岩手県文化財調査報告書第48集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

—Ⅳ—

（宮 地 遺 跡）

昭 和 55 年 3 月

岩 手 県 教 育 委 員 会

日 本 国 有 鉄 道 盛 岡 工 事 局

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— Ⅳ —

序

東北新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、宮城県境より盛岡市に至る 101kmの間に所在する48遺跡について日本国有鉄道盛岡工事局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年10月から昭和52年12月までの５年３ヶ月にわたり発掘調査を実施してまいりました。

昭和53年度においては、40遺跡について３分冊にまとめ報告書を刊行したところですが、本年度は残る８遺跡について報告書を刊行することによりこの委託事業のすべてが終了することになりました。

本報告書は東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳとして昭和50年、51年度の２ヶ年にわたり調査した江刺市宮地遺跡についてのまとめであります。この遺跡は平安時代初頭を中心として北上川東流域に営まれた集落跡であり、調査によって竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、方形溝跡等の遺構や、土器、土製品、石製品、鉄製品、金銅製品、動植物遺体等多くの貴重な資料を得ることができました。

言うまでもなく、北上川は本県の文化史にとって象徴的存在であり、その流域は長い間、文化の中心でもありました。宮地遺跡の調査結果は、そのことを裏付けると共に、当時の生活実態を示すものといえましょう。

本報告書が学術関係者だけでなく、社会教育や学校教育分野でも広く活用されれば幸いです。

最後に、これまでの調査について長期間にわたり御援助、御協力をいただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝を申し上げます。

昭和55年３月

岩手県教育委員会

教育長　　新里　盈

例　　言

1．本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書７分冊の中の第４分冊として、昭和50年度と昭和51年度の２ヶ年に旦って発掘調査を実施した江刺市に所在する宮地遺跡について作成したものである。

2．本遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。（敬称略）

・岩手大学名誉教授　　板橋　源
・岩手大学教授　　草間俊一
・北海道大学助教授　　林　謙作
・岩手県文化財審議会委員　司東真雄
・江刺市文化財調査委員　　佐嶋与四右ェ門

3．本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった。（敬称略）

・獣骨鑑定
　岩手大学農学部教授　　兼松重任
・石材鑑定
　岩手県立杜陵高等学校教諭　　佐藤二郎
・種子鑑定
　農林水産省林業試験場東北支場村井三郎
・花粉分析（井戸堆積層）
　パリノ・サーヴェイ株式会社
・鉄滓の組成分析およびＸ線回折
　岩手県工業試験場

4．本書に掲載した地形図、空中写真は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図、20万分の１地勢図、および２万分の１空中写真を使用したものである。

5．グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の１地形図を使用した。

6．土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料を参考にした。

7．遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山、竹原編著『新版、標準土色帖』日本色研事業㈱を使用した。

8．本遺跡の基準線方向角は、Ｎ－37°00′00″－Ｗである。

方向は新平面直角座標第X系（東北）による座標北を示す。

原点 $\begin{pmatrix} 経度 & 140^\circ 50' 00'' 000 \\ 緯度 & 40^\circ 00' 00'' 000 \end{pmatrix}$

9．遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会文化課において保管している。

10．調査主体者

岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

11．調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

12．本書の執筆は次のものがあたった。

・序文

調査に至る経過……嶋　千秋

調査の方法、整理の方法等……朴沢正耕

・本文……佐々木　勝

なお、遺物・図面の整理、および写真の撮影などは、熊谷由美子、平野邦子がこれを補助した。

目　　次

序　文

1．調査の経過…… 1
2．調査の方法…… 4
3．整理の方法…… 5
4．遺物保存処理の方法…… 6
5．広報活動の実施…… 6

本　文

Ⅰ．遺跡の立地と環境…… 11
1．地形と地質 …… 11
2．周辺の遺跡…… 17

Ⅱ．調査の概要 …… 23
1．調査の方法 …… 23
2．調査の経過 …… 27
3．調査の結果 …… 27

Ⅲ．報告に際して …… 28

Ⅳ．発見された遺構と遺物 …… 30
1．竪穴住居跡とその出土遺物…… 30
第1号(ＢＪ09)住居跡…… 30
第2号(ＣＡ53)住居跡…… 39
第3号(ＣＢ06)住居跡…… 44
第4号(ＣＣ56)住居跡…… 48
第5号(ＣＤ03)住居跡…… 55
第6号(ＣＥ50)住居跡…… 61
第7号(ＣＦ56)住居跡…… 67
第8号(ＣＧ06)住居跡…… 73
第9号(ＣＨ56)住居跡…… 78
第10号(ＣＪ03)住居跡…… 85
第11号(ＤＢ53)住居跡…… 92
第12号(ＤＪ50)住居跡…… 102
第13号(ＥＢ06)住居跡…… 110
第14号(ＥＨ03)住居跡…… 123
第15号(ＥＨ09)住居跡…… 128
第16号(ＥＩ50)住居跡…… 135
第17号(ＥＪ09)住居跡…… 140
第18号(ＥＪ50)住居跡…… 144
第19号(ＦＢ50)住居跡…… 155
第20号(ＦＤ09)住居跡…… 159
第21号(ＦＤ50)住居跡…… 166
第22号(ＦＩ50)住居跡…… 170
第23号(ＧＦ50)住居跡…… 178
2．井戸跡とその出土遺物 …… 185
第1号井戸跡…… 185
第2号井戸跡…… 211

3．溝 …… 225
第1号溝 …… 225
第2号溝 …… 226
第3号溝 …… 226
第4号溝 …… 227
第5号溝 …… 227
第6号溝 …… 228
第7号溝 …… 229
第8号溝 …… 229
第9号溝 …… 230
第10号溝 …… 237
第11号溝 …… 240
4．方形溝状遺構 …… 240
第1号方形溝状遺構 …… 240
第2号方形溝状遺構 …… 243
5．ピット類 …… 244
No.1ピット …… 244
No.2ピット …… 244
No.3ピット …… 245
No.4ピット …… 248
No.5ピット …… 248
No.6ピット …… 248
No.7ピット …… 249
No.8ピット …… 249
焼土遺構 …… 251
6．遺構に伴わない出土遺物 …… 251
Ⅴ．遺構と遺物に関する予察と問題点 …… 299
〔1〕 検出遺構 …… 299
1．竪穴住居跡 …… 299
2．井戸跡 …… 308
3．溝跡 …… 310
4．方形溝状遺構 …… 311
〔2〕 出土土器の分類 …… 312
〔3〕 住居跡における土器のあり方 …… 325
〔4〕 出土土器に関する問題点 …… 330
〔5〕 遺跡の構造 …… 334
〔6〕 遺跡の年代 …… 337
分析鑑定結果報告 …… 341
1．花粉分析 …… 342
2．鉄滓の組成分析およびX線回析 …… 345
3．植物遺体 …… 346
4．獣骨 …… 346
写真図版 …… 347～391
発掘担当者および協力機関 …… 392
発掘調査地元作業員名簿 …… 392
整理作業員名簿 …… 392
岩手県教育委員会事務局職員一覧 …… 394

図 版 目 次

第Ⅰ図　東北新幹線関係遺跡位置図…… 9
第1図　地形分類図…… 13
第2図　地質概念図…… 15
第3図　遺跡の深掘断面図…… 16
第4図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 19
第5図　グリッド配置図…… 24
第6図　遺構配置図…… 25
第7図　第1号住居跡…… 31
第8図　第1号住居跡出土遺物(1)…… 34
第9図　第1号住居跡出土遺物(2)…… 35
第10図　第1号住居跡出土遺物(3)…… 36
第11図　第1号住居跡出土遺物(4)…… 37
第12図　第2号住居跡…… 41
第13図　第2号住居跡出土遺物…… 43
第14図　第3号住居跡…… 45
第15図　第3号住居跡出土遺物…… 48
第16図　第4号住居跡…… 49
第17図　第4号住居跡出土遺物(1)…… 53
第18図　第4号住居跡出土遺物(2)…… 54
第19図　第5号住居跡…… 57
第20図　第5号住居跡出土遺物(1)…… 59
第21図　第5号住居跡出土遺物(2)…… 60
第22図　第6号住居跡…… 63
第23図　第6号住居跡出土遺物…… 66
第24図　第7号住居跡…… 69
第25図　第7号住居跡出土遺物(1)…… 71
第26図　第7号住居跡出土遺物(2)…… 72
第27図　第8号住居跡…… 75
第28図　第8号住居跡出土遺物…… 77
第29図　第9号住居跡…… 79
第30図　第9号住居跡出土遺物(1)…… 82
第31図　第9号住居跡出土遺物(2)…… 83
第32図　第9号住居跡出土遺物(3)…… 84
第33図　第10号住居跡…… 87
第34図　第10号住居跡出土遺物(1)…… 90
第35図　第10号住居跡出土遺物(2)…… 91
第36図　第11号住居跡(1)…… 94
第37図　第11号住居跡(2)…… 95
第38図　第11号住居跡出土遺物(1)…… 98
第39図　第11号住居跡出土遺物(2)…… 99
第40図　第11号住居跡出土遺物(3)…… 101
第41図　第12号住居跡…… 103
第42図　第12号住居跡出土遺物(1)…… 107
第43図　第12号住居跡出土遺物(2)…… 108
第44図　第12号住居跡出土遺物(3)…… 109
第45図　第12号住居跡出土遺物(4)…… 110
第60図　第16号住居跡出土遺物…… 139
第61図　第17号住居跡…… 141
第62図　第17号住居跡出土遺物…… 143
第63図　第18号住居跡…… 145
第64図　第18号住居跡出土遺物(1)…… 149
第65図　第18号住居跡出土遺物(2)…… 150
第66図　第18号住居跡出土遺物(3)…… 151
第67図　第18号住居跡出土遺物(4)…… 153
第68図　第18号住居跡出土遺物(5)…… 154
第69図　第19号住居跡…… 157
第70図　第19号住居跡出土遺物…… 158
第71図　第20号住居跡…… 161
第72図　第20号住居跡出土遺物(1)…… 163
第73図　第20号住居跡出土遺物(2)…… 164
第74図　第21号住居跡…… 167
第75図　第21号住居跡出土遺物…… 170
第76図　第22号住居跡…… 171
第77図　第22号住居跡出土遺物(1)…… 175
第78図　第22号住居跡出土遺物(2)…… 176
第79図　第22号住居跡出土遺物(3)…… 177
第80図　第23号住居跡…… 179
第81図　第23号住居跡出土遺物(1)…… 182
第82図　第23号住居跡出土遺物(2)…… 183
第83図　第1号井戸跡(1)…… 187
第84図　第1号井戸跡(2)…… 189
第85図　井戸枠実測図(1)…… 191
第86図　井戸枠実測図(2)…… 193
第87図　井戸枠実測図(3)…… 195
第88図　井戸枠実測図(4)…… 197
第89図　井戸枠実測図(5)…… 199
第90図　井戸枠実測図(6)…… 201
第91図　井戸枠実測図(7)…… 203
第92図　井戸枠実測図(8)…… 205
第93図　第1号井戸跡出土遺物(1)…… 207
第94図　第1号井戸跡出土遺物(2)…… 208
第95図　第1号井戸跡出土遺物(3)…… 209
第96図　第2号井戸跡…… 213
第97図　第2号井戸井筒部分側面図…… 215
第98図　第2号井戸跡出土遺物(1)…… 216
第99図　第2号井戸跡出土遺物(2)…… 217
第100図　第2号井戸跡出土遺物(3)…… 218
第101図　第2号井戸跡出土遺物(4)…… 219
第102図　第2号井戸跡出土遺物(5)…… 220
第103図　第2号井戸跡出土遺物(6)…… 221
第104図　溝(1)…… 231
第105図　溝(2)…… 233
第106図　溝(3)…… 235

第46図　第13号住居跡(1)…… 112
第47図　第13号住居跡(2)…… 113
第48図　第13号住居跡出土遺物(1)…… 116
第49図　第13号住居跡出土遺物(2)…… 117
第50図　第13号住居跡出土遺物(3)…… 118
第51図　第13号住居跡出土遺物(4)…… 119
第52図　第13号住居跡出土遺物(5)…… 121
第53図　第13号住居跡出土遺物(6)…… 122
第54図　第14号住居跡…… 125
第55図　第14号住居跡出土遺物…… 127
第56図　第15号住居跡…… 129
第57図　第15号住居跡出土遺物(1)…… 133
第58図　第15号住居跡出土遺物(2)…… 134
第59図　第16号住居跡…… 137
第107図　溝出土遺物…… 238
第108図　溝・方形溝状遺構・ピット出土遺物…… 239
第109図　方形溝状遺構…… 241
第110図　No.1ピット…… 245
第111図　No.2・No.3ピット・焼土遺構…… 246
第112図　No.4・No.5ピット…… 247
第113図　ピット出土遺物…… 250
第114図　遺構に伴わない出土遺物(1)…… 252
第115図　遺構に伴わない出土遺物(2)…… 253
第116図　住居跡の規模…… 299
第117図　柱穴類別模式図…… 301
第118図　ママド主軸方向…… 303
第119図　分類模式資料…… 323
第120図　時期別遺跡構成図…… 335

表　目　次

第Ⅰ表　東北新幹線関係遺跡一覧表…… 7
第1表　宮地遺跡周辺の遺跡地名表…… 20
第2表　遺構名称対照表…… 29
第3表　土器観察表…… 255
第4表　鉄製品・土製品・石製品観察表…… 296
第5表　住居跡一覧表…… 305
第6表　出土土器分類表…… 321
第7表　図示遺物集計表…… 327

写真図版目次

江刺市愛宕地区空中写真…… 348
図版1　遺跡遠景・遺跡近景・作業風景…… 349
図版2　C・D区全景・第1号住居跡 第2号住居跡・第3号住居跡…… 350
図版3　第3号住居跡・第4号住居跡 第5号住居跡・第6号住居跡…… 351
図版4　第7号住居跡・第8号住居跡・第9号住居跡・第10号住居跡・第11号住居跡… 352
図版5　第11号住居跡・第12号住居跡…… 353
図版6　第13号住居跡・第14号住居跡・E・F全景　354
図版7　第15号住居跡・第16号住居跡 第17号住居跡・第18号住居跡…… 355
図版8　第18号住居跡・第19号住居跡・第20号住居跡・第21号住居跡・E・F区全景 …… 356
図版9　E・F区全景・第22号住居跡・No.2・No.3ピット・第1号溝跡 …… 357
図版10　G区全景・方形溝状遺構・第9号溝跡 第10号溝跡…… 358
図版11　第1号井戸跡…… 359
図版12　第1号井戸跡井枠検出状況…… 360
図版13　第1号井戸跡井枠検出状況…… 361
図版14　第2号井戸跡…… 362
図版15　第2号井戸跡…… 363
図版16　第2号井戸跡・第1号、2号井戸跡…… 364
図版17　G区作業風景・調査区南端・現地説明会… 365
図版18　第1号住居跡出土土器…… 366
図版19　第5号住居跡出土土器・第3号住居跡 出土土器・第2号住居跡出土土器…… 367
図版20　第4号住居跡出土土器・第6号住居跡 出土土器・第8号住居跡出土土器…… 368
図版21　第7号住居跡出土土器・第10号住居跡 出土土器…… 369
図版22　第9号住居跡出土土器・第10号住居跡 出土土器…… 370
図版23　第11号住居跡出土土器…… 371
図版24　第12号住居跡出土土器…… 372
図版25　第12号住居跡出土土器・第13号住居跡 出土土器…… 373
図版26　第13号住居跡出土土器…… 374
図版27　第14号住居跡出土土器・第16号住居跡出土土器 第19号住居跡出土土器・第21号住居跡出土土器… 375
図版28　第18号住居跡出土土器…… 376
図版29　第17号住居跡出土土器・第20号住居跡出土土器 … 377
図版30　第22号住跡跡出土土器…… 378
図版31　第15号住居跡出土土器・第23号住居跡出土土器… 379
図版32　第2号井戸跡出土土器…… 380
図版33　第2号井戸跡出土土器…… 381
図版34　第2号井戸跡出土土器・遺構に伴わない出土土器　382
図版35　刀子・鉄片…… 383
図版36　釘・鎌・鋤・鉄鏃他…… 384
図版37　角・牛骨・馬骨・獣骨・砥石…… 385
図版38　鉄滓・特殊石製品・土錘・足方…… 386
図版39　第1号井戸横板(1)…… 387
図版40　第1号井戸横板(2)…… 388
図版41　第1号井戸横板(3)…… 389
図版42　第1号井戸横板(4)…… 390
図版43　顕微鏡写真（花粉）・ルツボ…… 391

序　　文

1.　調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約９年の歳月を要した。ここでは、1.発掘調査実施前の経過、２.年度別発掘調査の経過、３.整理報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめてみたい。

(1)　発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年５月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年５月17日に日本国有鉄道盛岡工事局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連ある範囲内での遺跡についての情報を提出することにした。昭和46年11月２日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101kmを巾２kmの範囲で実施することとし、11月20日より約２ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年４月に主管課である社会教育課に４名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに４名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として嶋千秋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の逐行に当った。更に同年６月１日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に巾20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査と嶋千秋・菊地郁雄両文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2)　発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障がある

ということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入っても発掘調査を継続せざるを得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の２ヶ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度　調査員３名、補助員１名、調査期間10月25日～12月18日。３遺跡。

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畑遺跡を調査した。この調査は用地未買収時期の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾を得ての調査であった。

昭和48年度　調査員８名、補助員５名、調査期間５月１日～１月29日　８遺跡。

４月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南舘遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るため新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして７月より１遺跡２名の調査員と１名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして８遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員・岩手大学生・京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失竪穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で１月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度　調査員８名、補助員５名、調査期間４月８日～12月20日　17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約１ｍ高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は地上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間どり多くの時間を費やした。

昭和50年度　調査員８名、補助員７名、調査期間４月10日～２月21日　15遺跡

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村それに盛岡市と広範囲におよび調査班相互の連絡・調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石経を地元民である佐藤忠二、佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもったこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリット方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期・中期・平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお年度末人事異動で昭和48年度より調査を担当した蜂谷　平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度　調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日　9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓壙群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないことになった。48年度から新幹線班で調査担当した宍倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度　調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日　1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓壙群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査結果の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真、遺物等の整理を一部実施した。

(3)　整理・報告書作成の経過

昭和53年度　調査員6名、期限付臨時職員12名。

53・54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。53年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施し、3分冊を刊行した。1分冊は一関・江刺地区（10遺跡）、2分冊は北上・花巻・石鳥谷地区（11遺跡）、3分冊には紫波・矢巾・都南・盛岡地区（19遺跡）を収録した。

昭和54年度　調査員６名、期限付臨時職員12名。

本年度は整理作業の最終年度に当たり、新幹線関連遺跡48遺跡の残り８遺跡の報告書作成のための作業を実施した。本年度は報告書４分冊とし、前年度３分冊に続き第４分冊として江刺市の宮地遺跡、５分冊として江刺市の鴻ノ巣館遺跡、石鳥谷町の高畑遺跡、矢巾町の白沢遺跡、の３遺跡、６分冊には江刺市の落合II遺跡、北上市の南舘遺跡と鬼柳西裏遺跡の３遺跡、第７分冊には紫波町の西田遺跡をそれぞれ収録した。

2.　調査の方法

遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

(1)　調査対象範囲の送定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

(2)　調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の２点（東京起点の距離程が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし３ｍ単位に割付け、30ｍで１地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベッドで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

(3)　発掘の方法

①　探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として３ｍ×３ｍのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

②　遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

③　遺物の取り上げ

ａ．遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

ｂ．出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものにつ

いては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

④　実測図の作成

断面図－断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は1/20であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて1/10などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図－平面図は調査区全域を表現したもの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録するための部分的なものとがある。原図の縮尺は1/20を原則としたが、必要に応じて1/10などの縮尺を用いた。測量方法は、遣り方測量により作図した。

⑤　写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真（スライド用）、6×7cmモノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

⑥　その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

3.　整理の方法

発掘調査の期間内で現場作業と併行して行った整理作業は遺物の洗浄だけで、大部分は分室で進められた。整理にあたっては図面・遺物・写真とそれぞれ整理基準を作成して実施した。

(1)　図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。第一原図は点検、修正の上、登録番号を符し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2)　遺物整理の方法

遺物は洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構名、地区名、層位、遺物番号を符し、接合、復元作業を進めた。その後分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3)　写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

(4)　本書に収録した遺構・遺物の実測図は、次の要領に従って整理、作成されている。

①　遺構の図面

遺構配置図は発掘調査時に作成した第一原図を基に1/80の縮尺図を作成し、それを1/2に縮少して載せた。各遺構の図面は第二原図をトレースし、それを以下の最終縮尺に合致するように縮少した。

住跡跡・井戸跡・ピット類：1/40　　溝類：1/80

なお、遺構の一部を拡大して図示した場合は、その都度縮尺を数字を表示した。

② 遺物

a．土器：土器は原則として1/5以上残存するものを図化した。土器の器面調整は中軸線の両側に3cm内外の幅をもたせて表記した。調整技法の表現方法は基本的には宮城県教育委員会の『東北新幹線関係遺跡調査報告書(1)』を参考にした。図式で区別できない技法は「土器の観察表」に記してある。体部下端、および底部にみられる再調整の範囲は実測図の外側に実線で表記し、黒色処理がみられるものは⁘⁘⁘のスクリーン・トーンで表現した。また、還元炎焼成の土器は酸化炎焼成のものと区別するため、断面を黒く塗り潰した。実測図は、縮尺を1/3に統一し、各遺構ごとにまとめて記載した。

b．鉄製品：錆の除去には努めたが、かなりの錆が付着したまま図化されている。実測図には錆と原体とは区別できるように表現した。破損部には鎖線を付した。実測図の縮尺は1/2に統一して記載した。

c．土製品・石製品：小形手捏土器、土錘、土製紡錘車等の土製品は縮尺を1/2に統一して記載した。調整技法等は土器に準じた。石製品も縮尺は1/2に統一して載せた。砥石の使用面は全面回転して図化した。

d．木製品：井戸枠として使用された木材については縮尺を1/6に統一して表記した。実測時において、木材が非常に軟弱であったため、加工痕等を完全なかたちでは図化していない。

4．遺物保存処理の方法

出土遺物のうち、木製品、鉄製品については可能な範囲で保存処理をおこなった。本書収録の遺物のうち、井戸枠は財団法人元興寺文化財研究所に委託し、P.E.G含侵、およびアルコールエーテル法で処理をおこなった。

5．広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

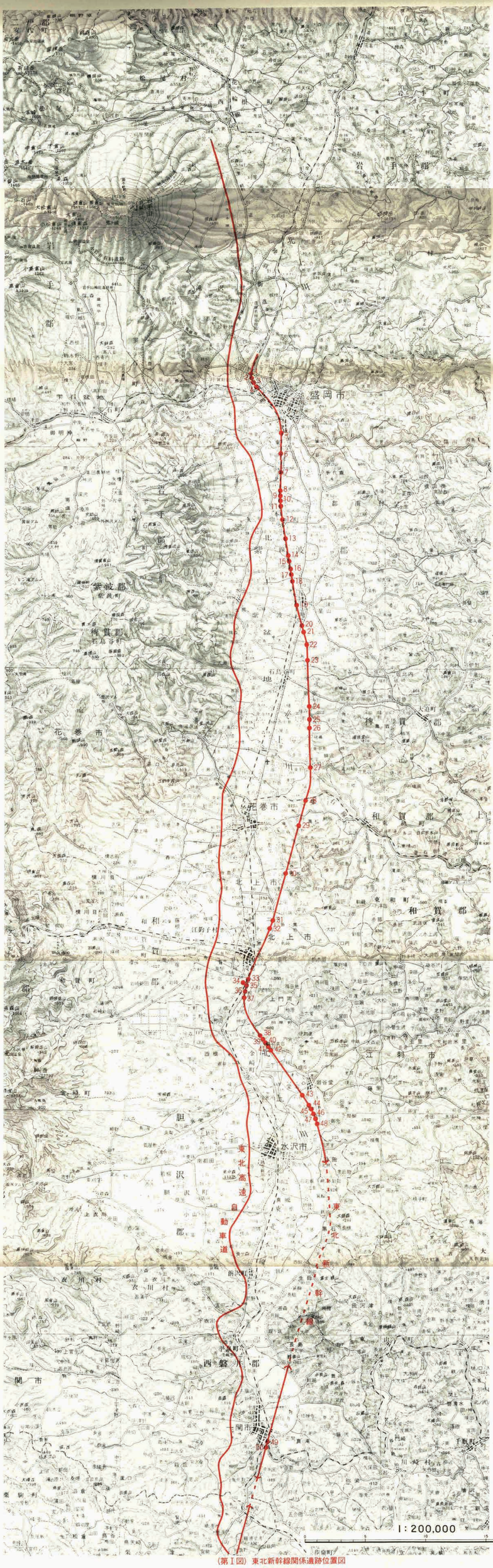
・現地説明会の開催　　・現場だよりの発行　　・関係機関への資料提供

（第Ｉ表）東北新幹線関係遺跡一覧

（位置一覧は第Ｉ図を参照）

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	収録報告書No.
一関市	機織山Ｉ遺跡	3,500m²	50. 9. 30～50. 11. 29	I
〃	機織山II遺跡	1,470	50. 9. 22～50. 11. 11	〃
江刺市	中屋敷遺跡	5,000	48. 12. 10～48. 12. 22	〃
〃	鴻ノ巣舘遺跡	6,400	49. 6. 24～49. 10. 23	V
〃	力石遺跡	2,240	49. 4. 8～49. 4. 18	I
〃	落合Ｉ遺跡	2,560	49. 4. 18～49. 8. 6	〃
〃	落合II遺跡	2,420	49. 4. 8～49. 8. 8	VI
〃	宮地遺跡	3,600	50. 9. 1～51. 7. 26	IV
〃	鶴羽衣遺跡	1,280	49. 4. 9～49. 5. 14	I
〃	鶴羽衣台遺跡	960	49. 4. 19～49. 5. 10	〃
〃	瀬谷子遺跡	2,400	49. 5. 8～49. 6. 19	〃
〃	五十瀬神社前遺跡	1,600	49. 6. 4～49. 7. 30	〃
〃	谷地遺跡	2,720	49. 7. 25～49. 9. 3	〃
北上市	八木畑遺跡	800	49. 11. 28～49. 12. 9	II
〃	松ノ木遺跡	480	50. 12. 16～50. 12. 25	〃
〃	西野遺跡	5,000	50. 9. 1～50. 12. 25	〃
〃	南舘遺跡	4,660	48. 5. 1～48. 7. 26	VI
〃	鬼柳西裏遺跡	4,400	50. 9. 3～51. 12. 15	〃
〃	野田Ｉ遺跡	3,000	51. 8. 6～51. 8. 28	II
〃	野田II遺跡	1,920	50. 9. 1～50. 9. 19	〃
〃	堀ノ内遺跡	2,400	50. 7. 7～50. 8. 30	〃
花巻市	高松遺跡	2,000	50. 6. 4～50. 7. 9	〃
〃	八幡遺跡	1,800	51. 10. 7～51. 11. 25	〃
石鳥谷町	高畑遺跡	2,720	49. 10. 25～49. 12. 20	V
〃	大明神遺跡	3,680	49. 10. 25～49. 11. 22	II
〃	大曲遺跡	1,920	49. 10. 25～49. 12. 12	〃
〃	幅遺跡	2,400	49. 11. 18～49. 11. 29	〃
紫波町	野上遺跡	2,400	49. 10. 17～49. 10. 29	III
〃	西田遺跡	29,600	50. 4. 26～52. 12. 15	VII
〃	大銀遺跡	960	50. 4. 10～50. 4. 26	III
〃	大日堂遺跡	2,240	50. 5. 16～50. 6. 10	〃
〃	田頭遺跡	1,760	49. 9. 5～49. 10. 16	〃
〃	杉ノ上III遺跡	3,402	48. 10. 16～48. 12. 28	〃
〃	杉ノ上II遺跡	4,276	48. 10. 16～49. 1. 29	〃
〃	杉ノ上Ｉ遺跡	7,200	48. 7. 18～48. 10. 16	〃
〃	古舘駅前遺跡	3,360	48. 10. 1～48. 11. 30	〃
〃	古舘橋遺跡	4,200	48. 9. 18～48. 12. 8	〃
矢巾町	白沢遺跡	3,726	48. 7. 20～48. 9. 29	V
〃	又兵衛新田遺跡	2,080	49. 10. 18	III
〃	高畑遺跡	640	47. 11. 24～47. 12. 2	〃
〃	下赤林Ｉ遺跡	2,720	47. 10. 25～47. 12. 16	〃
〃	下赤林II遺跡	3,200	48. 11. 13～48. 12. 19	〃
〃	下赤林III遺跡	2,560	47. 12. 2～47. 12. 18	〃
都南村	下永井遺跡	1,760	50. 4. 10～50. 4. 24	〃
〃	津志田遺跡	4,800	50. 4. 23～50. 5. 15	〃
盛岡市	南仙北遺跡	800	50. 4. 10～50. 4. 25	〃
〃	厨川柵擬定地	4,600	51. 5. 17～51. 10. 16	〃
〃	前九年Ｉ遺跡	5,150	51. 4. 23～51. 6. 3	〃
〃	前九年II遺跡	3,400	51. 4. 19～51. 6. 2	〃
〃	長畑遺跡	6,370	51. 4. 9～51. 5. 15	〃

※ 杉ノ上Ｉ・II・III遺跡は１遺跡として登録してある。



1.長畑遺跡
2.前九年II遺跡
3.前九年I遺跡
4.厨川柵擬定地
5.南仙北遺跡
6.津志田遺跡
7.下永井遺跡
8.下赤林II遺跡
9.下赤林II遺跡
10.下赤林I遺跡
11.高畑遺跡
12.又兵ヶ新田遺跡
13.白沢遺跡
14.古館橋遺跡
15.古館駅前遺跡
16.杉ノ上I遺跡
17.杉ノ上II遺跡
18.杉ノ上III遺跡
19.田頭遺跡
20.大日堂遺跡
21.大銀遺跡
22.西田遺跡
23.野上遺跡
24.幅遺跡
25.大曲遺跡
26.大明神遺跡
27.高畑遺跡
28.八幡遺跡
29.高松遺跡
30.堀ノ内遺跡
31.野田II遺跡
32.野田I遺跡
33.鬼柳西裏遺跡
34.南舘遺跡
35.西野遺跡
36.松ノ木遺跡
37.八木畑遺跡
38.谷地遺跡
39.五十瀬神社前遺跡
40.瀬谷子遺跡
41.鵜羽衣台遺跡
42.鵜羽衣遺跡
43.宮地遺跡
44.落合II遺跡
45.落合I遺跡
46.力石遺跡
47.渕ノ平舘遺跡
48.中屋敷遺跡
49.機織山II遺跡
50.機織山I遺跡

(第I図) 東北新幹線関係遺跡位置図

本　　文

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1　地形と地質

〔1〕位置

江刺市は岩手県の県南に位置する小都市で、人口約36,000人を数える。その市域は北上川東岸の平野部とその東側に続く丘陵地および山地一帯に広がっている。市域の範囲は南北約28km、東西約24kmの地域にまたがり、その面積は360.77km²に及ぶ。(注1)

市の中心部は市域西寄りの岩谷堂地区にあり、ここから県庁所在地の盛岡市までは北に約57km離れ、北上川を挟んで隣接する水沢市の中心街には西に約7km離れている。

本遺跡は江刺市西部の愛宕地区に位置する。地籍は愛宕字観音堂沖66で表わされ、江刺市役所の西南方向約1kmの地点である。

〔2〕地形

岩手県北部に源をもつ北上川は、岩手県を南北に縦断し、宮城県東北部の石巻湾に注いでいる。流路の長さ 243km、流域面積10.720km²に及ぶ東北第1の大河川(注2)であり、流路・流域面積ともその$\frac{3}{4}$を岩手県が占め、県内の大動脈をなしている。

遺跡の所在する江刺市は、北上川中流域(注3)（盛岡―前沢）沿岸地帯に位置する。中流域一般に、東岸では古生層・花崗岩類を主な構成層とする北上山地の西縁丘陵地帯を洗い、西岸では新第三紀層の砂岩・凝灰岩を基盤とする扇状地や扇状地性段丘群の末端に侵食崖をつくっている。中流域においても、東西両側の山地から直角に多くの支流が合流しており、北上山地より西流して合流する河川の勾配は比較的緩く、起伏の大きな奥羽山脈より東流する河川は急勾配で合流する。この結果、奥羽山脈支流から運び込まれた砂礫量は北上山地支流のそれと比べて著しく多く、西岸には大小の扇状地や扇状地性段丘群の発達が顕著になっている。中流域での流路が、河谷内において東に偏するのはこのことに起因する。

胆沢・江刺地方においても以上のことは同様であり、西岸には六原扇状地・胆沢扇状地などの大規模な扇状地が発達している。胆沢川によって形成された胆沢扇状地は段丘化しており、上位より一首坂段丘（西根段丘相当面）、胆沢段丘（村崎野段丘相当面）、水沢段丘（金ヶ崎段丘相当面）に大別され(注4)、胆沢段丘はさらに上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分される。これらの段丘群は胆沢川の流路に沿って南北に規則的に配置されている。

一方、東岸では段丘面の発達は著しく貧弱であり、西岸とは明瞭な河食営力の違いを示している。このなかで、江刺市北部の稲瀬付近には比較的顕著な段丘の発達が認められ、稲瀬より岩谷堂の北端にかけては、中位段丘（村崎野段丘相当面）が広く分布し、その前面に低位段丘（金ヶ崎段丘相当面）が小規模に発達している。(注5) また、丘陵西縁部にはそれに付着するかたちで、低位段丘が小規模ながらも比較的広範囲に分布する。そのほか、北上山地に源をもつ広瀬川・人首川・伊手川などの支流沿いに小面積の低位段丘が断片的に点在する。江刺市で最も広い面積を占めるのが北上山系の山地・丘陵地帯である。北上山地は隆起準平原化した高原地帯であり、種山高原（物見山：870.6m）・大森山（820.0m）などに代表される緩やかな丸味を帯びた尾根にその特徴がある。山地西側の丘陵は市域の大半を占めており、とくに200m以下で開拓可能の低平な丘陵地が卓越する。

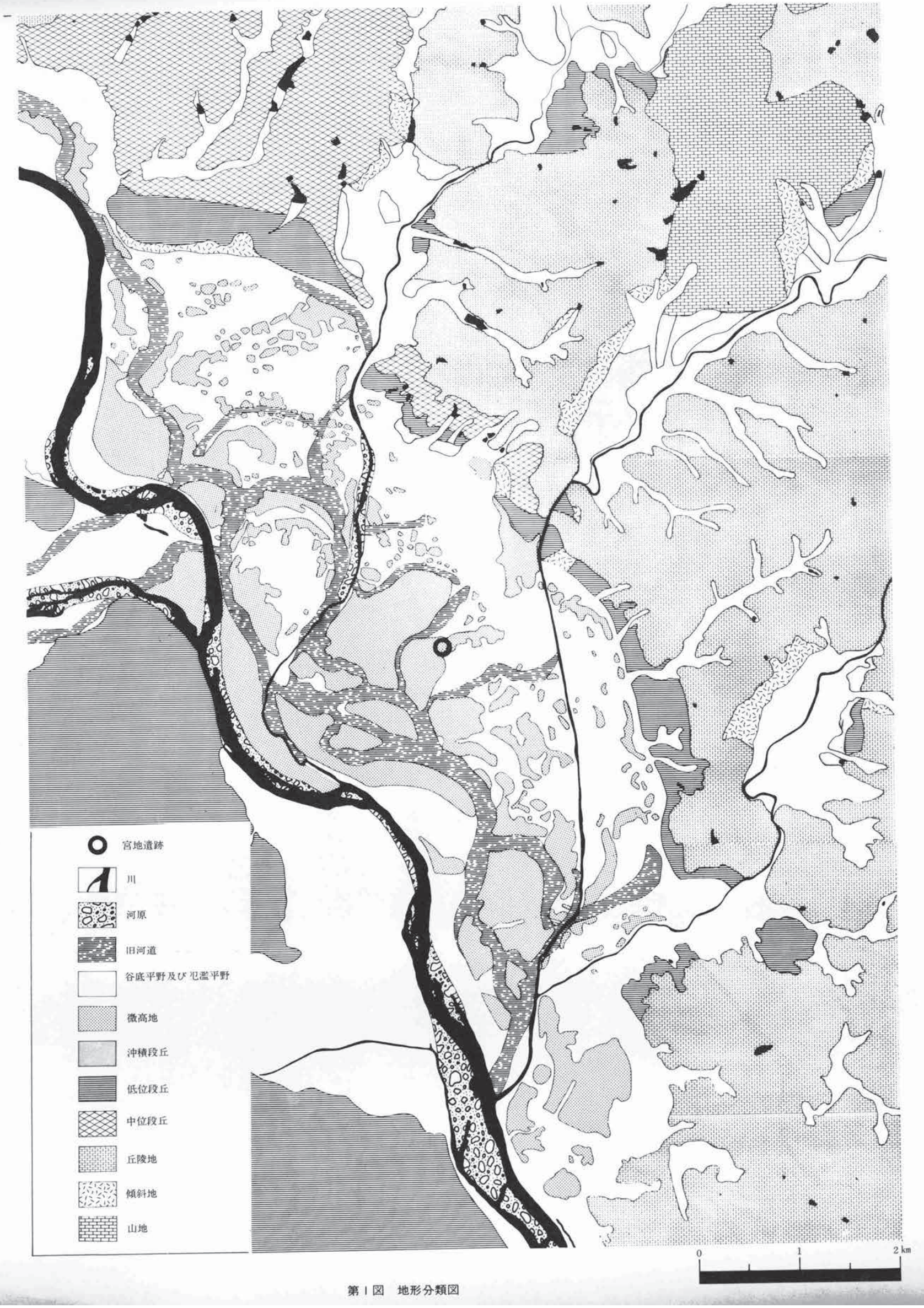
江刺市において、北上川東岸には西岸の胆沢扇状地と面して沖積平野が広く帯状に延びている。通称江刺平野と呼ばれるもので、最大幅東西 3.2km、最大長南北10.5kmを計り、中流域最大の規模をもつ。(注6) ゆるやかに蛇行して南下する北上川は、北上山地より西流する広瀬川・人首川・伊手川と合流し、また奥羽山脈より東流する胆沢川とも合流する。江刺平野上にはこれらの河川にかかわる旧河道が多数認められ、曲流・蛇行の痕跡を随所にとどめている。同地域は河川との比高も少なくそのほとんどが洪水氾濫の常襲地帯となっており、ここに自然造成された大小の微高地が一面に点在する。

これらの微高地は、その成因の違いによって、①旧河川の洗流に残された沖積台地の微高地面、②旧河川による居揚（いあげ）上の沖積層微高地面、③微高地状自然堤防上の沖積面などに分けられる。(注7) ①は沼の上、観音堂沖・橋本・三百刈田・荒谷等の小字名に表記される地域が該当し、宮地遺跡の立地面もこの微高地に含まれる。②は江刺平野上の微高地の大半を占めており、東北新幹線関連遺跡のほとんどがこの面に立地する。③は旧河川路に沿って局部的に形成されており、後背地は低地としてそのまま残されている。

江刺平野の海抜高度は35～45mであり、微高地面と周囲の低位面との比高は約1～2mを計る。低位面には水田が開け一大穀倉地帯を形成している。微高地は宅地や果樹・ホップ・野菜等の畑作利用のほか、水田化も進められており。本遺跡の現況（調査時）は宅地・畑地・水田となっている。

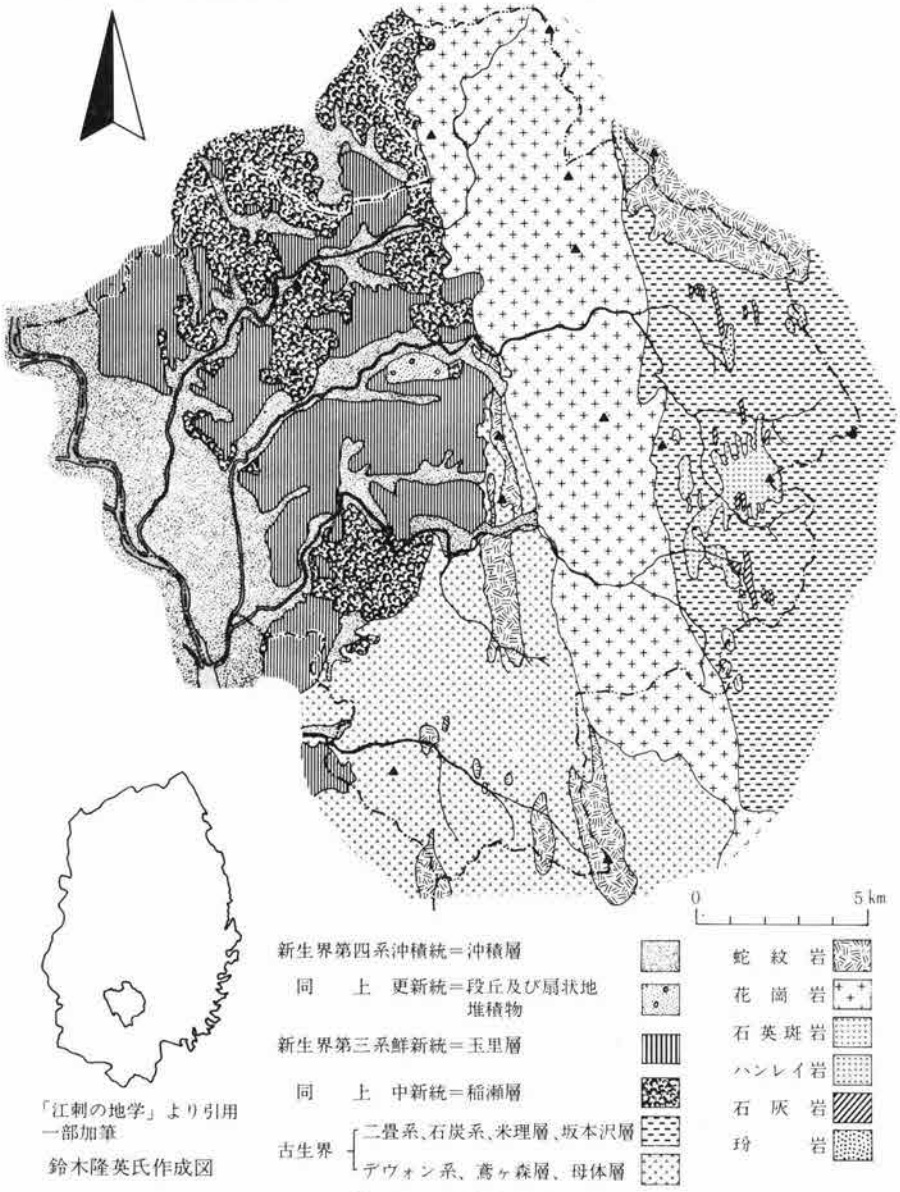
〔3〕地質

江刺市において、(注8) 北上山地の主要構成層である古生層は田原地区にみられる鷲ヶ森層と、米里付近にみられる米里層とがある。また中生代白亜紀には花崗岩体の貫入がみられ、梁川から伊手にかけて南北に分布する。これらは標高500～800mの山々として尾根をつらね、隣接町村と



第1図　地形分類図

の境界部をなしている。この地域に最も広く現われる地層は新第三系に属するもので、北上山地のなかでは分布範囲の限られた比較的新しい地層からなっている。中新統のものとしては、稲瀬付近に広がる稲瀬層があり、安山岩・凝灰質岩石・礫岩など火山性岩石を主要な構成層とするものである。稲瀬層は丘陵縁辺部各所に露出しており、標高150～300m内外の低い丘陵地を形成している。そのほかの丘陵地は、主として鮮新統の玉黒層の堆積物によって構成される。玉黒層は玉黒挾炭層ともいわれ、稲瀬層の侵食凸凹面を不整合におおっている。上部には亜炭層が挾在し、下部には凝灰質頁岩・砂岩・礫岩が発達する。



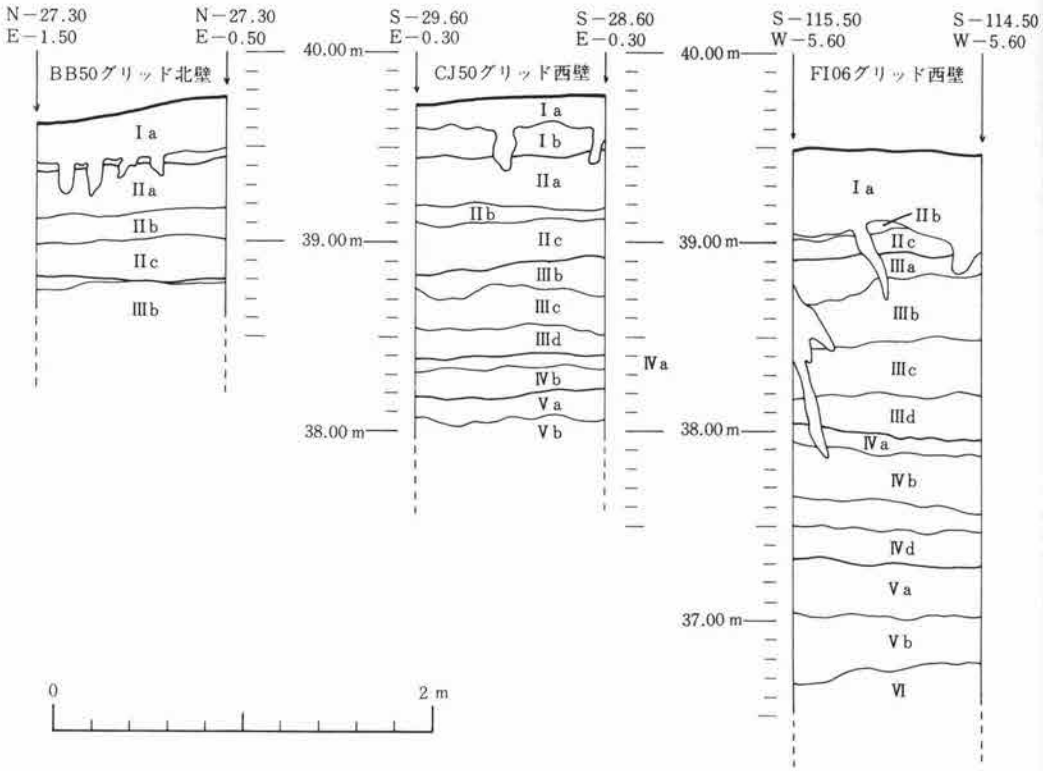
第２図　地質概念図

江刺平野の基盤は玉里層である。北上川及び北上山地の丘陵地に近接する瀬谷子付近の一部では、稲瀬層が基盤となり、安山岩が露出する。基盤の上部は下位より砂礫層・砂層・シルト層の順に堆積する沖積層で覆われる。江刺平野内では、基盤の絶対高は南より北へと漸次高くなる傾向があり、沖積層の厚さは北に薄く、南に厚くなる。沖積層の地質積成は一部を除いて一様な連続性を示している。表部は完新世のシルト層・砂層より構成され、シルト層が全体として卓越する。2層の層厚は下位の砂礫層に左右される面もあるが、2～4m程度になる。これらの層の下部にはよく締った更新世の砂礫層が一様分布する。礫径は平均30～50cm強で、下部は有効径が大きく透水性はかなり高いものである。層厚は3～5cm程度を計る。地下水位はこの層の上端付近にある。沖積層全体の層厚は約7～8mである。

以上のような沖積層の地質構成は江刺平野全体に一般的にみられるものであるが、一部の地域（たとえば本遺跡の乗る微高地面）では砂層の下部にシルト層の粘性土がみられるようになる。ただしこれはレンズ状に部分的な堆積を示す。

〔宮地遺跡の基本層序〕

本遺跡では、遺跡の乗る微高地面の基本層序を明らかにするために、調査区内の3地点で深堀りを実施し、断面観察を行なった。その結果は第3図に示すとうりであるが、深堀り不能の



第3図　遺跡の深掘断面図

深層の様相は川崎地質株式会社の試錐結果を参考にした。

Ⅰa層：暗褐色(10YR3/4)土。シルト。畑地及び水田耕作土。北部で薄く、南部で厚くなる。焼土粒・木炭粒・木器片・小円礫を包含する。層厚13cm±～45cm±。

Ⅰb層：褐色(10YR4/4)土。シルト。緻密で堅い。畑地の一部（耕作が浅い個所）に薄く確認されるのみである。焼土粒・木炭粒・土器片を含む。層厚0～15cm±。

Ⅱa層：にぶい黄褐色(10YR4/3)土。シルト。色調が褐色(10YR4/4)を呈する部分もみられる。比較的緻密で圧縮性に欠ける。この層の上面が遺構検出面である。層厚10cm±～30cm±。

Ⅱb層：にぶい黄褐色(10YR5/3)土。シルト。Ⅱa層よりやや粘性が強い。層厚6～15cm±。

Ⅱc層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。シルト。やや砂質である。層厚10cm±～28cm±。

Ⅲa層：褐色(10YR4/4)土。シルト質砂。調査区の北端及び南部のE区以南に堆積する。E区以南の遺構の精査、とくに壁の検出・堀り方の有無等はこの層の存在を鍵にして行なっている。層厚0～22cm±。

Ⅲb層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。砂。ややシルト分を含む。層厚8cm±～34cm±。

Ⅲc層：にぶい黄褐色(10YR5/3)土。砂。上層に比べてやや粗くなる。層厚16cm±～32cm±。

Ⅲd層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。砂。Ⅳ層との漸移層で粘性土を含む。層厚12～22cm±。

Ⅳa層：褐色(10YR4/4)土。シルト質粘土。有機物を混入する。層厚6cm±～12cm±。

Ⅳb層：にぶい黄褐色(10YR5/3)土。シルト質粘土。層厚20cm±～32cm±。

Ⅳc層：暗褐色(10YR3/4)土。シルト質粘土。Ⅵ層のなかで最も粘性が強く、多量の有機物を含む。色調が黒褐色を呈する個所もみられる。層厚10cm±～17cm±。

Ⅳd層：褐色(10YR4/4)土。シルト質粘土。細砂を若干含む。層厚15cm±～21cm±。

Ⅴa層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。砂。Ⅲ層に比べて粗くで軟弱である。やや粘性土を含み、含水性が高い。層厚25cm±。

Ⅴb層：にぶい黄褐色(10YR5/3)土。砂。2～3mmの礫を少量含む。層厚30cm±。

Ⅵ層　：暗灰黄褐色(2.5YR4/2)土。砂礫。径20～30mmの亜角礫・円礫が主体となる。層厚は試錐結果によれば4m強となる。

なお、粗堀は第1段階としてⅡa層の上面まで行ない、第2段階としてⅡa層を2～3cmを堀り下げて行なった。遺物の出土層はⅠa層とⅠb層に限られる。

2　周辺の遺跡

宮地遺跡は、江刺平野上に点在する数多くの微高地の1つに立地している。これらの微高

地はその成因に若干の違いは認められるものの、いずれも北上川・胆沢川等の大河川の影響のもとに発達したものであることは、概に述べた。こうした微高地面は、古くから人間活動の場として利用されてきており、古くは縄文時代中期末葉の遺跡が知られている。

ここでは、宮地遺跡の歴史的環境を理解する為に、江刺市及びその対岸の水沢市の一部（第4図）を中心に、主に発掘調査された遺跡[注9]をとりあげて時代別に概観してみたい。

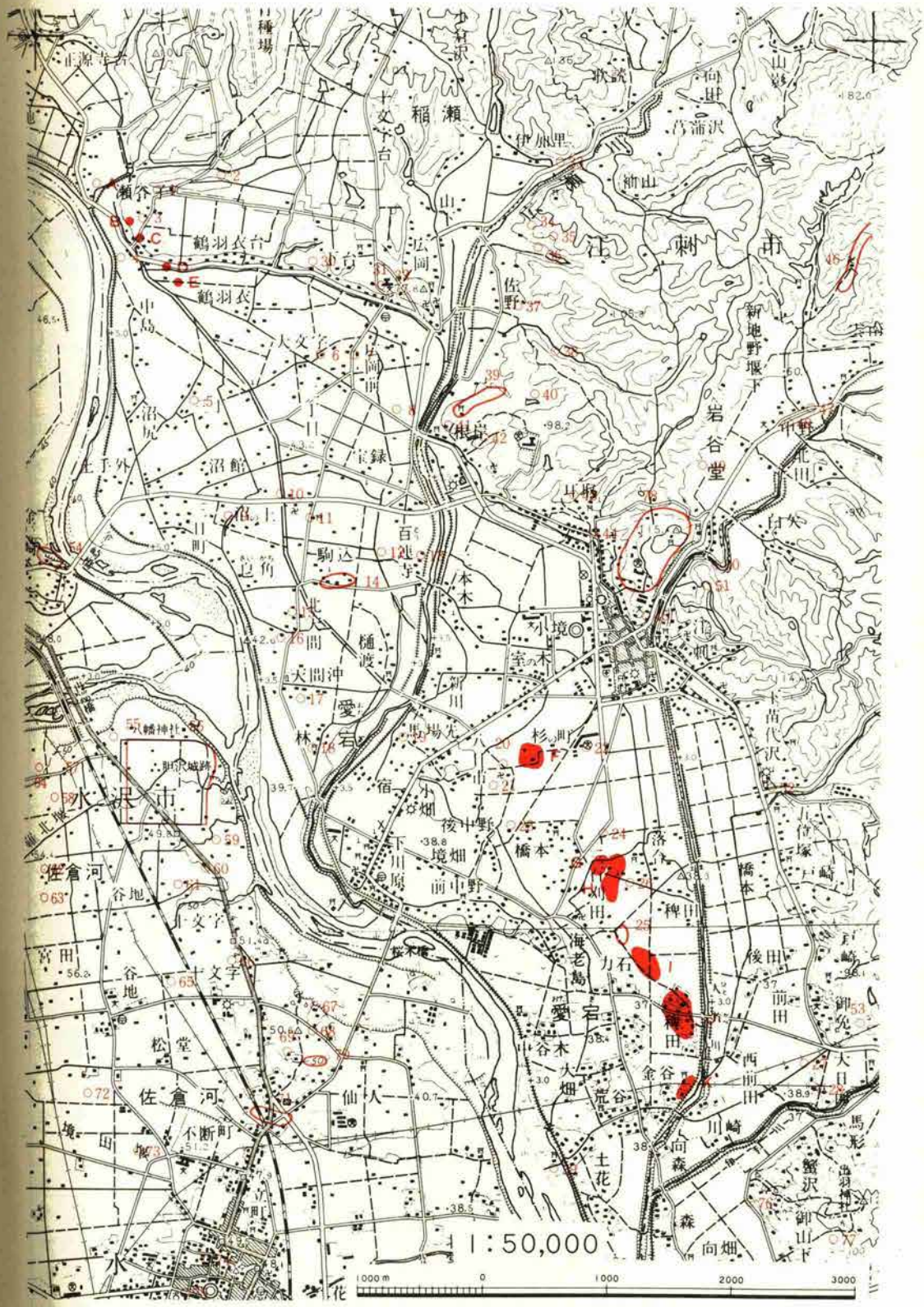
旧石器時代の遺跡は未だ確認されていない。

縄文時代では、江刺地区において五十瀬神社前遺跡・瀬谷子遺跡の2遺跡[注10]が調査されている。いずれも沖積平野の微高地上に立地する。五十瀬神社前遺跡は中期末葉に属し、微高地上に立地する遺跡では最も古く、住居跡1棟・炉跡3基が検出されている。瀬谷子遺跡からは中期末葉から後期初頭にかけての土器が少量出土している。ほかには立地面をたがえて丘陵西縁部や広瀬川・人首川・伊手川の流域に小規模に発達する低位段丘上に中期～晩期の遺跡が分布する。一方水沢地区では、水沢段丘面を中心に早期～晩期の遺跡が多数知られている。図幅内に限れば、晩期の遺跡が圧倒的に多い。

弥生時代の遺跡では、沖積微高地上に立地する沼の上遺跡[注11]・兎II遺跡[注12]などが発掘調査されている。特に沼の上遺跡は著名で、若干の遺構を伴って中期谷起島式併行の土器を主体に出土する。兎II遺跡では中期谷起島式併行から後期常盤式併行にかけての土器がかなり出土している。ほかに、沖積微高地には少量ながら該期の土器を出土する遺跡が多い。水沢地区には橋本遺跡[注13]・常盤遺跡[注14]などの著名な標式遺跡が知られている。

古墳時代の遺跡は、江刺地区では確認されていない。古墳群として登録された遺跡[注15]は数個所認められるもののその実体は不明である。水沢地区では、古墳時代の古式土師器を出土する遺跡に、水沢段丘上に立地する高山遺跡[注16]・西大畑遺跡[注17]がある。高山遺跡ではそれに伴う住居跡も発見されている。また、水沢市の西方には、同じ水沢段丘面に最北の前方後円墳といわれる角塚古墳[注18]が出現する。

奈良～平安時代に入ると遺跡の数が圧倒的に増加する。江刺平野の微高地上は特に平安時代に中心をおく遺跡が中心となる。新幹線建設に伴って調査された遺跡数11のうち、本遺跡を始めとする、鴻ノ巣館・中屋敷・力石I・落合I・落合II・鶴羽衣・鶴谷衣台・谷地の9遺跡[注19]が該期のものとしてあげられる。また、県道一関・北上線の敷設に伴う調査でも、力石II・兎II落合III・朴ノ木の各遺跡[注20]が発掘されており、いずれも平安時代にその中心をおくものである。微高地以外に立地する遺跡では、平野の北側稲瀬付近の村崎野段丘相当面上に立地する瀬谷子古窯跡群[注21]があげられる。胆沢域及びその近隣集落を主な供給源とするもので、須恵器・瓦などの窯跡が100基以上知られる県内最大の生産遺跡である。また、丘陵西縁の段陵上には藤原清衡の居城として伝えられる豊田城凝定地[注22]がある。一方、水沢地区では、奈良時代に中心をおく



A 谷地遺跡　B 五十瀬遺跡　C 瀬谷子遺跡　D 鶴羽衣台遺跡　E 鶴羽衣遺跡
F 宮地遺跡　G 落合II遺跡　H 落合I遺跡　I 力石遺跡　J 鴻之巣館遺跡
K 中屋敷遺跡

第4図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅰ表　宮地遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	瀬谷子窯跡	平安	40	庚申沢	不明
2	稲瀬古墳群	不明	41	根岸	縄文、平安
3	蔦ノ木	縄文、平安	42	宝性寺跡	縄文中～晩期
4	中島	平安	43	耳取	平安
5	沼尻	〃	44	男力	〃
6	十三	〃	45	館下	不明
7	大文字	不明	46	万松寺山	平安
8	宝録	平安	47	金打	〃
9	沼の上	縄文晩、弥生	48	中野	縄文晩期
10	沼館	中世	49	四天坊古墳	不明
11	別当	平安	50	裏手丘上古墳	〃
12	東間	〃	51	重染寺古墳	〃
13	百蓮寺	縄文	52	豊田館擬定地	平安
14	駒込	平安中世	53	石山	〃
15	北天間 (1)	平安	54	白糸	不明
16	〃 (2)	〃	55	八ツ口	平安
17	阿弥陀堂跡	〃	56	胆沢城跡	縄文、奈良、平安
18	林	〃	57	玉貫前	〃
19	馬場先	〃	58	膳性	奈良、平安
20	観音堂沖Ⅰ	〃	59	権現堂	〃
21	〃 Ⅱ	〃	60	竈堂	〃
22	杉の町	縄文後平安	61	伯済寺跡	不明
23	田谷城跡	中世	62	獅子鼻B	縄文
24	橋本	平安	63	〃 A	縄文、平安
25	兎	弥生、平安	64	玉貫	平安、中世
26	見分	不明	65	東大畑	〃
27	御免	〃	66	八幡幅	不明
28	松川	縄文	67	下河原館	縄文晩期
29	四丑	平安	68	根岸	〃
30	鶴羽衣擬定地	〃	69	瓦ケ田	縄文晩期
31	稲瀬中学校	〃	70	桐山	〃
32	稲瀬小学校	不明	71	下河原釜石	不明
33	大迫山居	平安	72	幅下	縄文中期
34	佐野山古墳	不明	73	里槍	縄文晩期
35	寺岡	縄文、平安	74	水沢商業跡地	平安
36	神明館古墳	不明	75	新小路	縄文晩期
37	坂橋	縄文	76	鹿野	縄文、平安
38	古兵衛乱塔塚	不明	77	愛宕神社塚	不明
39	根岸洞窟	縄文中期	78	岩谷堂城跡	中世～近世

遺跡、奈良時代から平安時代へと大きな断載をもたずに継続する遺跡、及び平安時代を主な活動時期とする遺跡とに3分される。前者には今泉(注23)・膳性(注24)など水沢段丘縁辺部に立地する大規模な遺跡があり、奈良～平安時代に継続するものには東大畑(注25)・石田(注26)など水沢段丘上に立地する遺跡が知られている。平安時代に中心をおく遺跡には、802年に創建され、陸奥国支配の中枢的存在となる胆沢城跡があげられる。該期の一般集落は、真城ヶ丘団地遺跡(注27)のように新たに胆沢段丘上に出現するものが多くなる。

以上のごとく、江刺平野上に立地する遺跡は、平安時代の初期にその中心をおくものが圧倒的多数を占める。これは、胆沢城創建に伴い、その政治的支配による社会的・経済的開発が江刺平野上で強力に推し進められたことを示唆しており、本遺跡もこうした背景のもとに展開していったものと推定される。一方、胆沢扇状地では、前述のごとく、奈良時代に営まれた大規模な集落が既に存在しており、これらの遺跡は平安時代に入っても継続、ないしは再開発というかたちで存続するものが多い。また、立地を異えて新たに出現する遺跡もかなり存在する。こうした事実は、その集落の性格をも加味したなかで、新たなる政治支配による政治的・経済的社会の改編の過程として把えうる内容を含んでいる。

注1　岩手日報社編　1977　『岩手年鑑』
　　岩手日報社編　1978　『岩手百科事典』

注2　前出注1『岩手百科事典』

注3　中川久夫ほか　1963　「北上川中流沿岸の第四系および地形―北上川流域の第四紀地史(2)」『地質学雑誌』第69巻812号

注4　注3と同じ

注5　経済企画庁　1975　『北上山系開発地域土地分類基本調査―北上』　5万分の1

注6　注1と同じ

注7　佐嶋与四衛門氏の御教示による。②の居揚とは、主として洪水等によって造成された広範囲に及ぶ微高地を言い、土砂を多量に含んだ濁流が流勢を殺がれ、緩流状態となったときに流送した土砂をその所に沈澱せしめる状態とされている。これは、③にみられる自然堤防が、局部的に形成され背後地まで広々と土砂を積むことがない状態を言うのとは異なり、広範囲にわたる砂丘(泥土)地が居揚に該当する。

注8　江刺の地質の記述には、山地・丘陵の部分は江刺市の理科教育担当教諭が合同で研究した資料を用い、江刺平野の様相は新幹線建設に伴う試錐結果を多く参考にした。
　　江刺市理科教育研究会編　1971　『江刺の地学』
　　川崎地質株式会社　1972　『東北新幹線地質調査報告書―東京起点429～441km―』

注9　遺跡の分布位置・所属時期等は以下の資料を参考にしたが、発掘調査によって確認されているもののほかに、分布調査・資料集収調査等によって判定したものも含まれている。これは、埋蔵文化財包含地的な確認にとどまるものであり、その実体を正確に把握しているとは言い難い。こうした遺跡は記述に際してできるだけ除外してある。
　　岩手県教育委員会　1974　『埋蔵文化財分布地図』

水沢市　1974　『水沢市史－Ⅰ－』

注10　岩手県教育委員会　1979　『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅰ－』

注11　伊藤鉄男　1973　『沼の上遺跡調査報告書』　江刺市教育委員会

山口了紀ほか　1978　『江刺市沼の上遺跡』　（財）岩手県埋蔵文化財センター

注12　高橋信雄・山口了紀・三浦謙一　1979「兎Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』

（財）岩手県埋蔵文化財センター

注13　水沢市　1974　『水沢市史－Ⅰ－』

注14　注13と同じ

注15　前出注９『埋蔵文化財分布地図』

注16　高山遺跡調査会　1978　『高山遺跡』　水沢市教育委員会

注17　岩手県教育委員会　1975　『西大畑遺跡現地説明会資料』

注18　林謙作・伊藤鉄夫・高橋信雄　1976　『角塚古墳』　胆沢町教育委員会

注19　落合Ⅱ遺跡を除き、前出注10『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅰ－』

岩手県教育委員会　1976　「落合Ⅱ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報』

注20　前出注12『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』

注21　大川清ほか　1969　『岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報』　窯業史研究所

大川清編　1970　『岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第２次緊急調査概報』　窯業史研究所

草間俊一編　1971　『岩手県江刺市瀬谷子遺跡第３次緊急調査報告』　江刺市教育委員会

注22　岩手県教育会江刺郡部会編　1925　『江刺郡志』

注23　岩手県教育委員会　1975　『今泉遺跡現地説明会資料』

注24　岩手県埋蔵文化財センター　1979　『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』

注25　岩手県埋蔵文化財センター　1978　『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』

注26　岩手県教育委員会　1976　『石田遺跡現地説明会資料』

注27　水沢市教育委員会　1972　『上野団地遺跡緊急調査現地説明会資料』

II　調査の概要

宮地遺跡の調査の方法は、文化課で他の遺跡に対して実施してきたものと基本的には同じであり、それは序文の2に詳述してある。しかし、遺跡のもつ特性に応じて細部は異なる点もあるので、簡単にその概要を述べておきたい。

〔1〕調査の方法

遺跡の規模：本遺跡の立地する微高地は南北約150m・東西約250mの範囲をもち、約37,000～38,000m²という比較的広い面積を占める。この微高地の規模はそのまま本遺跡の規模・範囲に一致するものと推定される。

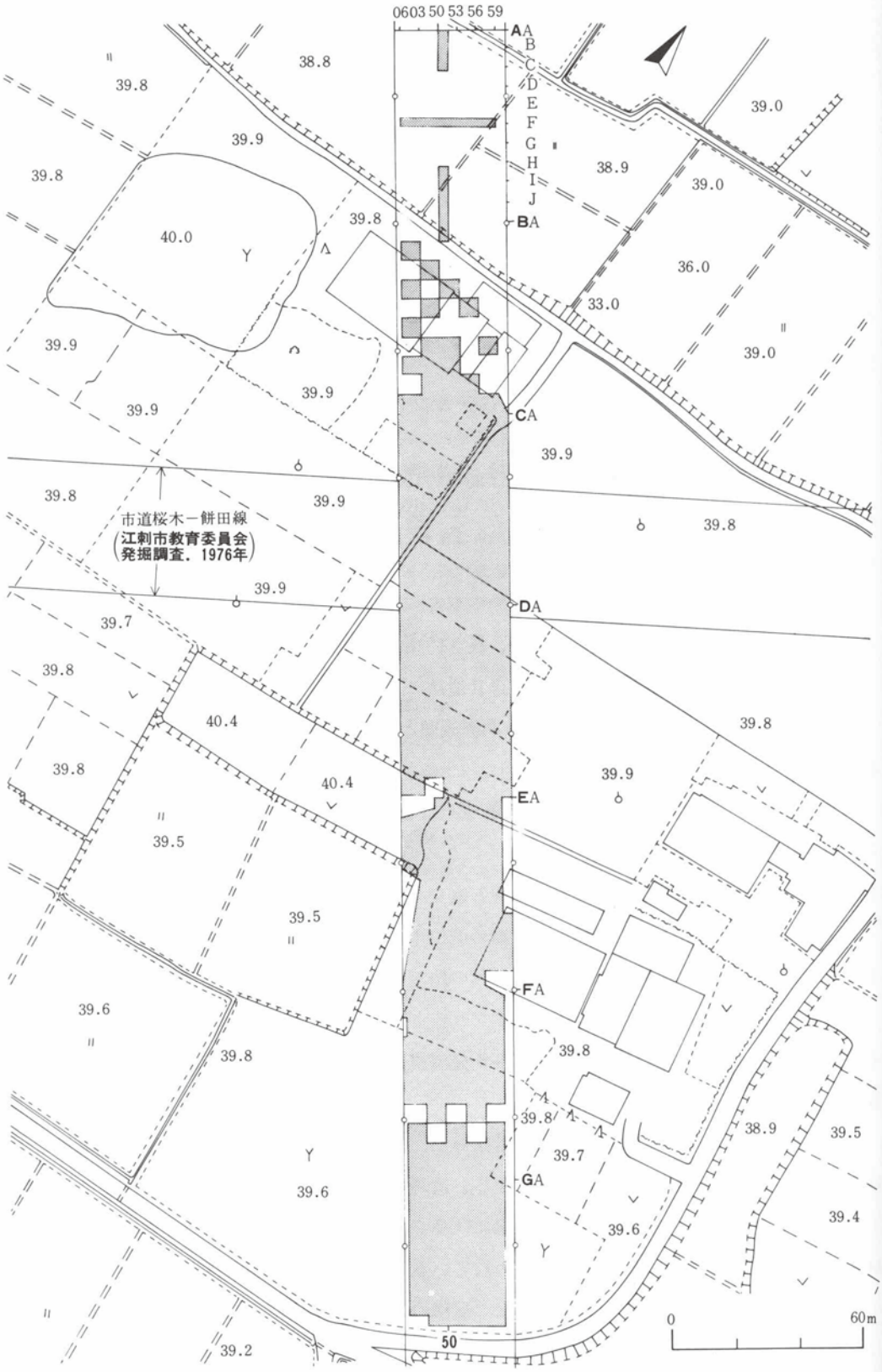
調査範囲：新幹線の路線敷は微高地のやや東寄りの部分を北北西―南南東の方位をとって貫通する。微高地における路線敷の範囲は、長さ約180m・幅17.5mを計り、約3,150m²となる。さらに、南方約2kmの地点に位置する落合II遺跡において旧河道の部分より多量の遺物が出土していることから低位の水田面の一部をも調査範囲とし、南北両域で約450m²を加えた。今回の調査は、以上の約3,600m²を対象とした。

調査区の設定：調査区内の平面測量基準原点は新幹線ルート中軸線上の東京起点432,900kmの地点上に設定し、DA50と名づけた。さらにこの原点と東京起点432,880kmの地点を結ぶ直線を現定し、地割基準線とした。この基準線と直交する線を設け、調査全区域に一辺3mのグリッドを組み1区画30m²とした。調査区北端の低位水田面をA区、南端とそれをG区と呼称し、全域をA～Gの7区に区分した。なお、長軸の地割基準線は座標北より西に37°傾いている。

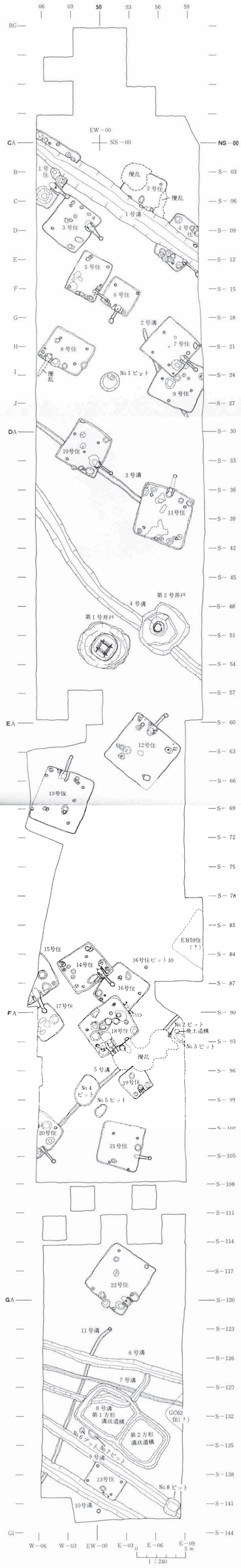
発掘の方法：発掘の方法としては、まずグリッドを市松状に掘り進み遺跡における遺構の分布状態を検討した。その結果、遺構の存在が確実視されたため微高地の北端部を除いてほぼ全面を発掘することにした。

遺構検出のための粗掘はすべて人力で行なった。これは、遺構が検出される層を遺構相互に検討することに留意したためである。しかし、遺跡の基本層がシルトで構成され、遺構の堆積土も同色のシルトであるため、遺構の検出には多くの困難が伴なった。また、当時の地表面が耕作による攪乱や浸食作用によって失なわれていることが多く、遺構の掘り込み面と確認面とが一致したと言えるものは存在しなかった。遺構の検出作業は二度にわたっており、結果的には、検出面である第IIa層を2～3cm掘り下げた段階で遺構の存在を確認したものが多い。

また、地山土と堆積土との区別が困難なため、遺構の精査は難行した。調査期間の長期化は


0603 50 53 56 59
AA
B
C
D
E
F
G
H
I
J
BA
CA
DA
EA
FA
GA
市道桜木ー餅田線
(江刺市教育委員会
発掘調査．1976年)
38.8
39.8
39.9
39.0
38.9
40.0
36.0
33.0
39.7
40.4
39.5
39.6
39.4
39.2
38.9
50
0
60m

第5図　グリッド配置図



注：遺構の新旧関係は
図化していない

第6図　遺構配置図

すべてこのことに起因する。対応策として遺構に近接する地山を深掘りし、それと壁・及び堆積土とを比較するという方法をとった。特に重複する遺構相互の新旧関係の把握には細心の注意を傾けた。

〔2〕調査の経過

前述のごとく、遺構の検出・精査が難行したことと遺跡の規模が予想以上の広がりをみせたことに起因して、単年度で調査を完了させるという当初の予定は実施不可能になり、本遺跡の発掘調査は2年間の継続調査になっている。

初年度は昭和50年9月1日から調査を開始した。粗掘はB区より着手し、A区・C区と進んだ。C区よりは数棟の住居跡が確認されたため、D区以南の粗掘と併行して遺構の精査を実施した。検出作業は2度行なっており、2度目の検出作業でD区以北より住居跡11棟・井戸跡2基などが発見された。当然E区以南にも遺構の存在が予想されたが検出作業は第1段階で保留し、初年度は上記の遺構の精査に主力を注いだ。12月25日には一応初年度の調査を終了したが井戸跡はそのまま放置できないため、乾水期である冬期に調査を続行することとし、51年1月12日から2月21日までの厳寒中に井筒の取りあげまでを実施した。

次年度は昭和51年4月9日より調査を開始した。ところが、4月中には掘削工事に着手する予定が既に組まれていたため、調査計画の練り直しが急を要する課題となった。そこで、工事の進行計画と合わせて調査日程を配分し、4月末までにG区を6月末までにE区以南をあけれたし、7月中旬には全区域の調査を終了させることにした。この計画に従って調査区南端のG区より北に向って再度の検出作業を行い、とりいそぎ全遺構数を把握することに努めた。この作業には、前年度に土捨場としていた場所も対象となり、排土の除去には重機を利用した。その結果、検出された遺構は竪穴住居跡14棟・溝8条などに及んでいる。

また、工事日程に合わせて限定された狭い範囲での調査を繰り返すという発掘方法を余儀なくされたため、削平を免れる遺構（竪穴住居跡か？）についてはシートパイルを打ち込んで保護し、調査対象からはずしている。未調査の竪穴状遺構はG区とE区とに1棟づつ検出されており、GC62住・EG59住と仮称されたものである。いずれも東側の調査区外に延びている。

〔3〕調査の結果

以上の調査は、残務整理をも含め7月26日で終了した。調査期間は2年間で延べ10ケ月に及び、約2,700㎡を発掘した。遺構の内訳は、竪穴住居跡25棟(うち2棟は未調査)・井戸跡2基・溝11条・ピット9個・方形溝状遺構2基などである。それらは調査区の北部と南部において密度が大きく、その数は当初確認した数の約2倍に達している。

Ⅲ　報告に際して

宮地遺跡での新幹線敷設工事にかかわる発掘調査が終了した後、51年の８月より江刺市教育委員会が調査主体となり本遺跡の発掘調査が実施されている。これは、市道の取り付けに伴うもので、県教委の調査が終了する以前にその計画が立案されていた。そこで市道の予定地内に数本の引照杭を設け、基準線を統一できるように配慮した。発掘調査は51年度中に完了しているが、遺構の数量・内訳・配置形態等のいずれもが不明である。したがって本報告書ではその内容に関しては一切ふれていない。ただ本遺跡内における道路の敷設位置とその幅のみを第５図に表示した。

本報告書の整理作業は54年３月より本格的に開始し、９月で終了している。その整理方法は序文の③で記してある方法に準じた。

発掘調査時においては、各種の発見遺構は検出したグリッド名をとって呼称し、原図にもその遺構名で表記した。本報告書では、編集の都合上遺構名を変更し、それぞれ遺構の種類ごとに北より番号をつけ直した。したがって、原図の遺構名と本書の遺構名の関連は第２表に示すとうりである。

なお、本遺跡の内容に関しては、すでに若干の内容が現地説明会資料や各年度の発掘調査略報等で紹介されている。本報告書の記載内容がそれらに優先するものであり、本書以前の遺構名は原図によるものであったことを付記しておく。

第２表　遺構名対照表

住居跡	
原図	報告書
ＢＪ09　住居跡	第１号　住居跡
ＣＡ53　住居跡	第２号　住居跡
ＣＢ06　住居跡	第３号　住居跡
ＣＣ56　住居跡	第４号　住居跡
ＣＤ03　住居跡	第５号　住居跡
ＣＥ50　住居跡	第６号　住居跡
ＣＦ56　住居跡	第７号　住居跡
ＣＧ06　住居跡	第８号　住居跡
ＣＨ56　住居跡	第９号　住居跡
ＣＪ03　住居跡	第10号　住居跡
ＤＢ53　住居跡	第11号　住居跡
ＤＪ50　住居跡	第12号　住居跡
ＥＢ06　住居跡	第13号　住居跡
ＥＨ03　住居跡	第14号　住居跡
ＥＨ09　住居跡	第15号　住居跡
ＥＩ50　住居跡	第16号　住居跡
ＥＪ09　住居跡	第17号　住居跡
ＥＪ50　住居跡	第18号　住居跡
ＦＢ50　住居跡	第19号　住居跡
ＦＤ09　住居跡	第20号　住居跡
ＦＤ50　住居跡	第21号　住居跡
ＦＩ50　住居跡	第22号　住居跡
ＧＦ50　住居跡	第23号　住居跡

溝	
原図	報告書
ＢＪ09　溝	第１号溝
ＣＪ53　溝	第２号溝
ＣＪ06　溝	第３号溝
ＤＢ06　溝	第４号溝
ＦＤ09　溝	第５号溝
ＧＢ06　溝	第６号溝
ＧＣ06－１溝	第７号溝
ＧＣ06－２溝	第８号溝
ＧＥ06　溝	第９号溝
ＧＦ06　溝	第10号溝
ＧＢ50　溝	第11号溝

ピット類	
原図	報告書
ＣＨ50　ピット	No.１ピット
ＦＡ50－１ピット	焼土遺構
ＦＡ50－２ピット	No.２ピット
ＦＡ50－３ピット	No.３ピット
ＦＣ03　ピット	No.４ピット
ＦＤ03　ピット	No.５ピット
ＧＥ03－１ピット	No.６ピット
ＧＥ03－２ピット	No.７ピット
ＧＧ56　ピット	No.８ピット

井戸跡	
原図	報告書
ＤＧ03井戸跡	第１号井戸跡
ＤＧ53井戸跡	第２号井戸跡

方形溝状遺構	
原図	報告書
ＧＤ50方形溝状遺構	第１号方形溝状遺構
ＧＥ53方形溝状遺構	第２号方形溝状遺構

Ⅳ　発見された遺構と遺物

1.　竪穴住居跡とその出土遺物

第１号（ＢＪ09）住居跡

〔遺構確認面〕　Ⅱa層のにぶい黄褐色土層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。遺構の掘込面はⅡa層の上面である。なお、当地区ではⅠb層は検出されていない。

〔保存状況〕　住居の一部は路線敷外にかかり、調査していない。調査区内に限れば、遺構相互の重複による削損をうけているものの保存状況は比較的良好である。

〔重複関係〕　第１号溝・第３号住居跡と重複関係にある。当住居の北部床面は第１号溝によって掘り抜かれており、カマド煙出部の一部は第３号住居跡によって切られている。第１号溝第３号住居跡よりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕　未調査区を含むため断定できないが、平面形は南北に長い長方形を呈するものと思われる。長軸方向は推定でN－3°30′－Wである。

〔規模〕　長軸(南北)長は6.62ｍ・6.42ｍで、短軸(東西)長は不明である。

〔堆積土〕　遺構内堆積土は基本的には以下の３層に大別される。

第１層：褐色のシルト層である。住居の上部のほぼ全域に厚く堆積する。緻密でかなりかたい。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第２層：暗褐色のシルト層である。第１層に次いで厚く、分布も住居の全域に及ぶ。第１層に比べてやや粘性があり、やわらかい。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

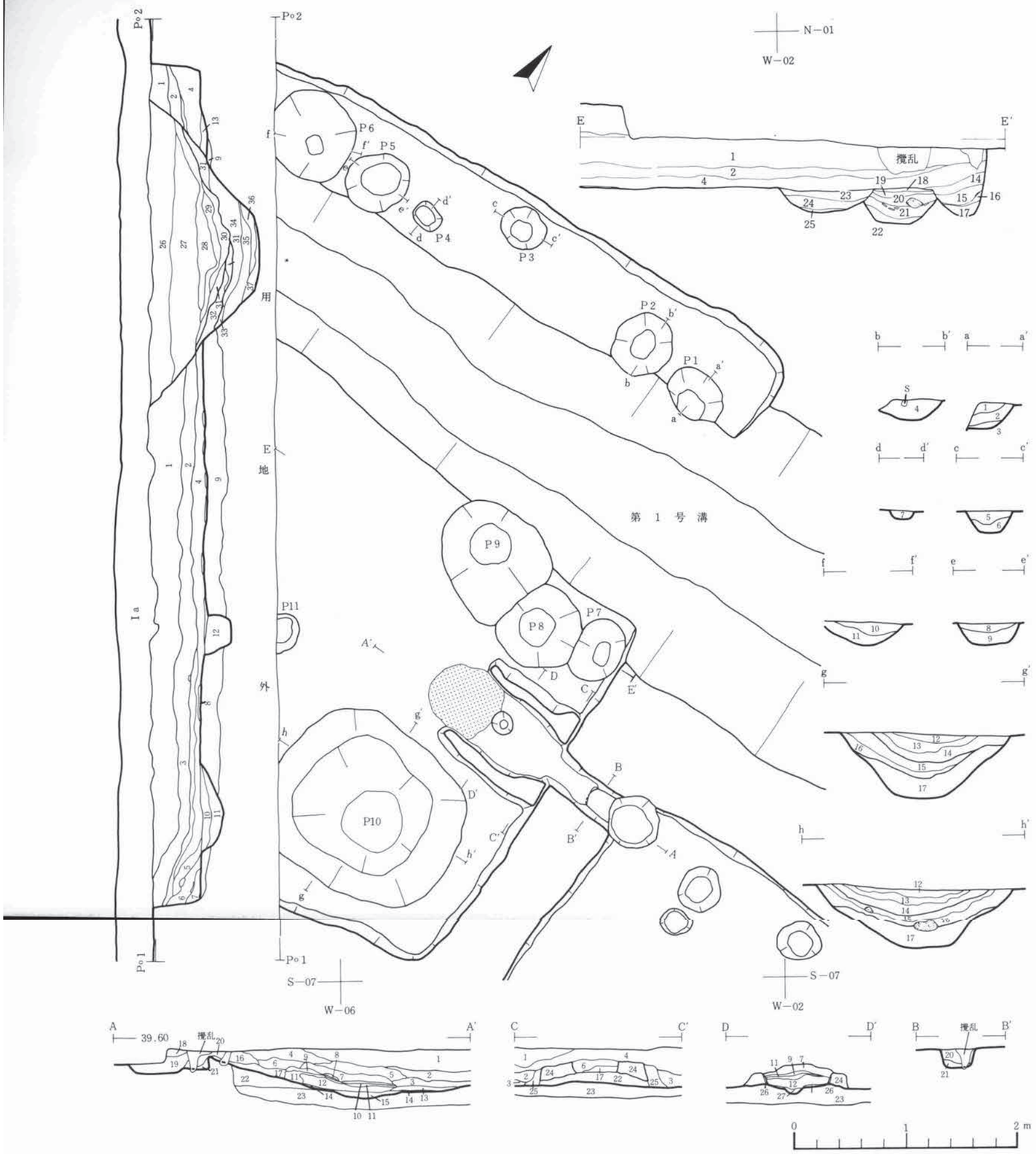
第３層：暗褐色の粘土質シルト層である。床面上に全域に堆積する。ややぼさぼさしておりやわらかい。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

以上、第１層から第３層まですべて自然的営力による堆積状況を示している。

〔壁〕　地山を壁としている。壁は床面より急角度で立ちあがる。現存する壁高は、東壁で30～37㎝、西壁が不明、南壁37～42㎝、北壁31～37㎝となっている。

〔床〕　床面は部分的な凸凹はみられるもののほぼ平担になっている。壁際を除いて比較的かたい面をなしており、堆積土とは肌分れ現象がみられる。床面上から大小合わせて11個のピットが検出されている。また、所々に小規模な焼土面が認められる。

最後に、床面を立ち割ったところ、床面下20㎝内外の深さをもつ掘り方が検出されている。壁際は浅くなっておりほとんど検出されない個所もある。埋土は地山のにぶい黄褐色土と褐色



	層No.	土色	土性	その他
第 1 層	1	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
第 2 層	2	暗 褐 色(10Y R3/4)	〃	〃 をかなり含む
〃	3	褐 色(10Y R4/4)	〃	地山粒・細砂をかなり混入する
第 3 層	4	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を多く含む
〃	5	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	木炭粒を少量含む
〃	6	褐 色(10Y R4/6)	〃	〃
〃	7	〃 (〃)	〃	塊状堆積
焼 土	8	暗 赤 褐 色(2.5Y R3/6)	〃	
埋り方埋土	9	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	褐色土との塊状混合土
P 10	10			ピットNo.13層と同じ
〃	11			〃 No.14層と同じ
P 11	12	褐 色(10Y R4/4)	シルト	
P 6	13			ピットNo.11層と同じ
P 7	14	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	15	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	木炭粒を少量含む
〃	16	〃 (〃)	〃	ぼさぼさしている
〃	17	褐 色(10Y R4/4)	〃	微量の焼土粒を含む
P 8	18	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	固化している
〃	19	黄 褐 色(10Y R5/6)	〃	〃
〃	20	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	〃
〃	21	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	灰・焼土・木炭・土器を含む
〃	22	褐 色(10Y R4/4)	シルト	地山粒・細砂を含む
P 9	23	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	24	〃 (〃)	〃	緻密で混入物なし
〃	25	暗 褐 色(10Y R3/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
第 1 号 溝	26			第12図第 1 号溝No. 1 層と同じ
	27			〃 〃 No. 2 〃
	28			〃 〃 No. 3 〃
	29			
	30			第12図第 1 号溝No. 4 層と同じ
	31			
	32			第12図第 1 号溝No. 5 層と同じ
	33			第12図第 1 号溝No. 6 層と同じ
	34			
	35			第12図第 1 号溝No. 7 層と同じ
	36			〃 〃 No. 8 〃
	37			〃 〃 No. 9 〃
カ マ ド	1			住居内 堆積土No. 1 層と共通
	2			〃 〃 No. 2 層 〃
	3			〃 〃 No. 4 層 〃

	層No.	土色	土性	その他
	4	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	少量の木炭粒を含む
	5	明 黄 褐 色(10Y R6/6)	〃	天井部崩壊土(?)
	6	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	灰白色粘土を塊状に含む
	7	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	木炭粒をかなり含む
	8	灰 白 色(5Y 8/2)	粘 土	
	9	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土塊を多量に含む
	10	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	灰白色粘土をかなり含む
	11	赤 褐 色(2.5Y R4/6)	シルト	塊状の焼土
	12	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	灰・焼土・木炭を含む
	13	〃 (10Y R3/3)	シルト質粘土	〃
	14	赤 褐 色(2.5Y R4/6)	シルト	焼土
	15	暗 赤 褐 色(2.5Y R3/6)	〃	火床部
	16	褐 色(10Y R4/4)	〃	粒～塊状の焼土をかなり含む
	17	〃 (〃)	〃	塊状の焼土を多量に含む
	18	〃 (〃)	〃	ぼさぼさしている
	19	〃 (7.5Y R4/4)	〃	塊状の焼土を多量に含む
	20	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	塊状堆積
	21	褐 色(10Y R4/4)	〃	焼土粒をかなり含む
	22	〃 (10Y R4/6)	〃	固化している
	23	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	〃
	24	〃 (10Y R5/3)	〃	袖部
	25	〃 (10Y R4/3)	〃	袖の崩壊土
	26	赤 褐 色(2.5Y R4/6)	〃	焼土
	27	暗 褐 色(10Y R3/3)	粘土質シルト	ぼさぼさしている
P 1	1	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	
〃	2	褐 色(10Y R4/4)	〃	
〃	3	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
P 2	4	〃 (〃)	〃	緻密で混入物なし
P 3	5	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	〃	木炭粒を少量含む
〃	6	〃 (10Y R4/3)	〃	
P 4	7	〃 (10Y R5/3)	〃	木炭粒を少量含む
P 5	8	〃 (〃)	〃	細砂を含む
〃	9	〃 (10Y R4/3)	〃	ややねばりがある
P 6	10	〃 (10Y R5/3)	〃	
〃	11	褐 色(10Y R4/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
P 10	12	暗 褐 色(10Y R3/4)	〃	焼土粒をかなり含む
〃	13	褐 色(10Y R4/4)	〃	木炭粒を少量含む
〃	14	暗 褐 色(10Y R3/3)	粘土質シルト	多量の木炭片を含む
〃	15	褐 色(10Y R4/4)	シルト	木炭粒を少量含む
〃	16	〃 (〃)	〃	〃
〃	17	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	粘土質シルト	グライ化している

第 7 図　第 1 号住居跡

土の混合土である。

〔柱穴〕 床面上より発見された11個のピットのなかで、柱穴とすることのできるものはみあたらない。

〔カマド〕 東壁やや南寄りの部分に付設されている。第3号住居跡に煙出部の一部を破壊されているほかは遺存状況は良好である。主軸方向はE—2°—Nである。

燃焼部は火床部にあたる部分で床面より若干掘り凹め、そのまま煙道部入口に向って緩やかに立ち上がっている。煙道部入口での火床面との比高は24cmになる。火床部には64×59cmの範囲で厚さ2～5cmのかたい焼土面がある。火床部の奥からは直径18cmの小ピットが検出されており、支脚をすえるためのピットと想定される。

煙道部はやや特異な形態を示す。煙道の中央付近までは燃焼部から連続して緩く立ち上がり、中央付近で一旦急激に下ってそのまま水平に進んで煙出部へと接続している。煙出部には直径約50cmのピットが掘られており、煙道端との比高は4cmとなる。

最後に燃焼部を掘り下げたが、床面下の掘り方埋土と共通する土が検出されており、燃焼部に伴う掘り方は認められなかった。ただ、燃焼部の傾斜する部分にはそれに合わせて土を積みあげている。

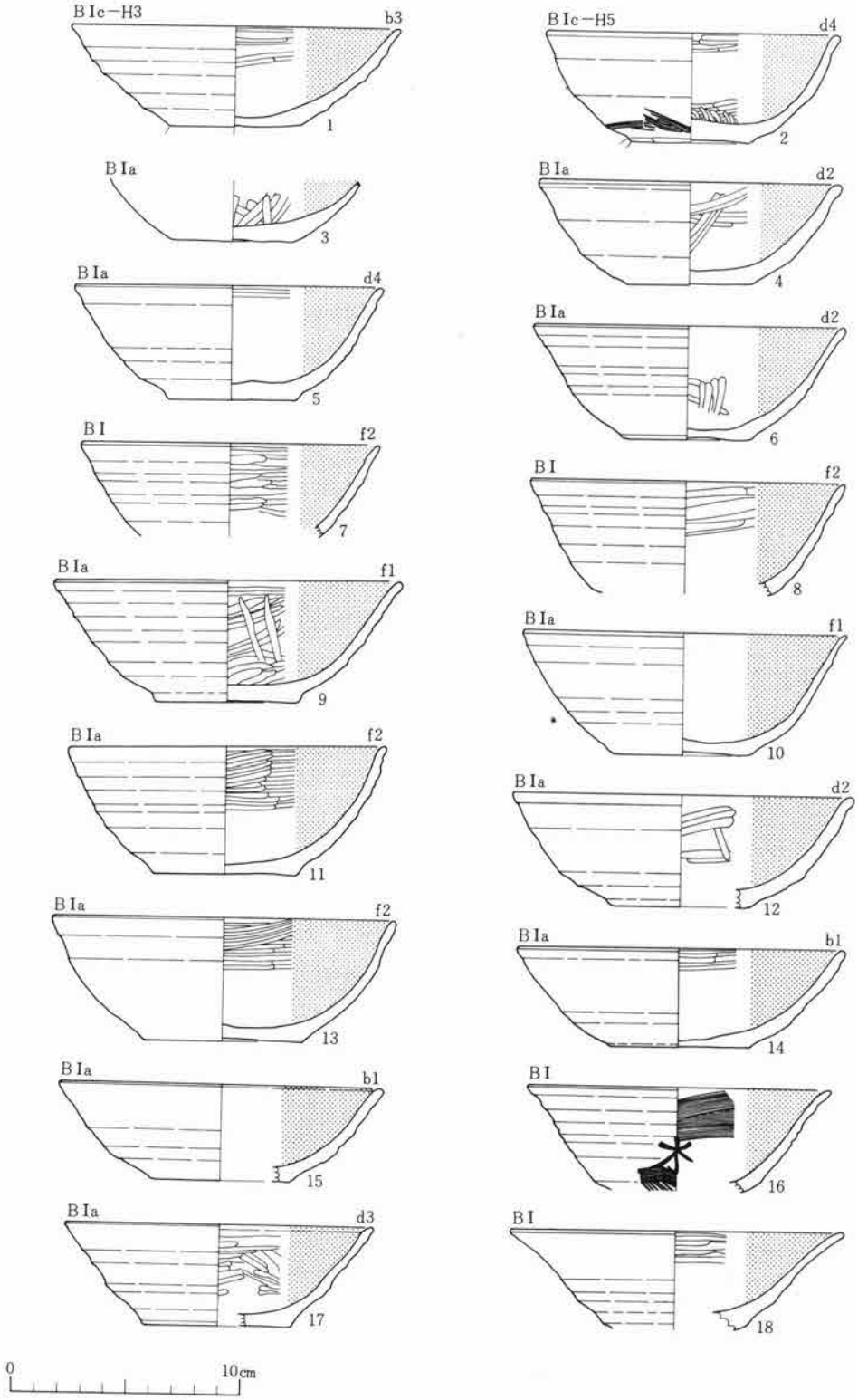
〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるものにはP_8、P_9、P_{10}がある。P_8とP_9はカマド左脇に重複して位置している。P_9はP_8よりも新しい。P_8は直径約75cmで深さは32cmとなる。埋土は5層に分けられるが上部の3層は埋め戻した人為的な堆積層である。他の層は自然堆積層で、灰・焼土・木炭を多く混入する。P_9はP_8に後続して使用されたものと思われ、埋土は自然堆積層である。P_{10}はカマド右脇に位置しており、かなり大形のものである。大きさは178×152cmで深さは58cmとなる。埋土は6層に分けられ、すべて自然的営力による堆積層である。P_{10}に関していえば、貯蔵穴との想定は一応妥当性をもっているが、当住居と重複するピットとなる可能性も残されている。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器と土錘とがある。土器は、坏、高台付坏、甕、鉢の各器種に分けられる。土器の出土量は比較的多く、なかでもピット10および、カマドの周囲より出土したものが多い。

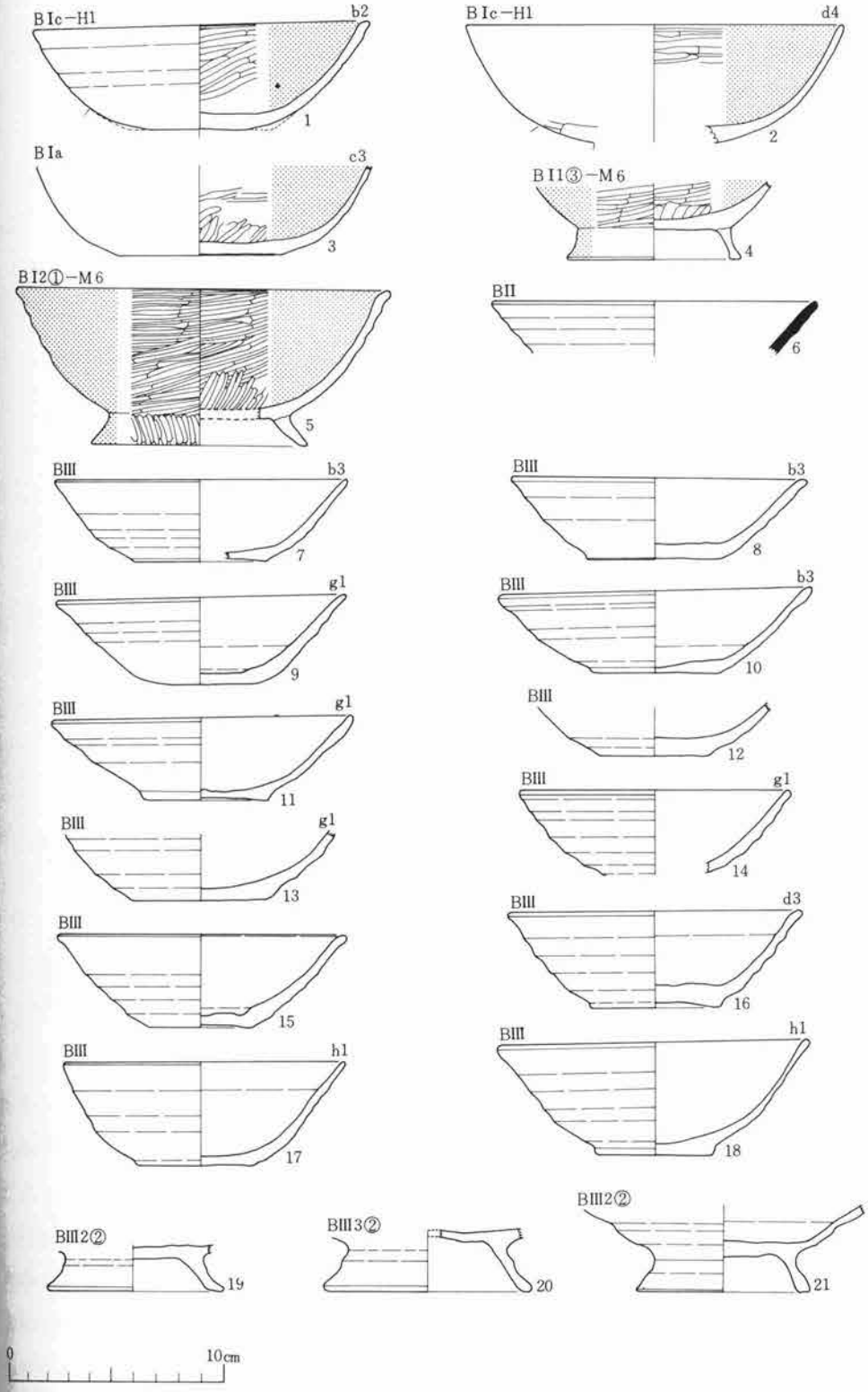
坏形土器（第8図、第9図） 坏には、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、BⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）がある。

〈坏BⅠ類〉（第8図1～18、第9図1～3）BⅠ類の坏は、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施すもの（BⅠc類）と無調整のもの（BⅠa類）とがある。後者が圧倒的に多い。

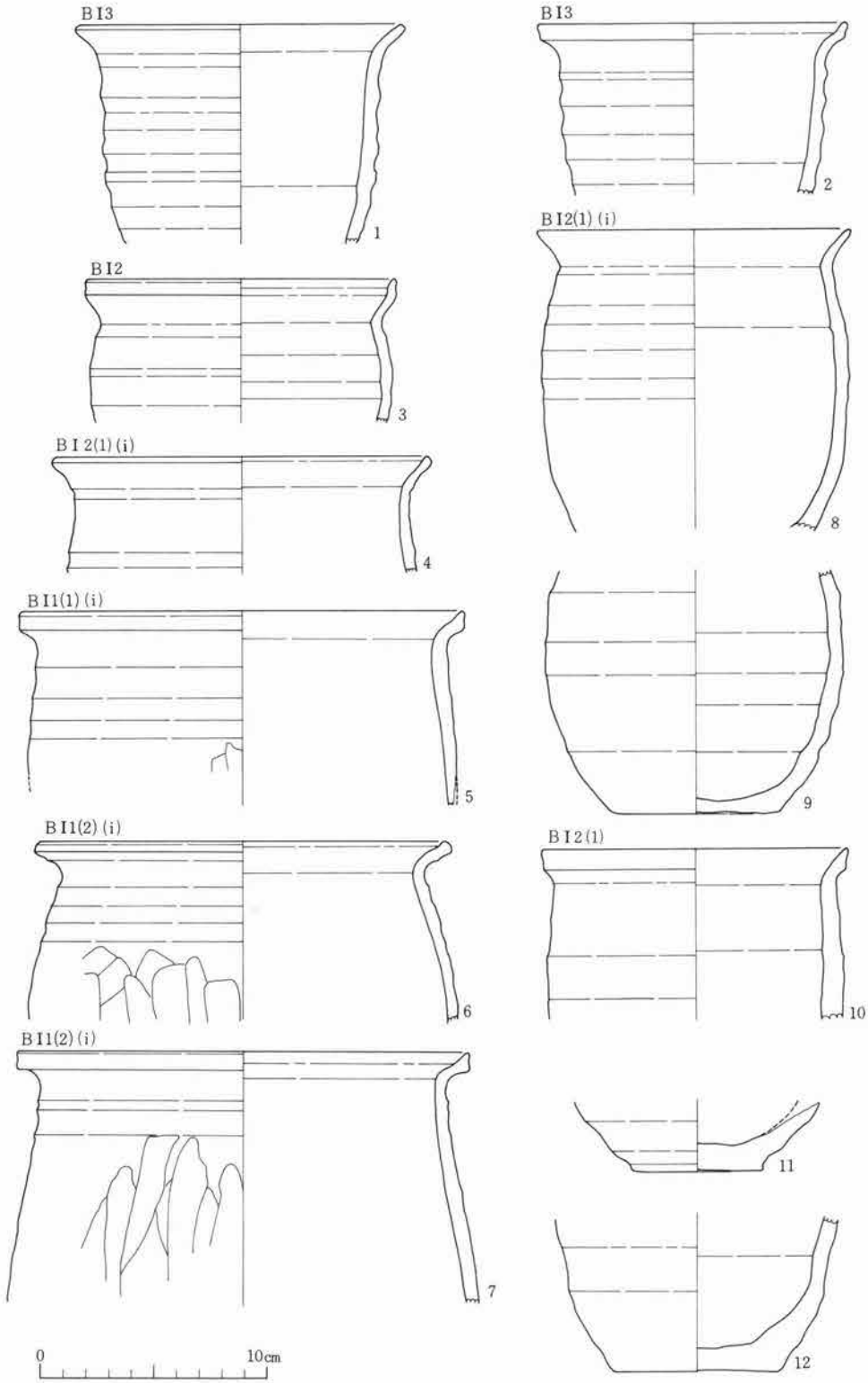
BⅠc類の坏（第8図1・2、第9図1・2）は、再調整の手法はすべて手持ちヘラケズリによっており、体部下端に施すもの（H_5手法）（第8図2）、底部全面に施すもの（H_3手法）（第8図1）



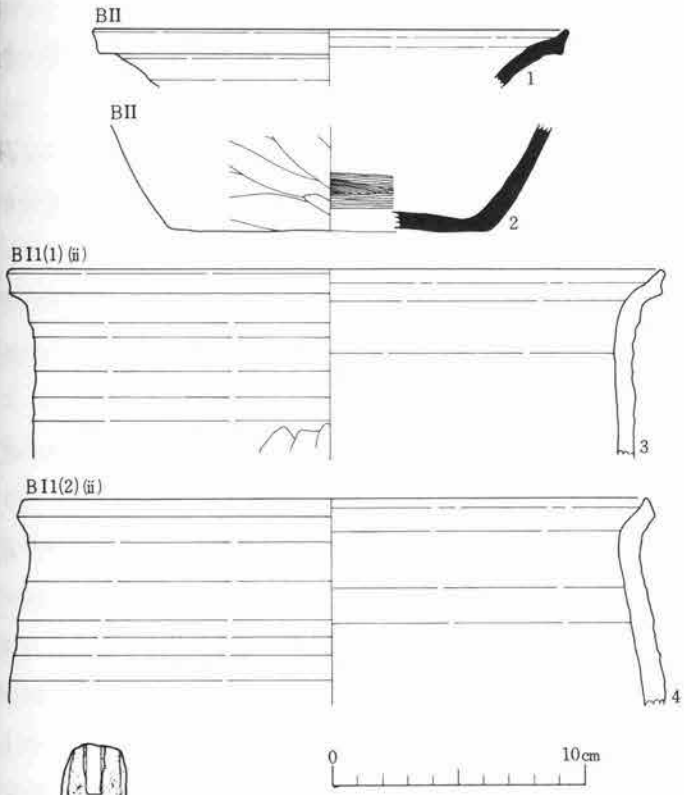
第8図　第1号住居跡　出土遺物（1）

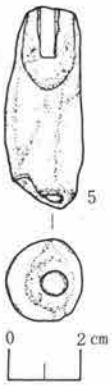


第9図　第1号住居跡　出土遺物（2）



第10図　第1号住居跡　出土遺物（3）





第11図　第1号住居跡　出土遺物（4）

体部下端より底部全面に施すもの（H1手法）(第9図1・2）に3分される。形態上の特徴によっても分けられ、器高が底くて底径の小さなものには、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（第8図1)と体部がやや丸味をもって外傾するもの（第9図1）とがある。また、器高が普通で底径の小さなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの（第8図2、第9図2）である。

ＢＩａ類の坏（第8図3～6、9～15、17、第9図3）は、成形・調整技法は共通しており、形態上の特徴により細分される。器高が普通で底径の小さなものには、体部がやや丸味をもって外傾するもの（4・6・12）と体部が直線的に外傾するもの（17）、および体部がかなり丸味をもって立ち上がるもの(5)とがある。器高が高くて底径の小さなものには、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの（11・13）と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（9・10）とがある。器高が低くて底径の小さなものは体部がかなり丸味をもって外傾する（14・15)。また、器高が普通で底径が大きく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの（第9図3）もある。9の体部には〝水〟の墨書が観察される。

〈坏ＢⅡ類〉　（第9図6）　すべて細片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない

〈坏ＢⅢ類〉　（第9図7～18）　回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さく体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（7・8・10)、器高が低くて底径が極端に小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（9・11・14・15)、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（16)、および器高が普通で底径が極端に小さく、体部がやや丸味を

もって立ちあがるもの（17・18）などに細分される。

高台付坏形土器（第９図）　高台付坏はＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とに類別される。

〈高台付坏ＢＩ類〉（第９図４・５）　高台部が短く直立ぎみに外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（ＢＩ１③類）（４）と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの（ＢＩ２①類）（５）とに分けられる。いずれも内外両面にヘラケズリを施し、黒色処理を加えるものである。５は高台部もヘラミガキで調整している。４の坏部は器高の高い埦形を呈するものと思われる。なお第８図18は、高台付坏の坏部となる可能性が強い。

〈高台付坏ＢⅢ類〉（第９図19～21）　高台部が長く外傾するもの（ＢⅢ２類）（19・21）と極端に長く外傾するもの（ＢⅢ３類）（20）とがある。いずれも底部はナデを施し、口縁をロクロ調整するもの（②類）で、坏部の形態は不明である。

甕形土器（第10図・第11図）　甕にはＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕ＢＩ類〉（第10図４～12、第11図３・４）　ＢＩ類の甕は器形の大小と最大径をもつ位置によって分けられ、口縁部に最大径をもつ大形のもの（ＢＩ１(1)類）、体部に最大径をもつ大形ののもの（ＢＩ１(2)類）、および口縁部に最大径をもつ小形のもの（ＢＩ２(1)類）とに細分される。

ＢＩ１（１）類の甕（第10図５・第11図３）には、口縁部が短くてゆるやかに外反するもの（第10図５）と極端に短く外反するもの（第11図３）とがあり、口唇部は上方へ弱く挽き出している。

ＢＩ１（２）類の甕（第10図６・７、第11図４）は、口縁部の形態に違いがみられ、極端に短くてゆるく外反し、口唇部を上方内側へ挽き出すもの（第11図４）、短く強く外反し、口唇部を上方へ挽き出すもの（第10図７）、短く強く外反し、口唇部は単純に丸めてあるもの（第10図６）などに分けられる。体部はほぼ共通するが、やや丸味が強いもの（第10図６）とゆるやかに脹むものとに分かれる。いずれも体部の中央付近に最大径をもつ。器高調整は、体部外面下半にヘラケズリが施されている。

ＢＩ２（１）類の甕（第10図４、８～12）は、口縁部が比較的長く外反し、体部がゆるやかに脹むもの（４・８・９）と口縁部が極端に短く外反し、体部がほぼ直線的に底部へと移行するもの（10）とに分けられる。全面ロクロ調整によっており、底部片には右回転糸切痕を残す。

〈甕ＢⅡ類〉（第11図１・２）　ＢⅡ類の坏はすべて細片であり、図示可能のものは少ない。１は口縁部が大きく開いて外傾する甕の破片である。２は底部片で、外面にはヘラケズリ、内面にはナデが施されている。ともに全体の器形は不明である。

鉢形土器（第10図１～３）　鉢はいずれもＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。１と２は口縁部が短くゆるく外反し、体部はほぼ直線的に底部へと移行するもので、上

端付近に体部最大径をもつ。口唇部に若干の違いがみられ、2は上方へ挽き出している。3は口縁部がゆるく外反し、口唇部を上方へ長く挽き出すもので、体部は肩部付近で丸味をもって張り出し、体部最大径は上半付近にもつ。いずれも全面ロクロナデで調整している。

土錘（第11図5）先端の一部を欠いている。中央でやや脹む管状のものである。長さ5.4cm、最大腹径2.2cmを計り、長軸に沿って径約0.7cmの貫通孔が入る。

第2号（CA53）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。実際にはIIa層を2～4cm掘り下げて遺構の存在を確認している。

〔保存状況〕 北西のコーナー部分は溜桶を据えるための大きな円形土壙によって破壊され、東壁の大部分は不定形の溝状の土壙によって攪乱をうけている。保存状況は極めて悪い。

〔重複関係〕 第1号溝によって南壁全体を切られており、当住居跡は第1号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕 南壁を欠くため明確にしがたいが、東西に長い長方形を呈するものと思われる。長軸方向は推定でN—84°50′—Wとなる。

〔規模〕 長軸(東西)長は 4.3m・4.15mとなり、短軸(南北)長は3.7m前後と推定される。床面積はやはり推定値で15.35m²前後になる。

〔堆積土〕 住居内堆積土は基本的には以下の2層に大別される。

第1層：褐色のシルト層で、住居の全域に広く分布する。粒状の焼土・炭化物を少量含む。上部はかなり攪乱をうけている。

第2層：にぶい黄褐色のシルト層で、壁の周囲に厚く堆積する。粒状の焼土・炭化物を多量に含むほか、地山のにぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

第1層、第2層とも自然的営力により堆積したものである。

〔壁〕 第1号溝による削除、後世の攪乱等により遺存する壁は西壁の一部と北東コーナー付近に限られる。地山を壁としており、床面より急角度で立ちあがる。残存する壁高は東壁で9～10cm、西壁が5～9cm、北壁9～12cmとなっている。

〔床〕 床面は、北東部に若干低くなる個所もみられるがほぼ平担になっている。遺存する床面上には4個のピットが掘り込まれている。

地山をそのまま床面としており、掘り方等は検出されていない。

〔柱穴〕 柱穴として断定できるピットは検出できなかった。ただ、配置形からはP_4が柱穴とも考えられるが、深さが13cmと浅い。

〔カマド〕 南壁の東寄り部分に構築されている。主軸方向は推定でS—12°12′—Eとなる。煙道部、煙出部は第1号溝による削除をうけて失なわれており、残存するのは燃焼部の一部の

みである。燃焼部は床面より７cmほど掘り込まれており、下部に２～３cmの固い焼土面を有する。燃焼部側壁は、地山のにぶい黄褐色シルトを素材とし、それを積み上げて構築している。ほとんど遺存しておらず、最大高で10cmにすぎない。

最後に燃焼部床面を掘り下げたが、掘り方等は検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマド右袖脇に検出されたP_1が貯蔵穴と思われる。第１号溝によって欠損しているが直径約45cmほどの円形を呈するものと思われ、深さは約30cmになっている。埋土は２層に分けられる。上層は粒状の焼土と木炭片を多量に含む褐色土で、ぼさぼさした細粒状堆積を示す。下層は地山のにぶい黄褐色土をブロック状に混入する褐色土で、含有物は認められない。

〔出土遺物〕　当住居跡の出土遺物には、土器と鉄製品とがある。土器は坏・甕・高台付盤(？)などの器種がある。カマドの周囲より比較的多く出土している。

坏形土器（第13図）　坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、ＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢＩ類〉（第13図１～５）　ＢＩ類の坏には、底部を切り離した後、調整を加えないもの（ＢＩa類）と再調整を施し、底部の切り離し技法が不明のもの（ＢＩe類）とがある。

ＢＩe類の坏（１）は、体部下端より底部全面に手持へラケズリが施されるもの（H_1手法）である。器形の特徴は、器高が低くて底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾する。

ＢＩd類の坏（２・５）は、器高が底くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾するもので１と共通する。

〈坏ＢII類〉（第13図６）　回転糸切り無調整のもの（ＢIIa類）である。６は器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するものである。

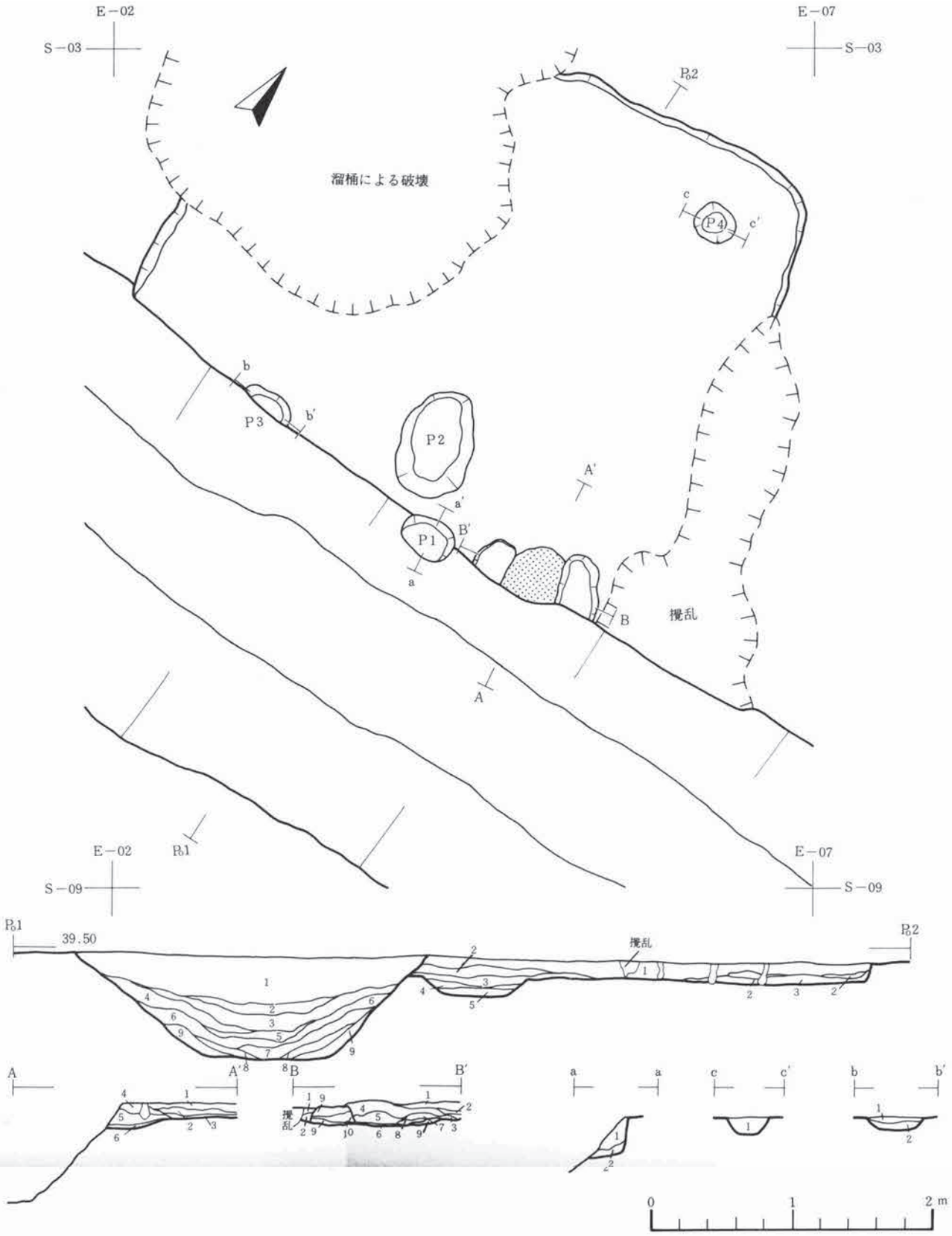
〈坏ＢIII類〉（第13図７・８）　回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さなもので、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(７)と体部がややふくらみをもって外傾するもの（８）とがある。

甕形土器（第13図）　甕にはＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼式）とＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。甕ＢII類はすべて体部の小片であり、全体の器形等は不明である。

〈甕ＢＩ類〉（第13図９・10）ＢＩ類の甕には、大形の長胴形を呈し、体部に最大径をもつもの（ＢＩ１(２)類）と小形で口縁部に最大径をもつもの（ＢＩ２(１)類）とがある。

ＢＩ１(２)類の甕(９)は、口縁部が極端に短く外反し、口唇部は上方へ挽き出しており、最大径は体部中央付近にもつ。器面調整は口縁部から体部上半までロクロナデによっている。

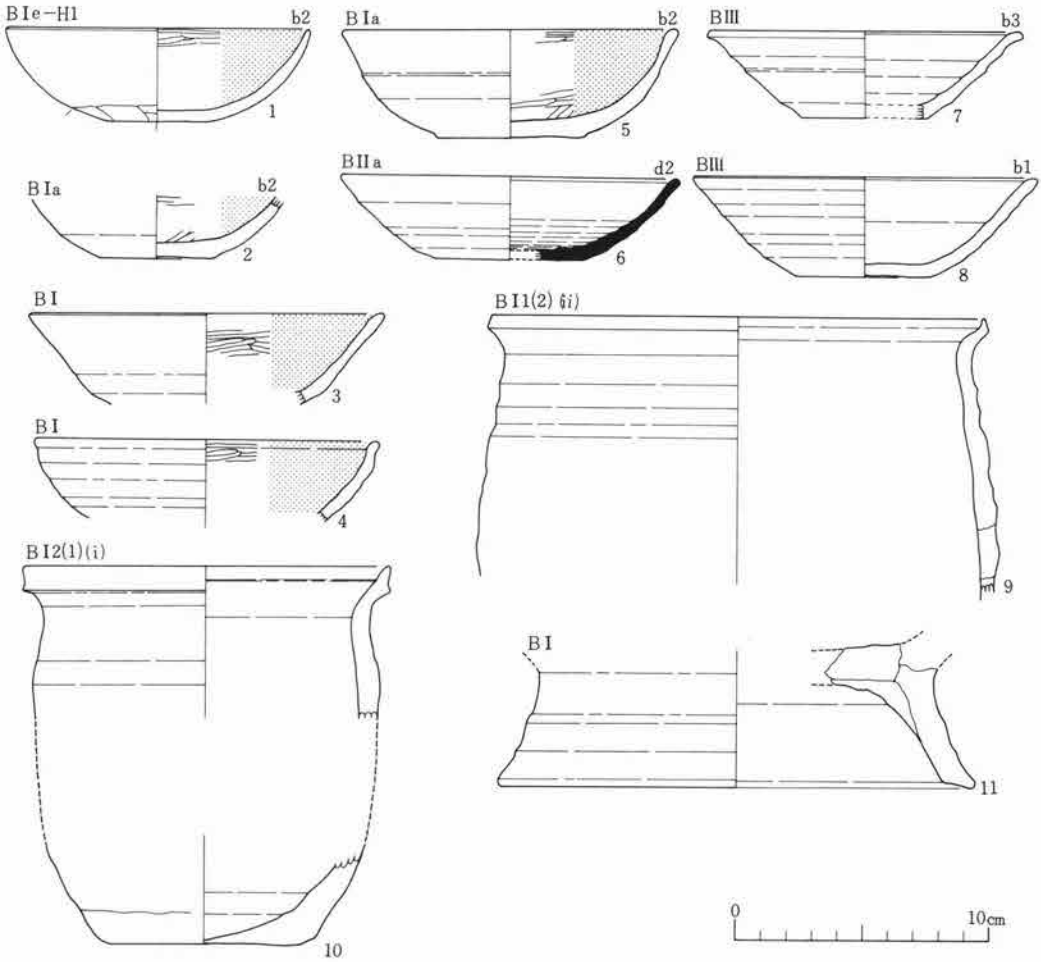
ＢＩ２(１)類の甕(10)は、口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部最大径を中央付近にもつ。器面は全面ロクロナデで整え、底部外面には右回転糸切り底を残す。



	層No.	土色	土性	その他
第1号溝				
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	混入物なし
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を少量含む
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	細粒状の焼土・粒状の木炭を少量含む
第2層	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	第1層よりややあらいシルトで粒状堆積微量の焼土・木炭を含む
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
第3層	7	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	粒状の焼土・炭化物をかなり含む
	8	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	粒状の焼土・炭化物を少量含む
	9	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	若干グライ化している
第2号住				
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭片を少量含む
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粒状の焼土・炭化物を多量に含む
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山土をブロック状に含む
P 2	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	粒状の焼土・炭化物を含み、ねばりがある
	5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	混入物なし

	層No.	土色	土性	その他
カマド	1			住居堆積土層No.1
	2			〃 層No.2
	3			〃 層No.3
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	ブロック状に堆積
	5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	下部は若干焼土化している
	6	橙色(5YR6/8)	シルト	焼土、火床部
	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	袖の崩壊土、暗褐色土と焼土粒を混入
	8	〃 (10YR5/3)	シルト	袖の崩壊土、焼土粒を僅かに含む
	9	〃 (10YR5/4)	シルト	混入物なし
	10	〃 (10YR5/3)	シルト	粒状の焼土・木炭をかなり含む
P 1	1	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	粒状の焼土を多量に含む、ねばりがある
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山土を含む
P 3	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	
	2	〃 (10YR5/4)	シルト	ぼさぼさしている
P 4	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	粒状の木炭を少量含む

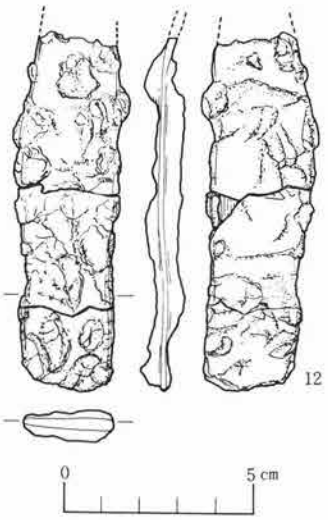
第12図　第2号住居跡



第13図　第２号住居跡出土遺物

高台付盤形土器（第13図II）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。高台部分のみの破片であり、正確には器種は不明である。高台は長く外傾する器肉の厚いもので、先端は平坦になっている。底部周縁はロクロナデで調整している。

鉄製品（第13図12）　板状の偏平なもので長方形を呈する。鎌と推定される。一方の先端を欠き、現存長で9.5cm、幅2.5cmを計る。



第3号（CB06）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。IIa層の上面はところどころに耕作による攪乱を受けており、実際はIIa層を若干掘り下げて全体のプランを確認した。

〔保存状況〕 ほぼ完全なかたちで遺存している。

〔重複関係〕 第1号住居跡と重複関係にある。当住居跡の北西隅コーナーの部分が第1号住居跡のカマド煙出部の一部を切っている。第1号住居跡より新しい。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は南北にやや長い長方形で、長軸方向はN－2°15′－Eとなる。

〔規模〕 短軸(東西)長で4.37m・4.30m、長軸(南北)長で4.63m・4.50mとなり、床面積は約18.79m²である。

〔堆積土〕 遺構内堆積土は基本的には以下の2層に分けられる。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の上部全域に厚く堆積する。微量の木炭片以外に混入物はみられない。

第2層：褐色のシルト層で、住居の下部全域に分布する。焼土粒・木炭片をかなり混入する。第1層に比べて密度が密になっている。

第1層、第2層とも自然堆積土層として認定できる。

〔壁〕 地山を壁としている。ほぼ完全なかたちで残存しており、、床面よりの角度は比較的きつい。壁高は低く、現存値で東壁5～8cm、西壁11～13cm、南壁11～18cm、北壁6～9cmとなっている。

〔床面〕 床面はほぼ水平であるが壁付近でやや低く、中央部でやや高くなる傾向がみられる。床面上からは合計12個のピットが検出されている。

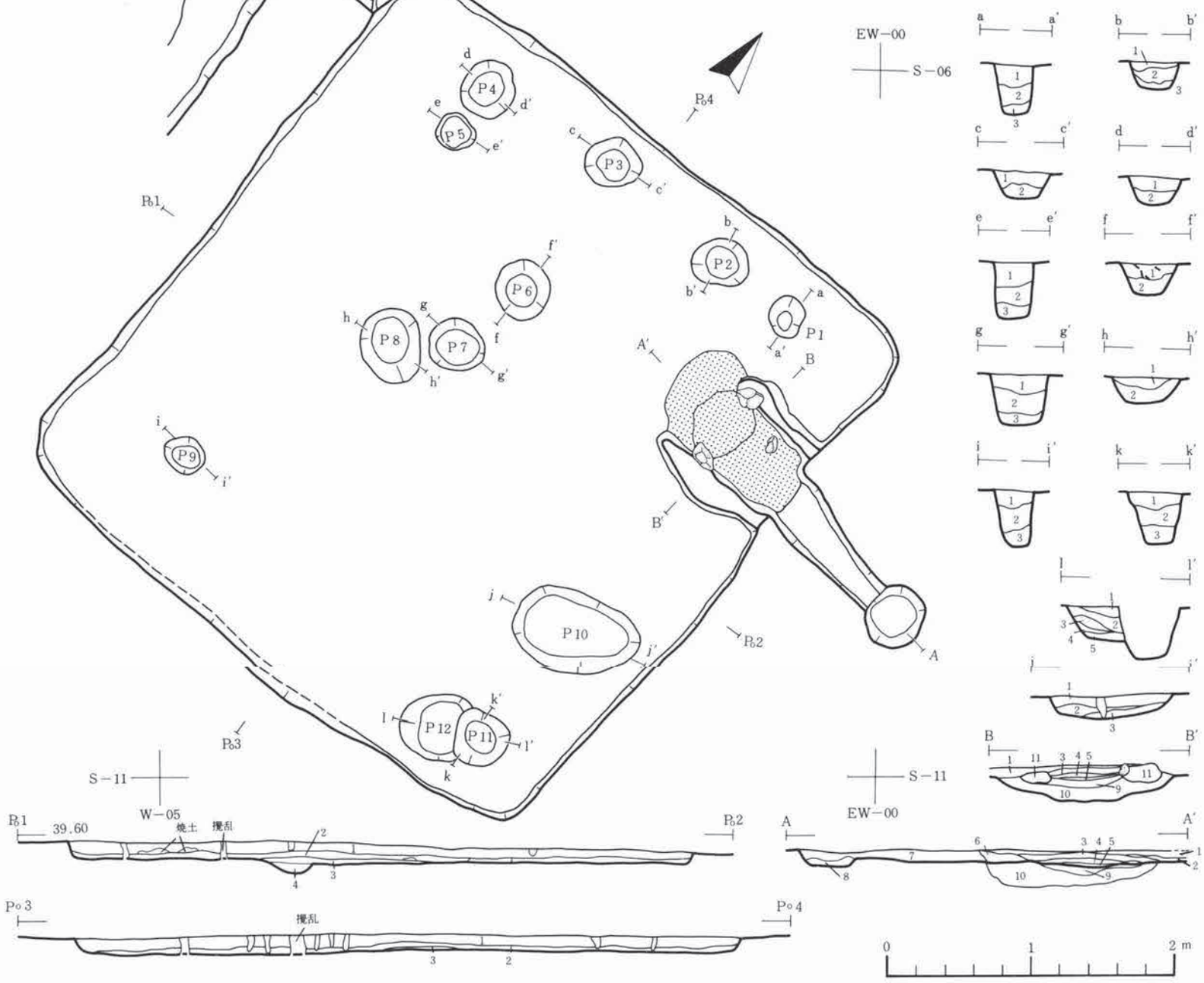
地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方等は確認されていない。

〔柱穴〕 柱穴として認定できるものとしてP_1・P_5・P_9・P_{11}がある。これらのピットは斉一性が認められ、規模、埋土状況等がほぼ一定している。また、配列にも規則性がみられ、4個のピットを結んだ線は台形に近い四角形となる。

ほかに柱穴の可能性を持つものとしてP_7がある。これは床面のほぼ中央部に位置しており、上記の4個のピットと同様の内容を示している。P_7が柱穴となれば5本柱となる。

〔カマド〕 東壁南寄りの個所に構築されている。燃焼部・煙道部・煙出部とも比較的良好なかたちで残存する。主軸方向は住居の短軸方向からはややずれており、E－9°50′－Sとなる。

燃焼部は床面の高さとほぼ一定している。焚口付近に50×38cmの範囲で厚さ約2cm±の固い焼土面が認められる。燃焼部内には支脚に用いたものと思われる石が残存しているが、動いており確証に欠ける。燃焼部側壁は褐色のシルトをたたきしめて構築されており、焚口付近では内壁



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	微量の木炭片を含む		2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	粒〜ブロック状に堆積
第2層	2	褐色(10YR4/4)	シルト		P 5	1			P1、層No.1と同じ
	3	〃	シルト	粒状の焼土・木炭片をかなり含む		2			P1、層No.2と同じ
P 8	4			P8、層No.1と同じ		3			P1、層No.3と同じ
					P 6	1	褐色(10YR4/4)	シルト	細粒状の焼土・土器片を含む
カマド	1			住居内堆積土層No.1		2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	固くしまっている
	2			〃 No.2	P 7	1			P1、層No.1と同じ
	3	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	天井部崩落土		2			P1、層No.2と同じ
	4	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	天井部崩落土		3			P1、層No.3と同じ
	5	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	火床部	P 8	1	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	焼土粒を含む
	6	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	明赤褐色の焼土粒を多量に含む		2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒を少量含む
	7	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土粒、灰を多量に含む	P 9	1			P1、層No.1と同じ
	8	褐色(10YR4/4)	シルト	細粒状の焼土を少量含む		2			P2、層No.2と同じ
	9	暗赤褐色(2.5YR3/4)	シルト	燃焼部掘り方埋土熱を受けている		3			P3、層No.3と同じ
	10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	燃焼部掘り方埋土	P 10	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭片をかなり含む
	11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	側壁(袖)構築土焼土粒を含む		2	褐色(7.5YR4/3)	シルト	粒状の焼土を少量含む
						3	褐色(10YR4/4)	シルト	固くしまっている
P 1	1	褐色(10YR4/4)	シルト	密度が疎でぼさぼさしている	P 11	1			P1、層No.1と同じ
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	固くしまっている		2			P1、層No.2と同じ
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	疎で細粒状に堆積		3			P1、層No.3と同じ
P 2	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	粒状の焼土を含む	P 12	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
	2	褐色(10YR4/4)	シルト			2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	細粒状の焼土を少量含む
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト			3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	密度が密
P 3	1			P2、層No.2と同じ		4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	密度が疎で粒状堆積
	2			P2、層No.3と同じ		5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	粒状の炭化物を含む
P 4	1			P2、層No.2と同じ					

第14図　第3号住居跡

に川原石を芯材として使用している。

煙道部は燃焼部底面から高低差をもたずに移行する。長さは約91cmで、底面はほぼ水平になっている。煙出部には直径43cmのピットが掘りこまれており、煙道端との比高は約5cmである。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、側壁部分をも含めた燃焼部全域に深さ約18cmで皿状の断面形を呈する掘り方が確認された。埋土は地山の褐色土と同質であり、ブロック状の人為的な堆積層である。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴として断定できるピットは検出されていない。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物は土器に限られる．土器には坏・甕・鉢の器種がある。土器の出土量は少く、カマドの周囲より集中して出土している。

坏形土器（第15図） 坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理)、ＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢＩ類〉（第15図１・２） ＢＩ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（ＢＩa類）と再調整を施すもの（ＢＩc類）とがある。

ＢＩa類の坏は破片のみで図化可能品は出土していない。ＢＩ類の坏のほとんどを占める。

ＢＩc類の坏（第15図１）は、体部下端に手持ちヘラケズリを施すもの（H_5手法）である。器高が普通で底径が小さく、体部は直線的に外傾する。

〈坏ＢII類〉（第15図３） ＢII類の坏には、回転糸切り無調整のもの（ＢIIa類)と回転ヘラ切り無調整のもの（ＢIIb類）とがある。

ＢIIa類の坏は細片で２点出土している。いずれも図化不能で全体の器形は不明である。

ＢIIb類の坏(３)は、１点のみで、底径が大きく体部が直線的に外傾するものである。

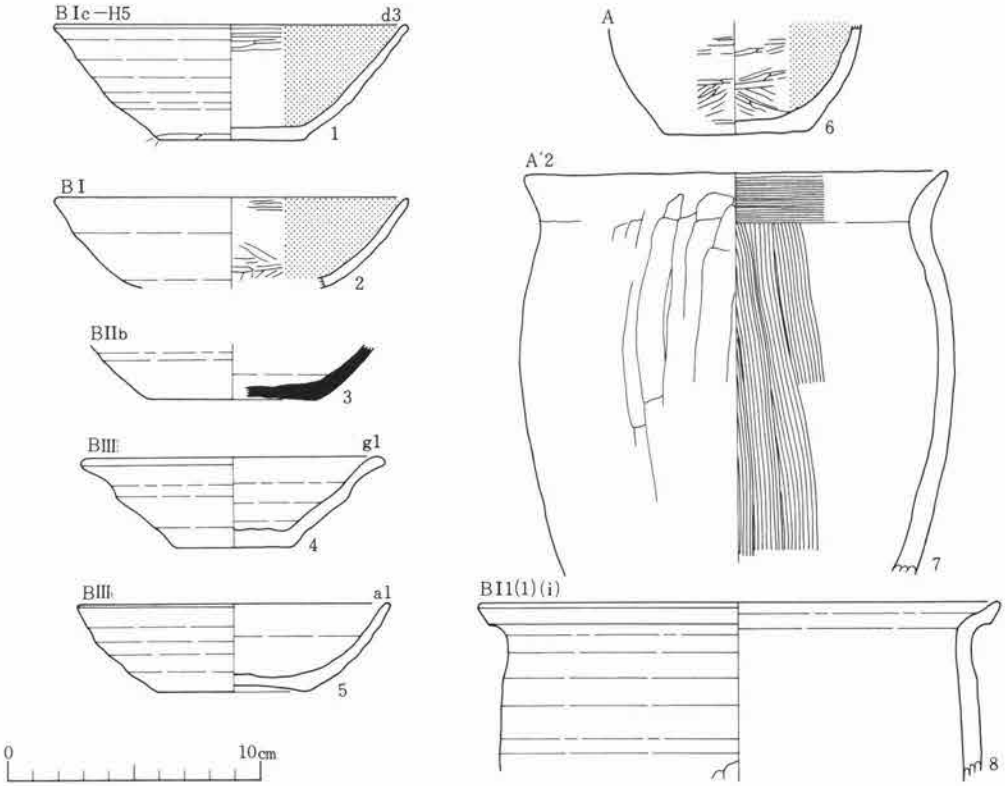
〈坏ＢIII類〉（第15図４・５） 破片でかなり出土しているが、全体の器形を知り得るものは少ない。ともに器高が低くて底径の小さなものであり、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(４)とややふくらみをもって外傾するもの(５)とがある。

甕形土器（第15図） 甕にはA′類（ロクロ不使用で酸化炎焼成）とＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕A′類〉（第15図７） 中形のものである。口縁部は短く、直立ぎみに外反し、頭部のくびれは指で折り曲げて造っている。最大径の位置は体部の中央付近にある。器面調整は極めて粗く、外面がヘラケズリ、内面は口縁部が横ナデ、体部がヘラナデで整えている。

〈甕ＢＩ類〉（第15図８） 口縁部に最大径をもつ大形のもの（ＢＩ１(１)類）である。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方外側に挽き出している。体部下半外面にヘラケズリが施されているほかはロクロナデで調整している。

〈甕ＢII類〉 体部の小片が少量出土しているが図示可能のものはない。



第15図　第３号住居跡出土遺物

鉢形土器（第15図６）　Ａ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属すものが１点出土している。口縁部を欠き、全体の器形は不明であるが一応鉢として分類した。器面調整は体部が内外面ともヘラミガキによっており、底部外面にはヘラケズリが施される。内面は黒色処理されている。

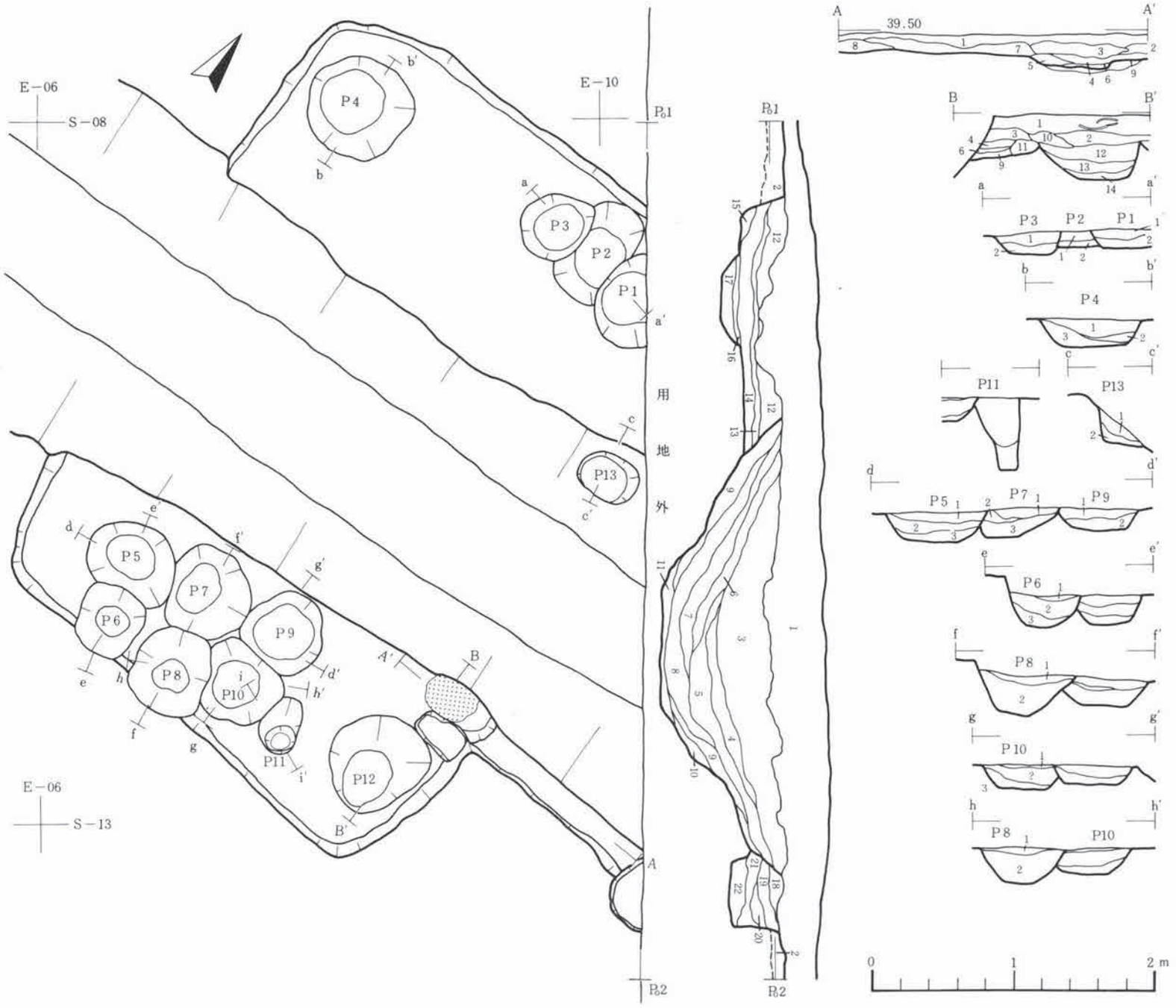
第４号（ＣＣ56）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。当住居跡付近ではＩb層を欠いており、IIa層の上面はすべて耕作土（Ｉa層）になっている。

〔保存状況〕　重複による削除をうけている個所を除いて、ほぼ原形をとどめている。なお、住居跡の北東コーナー付近は路線敷外に入る。

〔重複関係〕　第１号溝と重複関係にある。住居跡のほぼ中央部を巾220～230ｍにわたって切られており、第１号溝よりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕　基本的には南北に長い長方形を呈するが、北辺よりも南辺が短いため南向きの台形に近い形となる。長軸方向はＮ−1°00′−Ｅとなる。



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
表土	1			Ⅰa層		11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	側壁(袖)部
	2			Ⅱa層	P 12	12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
						13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	粒~柱状の木炭・粒状の焼土を多量に含む
第1号溝						14	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を少量含む
第1層	3			第12図No.1層と同じ					
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒を少量含む	P 1	1			No.16層と同じ
	5			第12図No.2層と同じ		2			No.17層と同じ
	6			第12図No.3層と同じ	P 2	1	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒を含む
	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山土をブロック状に含む		2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山土をブロック状に含む
第2層	8			第12図No.4層と同じ	P 3	1			P1、No.1層と同じ
第3層	9			第12図No.7層と同じ		2			P1、No.2層と同じ
	10			第12図No.8層と同じ	P 4	1	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を多量に含む
	11			第12図No.9層と同じ		2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粒状の焼土をかなり含む
						3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	ブロック状の焼土・粒状の木炭を多量に含む
第4号住					P 5	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を多量に含む
第1層	12	褐色(10YR4/4)	シルト			2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
第2層	13	〃 (10YR4/4)	粘土質シルト	粒状の木炭を少量含む		3	褐色(10YR4/4)	シルト	密度が疎でやわらかい
第3層	14	〃 (10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭をかなり含む	P 6	1	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を少量含む
	15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	壁の剥落土		2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒をかなり含む
P 1	16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粒~ブロック状の粒土を多く含む		3	〃 (10YR5/3)	シルト	
	17	褐色(10YR4/4)	シルト	ぼさぼさしている	P 7	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を多量に含む
カマド煙出	18	褐色(10YR4/4)	シルト	やや砂っぽい		2	〃 (10YR5/3)	シルト	粒状の焼土を少量含む
	19	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粒状の焼土を多く含む		3	〃 (10YR5/4)	シルト	密度が疎でやわらかい
	20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	ぼさぼさしている	P 8	1			P6、No.1層と同じ
	21	暗赤褐色(5YR3/6)	シルト	粒~ブロック状の焼土		2			P6、No.2層と同じ
	22	赤褐色(5YR4/8)	シルト	ブロック~層状の焼土、地山粒を含む	P 9	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む
						2	〃 (10YR4/3)	シルト	ぼさぼさしている
カマド	1			住居内堆積土No.12層と同じ	P 10	1			P7、No.1層と同じ
	2			〃 No.14層と同じ		2			〃 No.2層と同じ
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒を含む、緻密で固い		3			〃 No.3層と同じ
	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	多量の焼土・木炭を含む	P 11	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粒状の木炭を少量含む
	5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	ぼさぼさしている		2	褐色(10YR4/4)	シルト	密度が疎でやわらかい
	6	橙色(5YR6/8)	シルト	火床部	P 12	1			カマドNo.12層と同じ
	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む		2			〃 No.13層と同じ
	8			No.19層と同じ		3			〃 No.14層と同じ
	9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	掘り方埋土・ブロック状の地山土	P 13	1	褐色(10YR4/4)	シルト	粒~ブロック状の焼土を多量に含む
	10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	側壁(袖)の崩壊土		2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	

第16図　第4号住居跡

〔規模〕 長軸(南北)長は4.93m・4.80m、短軸(東西)長は3.65m・3.43mとなる。床面積は約16.46m²である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は以下の3層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層である。上部を厚く覆う。緻密な粉状の堆積状況を示す。混入物はみられない。

第2層：褐色の粘土質シルト層である。細粒状の木炭を少量含む。

第3層：褐色のシルト層である。やや砂っぽい。密度は比較的疎密で、地山のにぶい黄褐色土を粒～ブロック状に含む。細粒状の焼土、粒状の木炭をかなり混入する。

以上の堆積層はすべて自然的営力による堆積状況を示している。

〔壁〕 地山を壁としている。地面より比較的緩やかに立ち上がる。プランの検出に際して遺構掘り込み面より若干掘り下げているが、現存する壁高は東壁で13～22cm、西壁が7～12cm、南壁13～17cm、北壁10～14cmとなっている。

〔床〕 床面は、やや北側で低く南側で高くなっているが、全体的にはほぼ平坦である。床面上からは合計13個のピットが検出されている。

地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方は認められない。

〔柱穴〕 床面上から発見された13個のピットのうち柱穴として認定できうるものはみられない、規模からみてP_1はその可能性をもつが対となるものが検出されていない。

〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に構築されている。主軸方向はE—2°30′—Sとなる。燃焼部、煙道部の北側は第1号溝によって削除されており、煙出部の一部は路線敷外にかかる。

燃焼部は床面より若干掘り込まれており、38×28cmの範囲で固い焼土面を有する。焼土の厚さは6cmほどで良く焼けている。現存する右側壁は地山のシルトを素材にしている。遺存状況は不良でほとんど残っていない。

煙道部は燃焼部奥壁から6cmほどの段をもって移行している。長さは約156cmあり、ほぼ水平に煙出部と接続する。煙出部には煙道部底面より約13cm低いピットが掘り込まれており、直径は検出面上で約26cmになっている。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、側壁部分をも含めた全面に最大深10cmの皿状の掘り方が認められた。

〔貯蔵穴状ピット〕 床面上から検出された13個のピットのうち貯蔵穴と思われるものには南東コーナー部分より検出されたP_2がある。72×64cmの不整円形で深さは30cmほどになる。堆積土は3層に分けられる。上層はにぶい黄褐色のシルト層で、緻密な粉状堆積を示す。中層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、粒～柱状の木炭や粘状の焼土を多量に含む。下層は褐色のシルト層で地山土をブロック状に含むほか少量の焼土・木炭を混入する。ぼさぼさした粒状堆積を示す。

ほかに貯蔵穴の可能性をもつものに北西コーナー部分より検出されたP4がある。P12とほぼ同様な堆積状況を示しており、灰混りの焼土、木炭を多量に混入している。

〔その他のピット〕 南壁際に検出されたP5～P10のピットは当住居に伴うものであるかは不明である。とくにP6、P8は南壁外にわたっており、当住居より新しいものとなる可能性が強い。ただ、6個のピットそれぞれには重複関係が認められ、同時存在したものとはいえない。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器と砥石がある。土器は、坏、甕、壺、鉢の4器種に分けられる。住居のほぼ全域から出土するが、カマドの周囲よりやや多く出土している。

坏形土器（第17図） 坏には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、およびBⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈坏A類〉 図化不能の小片でかなり出土している。すべて平底（A2類）のものである。

〈坏BⅠ類〉（第17図2） BⅠ類の坏は、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施すものと無調整のもの(2)とがある。前者は破片でかなり出土しているがすべて図化不能である。

〈坏BⅡ類〉（第17図3～9） BⅡ類の坏はすべて回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。器高が普通で底径が小さなものには、体部が直線的に外傾するもの(3)と大きく開いて直線的に外傾するもの(7)とがあり、器高が高くて底径の小さなものには体部が直線的に外傾するもの（4～6)と、ややふくらみをもって外傾するもの(8)とがある。

甕形土器（第17図） 甕には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびBⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

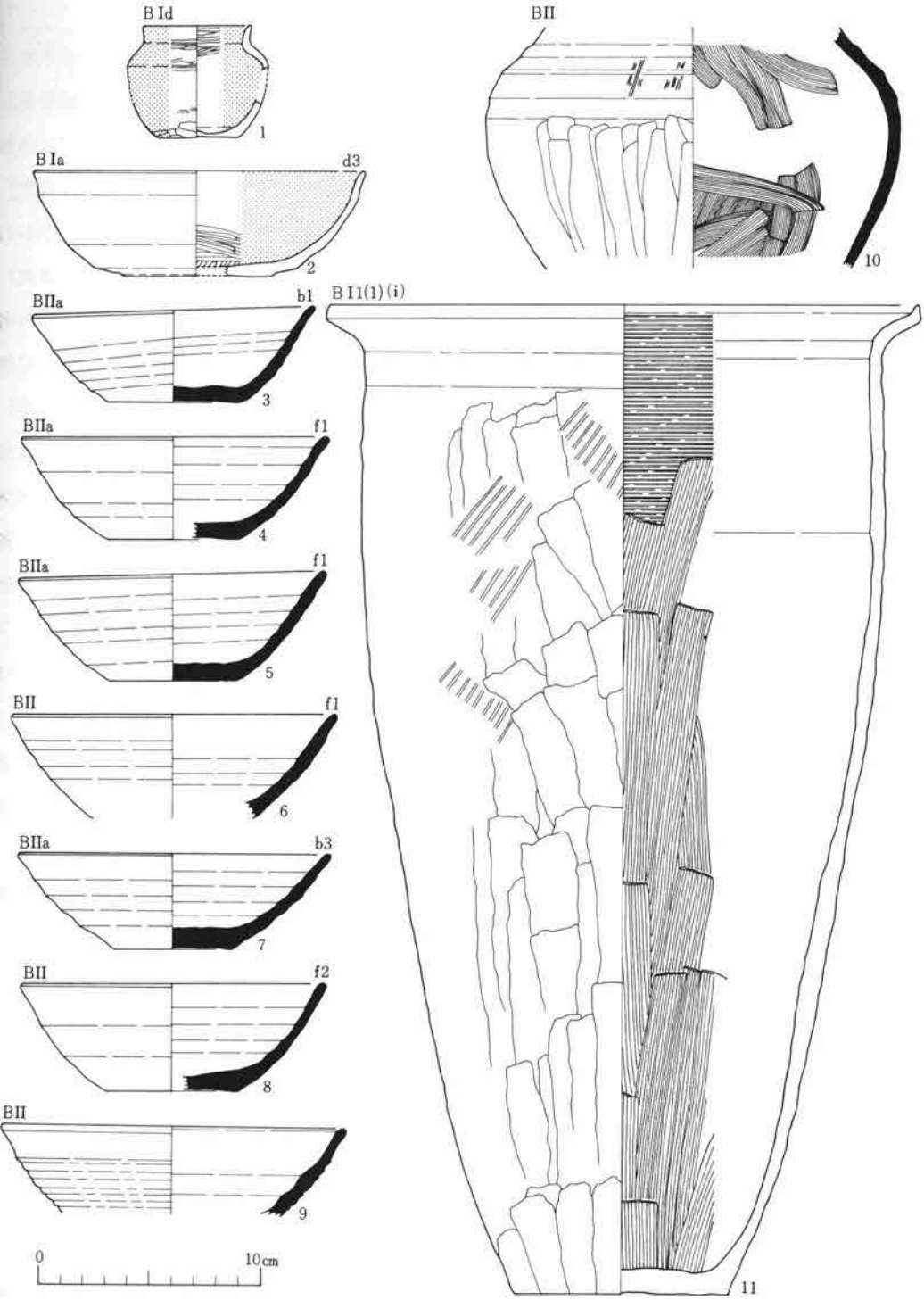
〈甕A類〉 破片でかなり出土しているが図示可能のものはない。大形の長胴形を呈するものがほとんどで、頸部に段を有するものと無いものとがある。

〈甕BⅠ類〉（第17図11） BⅠ類の甕は、口縁部に最大径をもつ大形のもの(BⅠ1(1)類)である。11は器高が極端に高い長胴形を呈する。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部はほぼ直線的に底部へと移行し、体部最大形を上端付近にもつ。外面の調整は口縁部がロクロナデ、体部上半が平行文様工具による叩きしめの後へラケズリ、体部下半から底部にかけてはへラケズリによっており、内面は口縁部から体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がへラナデで整えている。

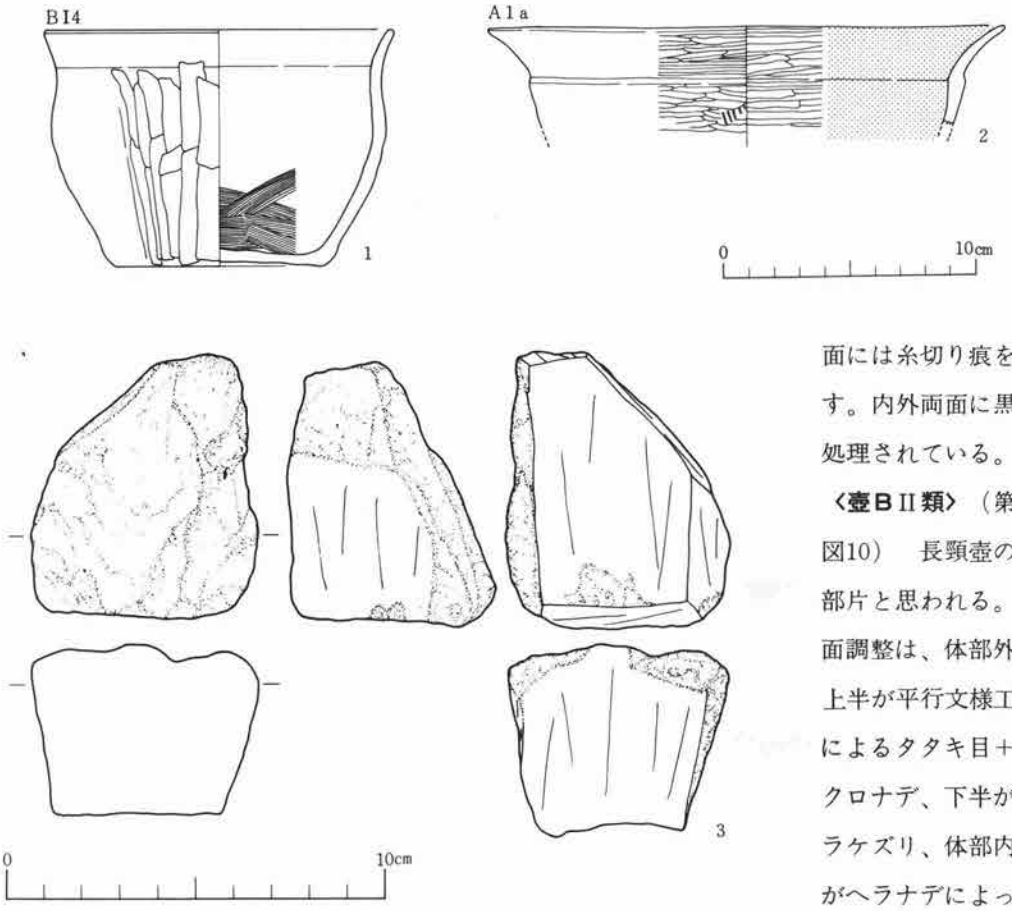
〈甕BⅡ類〉 体部片が少量出土している。全体の器形は不明である。

壺形土器 壺にはBⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものとBⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものとがある。

〈壺BⅠ類〉（第17図1）小片を推定復元したものであり、必ずしも正確とは言えないが極端に小形の壺になる。外面の調整は体部下端にへラケズリが施されるほかはへラミガキによっており、内面は口縁部から体部上半がへラミガキ、体部下半がロクロナデで整えている。底部外



第17図　第4号住居跡　出土遺物（1）



第18図　第４号住居跡　出土遺物（２）

面には糸切り痕を残す。内外両面に黒色処理されている。

〈壺BⅡ類〉（第17図10）　長頸壺の体部片と思われる。器面調整は、体部外面上半が平行文様工具によるタタキ目＋ロクロナデ、下半がヘラケズリ、体部内面がヘラナデによっている。

鉢形土器（第18図）　鉢には、Ａ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈鉢Ａ類〉（第18図２）　口縁部はゆるやかに外反し、頸部にはやや形式化した段を有する。体部はほとんど脹まずに底部へといたるもので、体部最大径を上端付近にもつ。器面は内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。前段階の調整として、口縁部外面には横ナデ、体部外面には刷毛目が観察される。内面は黒色処理されている。

〈鉢ＢⅠ類〉（第18図１）　口縁部は直立ぎみにゆるく外反し、体部は上半でやや脹むものである。外面の調整は、体部より底部にかけてヘラケズリが整えている。内面は体部下半にヘラナデを施すほかはロクロナデによっている。

砥石（第18図３）　不定形の原石を未整形で利用したものである。大小の４面に使用痕が認められる。長軸の横断面形はやや歪んだ四角形を呈する。石質は斜長流紋岩質凝灰岩である。

第5号（CD03）住居跡

〔遺構確認面〕 IIa層のにぶい黄褐色シルト層を4～5cm掘り下げて遺構の存在を確認した。遺構の掘込面はIIa層の上面である。

〔保存状況〕 北壁、南壁および西壁の一部が攪乱によって破壊されているが、全体のプランはほぼ完全に確認できた。

〔重複関係〕 第6号住居跡と重複関係にある。当住居跡の煙道部・煙出部が第6号住居跡の南西部を切っている。第6号住居跡より新しい。

〔平面形・長軸規模〕 平面形は南北に長い長方形となる。長軸方向はN—9°30′—Wである。

〔規模〕 長軸(南北)長は4.40m・4.29m、短軸(東西)長は3.46m・3.32mとなり、床面積は約14．24m²である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は以下の2層に大別される。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の上部全域を厚く覆う。密度はやや疎で、粉～粒状堆積を示す。細粒状の焼土・木炭を少量含む。

第2層：褐色の粘土質シルト層で、床面上に薄く堆積する。粒状の焼土・木炭をかなり含む。壁際には地山土がブロック状に堆積している。

第2層は、床面上にうすく堆積すること、上部に層状の焼土が乗ることなどから生活層とも考えられるが、壁際においては壁の剝落土の上に堆積している。第1層・第2層とも住居廃絶後の自然堆積層として認定した。

〔壁〕 地山を壁としている。床面より急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁が20～23cm、西壁で14～26cm、南壁13～23cm、北壁20～25cmとなっている。

〔床〕 床面はほぼ平坦で凸凹はみられないが、北東部より南西部にかけて緩く傾斜している。床面上よりは合計11個のピットが検出されている。

地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方は確認されなかった。

〔柱穴〕 11個のピットのうち柱穴の可能性をもつものとして、P_1、P_4、P_5があげられる。これらのピットは深さがほぼ一定しており約25cmとなっている。ただ、配列の規則性からみれば、これらの3本だけとは考えられず、P_{13}付近に柱穴が必要となる。しかしP_9は貯蔵穴としての機能をもつものと思われ、柱痕も認められず、柱穴とは考えられない。したがって上記の3個のピットも柱穴としての確証に欠ける。単に可能性をもつにとどめたい。

〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に構築されている。遺存状況は良好である。主軸方向は住居の短軸方向とほぼ一致し、E—7°15′—Nである。

燃焼部は床面と段差をもたずに接続している。焚口付近に24×20cmの固い焼土面があり、そ

の奥に支脚が検出されている。支脚は石と土器とを併用しており、石の上に坏を倒位の状態でかぶせている。側壁は地山のにぶい黄褐色シルトを素材としており、遺存状況はあまり良くない

煙道部は燃焼部底面より16cmの段差をもつ。長さは114cmあり、底面はほぼ水平に移行して煙出部に接続する。煙出部には直径約23cmのピットがあり、煙道端との比高は約10cmになっている。最後に燃焼部を掘り下げたが、掘り方は検出されていない。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるピットにはP_9がある。カマドの右脇、南東コーナーに位置しており、68.5×54.5cmの隋円形を呈し、深さは30cmとなる。堆積土は3層に分けられ、上層は褐色のシルト層で、粒状の焼土・木炭を少量含む。中層はにぶい黄褐色のシルトで、地山土をブロック状に含むほか粒状の焼土・木炭を少量混入する。下層は褐色の粘土質シルト層で、多量の焼土・木炭および土器片を含む。

〔出土遺物〕 当住居の出土遺物は土器に限られる。土器は坏・高台付坏・甕・鉢の4器種に類別される。住居の北西部より集中して出土したものが多い。

坏形土器（第20図、第21図） 坏には、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、BⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏BⅠ類〉（第21図1～4） BⅠ類の坏には底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（BⅠa類）と再調整を施すもの（BⅠc類）とがある。

BⅠc類の坏（1・2）は、体部下端より底部全面に手持ヘラケズリを施すもの（H_1手法）である。形態上の特徴によって、器高が低くて底径が小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(1)と器高が普通で底径が小さく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(2)とに分けられる。

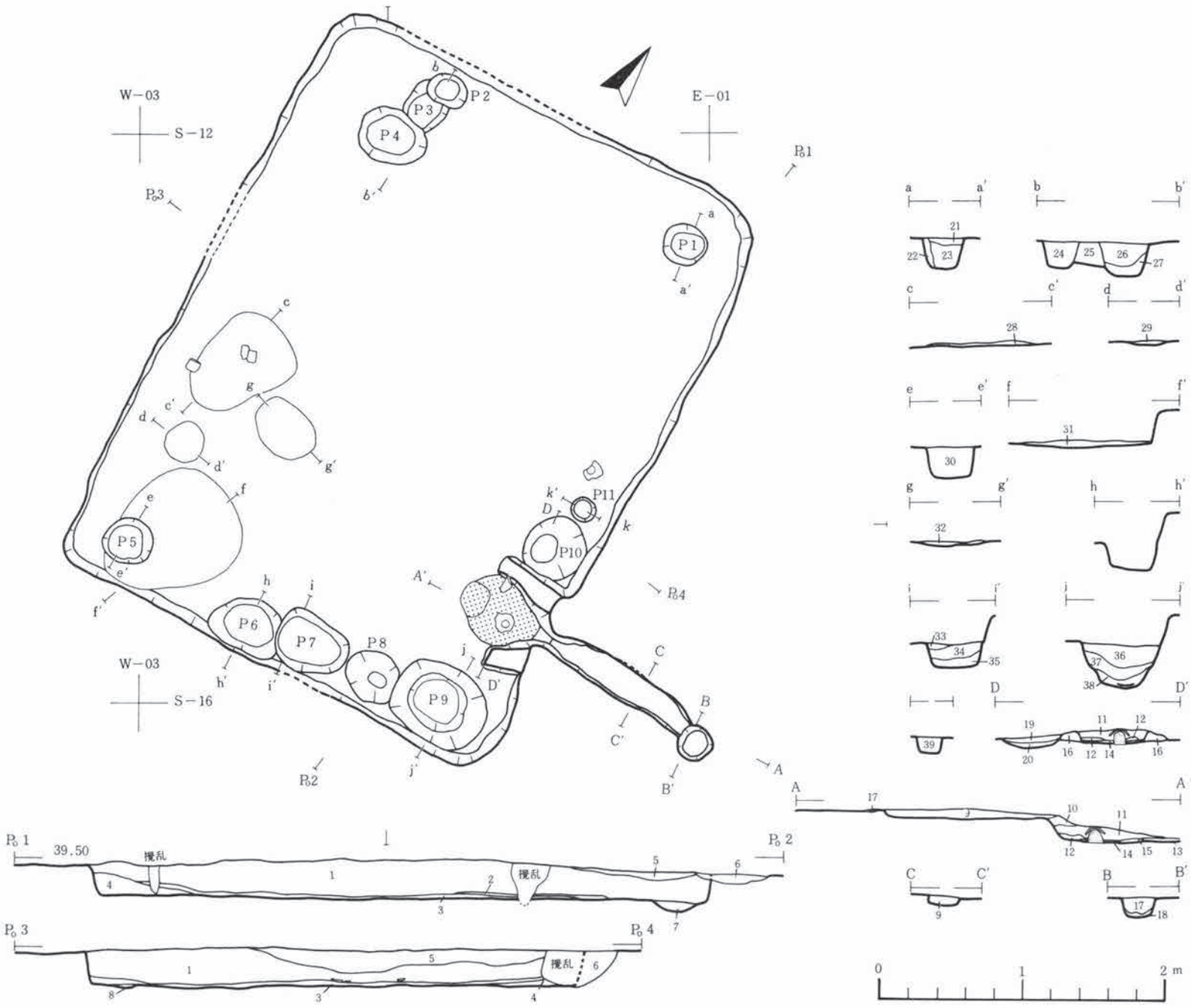
BⅠa類の坏（3・4）には、器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(3)と器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(4)とがある。

〈坏BⅡ類〉（第20図10・11） BⅡ類の坏はすべて細片であり、全体の器形を知り得るものは出土していない。底部を残すものはすべて回転糸切り無調整のもの（BⅡa類）である。

〈坏BⅢ類〉（第20図1～7） 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴により、いくつかに細分される。器高が普通で底径の小さなものには、体部が直線的に外傾するもの(1)と体部がややふくらみをもって外傾するもの(7)とがある。また器高が低くて底径の小さなものは、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（2～4）と体部がややふくらみをもって外傾するもの（5・6）とに分かれる。

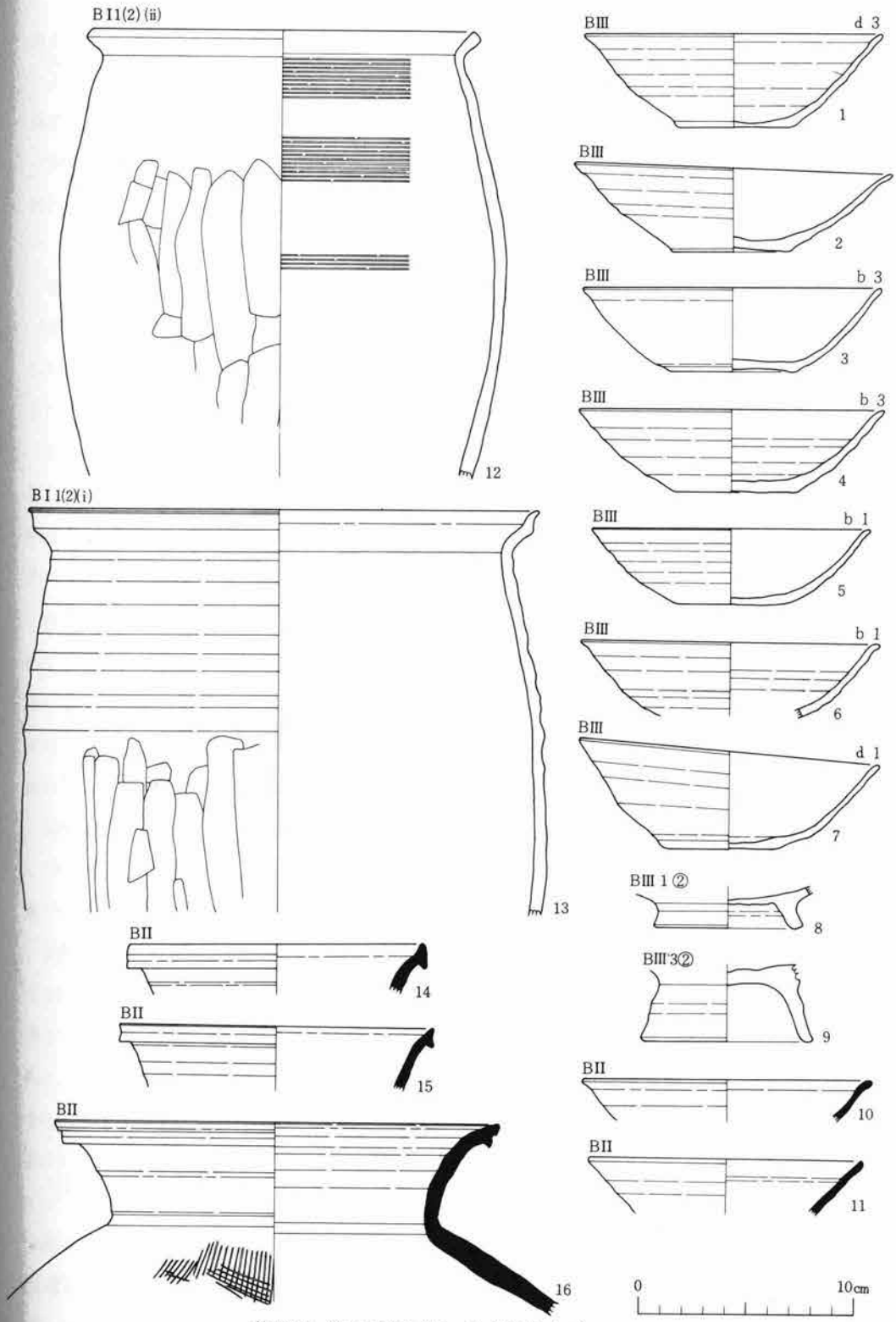
高台付坏形土器（第20図・第21図） 高台付坏にはBⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈高台付坏BⅠ類〉（第21図5～7） 高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの

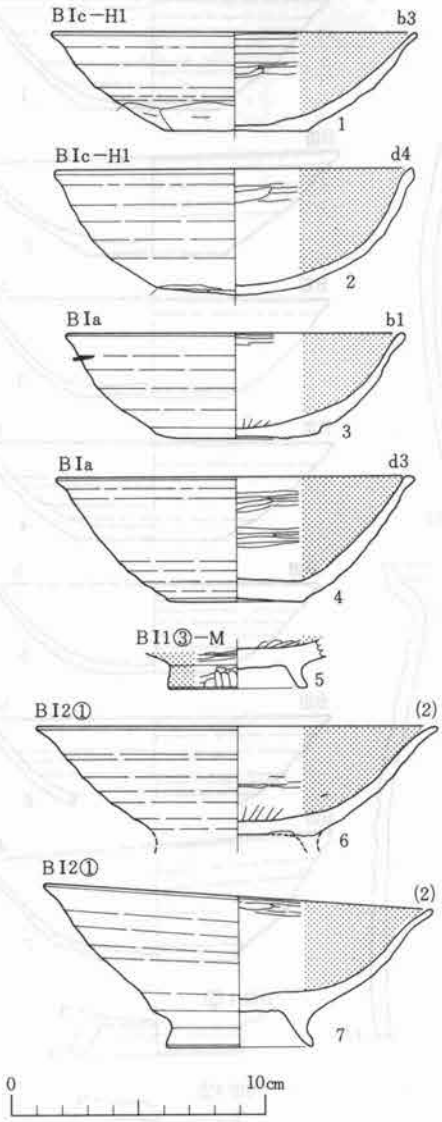


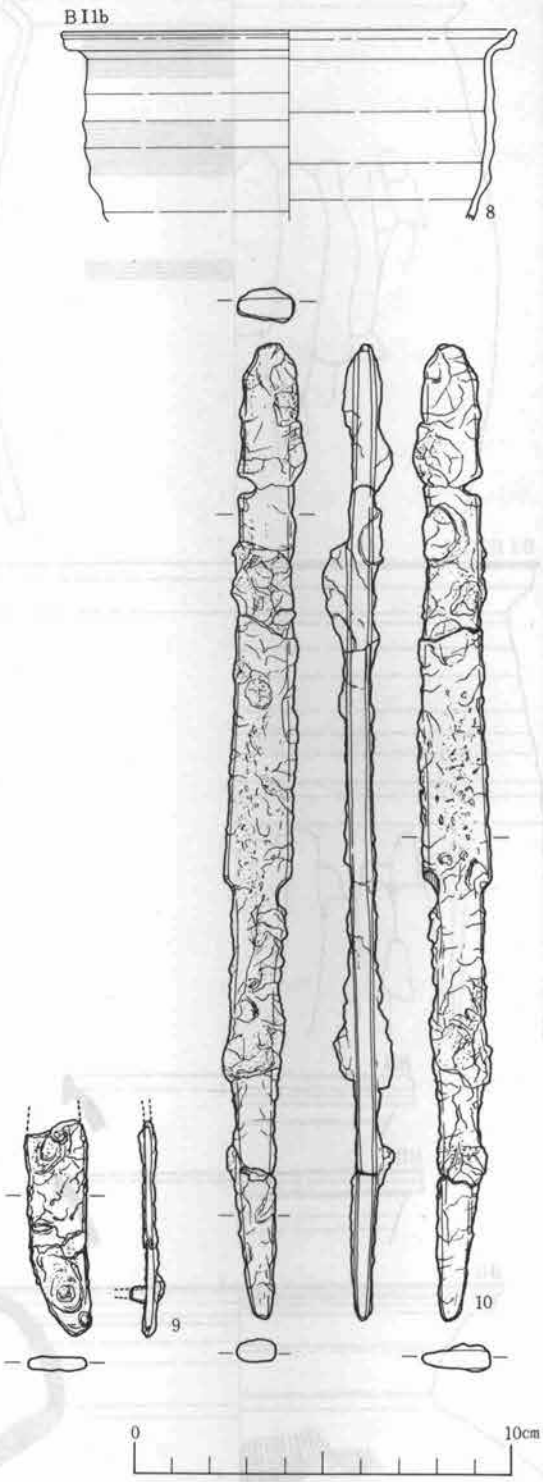
	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	細粒状の焼土・木炭を少量含む	P 1	21	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
第2層	2	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土	〃	22	〃 (10YR5/3)	シルト	地山土をブロック状に含む
〃	3	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	粒状の焼土・木炭をかなり含む	〃	23	褐色(10YR4/4)	シルト	ややねばりがある
〃	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山土を多量に含む	P 2	24	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山土をブロック状に含む
撹乱	5				P 3	25	褐色(10YR4/4)	シルト	
〃	6				P 4	26	褐色(10YR4/4)	シルト	粘状の焼土・木炭を少量含む
P 8	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		〃	27	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〃
P 10	8			No.19層と同じ		28	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	粒状の木炭・焼土を多量に含む
						29			No.20層と同じ
カマド	9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粘状の焼土・木炭をかなり含む	P 5	30	褐色(10YR4/4)	シルト	
〃	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ブロック状堆積		31	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	粒状の木炭を多量に含む
〃	11	褐色(10YR4/4)	シルト	粒～ブロック状の焼土・灰を混える		32			No.31層と同じ
〃	12	暗赤褐色(5YR3/2)	シルト	焼土(やわらかい)	P 7	33			No.20、29層と同じ
〃	13			No.3層と同じ	〃	34	褐色(10YR4/4)	シルト	
〃	14	暗赤褐色(2.5YR3/4)	シルト	焼土	〃	35	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
〃	15	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部	P 9	36	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を少量含む
〃	16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	側壁(袖)部	〃	37	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〃
〃	17	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土をブロック状に含む	〃	38	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	粒状の焼土・木炭、灰を多量に含む
〃	18	赤黒色(2.5Y 2/1)	粘土質シルト	焼土と灰の混合土	P 11	39	褐色(10YR4/4)	シルト	
P 10	19	褐色(10YR4/4)	シルト	ブロック状の焼土を多量に含む					
〃	20	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	白色粘土・焼土を含む					

第19図　第5号住居跡



第20図　第５号住居跡　出土遺物（Ⅰ）





第21図　第５号住居跡　出土器物（２）

（ＢＩ１③類）と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施し周辺をロクロ調整するもの（ＢＩ２①類）とがある。

ＢＩ１類の高台付坏(５)は、坏部を欠き全体の器形は不明であるが、器高が極端に高い埦形を呈する可能性が強い。内外両面に丁寧なヘラミガキを施して

黒色処理を加えるものである。

ＢＩ２類の高台付坏（６～７）は、坏部の形態は共通しており、器高が低くて底径が小さく、体部はややふくらみをもって外傾し、口縁端で外反するものである。

〈高台付坏Ⅲ類〉（第20図８・９）　高台部が長く外傾するもの（ＢⅢ２類）と、極端に長く外傾するもの（ＢⅢ３類）とがある。底部は、いずれもナデを施して周縁をロクロ調整するもの（③類）で、坏部の形態は不明である。

甕形土器（第20図）　甕はＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものに限られる。

〈甕ＢＩ類〉（第20図12・13）　ＢＩ類の甕には、最大径の位置が口縁部にある大形のもの（ＢＩ１(1)類）、体部に最大径をもつ大形のもの（ＢＩ１(2)類）、および小形で口縁部に最大径をもつもの（ＢＩ２(1)類）とがある。ＢＩ１(1)類およびＢＩ２(1)類の甕は図示不能である。

ＢＩ１(2)類の甕（12・13）には、口縁部が極端に短く外反するもの(12)と、口縁部が短く外反し口唇部を上方外側へ強く挽き出すもの(13)とがある。体部はいずれもゆるく張み最大径を中央付近にもつ。器面調整は外面が口縁部から体部上半はロクロナデ、体部下半はヘラケズリ、内面が12の体部上半に刷毛目状ロクロナデが施されるほかはロクロナデで整えている。

壺形土器（第20図14～16）　壺はＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）のものに限られる。頸部が直立ぎみに外傾し、口縁部が外反するもので、体部は大きく張り出す器形を呈する。ほぼ全体の器形が推定できる16は、口唇部を下方へ挽き出しており、中央に太い沈線が回る。体部は平行文様叩き―連ぐう文あて工具で叩きしめている。14・15は口縁部の破片であり、全体の器形は不明である。

鉢形土器（第21図８）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部最大径は上端付近にある。全面ロクロ調整である。

鉄製品（第21図９・10）　10は刀子で、刃部端をほんの少し欠くがほぼ完形である。現存長で26.2cmもある大形のもので、刃部幅は関近くで1.8cm、中央部で1.5cmを計る。背は幅0.5cmの平造りである。関は背側・刃部側とも段を有し、関幅は1.2cmである。茎は11.5cmの長さをもち、幅は1.3～0.6cmと先端に向って徐々に狭まり、断面形は長方形を呈する。９は最大幅1.7cm、厚さ0.3cmの偏平な鉄製品で、長軸の一端に細長い棒状のものが直角にとりつけられている。現存長で5.7cmを計る。鎌と推定される。

第６号（ＣＥ50）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構の掘込面はⅡa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。実際にはⅡa層を２～４cm掘り下げて遺構の存在を確認している。

〔保存状況〕　所々に長イモによる攪乱をうけているがほぼ原形をとどめている。

〔重複関係〕　第５号住居跡と重複関係にある。西壁の一部が第５号住居跡の煙道部によって切られている。第５号住居跡より旧い。

〔平面形・長軸方向〕　東西にやや長い長方形を呈する。長軸方向はN－94°50′－Wである。

〔規模〕　長軸(東西)長が3.35ｍ・3.11ｍで、短軸(南北)長が3.03ｍ・2.84ｍとなり、床面積は約8,83㎡である。

〔堆積土〕　住居内堆積土は以下の２層に分けられる。

第１層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の全域を厚く覆う。緻密で比較的固い。少量の木炭粒を含むほか、混入物はみられない。

第２層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の下部全面に堆積する。第１層に比べて密度が疎で、粒～ブロックの堆積を示す。粒状の焼土・木炭をかなり含む。

第１層、第２層とも自然的営力による堆積層として把握することができる。

〔壁〕　地山をそのまま壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で20～23㎝、西壁が18～21㎝、南壁18～22㎝、北壁19～24㎝となっている。

〔床〕　床面は全体的に凸凹がみられず、ほぼ平坦である。たたきしめられたものと思われ、比較的かたい。床面上からは大小５個のピットが検出されている。

床面を立ち割ったところ、にぶい黄褐色のシルト層が５～15㎝の厚さで認められた。これは住居掘り方の埋土と考えられ、ブロック状の堆積状況を示している。

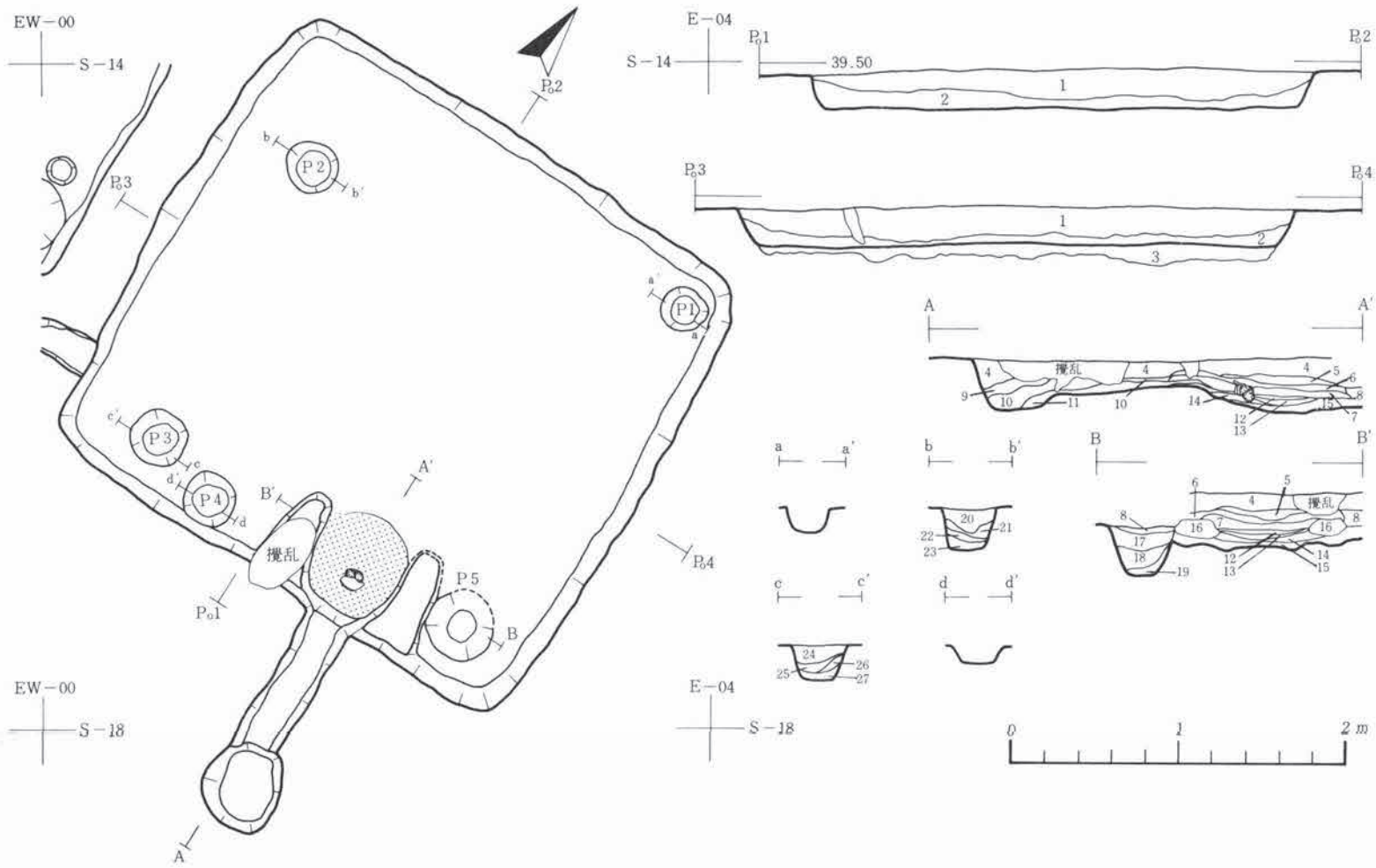
〔柱穴〕　住居内には柱穴と思われるものは検出できなかった。床面上からは検出されたP_1～P_5のうち、位置からみてその可能性をもつものとしてはP_2とP_3とがあげられる。しかし、埋土状況などからは柱穴としての確証に欠ける。

〔カマド〕　南壁東寄りの部分に構築されている。燃焼部右側壁の部分が深耕による破壊を受けているほかはほぼ原形をとどめている。主軸方向はS－5°10′－Eである。

燃焼部は床面を若干(2～3㎝)掘り下げて作られており、34×52㎝の範囲で固い焼土面が検出されている。中央やや壁寄りの部分には支脚が設けられており、石と土器とを併用している。川原石を底面下にうめこんで、その上に土師器坏を倒位の状態でかぶせており、石の露出部の高さは約６㎝となっている。側壁(袖)は地山のにぶい黄褐色シルト質土を素材としている。

煙道部は燃焼部底面より約６㎝の比高をもって奥壁とつらなっている。長さは約88㎝あり、やや下りぎみに移行して煙出部と接続する。煙出部には直径約50㎝のピットが掘り込まれており、深さは煙道端より約８㎝低くなっている。

最後に燃焼部底面を立ち割ったところ、直下にかたくたたきしめられた層が検出された。掘り方の埋土とは異なることから、カマド燃焼部の固化を意識したものであろう。



	層No.	土　　色	土　　性	そ　の　他
第 1 層	1	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シ ル ト	粒状の焼土・木炭を少量含む
第 2 層	2	〃 (10Y R4/3)	シ ル ト	粒状の焼土・木炭をかなり含む
埋り方埋土	3	〃 (10Y R5/4)	シ ル ト	ブロック状の堆積
カ マ ド	4			No.1 層と同じ
	5	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	シ ル ト	
	6	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シ ル ト	
	7	〃 (〃)	シ ル ト	粒状の焼土を多量に含む
	8			No.2 層と同じ
	9	褐 色(10Y R4/4)	シ ル ト	粒状の焼土を少量含む
	10	暗 褐 色(10Y R3/4)	シ ル ト	焼土と木炭の混合層
	11	〃 (〃)	粘土質シルト	粒状の焼土・灰を含む
	12	赤 褐 色(2.5Y R5/8)	シ ル ト	火床部
	13	〃 (2.5Y R4/6)	シ ル ト	火熱の浸透部
	14	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シ ル ト	固化している
	15			No.3 層と同じ
	16	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	シ ル ト	側壁(袖)残存部
P 5	17	褐 色(10Y R4/4)	シ ル ト	粒状の焼土・木炭を少量含む
	18	〃 (〃)	粘土質シルト	粒状の焼土・木炭を多量に含む
	19	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シ ル ト	
P 2	20	褐 色(10Y R4/4)	シ ル ト	
	21	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シ ル ト	粒状の焼土・木炭を少量含む
	22	〃 (10Y R5/3)	シ ル ト	地山土
	23	褐 色(10Y R4/4)	シ ル ト	
P 3	24			No.20層と同じ
	25	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シ ル ト	粒状の焼土・木炭を多量に含む
	26			No.22層と同じ
	27			No.23層と同じ

第22図　第 6 号住居跡

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるものにP_5がある。直径約41cmの円形を呈し深さは約31cmある。埋土は3層に分けられ、上層は褐色のシルト層で粒状の焼土・炭化物を少量含む。中層は褐色の粘土質シルト層で粒～ブロック状の焼土および粒状の炭化物を多量に混入する。土器片もかなり含まれる。下層はにぶい黄褐色のシルト層で地山土をブロック状に含む。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物は土器に限られる。土器には、坏・甕・鉢・堝などの器種がある。住居のほぼ全域から出土している。

坏形土器 (第23図) 坏には、BⅠ類(ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理)、BⅡ類(ロクロ使用で還元炎焼成)およびBⅢ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)などがある。

〈坏BⅠ類〉 (第23図1～4) BⅠ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施さないもの(BⅠa類)と再調整を施すもの(BⅠc類)とがある。前者は破片で少量出土しており、図化不能である。BⅠc類の坏は再調整を施す部位およびその手法によって細分される。

再調整は回転ヘラケズリによるもの(1)と手持ヘラケズリによるもの(2～4)とがある。前者は体部下端より底部全面に施しており(W_1手法)、後者は体部下端より底部全面に施すもの(2)(H_1手法)、と体部下端に施すもの(3～4)(H_5手法)とがある。さらに、形態上の特徴によっては以下のように分けられる。器高が低くて底径が大きなものは、体部がややふくらみをもって外傾するもの(2)と体部がやや丸味をもって外傾するもの(3)とに分かれる。また、器高が高くて底径の小さなものには、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(1)と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(4)とがある。

〈坏BⅡ類〉 すべて回転糸切り無調整のもの(BⅡa類)である。細片のため図示できない。

〈坏BⅢ類〉 破片で少量出土している。図示可能のものは出土していない。

甕形土器 (第23図) 甕には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、BⅠ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)、およびBⅡ類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

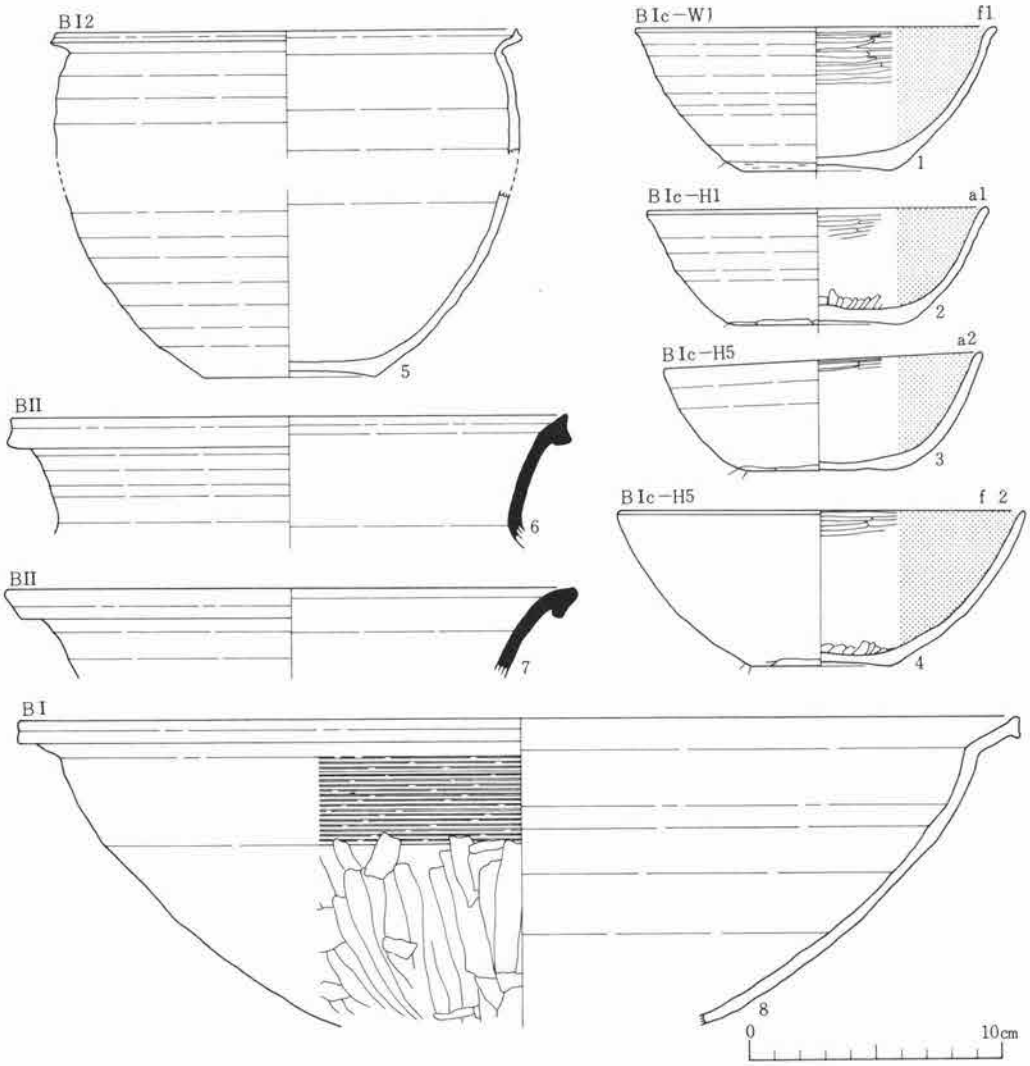
〈甕A類〉 大形のもの(A1類)が破片で出土している。体部片が多く図示不能である。

〈甕BⅠ類〉 口縁部に最大形をもつ大形のもの(BⅠ1類)が少量出土している。図示不能。

〈甕BⅡ類〉 (第23図7) BⅡ類の甕は細片でかなり出土している。体部の破片が多く、正確な分類はできない。7は口縁部が外反するもので、口唇部は下方へ強く挽き出している。肩部で大きく張り出す器形を呈するものと思われる。

壺形土器 (第23図6) BⅡ類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属すものである。広口壺の口縁部と推定される。口縁部は直立ぎみに外傾して口縁部で外反するもので、口唇部は上下に挽き出している。

鉢形土器 (第23図5) BⅠ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)として類別されるものである。口縁部は短く外反し、口唇部は上下に強く挽き出している。体部は上半でやや張り出しており、



第23図　第６号住居跡、出土遺物

上半に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整で、底部外面には右回転糸切り痕をそのまま残す。

鍋形土器（第23図８）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。底部は欠損している。体部はややふくらみをもって外傾し、口縁部はかなり長く外反する。口唇部は下方へ強く挽き出している。外面の調整は口唇部がロクロナデ、口縁部から体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がヘラケズリによっている。内面は全面ロクロナデで整えている。

第７号（ＣＦ56）住居跡

〔遺構確認面〕　IIa層のにぶい黄褐色シルト層を２～３cm掘り下げて遺構の存在を確認した。遺構の掘込面はIIa層の上面である。

〔保存状況〕　北西コーナー付近と南壁の一部が耕作によって破壊されているほかはほぼ原形をとどめており、保存状況は比較的良好である。

〔重複関係〕　第９号住居跡および第２号溝と重複関係にある。当住居跡の南東部が第９号住居跡の北西部を切って構築されている。第９号住居跡より新しい。また、第２号溝は当住居の西壁から南壁にかけて検出されており、それらの部分を破壊している。第２号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕　東西に若干長いがほぼ正方形を呈する。長軸方向はＮ―86°30′―Ｗである。

〔規模〕　長軸(東西)長で4.66ｍ・4.59ｍ、短軸(南北)長が4.54ｍ・4.46ｍとなり、床面積は約20.83㎡である。

〔堆積土〕　住居内堆積土は基本的には以下の２層に分けられる。

第１層：褐色のシルト層で、住居のほぼ全体を覆う。緻密でかなりかたい。粒～柱状の木炭をかなり含む。

第２層：暗褐色のシルト層で、住居の下部に薄く堆積する。粒～ブロック状の堆積状況を示す。粒状の焼土・木炭を多量に含む。壁際には壁剝落に伴うものと思われるにぶい黄褐色土がブロック状に堆積する。

第１層、第２層とも自然堆積層と思われる。とくに第２層は生活層とも考えられたが、壁の剝落土の上に堆積することや緻密さがみられないことなどから自然堆積層として認定した。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりかなり急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁で23～27cm、西壁が22～26cm、南壁21～28cm、北壁20～24cmとなる。

〔床〕　床面は全体的に凸凹がみられず、ほぼ平坦である。とくにかたい面はみられない。床面上には貯蔵穴をも含めて合計８個のピットが確認されている。

なお、床面下に掘り方等は検出されなかった。

〔柱穴〕　床面上に検出された７個の小ピットのなかで、柱穴としての配置の規則性、規模などからみればP_1、P_5、P_7の３つのピットがその可能性をもつ。しかし、対になるべき最低もう１個のピットがみあたらないことからこれらの３ピットも柱穴として断定できない。

〔カマド〕　東壁のほぼ中央(やや東寄り)に構築されている。極めて良好なかたちで遺存している。主軸方向はＥ―3°30′―Ｓである。

燃焼部は床面を若干掘りくぼめており、焚口付近に63×48cmの範囲で厚さ約５cmのかたい焼土面を有する。粒状の焼土は燃焼部全面に広がる。側壁も良く残存しており、地山のにぶい黄

褐色シルト質土を素材にし、それを積み重ねて作られている。

燃焼部奥壁は約16cmの段差をもって煙道部へと移行しており、煙道部の長さは約102cmになっている。煙道部底面は煙出部に向って緩く立ちあがる。煙出部には直径45cmのピットが掘られており、煙道端との比高はかなり深く29cmになっている。

最後に燃焼部底面を掘り下げたが掘り方等は検出されていない。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるものにはカマド右脇に検出されているP_8がある 114×110cmの不整円形を呈し、深さは55cmになる。埋土は4層に分けられる。No.1層は褐色のシルト層で、粒状の焼土・炭化物を少量含む。No.2層は暗褐色の粘土質シルト層で、木炭片・焼土粒をかなり含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で、土器片・焼土粒・木炭片がかなり含まれる。No.4層は暗褐色の粘土質シルト層で、焼土・木炭・土器が充塡する。灰も含まれるものと思われ、土はベトベトしている。

〔その他のピット〕 カマド左袖脇に検出されたP_3は当住居にかかわるピットとはならず、第9号住居跡の煙出部と思われる。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器と鉄製品がある。土器の器種は坏・高台付坏・甕・鉢などに分けられる。床面上のほぼ全域にわたって出土するが、とくにピット8より出土するものが多い。

坏形土器（第25図、第26図） 坏には、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、BⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

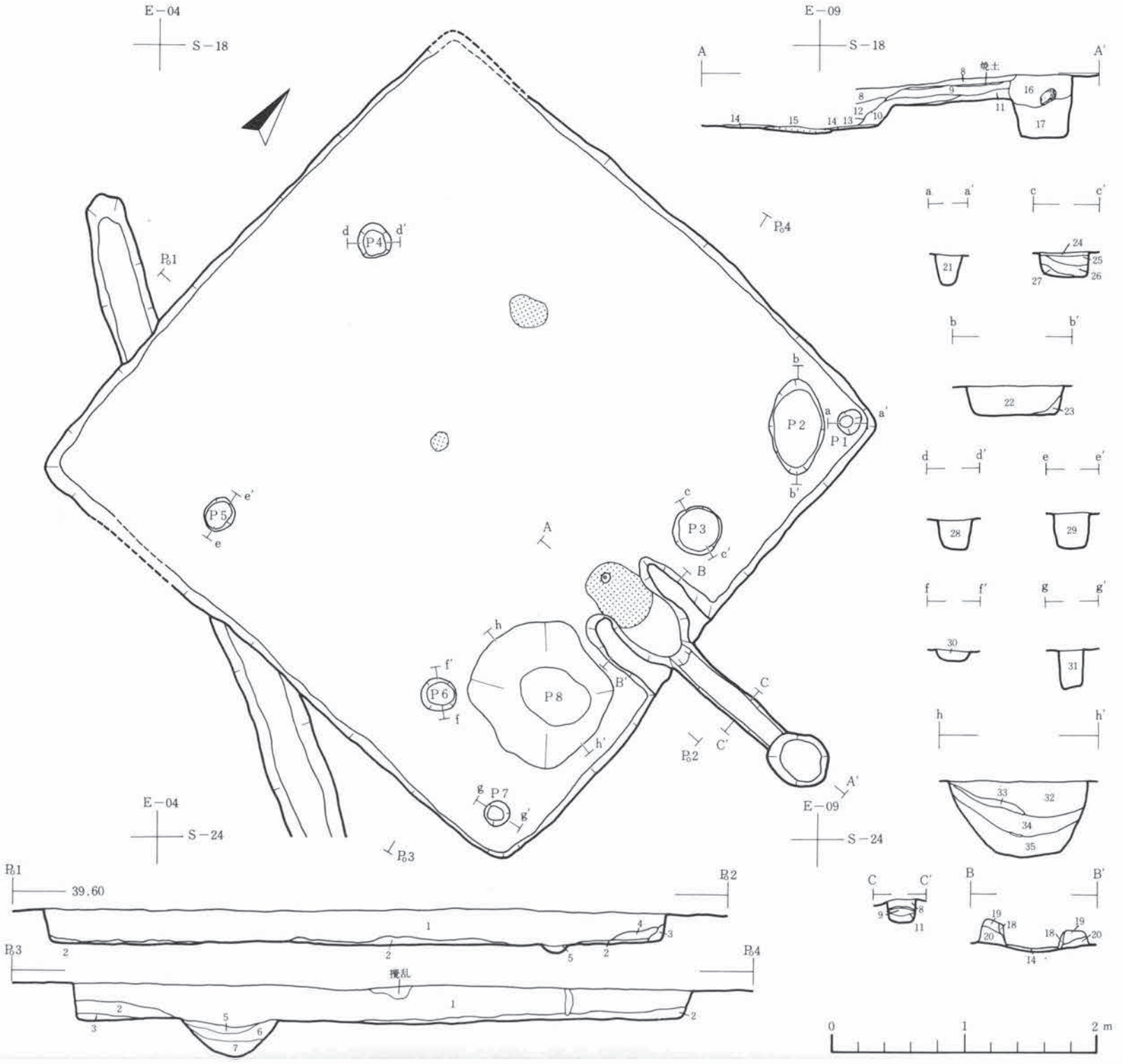
〈坏BⅠ類〉（第25図1～8）BⅠ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を施すもの（BⅠc類）と調整を加えないもの（BⅠa類）とがある。

BⅠc類の坏(1)は、体部の全面に手持ヘラケズリを施している。底部を欠くため全体の器形は不明であるが、体部はややふくらみをもって外傾する。

BⅠa類の坏（2・3・5・7・8）は、形態上の特徴によって分けられ、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（3・7）と体部が直線的に外傾するもの（5・8）とがある。

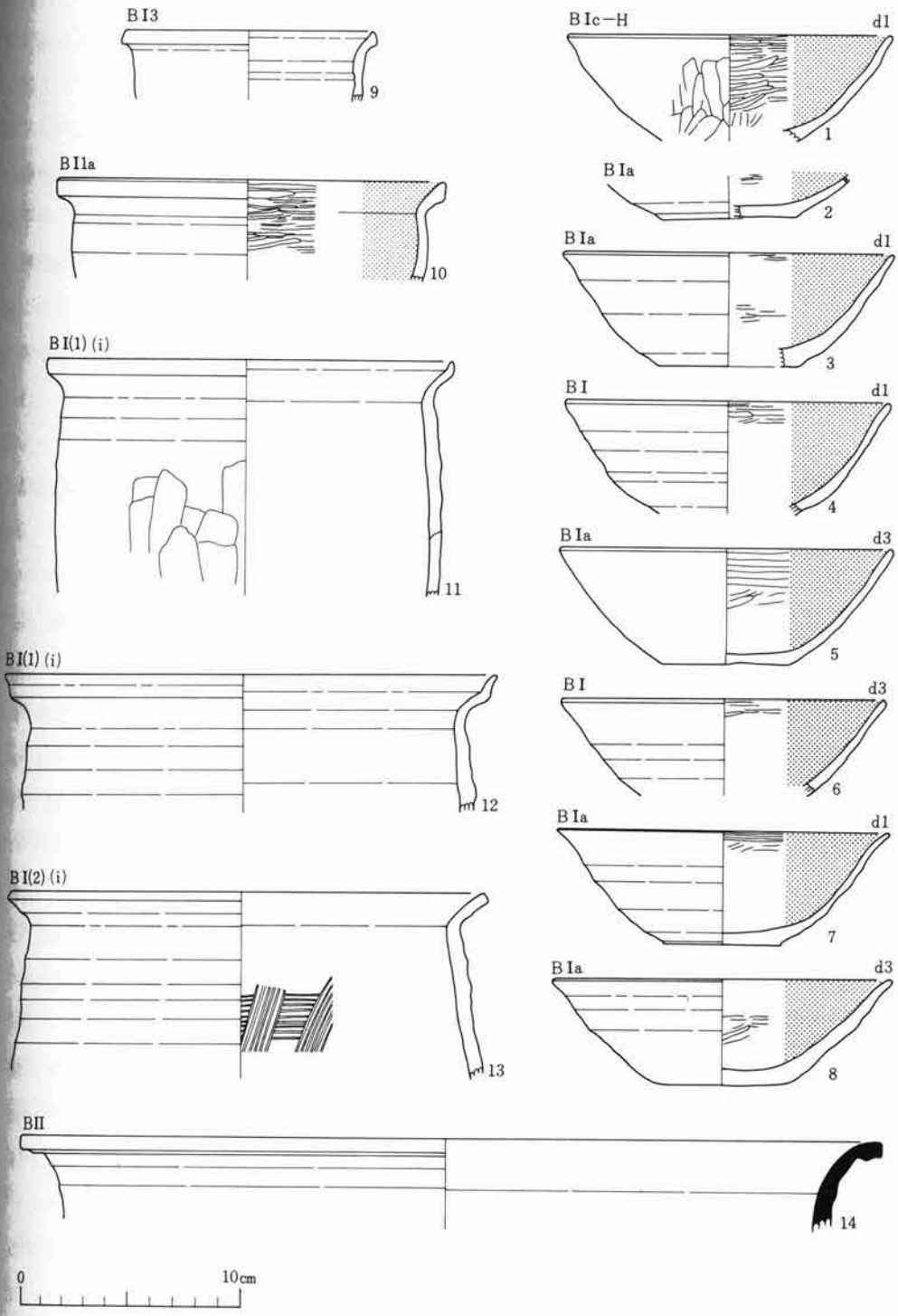
〈坏BⅡ類〉（第26図8～10） 回転糸切り無調整のもので(BⅡa類)である。小片で少量出土している。いずれも全体の器形は不明である。

〈坏BⅢ類〉（第26図1～6） 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。すべて器高が普通で底径が小さなもので、体部がややふくらみをもって外傾するもの（1・2）、体部がやや丸味をもって外傾するもの(3)、および体部が直線的に外傾するもの(3 4・6）などがある。

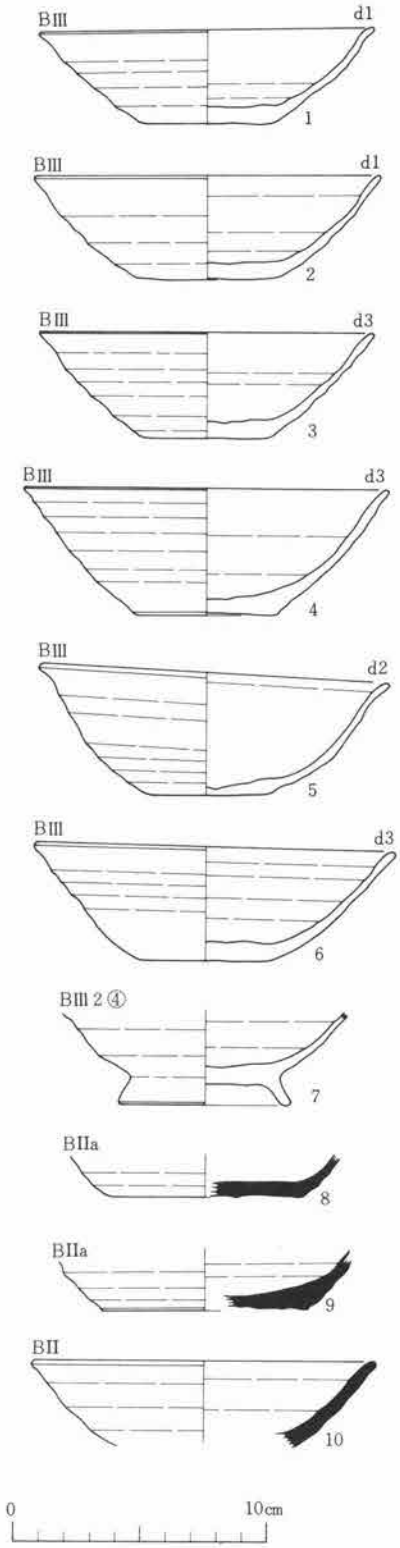


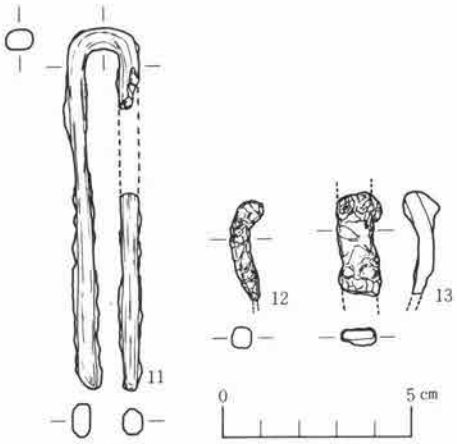
	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	粒～柱状の木炭をかなり含む		19	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	焼土粒を含む
第2層	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を多量に含む		20	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
〃	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	壁の剝落土					
〃	4	〃 (10YR4/3)	シルト	袖の崩壊土、焼土粒を含む	P 1	21	褐色(10YR4/4)	シルト	下方はぼさぼさしている
P 8	5			No.32層と同じ	P 2	22	〃 (〃)	シルト	粒状の焼土・木炭をかなり含む
	6			No.34層と同じ		23	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂を少量含む
	7			No.35層と同じ	P 3	24	〃 (10YR5/3)	シルト	固化している
						25	〃 (10YR4/3)	シルト	粒状の焼土を含む
カマド	8			No.1層と同じ		26	にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	シルト	ブロック状の焼土を多く含む
	9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土(ブロック状)がかなり含まれる		27	暗赤褐色(2.5YR3/2)	粘土質シルト	ねばりがある
	10	暗赤褐色(2.5YR3/3)	シルト	焼土	P 4	28	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土を少量含む
	11	〃 (2.5YR3/2)	シルト	焼土、ややねばりがある	P 5	29			No.21層と同じ
	12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土をブロック状に含む	P 6	30	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	13	暗褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	ねばりがある	P 7	31			No.21層と同じ
	14	暗赤褐色(2.5YR3/2)	粘土質シルト	灰混りの焼土、木炭片を含む	P 8	32	褐色(10YR4/4)	シルト	粒状の焼土・木炭を少量含む
	15	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部		33	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	木炭片・焼土粒をかなり含む
	16	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粒状の焼土・木炭をかなり含む		34	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	土器・焼土粒・木炭片をかなり含む
	17	赤黒色(2.5YR2/1)	粘土質シルト	赤褐色の焼土(ブロック状)をかなり含む		35	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	焼土・木炭・土器が充塡
	18	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土					

第24図　第7号住居跡



第25図　第７号住居跡　出土遺物（Ⅰ）





第26図　第７号住居跡　出土遺物（２）

高台付坏形土器（第26図７）　ＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものが１点出土している。高台部は長く外傾し、先端に平坦面をもたないものである。底部は全面にロクロ調整されている(④類)。坏部の形態は口縁部を欠くため不明である。

甕形土器（第25図11～14）　甕には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。ＢII類の出土量はごく少量である。

〈甕ＢＩ類〉（第25図11～13）　ＢＩ類の甕は、すべて大形のもの（BI1類）であり、最大径を口縁部にもつもの（ＢＩ1(1)類）と体部にもつもの（BI1(2)類）とに分けられる。

ＢＩ1(1)類の甕（11・12）は、口縁部は短く外反するが口唇部は上方へ挽き出すもの(11)と上方外側へ強く挽き出すもの(12)とに分かれる。体部は、あまり脹まず底部へ移行するも

の(11)とゆるく脹らむもの(12)とがある。器面調整は共通しており、体部下半外面にヘラケズリが施されるほかはロクロナデによっている。

ＢＩ１(2)類の甕(13)は口縁部が短く外反し、体部が大きく脹らむものである。器面調整は体部下半外面にヘラケズリ、内面に刷毛目が施されるほかはロクロナデで整えている。

〈甕ＢII類〉（第25図14）　かなり大形のものである。口縁部のみの破片であり、全体の器形は不明である。頸部が直立ぎみに移行し、口縁端で大きく外反するものである。

鉢形土器（第25図９・10）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。９は極端に小形のもので、ゆるやかに外反する短かい口縁部をもつ。体部はほぼ直線的になり、上端に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整である。10は口縁部が短く外反し、体部は上半でやや脹らむものである。体部最大径を上半付近にもつ。内面に丁寧なヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。外面調整はロクロナデによっている。

鉄製品（第26図11～13）　11はＵ字形の細い棒状のものである。断面は円形を呈する。長さは9.7cm、幅1.9cmとなり、鉄棒の径は約0.4cmを計る。用途は不明である。12は断面が方形の細長い棒状のものである。角釘と思われる。一方の先端を欠き、現存長で2.7cmを計る。13は刀子の刃部片と思われる。両端を欠き、現存長で2.8cm、幅1.0cmを計る。

第８号（ＣＧ06）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構の検出面はIIa層の黄褐色シルト層の上面であるが、上部は耕作によって攪乱をうけている。結果的に、攪乱土を除去して遺構を確認している。

〔保存状況〕　全体の平面プランはほぼ確認できるが、随所に長イモ栽培による攪乱をうけている。とくに煙道部は完全に破壊されており、保存状況はかなり悪い。

〔重複関係〕　重複する遺構は検出されていない。

〔平面形・長軸方向〕　東西に長い長方形を呈する。長軸方向はＮ―96°15′―Ｗである。

〔規模〕　長軸(東西)長で4.71ｍ・4.49ｍ、短軸(南北)長が3.76ｍ・3.59ｍとなり、床面積は約16.12ｍである。

〔堆積土〕　遺構内堆積土は基本的には２層に大別される。

第１層：褐色のシルト層で、住居の上部全域に及んでいる。緻密でかなりかたい。少量の木炭粒以外の混入物はみられない。

第２層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居床面上に広く分布する。第１層に比べて緻密さに欠け、比較的やわらかい。少量の木炭粒・焼土粒を含む。

堆積土第１層、第２層とも自然堆積層として認定される。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりの傾斜は緩い。長イモ栽培により遺存状況は悪い。現

存する壁高は東壁で14～18cm、西壁が13～17cm、南壁11～16cm、北壁14～18cmとなっている。

〔床〕 床面の一部は破壊をうけているがほぼ原形をとどめている。全体的に水平でかたくしまっている。床面上には大小10個のピットが検出されている。

地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方等は確認されていない。

〔柱穴〕 柱穴と断定できるものは検出されていない。その可能性をもつものとしてはP_1、P_2、P_4、P_9があげられる。しかし、配列に規則性は認められず、確証に欠ける。

〔カマド〕 南壁西寄りの部分に構築されている。燃焼部から煙道部、煙出部にかけて破壊されている。主軸方向は推定でS－7°10′－Eである。

燃焼部は床面と段差をもたずにほぼ水平に接している。床面には47×49cmの範囲で固い焼土面をもつ。焚口付近に角礫が発見されているが用途は不明である。支脚と思われるものは存在しない。側壁(袖)は地山土を素材にし、それをたたきしめて重ねている。

煙道部、煙出部は破壊のため遺存しない。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるものにP_7がある。カマド左袖脇に検出されており、大きさは87×82cmで、深さは40cmになっている。堆積土は4層に分けられる。No.1層は褐色のシルト層で、混入物はみられない。No.2層はにぶい黄褐色のシルト層で微量の焼土粒・木炭粒を含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で、粒～ブロック状の焼土、粒～柱状の木炭をかなり含む。No.4層は暗褐色の粘土質シルト層で、ブロック状の焼土・木炭片を多量に含む。なお、No.4、No.5層に土器をかなり混入する。

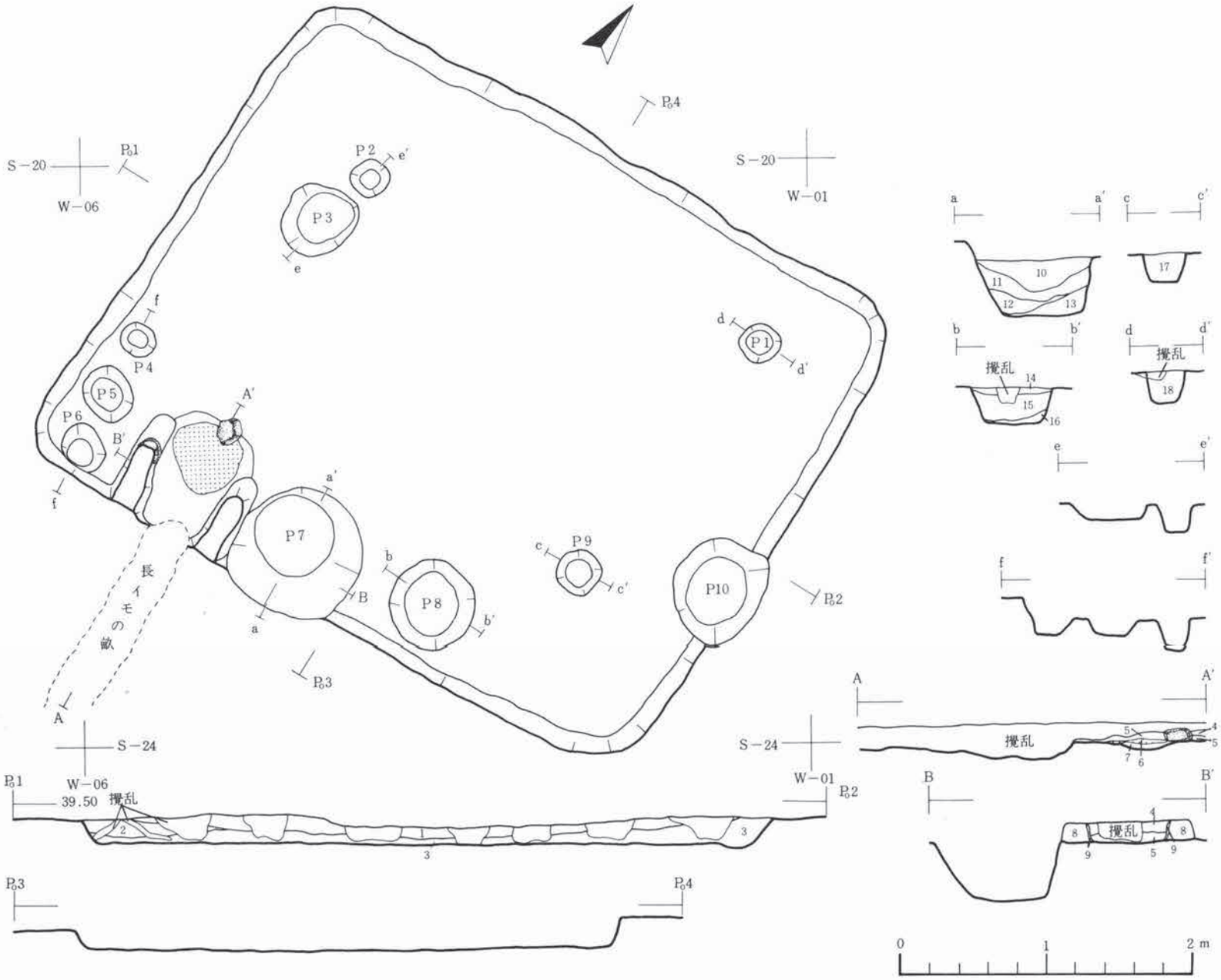
〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器・土錘・砥石がある。土器は坏・甕・鉢の3つの器種に分けられる。ピット7、およびカマドの周囲より比較的多く出土している。

坏形土器（第28図1～6） 坏には、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理)、BⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏BⅠ類〉（第28図1～3、6） 底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの(BⅠa類)と再調整を施すもの(BⅠc類)とがある。前者は破片で少量出土するのみで、図示可能のものはない。BⅠc類の坏は再調整の手法・部位とも共通しており、すべて体部下端より底部全面に手持ちのヘラケズリを施すもの（H_1手法）である。形態上の特徴によって2分され、器高が低くて底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するもの（1～3）と器高が高くて底径が大きく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(6)とがある。

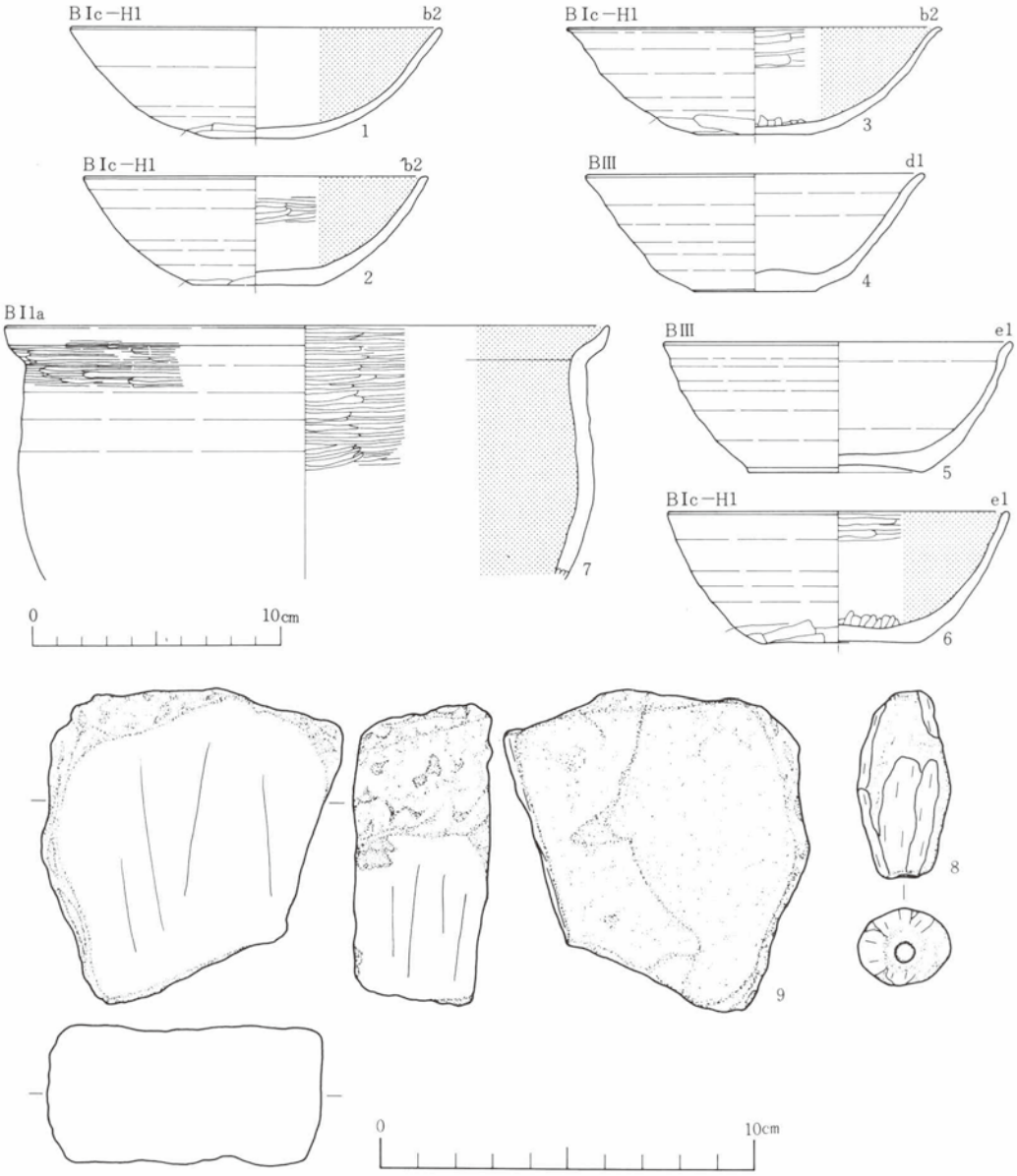
〈坏BⅡ類〉 体部片が数片出土している。底部の切り離し技法は不明である。

〈坏BⅢ類〉（第28図4・5） 回転糸切り無調整のものである。器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(4)と器高が高くて底径が大きく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(5)とがある。



	層No.	土　　色	土　　性	そ　の　他
第 1 層	1	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	かなり緻密
	2	にぶい黄褐色（10Y R4/3）	シ　ル　ト	焼土粒をかなり含む
第 2 層	3	にぶい黄褐色（10Y R5/3）	シ　ル　ト	木炭粒・焼土粒を少量含む
カ マ ド	4	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	5	暗　褐　色（7.5Y R3/4）	シ　ル　ト	粒～ブロック状の焼土を多く含む
	6	赤　褐　色（2.5Y R4/8）	シ　ル　ト	火床部
	7	暗 赤 褐 色（2.5Y R3/6）	シ　ル　ト	火熱の浸透部
	8	にぶい黄褐色（10Y R4/3）	シ　ル　ト	袖部
	9	極暗赤褐色（2.5Y R2/4）	シ　ル　ト	焼土
P 7	10	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	
〃	11	にぶい黄褐色（10Y R4/3）	シ　ル　ト	微量の焼土粒・木炭粒を含む
〃	12	褐　　色（10Y R4/4）	粘土質シルト	焼土・木炭・土器を多量に含む
〃	13	暗　褐　色（10Y R3/4）	粘土質シルト	〃
P 8	14	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	15	にぶい黄褐色（10Y R5/3）	シ　ル　ト	
〃	16	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	
P 9	17	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	
P 1	18	褐　　色（10Y R4/4）	シ　ル　ト	

第27図第 8 号住居跡



第28図　第８号住居跡　出土遺物

甕形土器　甕にはＢＩ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とＢII類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

〈甕ＢＩ類〉　口縁部に最大径をもつ大形のものと小形のものとがある。ともに図化できない。

〈甕ＢII類〉　大形の肩部より張り出す器形のものである。叩き目文・あて工具の痕跡によりいくつかに分けられる。いずれも体部の細片であり、図化不能である。

鉢形土器（第28図７）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別されるものである。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部の上半付近に体部最大径をもつ。

外面の調整は頸部の周囲に丁寧なヘラミガキを施すほかはロクロナデによっている。内面には丁寧なヘラミガキを施し、黒色処理が加えられている。

土錘（第28図８）　中央で脹らむ管状のものである。長さ5.1㎝、最大径2.6㎝を計り、長軸方向に沿って径約0.4㎝の貫通孔が入る。器面はみがかれている。

砥石（第28図９）　未加工の不定形の原材を使用したものと思われる。断面形は４角形を呈し、その２面に使用痕が認められる。石質は中粒質アルコース砂岩である。

第９号（ＣＨ56）住居跡

〔遺構検出面〕　IIa層のにぶい黄褐色シルト層の上面より検出した。畦畔断面の観察によればＩb層は確認できず、IIa層の上部はすべて耕作土になっている。

〔保存状況〕　遺構相互の重複関係による削損をうけているほかはほぼ原形をとどめている。なお、住居の北東コーナー部分は路線敷外にかかるため、調査していない。

〔重複関係〕　第７号住居跡および第２号溝と重複関係にある。当住居の北西部は第７号住居跡によって切られており、それよりも旧い。また、西壁と南壁の一部は第２号溝によって切られており、やはり第２号溝よりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕　ほぼ正方形である。長軸方向は一応南北にとって、N－10°－Wとなる。

〔規模〕　南北長で5.08ｍ・4.95ｍ、東西長が4.99ｍ・4.83ｍとなり、床面積は約23.91㎡である。

〔堆積土〕　住居内堆積土は基本的には以下の２層に大別される。

第１層：褐色のシルト層である。きめ細かくて緻密である。木炭・焼土をかなり多く含む。３層に細分される。

第２層：暗褐色の砂質シルト層であるが第１層よりやや砂分が強い。粒～小ブロック状の堆積を示す。木炭・焼土はあまり含まれない。２層に細分される。

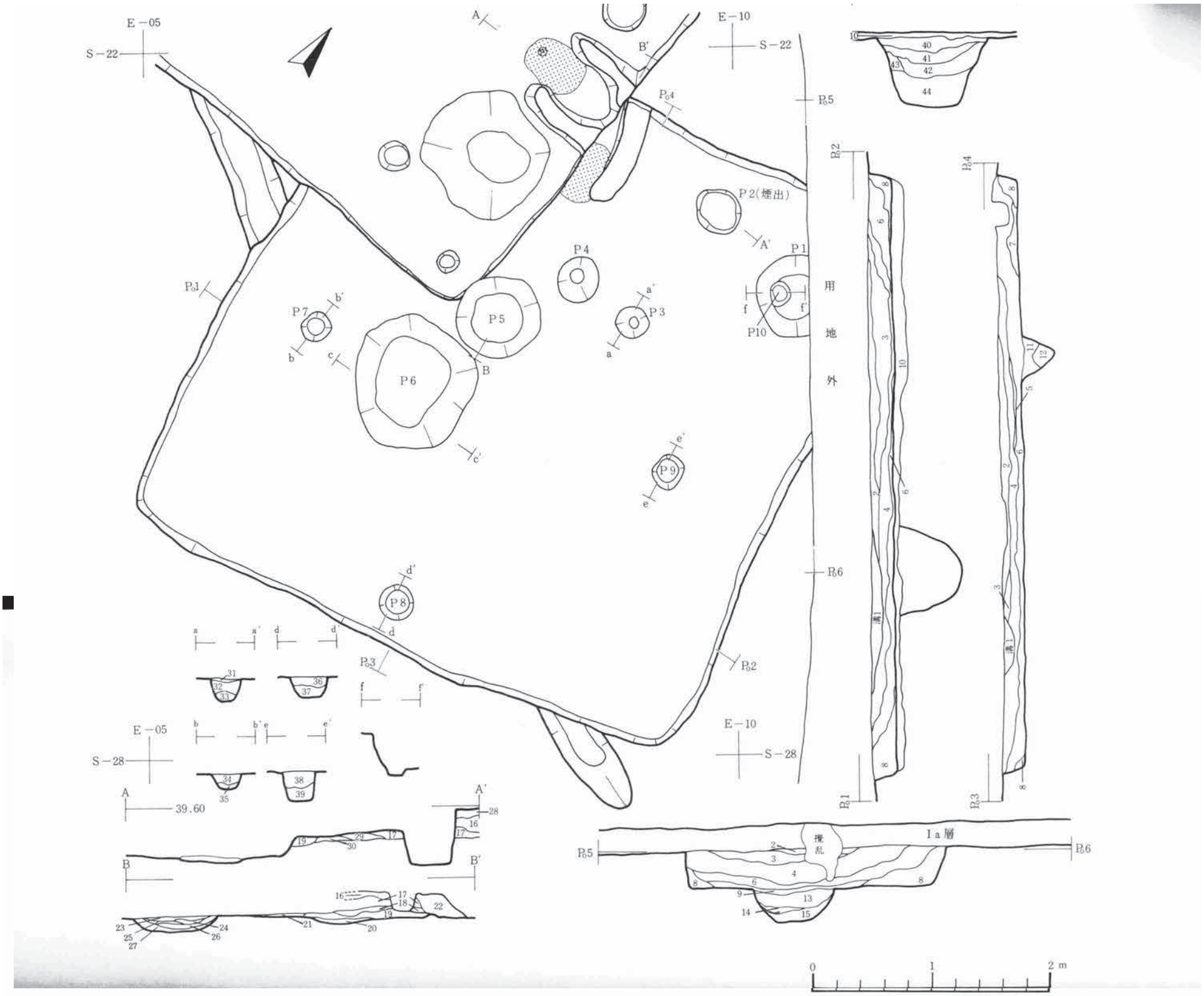
第１層・第２層とも自然的営力による堆積の状況を示している。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりかなり急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁で19～24㎝、西壁が17～21㎝、南壁18～22㎝、北壁19～27㎝となっている。

〔床〕　北東部から南西部にかけて緩く傾斜しているがほぼ平坦である。床面上からは合計８個のピットが検出されているがP_2は第７号住の煙出部である。なお、第７号住のP_6は当住居に伴うものとなる可能性が強い。

部分的に床面下を掘り下げたところ、ブロック状に堆積したにぶい黄褐色のシルト質土があらわれた。掘り方の埋土と思われる。また、掘り方の下部よりはP_8が発見されている。

〔柱穴〕　柱穴として断定できるピットは検出されていない。規模からはP_3、P_4、P_7、P_8、P_9、



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第2号溝	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト		P 5	23	黒褐色(10YR2/2)	シルト	木炭粒を多く含む
第1層	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		〃	24	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土
〃	3	褐色(10YR4/4)	シルト	非常に緻密、焼土・木炭が多い	〃	25	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土粒・木炭粒が主体
〃	4	褐色(10YR4/4)	シルト	やわらかい 〃	〃	26	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	木炭粒を多く含む
第2層	5	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土	〃	27	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を多く含む
〃	6	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト		カマド	28			No.2層と同じ
〃	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	袖の崩壊土(?)		29			No.7層と同じ、袖の崩壊土
〃	8	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	かなり疎、多量の焼土・木炭を含む		30	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	袖部
〃	9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	壁の剝落土					
埋り方埋土	10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	暗褐色土を混入	P 3	31	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	No.6層と同じか?
P 4	11	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒をかなり含む	〃	32			No.11層と同じ
〃	12	暗褐色(10YR4/3)	シルト		〃	33			No.12層と同じ
P 1	13	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒をかなり含む	P 7	34	褐色(10YR4/4)	シルト	
〃	14	暗褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む	〃	35	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
〃	15	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	〃	P 8	36	褐色(10YR4/4)	シルト	やや砂っぽい
					〃	37	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	微量の焼土粒を含む
カマド	16			No.4層と同じ	P 9	38			No.34層と同じ
	17			No.6層と同じ	〃	39			No.35層と同じ
	18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒を多く含む	P 6	40	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	ブロック状の人為的堆積層
	19	褐色(10YR4/6)	シルト	粒〜ブロック状の焼土が多い	〃	41	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	〃
	20	赤褐色(5YR4/8)	シルト	火床部	〃	42	暗褐色(10YR3/4)	シルト	上部にかたい焼土面をもつ
	21	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒が多い	〃	43	褐色(10YR4/4)	シルト質砂	IIIa層の崩壊土(?)
	22			第7号住の袖部	〃	44	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	

第29図　第9号住居跡

P_{10}、および第７号住のP_6の合計７個が考えられる。このなかで、配列の規則性を加味して強いて可能性を求めるならば、P_7、P_9、P_{10} 第７号住のP_6の４個があげられる。

〔カマド〕 北壁のやや西寄りの部分に構築されている。燃焼部の大半、および煙道部、煙出部は第７号住によって破壊されている。主軸方向は推定でN－12°30′－Wとなる。

燃焼部は右半分しか遺存していないが、床面より４～６cmほど掘り下げている。焚口付近の底面には54×(21)cmの範囲で固い焼土面をもつ。支脚は検出されていない。

煙道部は第７号住によって切られており、まったく残存しない。ただ、第７号住の左袖脇に検出されているP_3は当住居の煙出部と思われる。現存部分で直径37cmで、深さは19cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴の可能性をもつものにP_1とP_5がある。P_1は北東コーナー付近に位置しており、P_5は住居のほぼ中央部に設置されている。P_1は３層に分けられ、上層は褐色のシルト層で、木炭粒をかなり含む。中層は焼土・木炭を主体とする暗赤褐色の粘土質シルト層である。下層は褐色のシルト層で、焼土・木炭を粒状に含む。なお、P_1はP_{10}と重複しているが新旧関係は不明である。併用されていた可能性が強い。P_5は３層に大別される。上層は３層に細分されるが、ともに焼土・木炭が主体となるシルト層で色調は一定しない。中層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、木炭粒をかなり含む。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、木炭粒・焼土粒・灰を多く混入する。双方のピットとも一般的な意味での蔵穴としては確証に欠ける。

〔その他のピット〕 掘り方の下より大形のピット(P_6)が検出されている。このピットは少なくとも当住居の廃絶段階では使用されておらず、当住居と時期差を有する重複関係にあるものと考えるのが妥当であろう。

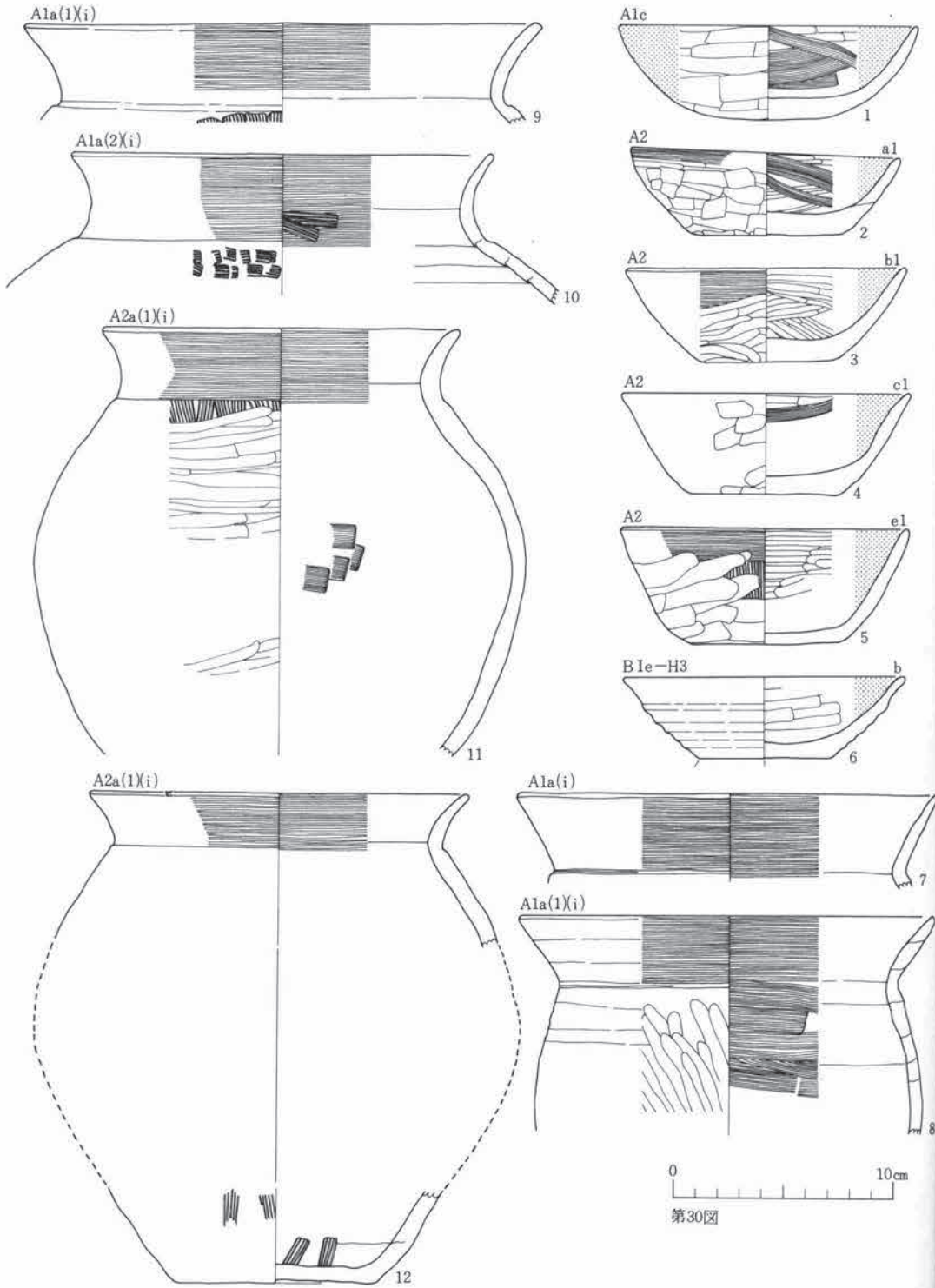
〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器・鉄製品・砥石がある。土器は坏・甕・壺の３器種に分けられ、住居のほぼ全域より出土する。

坏形土器（第30図・第31図）坏には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、BⅠ類（ロクロ成形で酸化炎焼成＋黒色処理)、およびBⅡ類（ロクロ成形で還元炎焼成）がある。

〈坏A類〉（第30図１～５） 丸底のもの（Ａ１類）と平底のもの（Ａ２類）とがある。

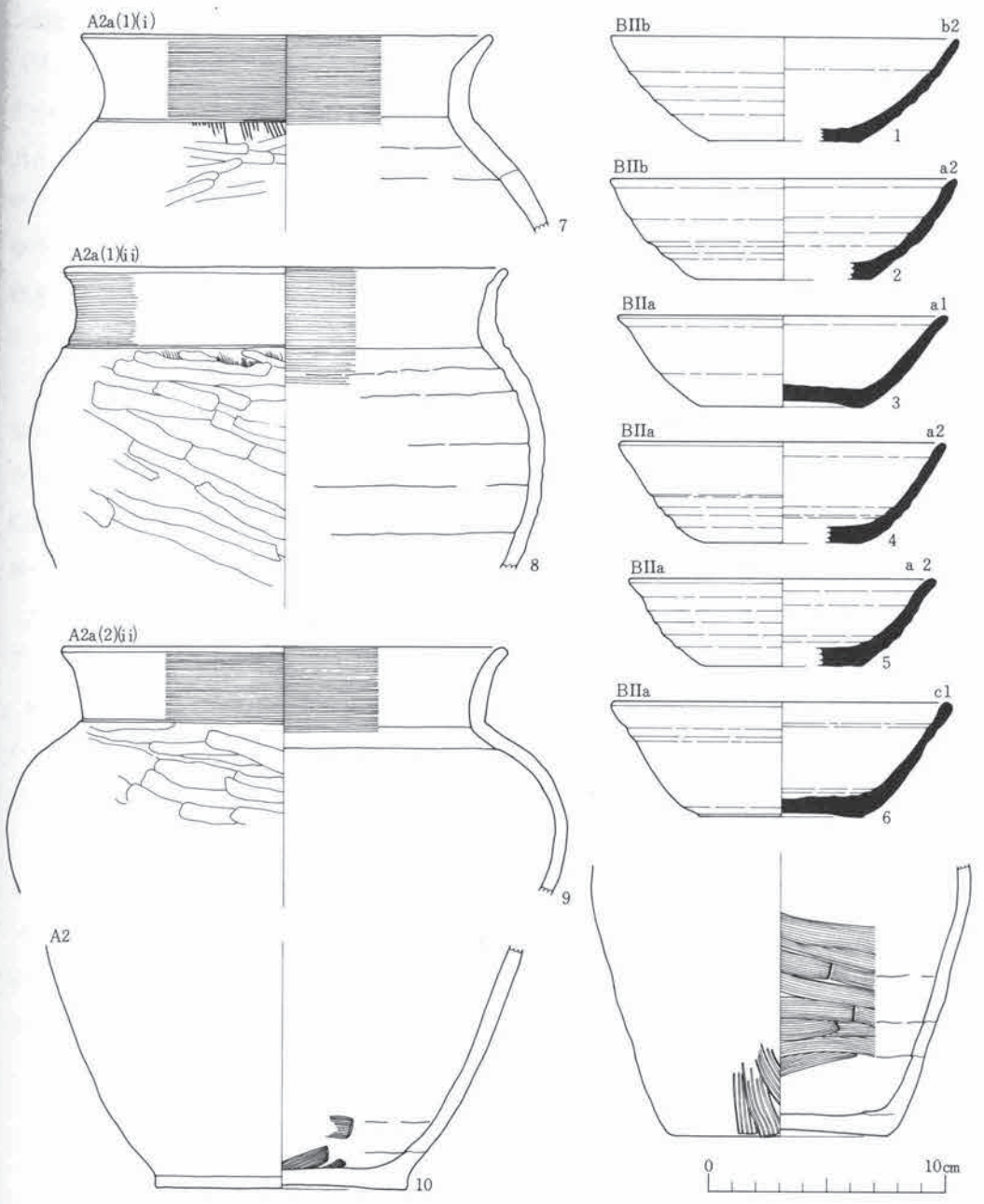
Ａ１類の坏 (1) は、体部が丸味をもってなめらかに外傾し、段ないし沈線のいずれもが施されていないもの（Ａ１c類）である。器面調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ＋ナデによっている。内外両面に黒色処理が認められる。

Ａ２類の坏（２～５）は、形態上の違いによって細分され、器高が低くて底径が大きく、体部が直線的に外傾するもの(２)、器高低くて底径が小さく、体部が大きく開いて外傾するもの(３)、器高が普通で底径が大きく、体部が直線的に外傾するもの(４)、器高が高くて底径が大きく、体部が直線的に立ちあがるもの(５)、などがある。器面調整は体部外面にヘラミガキを施すもの(３)とヘラケズリを施すもの(２・４・５)とがある。内面はヘラミガキで統一される



第30図

第30図　第９号住居跡　出土遺物（Ⅰ）



第31図　第9号住居跡　出土遺物(2)

が、後にナデを加えるもの（2・4）もある。口縁部には前段階の調整である横ナデを施すものが多い。5には体部外面に刷毛目痕が観察される。底部外面はすべてヘラケズリで整えている。

〈坏BⅠ類〉（第30図6）　底部全面に再調整を施し、底部の切り離し技法が不明のものである(BⅠc類—H_3手法)。器高が低くて底径の大きなもので、体部は直線的に外傾する。

〈坏BⅡ類〉（第31図１～６）　ＢⅡ類の坏は、回転糸切り無調整のもの（ＢⅡa類）と回転ヘラ切り無調整のもの（ＢⅡb類）とがある。

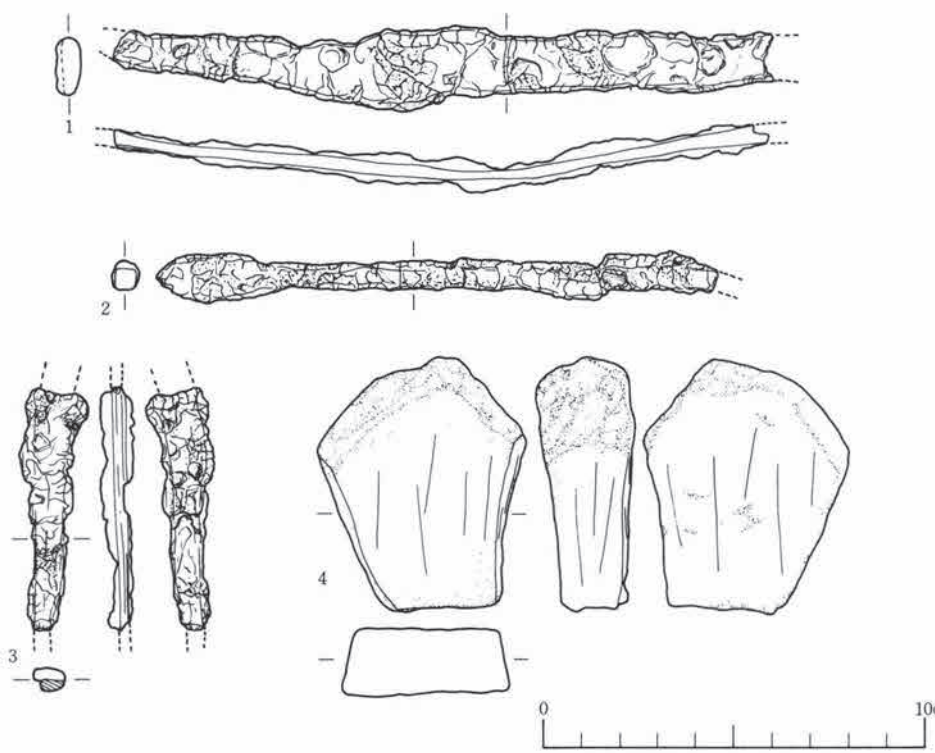
ＢⅡb類の坏（１・２）は、形態上の特徴によって、底径が小さく体部がふくらみをもって外傾するもの(１)と底径が普通で体部がややふくらみをもって外傾するもの(２)とに分けられる。

ＢⅡa類の坏（３～６）は、形態上の特徴によって、体部が直線的に外傾するもの(３)とややふくらみをもって外傾するもの（４・５）、および器高が高くて体部が直線的に外傾するもの(６)などに分けられる。

甕形土器（第30図・第31図）　甕はＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に限定される。

〈甕Ａ類〉（第30図７・８）　いずれもＡ１類に属す大形のもので、頸部に段を有し、口縁部は長く外反する。８の体部はゆるやかに脹らみ、中央付近に体部最大径をもつ。

器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面が粗いヘラミガキ、内面が粗いヘラナデによっている。そのほか、体部下半～底部の破片（第31図11）があり、中形(Ａ２類)のものと思われる。体部外面が刷毛目＋ヘラミガキ、内面がヘラナデで整えてあり、底部外面にはナデを施している。



第32図　第９号住居跡　出土遺物（３）

壺形土器（第30図・第31図）　壺はＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に類別される。

〈壺Ａ類〉 器形の大小によって大形のもの（Ａ１類）と中形のもの（Ａ２類)とに２分される。さらに、最大径の位置、口縁部の形態等によっても分類される。

Ａ１類の壺（第30図９・10）は、ともに頸部に段をもち、口縁部が長く外反するものであるが、頸部の段は明瞭なもの(９)と形式的なもの(10)とに分けられる。体部の形態はそれぞれ異なり、９は真球に近くて最大径を中央付近にもつものと思われ、10はやや肩の張る球形を呈し最大径を上半付近にもつものである。器面調整は共通しており、口縁部が横ナデ、体部上半外面が刷毛目によっている。

Ａ２類の壺（第30図11・12、第31図７～10)には、口縁部が単純に外反するもの(第30図11・12、第31図７）と直立ぎみに立ちあがり口縁端で外反するもの（第31図８・９）とがある。前者は体部がほぼ真球を呈し体部最大径を中央付近にもつものに限られるが、後者にはゆるやかに脹み最大径を中央付近にもつもの(８)とやや肩が張り最大径を上半付近にもつもの(９)とがある。Ａ２類の壺の器面調整はほぼ共通しており、口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目＋ヘラミガキによっている。体部内面にはヘラナデを施すものが多い。底部を残すものには外面にナデの痕跡が認められる。なお、11は壺Ａ２類の体部下半～底部片と思われる。

鉄製品（第32図１～３）　３点出土している。１は刀子と思われ、茎と身の一部を欠く。ややわん曲しているが現存長で17.6cmを計る。身幅は1.3～2.0cmとなり刃部端に向って細くなる。関は背側に段をもち、幅は約1.5cmである。茎幅も身幅と同様に先端に向い徐々に細くなり、1.0～1.6cmを計る。３は細長い板状のもので、一方の先端を欠く。 現存長で5.5cm、幅0.8cmを計る。性格は不明である。 ２は細長い角棒状のもので、先端部の脹みは三角形式の峰と思われ、鏃となる可能性が強い。現存長で14.4cmを計る。

砥石（第32図４）　板状の不整形の石である。砥面は長軸に沿って４面認められ、使用部分の横断面は４角形である。石質は凝灰質の砂岩である。

第10号（ＣＪ03）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト質土の上面である。遺構はＩa層にあたる耕作土を約30cmほど除去して確認している。

〔保存状況〕　重複関係による削損部分を除いて極めて良好なかたちで遺存している。

〔重複関係〕　第３号溝と重複関係にある。当住居跡の西壁から東壁にかけて第３号溝によって切られており、それよりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕　南北に長い長方形を呈する。長軸方向はＮ―5°―Ｗである。

〔規模〕　長軸(南北)長で4.85ｍ・4.60ｍ、短軸(東西)長が4.42ｍ・4.16ｍとなり、床面積は

約19.14㎡である。

〔堆積土〕 住居跡内の堆積土は基本的には以下の3層に大別される。

第1層：褐色のシルト層で、住居内上部に厚く堆積する。緻密でかなりかたい。混入物はほとんど認められない。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層より若干粘性が強い。住居の全面に分布しており下部に厚く堆積する。少量の焼土粒・木炭粒を含む。

第3層：褐色の粘土質シルト層で、住居の下部に部分的に認められる。多量の焼土粒、木炭片を含む。灰も混っており、比較的粘性が強い。

以上の堆積層のうち、第1層、第2層は自然堆積層と思われるが、第3層は床面上の一部分に薄く堆積しており、人為的な生活層と推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で24～34cm、西壁が29～38cm、南壁28～35cm、北壁30～38cmとなり全体的にかなり深い。

〔床〕 部分的には凸凹がみられるがほぼ平坦である。カマドが付設されている南東部が若干高くなっている。床面上からは大小11個のピットが発見されている。

最後に床面の一部を掘り下げたが掘り方等は検出されていない。

〔柱穴〕 床面上より発見された11個のピットのうち、その規模から柱穴と推定されるものに、P_2、P_5、P_6、P_7、P_{10}の5個のピットがある。P_6を除く4本を結ぶ線は、やや歪んではいるもののほぼ長方形を呈し、その配置形からは柱穴とするのに矛盾はない。また、P_8は床のほぼ中央部に位置しており、柱穴としての機能をもつ可能性がある。

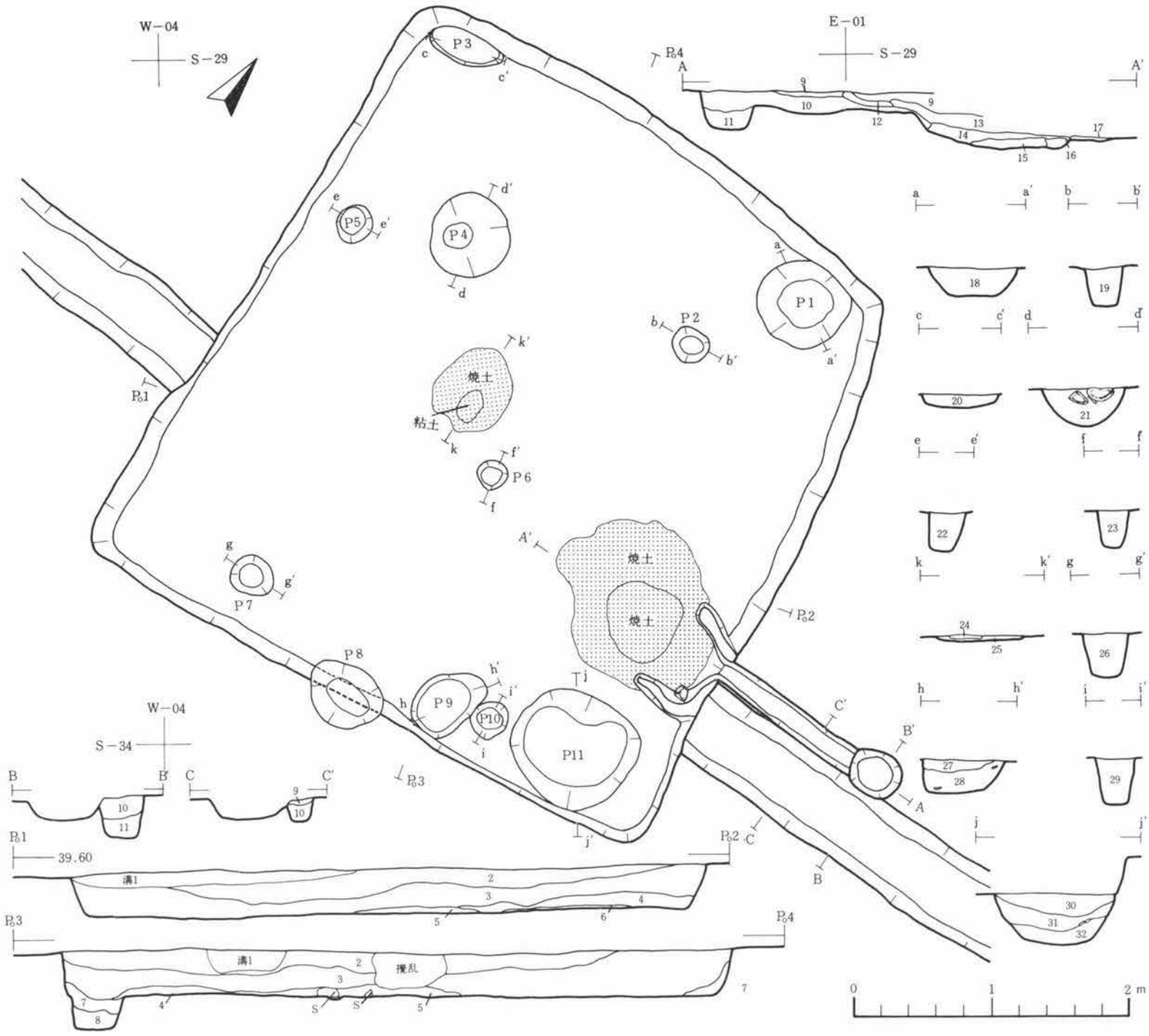
〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に構築されている。煙道部、煙出部の一部を第3号溝によって切られている。主軸方向はE－3°－Nである。

燃焼部は床面より10cmほど皿状に掘り凹めており、焚口付近に54×55cmの範囲で、厚さ約8cmのかたい焼土面を持つ。その周囲には木炭・灰を多量に含むぼさぼさした焼土面が広がる。また袖内壁もよく焼けている。支脚と思われる角礫が燃焼部内に発見されている。

煙出部は燃焼部底面から15cmほどの比高をもつ奥壁を掘り込んで作られており、長さは約115cmになる。中央部が若干低くなるがほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には40×33cmのピットが掘られており、煙道端との比高は16cmになっている。

燃焼部底面の下に掘り方は検出しておらず、地山をそのまま燃焼部としている。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴状のピットとしてはカマド右袖脇、南東コーナー部分に位置するP_{11}がある。大きさは95×89cmで、深さは37cmである。埋土は3層に分けられる。上層は褐色のシルト層で、かなりの木炭片・焼土粒を混入する。中層は灰黄褐色の粘土質シルト層で、塊状に浅黄色の粘土を含む。土器・焼土粒・木炭片・灰を混える。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第3号溝	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む		17	暗赤褐色(2.5YR3/2)	シルト	焼土・木炭の混合土
第1層	2	褐色(10YR4/4)	シルト						
第2層	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土粒・木炭片を少量含む	P 1	18	褐色(10YR4/4)	シルト	微量の木炭粒を含む
〃	4	〃 (10YR3/3)	シルト	焼土粒・木炭片を多量に含む	P 2	19	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粒～塊状堆積
第3層	5	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	木炭片を含みねばりがある	P 3	20			No.19層と同じ
〃	6	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	小塊状の焼土・木炭片・灰を含む	P 4	21	褐色(10YR4/4)	シルト	土器片・木炭片・礫をかなり含む
〃	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	壁の剥落土	P 5	22			No.18層と同じ
P 9	8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粒～塊状の焼土を多量に混える	P 6	23			No.18層と同じ
					焼土	24	浅黄色(7.5Y 7/3)	粘土	
カマド	9			No.3層と同じ	〃	25	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土
	10	褐色(10YR4/4)	シルト	粒～塊状の焼土を多く含む	P 7	26			No.18層と同じ
	11	暗褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	〃	P 9	27			No.7層と同じ
	12	暗赤褐色(2.5YR3/6)	シルト	焼土	〃	28			No.8層と同じ
	13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粒状の焼土をかなり含む	P 10	29			No.18層と同じ
	14	暗赤褐色(2.5YR3/4)	シルト	焼土	P 11	30	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭片・焼土粒をかなり含む
	15	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部	〃	31	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	粘土・灰・木炭片・焼土粒を多く含む
	16	黒褐色(5YR2/2)	粘土質シルト	多量の木炭片を含む	〃	32	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	砂・灰・木炭片・焼土粒を多く含む

第33図　第10号住居跡

中層と同様の混入物が認められるほか、若干の砂を含む。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器・鉄製品・土錘などがあり、土器は坏・高台付坏・甕・壺・鉢の各器種に分けられる。遺物は住居のほぼ全域より出土している。

坏形土器（第34図）坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢＩ類〉（第34図４～９） ＢＩ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（ＢＩa類）と再調整を施すもの（ＢＩc類）、および再調整のための底部の切り離し技法が不明のもの（ＢＩe類）とがある。

ＢＩa類の坏（８）は、器高が低くて底径の大きなもので体部はやや丸味をもって外傾する。

ＢＩc類の坏（５～７）は、いずれも体部下端より底部全面にかけて手持ちのヘラケズリを施すもの（H_1手法）である。形態上の特徴によって細分される。すべて底径の小さなもので、器高が低く体部がややふくらみをもって外傾するもの（５）、器高が普通で体部がややふくらみをもって外傾するもの（６）、および器高が高くて体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（７）とに分けられる。

ＢＩe類の坏（４）は、体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリが施されている（H_1手法）器高が低くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾するものである。体部外面にも丁寧なヘラミガキが観察され、内外両面が黒色処理されている。

〈坏ＢII類〉（第34図１・２）ＢII類の坏は回転糸切り無調整のもの（ＢIIa類）である。３は器高が低くて底径が大きく、体部は直線的に外傾する。

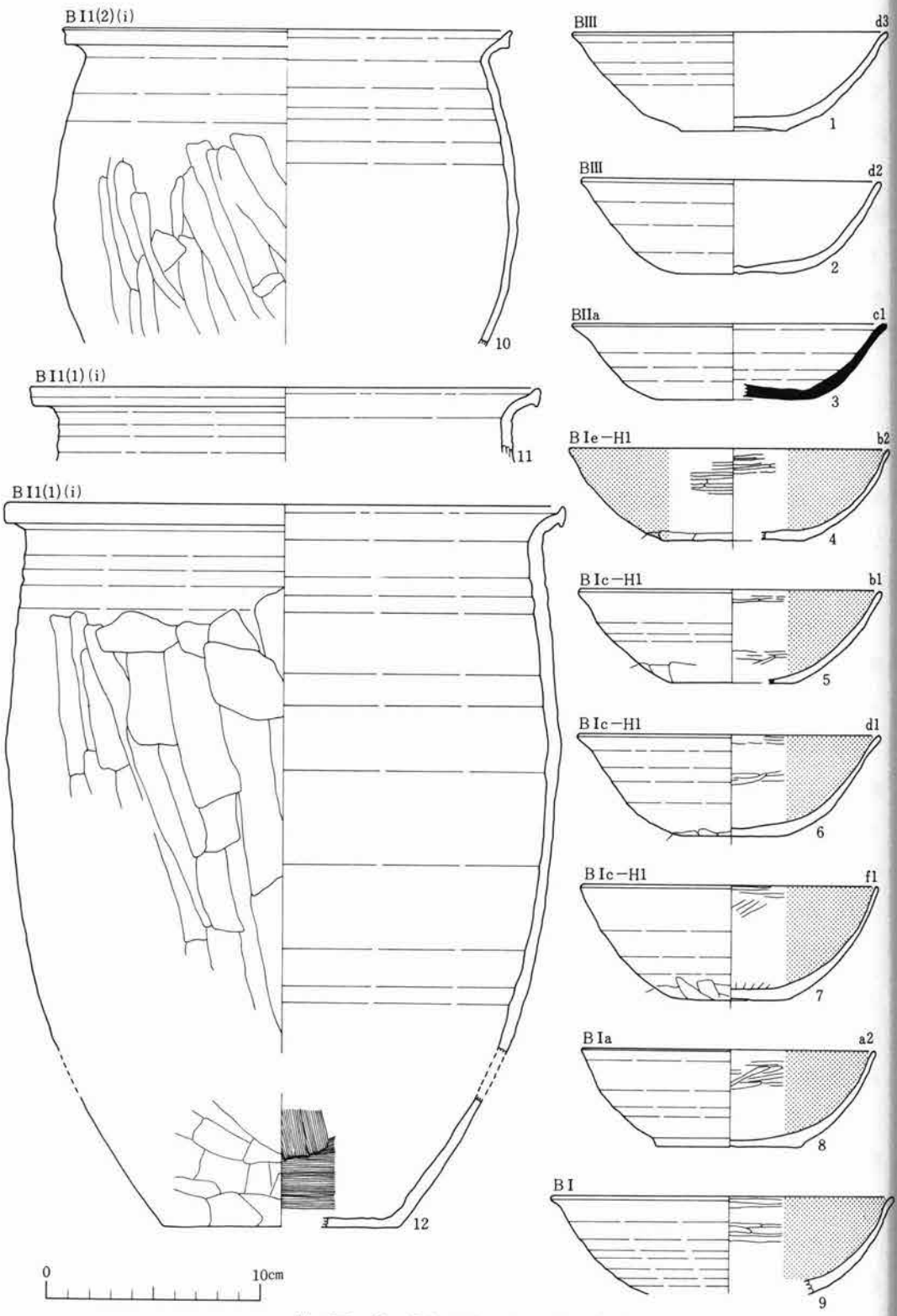
〈坏ＢIII類〉（第34図１・２） 回転糸切り無調整のものである。いずれも器高が普通で底径の小さなもので、体部が直線的に外傾するもの（１）と体部がやや丸味をもって外傾するもの（２）とがある。

高台付坏形土器 ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）に属すものが図化不能の細片で１点出土している。高台部が短く外傾し、底部は周縁をロクロ調整するもの（ＢＩ１③類）で、坏部の形態は不明である。埋土上層より出土したもので、当住居跡に伴うものであるかは疑問が残る。

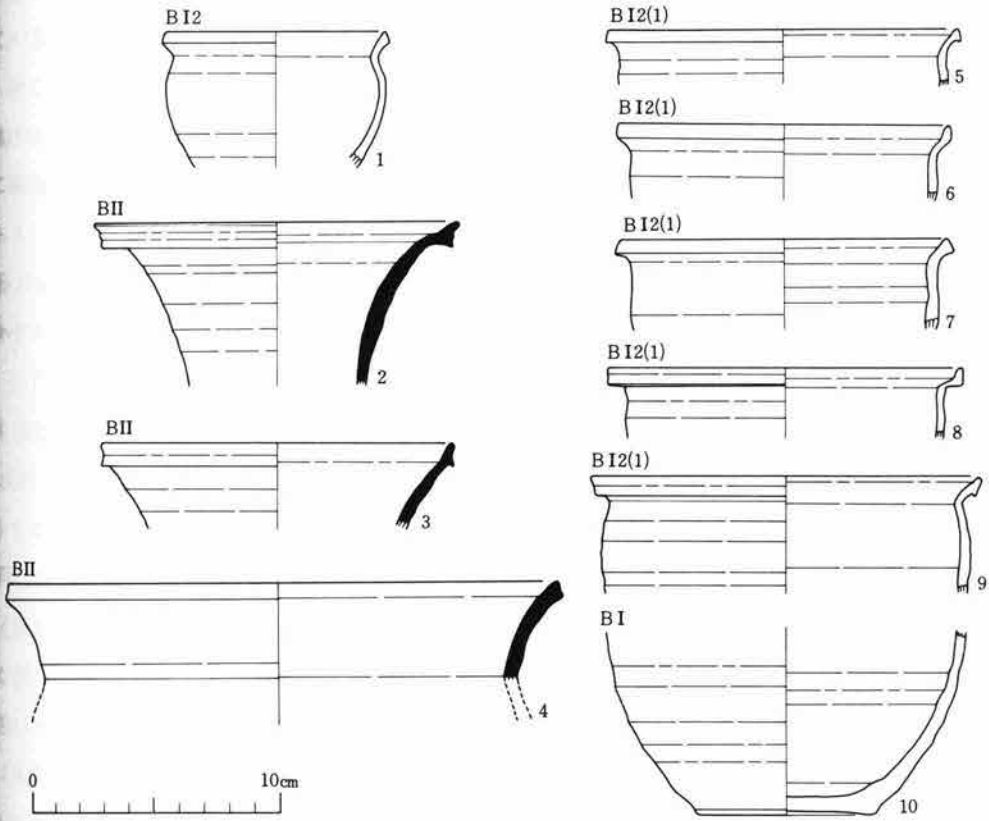
甕形土器（第34図、第35図） 甕にはＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものとＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものである。

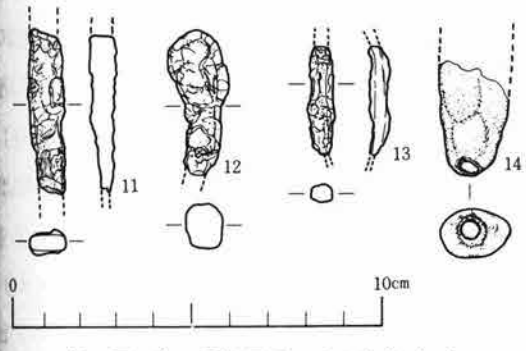
〈甕ＢＩ類〉（第34図10～12、第35図５～８） ＢＩ類の甕は器形の大小や最大径の位置によって分けられ、口縁部に最大径をもつ大形のもの（ＢＩ(1)類）、体部に最大径をもつ大形のもの（ＢＩ１(2)類）および口縁部に最大径をもつ小形のもの（ＢＩ２(1)類）などに細分される。

ＢＩ１(1)類の甕（第34図11・12）は、口縁部が短く強く外反し、口唇部は上下に挽き出して



第34図　第10号住居跡　出土遺物（Ⅰ）





第35図　第10号住居跡　出土遺物（２）

いる。体部最大径は中央付近にある。器面調整は外面が体部下半より底部にかけてはヘラケズリを施し、内面は体部下端にヘラナデを施している。

ＢＩ１(2)類の甕（第34図10）は１点のみで、体部が大きく張むもので、最大径を体部中央にもつ。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方外側に挽き出している。器調調整は体部下半にヘラケズリが施されるほかはロクロナデによっている。

ＢＩ２(1)類の甕（５～９）は、口縁部の形態に違いがみられ、口縁部が極端に短くて直立ぎみにゆるく外反するもの（５～７）と短く強く外反するもの（８・９）とがある。さらに口唇部の形態によって、前者は上方へ挽き出すもの(６)と下方へ挽き出すもの（５・７）とに分けられる。後者には、上方へ強く挽き出すもの（８）、と下方内側へ挽き出すもの(　９)とがある。

体部はほぼ直線的に底部へと移行するものがほとんどを占め、8はやや丸味をもって脹むものである。調整は全面ロクロナデによっている。なお、10は9と同一個体となる可能性が強い。底部には右回転糸切り痕をそのまま残す。

〈甕BⅡ類〉（第35図4）　BⅡ類の甕はいずれも小片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない。4は口縁部片で、体部があまり脹まずに底部へと移行し、最大径を口縁部にもつ器形と推定される。ほかに、体部が大きく張り出す器形のものも出土している。

壺形土器（第35図2・3）　壺はBⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものに限られる。2は長頸壺の口縁部片と思われる。口縁端で大きく外反し、口唇部は上下外方に挽き出している。3は口縁部のみの破片で全体の器形は不明である。甕となる可能性もある。

鉢形土器（第35図1）　BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別されるものが1点出土している。極端に小形のもので、口縁部は短く外反し、体部は肩部付近でやや外側へ張り出している。器面は全面ロクロ調整である。

土錘（第35図14）　中央部でやや脹む管状を呈するものである。約半分が欠損している。現存長で3.1cm、幅1.9cmを計り、長軸に沿って径約0.5cmの貫通孔がある。

鉄製品（第35図11～13）　11は刀子の破片である。小形のもので茎と身の一部を欠く。関は背側にのみ段を有する。現存長で4.4cm、身幅1.0cm、茎幅0.8cmを計る。12と13は釘の破片と思われる。現存長で2は3.8cm、3は2.9cmになる。

第11号（DB53）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構は地表下25cm±のIIa層の上面より確認した。耕作土(Ⅰa層)は地表下20cm±その下に新鮮なⅠb層が4～5cmの厚さで検出されている。遺構はこの層の直下より掘り込まれている。

〔保存状況〕　南辺付近が電柱埋め込み穴によって破壊されている。そのほかはほぼ原形をとどめており、保存状況は比較的良好である。

〔重複関係〕　第3号溝によって西壁の一部が削損をうけている。第3号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕　平面形は菱形に近い不整の正方形を呈する。長軸方向は南北方向にとって、N－20°30′－Wとなる。

〔規模〕　南北長で5.68m・5.40m、東西長が5.40m・5.19mとなり、床面積は約28.03 m²である。

〔堆積土〕　住居内の堆積土は基本的には以下の4層に分けられる。

第1層：黒褐色のシルト層である。住居上部のほぼ全域を覆う。本遺跡の遺構内堆積土のなかで最も黒味を帯びる土である。層中には焼土粒・木炭粒を多量に含む。

第2層：褐色のシルト層である。第1層に比べて顕著な色調の違いを示す。最も厚く堆積している。第1層ほどではないが、かなりの焼土粒・木炭粒を混入する。

第3層：褐色のシルト層である。第2層より砂分が強い。層厚は薄く、ほぼ水平に堆積する。焼土粒・木炭粒はほとんど含まない。

第4層：多量の木炭・焼土を含むため色調は一定しないが、基本的には暗褐色のシルト層である。含まれる木炭は破片に限らず柱状のものも多くみられ、それが横倒しの状態で相当数検出されている。焼土は大小の粒状混入で層全体にみられ、所々に大きな塊状のかたまりとして含まれる。

以上4層に分けられた層相互の関係は以下のように位置づけられる。第1層・第2層は住居廃絶後に堆積した自然堆積層と思われ、第4層は層中に多量の炭化材・焼土を含むことからみれば、火災によって焼失した際に堆積した事故的堆積層と考えられる。第3層は焼土・炭化材を含まないこと、粒～塊状の状態で水平に堆積していることなどから、上屋の構造物に乗せていた土が落ちたものと推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。南壁の一部が破壊されているほか、西壁の一部が第3号溝で切られている。床面上から急角度で立ちあがる。壁高はかなり高く、東壁で29～47cm、西壁が39～44cm、南壁29～40cm、北壁45～52cmとなる。

〔床〕 床面の中央付近、および南側の部分に後世の掘り込みによる破壊をうけている。床面上は叩きしめられており、かなりかたい。部分的な凸凹はみられるがほぼ平坦になっている。床面上からは大小15個のピットが検出されている。

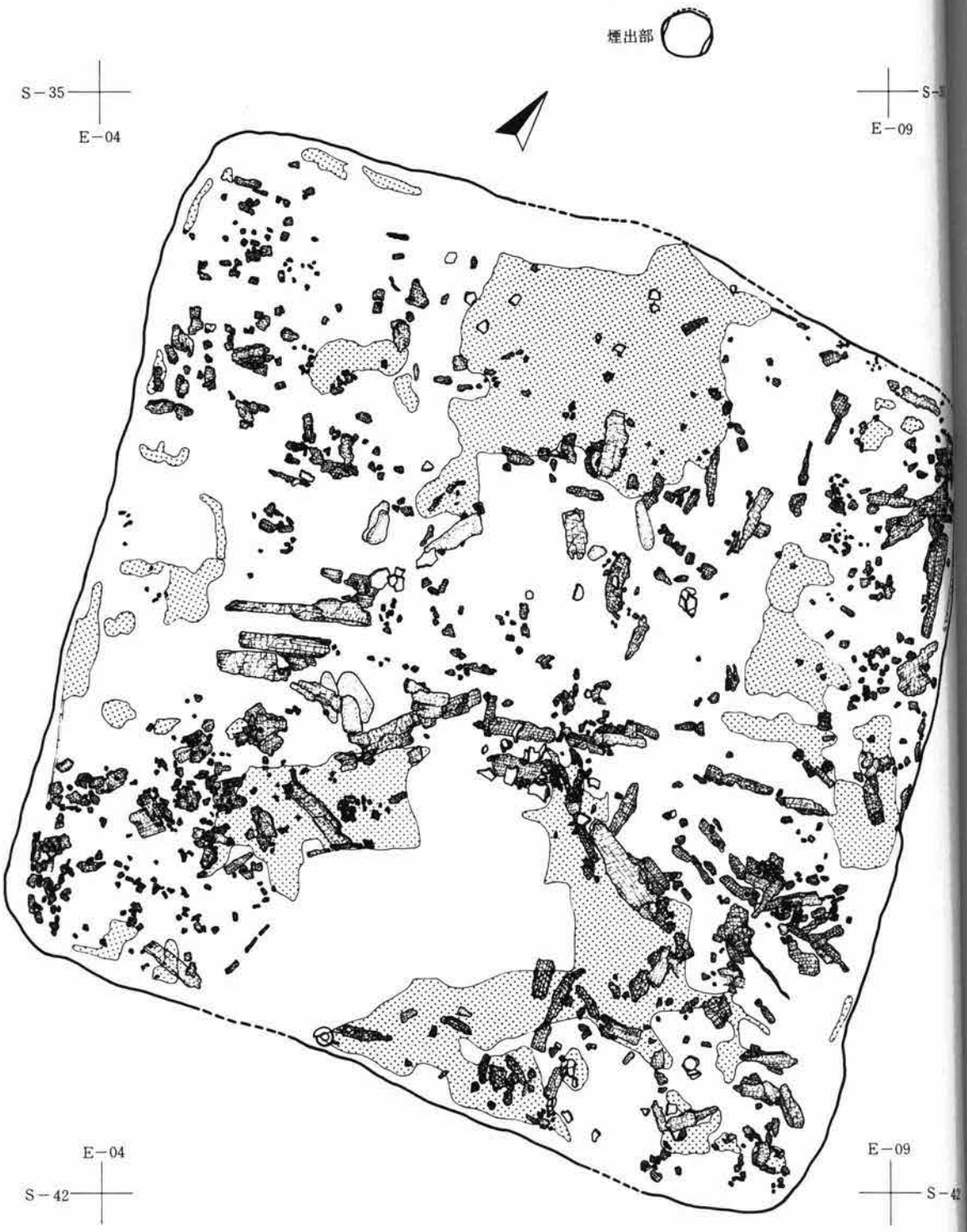
なお、最後に床面を掘り下げたところ3～10cmの厚さでにぶい黄褐色土層があらわれた。住居に伴う掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 床面上で発見された15個のピットのうち、柱穴と考えられるものにはP_2、P_5、P_8、P_{14}がある。これらのピットは住居の方形プランの対角線上に乗り、4点を結ぶ線はほぼ正方形を呈する。大きさ、深さにも斉一性が認められる。

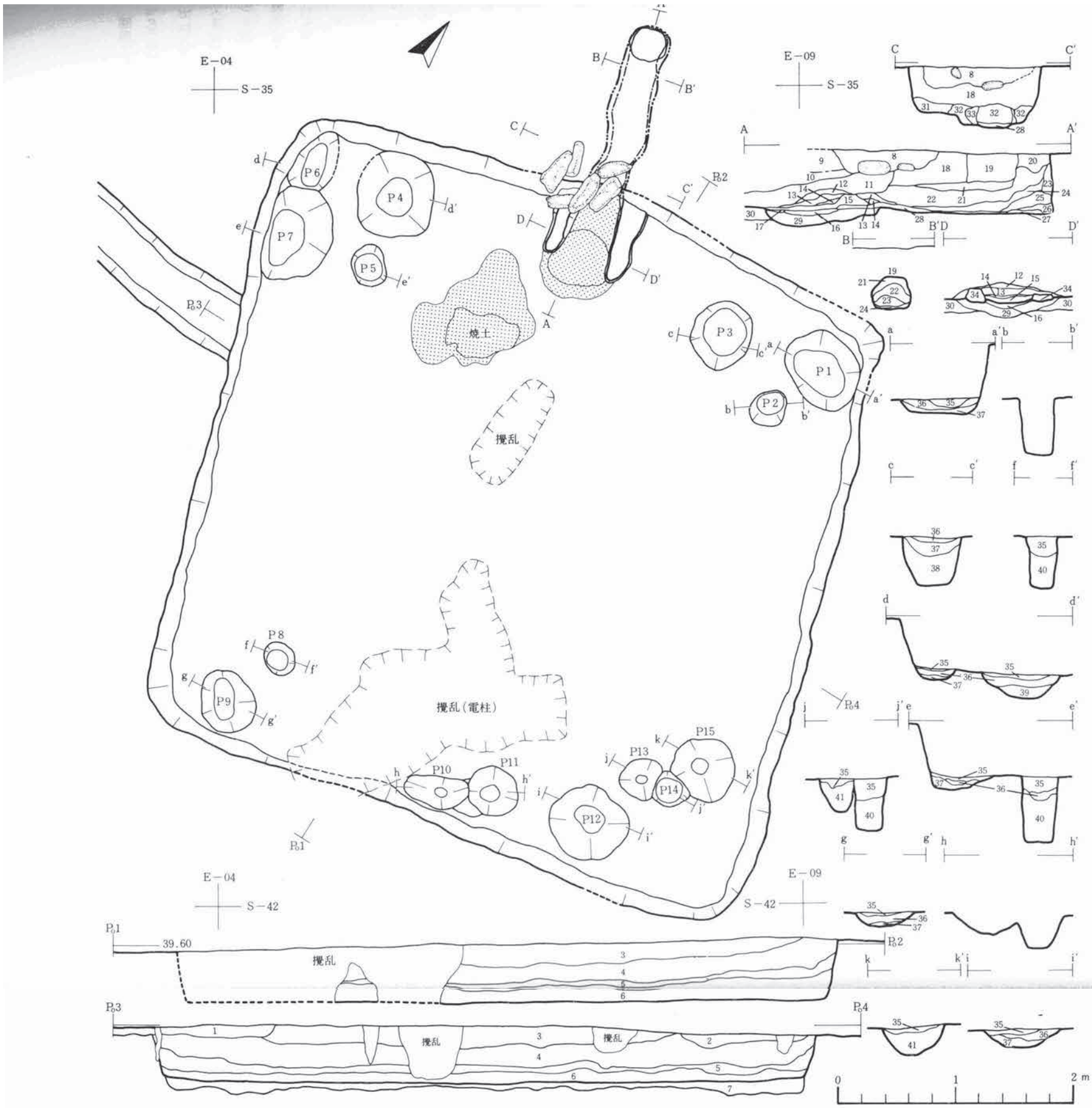
〔カマド〕 北壁の中央部に設置されている。袖がほとんど崩壊しているほかは遺存状況は良好である。主軸方向は住居の南北軸と平行しており、N－20°30′－Wとなる。

燃焼部は92×36cmの大きさで床面より若干掘りくぼめており、焚口付近には50×51cmの範囲でかたい焼土面をもつ。支脚は検出されていない。煙道部への入口付近では大きな川原石が発見されており、袖部・天井部とも部分的に石を芯材として利用していた可能性が大きい。

煙道部は燃焼部底面と段差をもたずに奥壁をトンネル状にくり抜いて作られる。長さは約112cmほどあり、ほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には径32cmのピットが掘られており、煙道端とは段差をもたない。



第36図　第11号住居跡（1）



	層No.	土色	土性	その他
第3号溝	1	暗 色(10YR3/4)	シルト	少量の焼土粒・木炭粒を含む
第1層	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	〃
〃	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む
第2層	4	褐 色(10YR4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒をかなり含む
第3層	5	〃 (〃)	シルト	固化している、混入物なし
第4層	6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土・木炭が主体を占める
埋り方埋土	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	塊状の堆積
カマド	8	褐 色(10YR4/6)	シルト	崩壊土（攪乱）
	9			No.4層と同じ
	10			No.5層と同じ
	11			No.6層と同じ
	12	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	焼土（かたい）
	13	褐 色(7.5YR4/6)	シルト	全体に熱をうけている
	14	赤褐色(5YR4/8)	シルト	焼土（かたい）、灰を含む
	15	暗赤褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	焼土粒・灰を含む
	16	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部
	17	黒褐色(5YR2/2)	シルト	木炭粒・灰を含む
	18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	固化している、塊状堆積
	19	〃 (10YR5/4)	シルト	地山
	20	褐 色(10YR4/6)	シルト	粒～塊状堆積
	21	褐 色(10YR4/4)	シルト	少量の焼土粒・木炭粒を混入

	層No.	土色	土性	その他
	22	褐 色(10YR4/6)	シルト	かなりの焼土粒・木炭粒を含む
	23	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山土（崩壊土）
	24	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	全体に熱をうけている
	25	〃 (10YR3/4)	シルト	ややぼさぼさしている
	26	褐 色(10YR4/4)	砂質シルト	塊状の焼土を含む
	27	黒褐色(5YR3/1)	シルト	ススの堆積層
	28	暗赤褐色(5YR3/2)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒・灰を混える
	29	褐 色(10YR4/4)	シルト	燃焼部掘り方
	30			No.7層と同じ
	31	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	緻密
	32	褐 色(10YR4/4)	シルト	やや砂分が強い
	33	にぶい赤褐色(5YR4/3)	シルト	No.32層の加熱部分
	34	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	袖部
P1～P15	35	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	粒～塊状の焼土・木炭粒を混入
〃	36	褐 色(10YR4/4)	シルト	木炭粒・焼土粒を少量含む
〃	37	暗褐色(10YR3/4)	シルト	ぼさぼさしている、混入物なし
〃	38	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	固化している
〃	39	暗褐色(10YR3/3)	シルト	ぼさぼさしている
〃	40	〃 (10YR3/4)	粘土質シルト	下に向うほどやわらかい
〃	41	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	固化している。

第37図　第11号住居跡（2）

このカマドの構築法はやや特異な方法がとられており、以上の過程を推定を混えて復原すると以下のようになる。

1．北壁の中央部にカマドを構築することとし、煙道部の長さの半分位まで地山を半円状に掘り下げる。したがって、煙道部をトンネル状にくり抜くのは奥の半分の長さに限られる。

2．住居内に燃焼部、袖部、天井部を構築し、煙道部の手前半分も煙道を残して埋め戻す。この段階で川原石を使用したものと推定される。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、床面下に検出された掘り方埋土とは異なる褐色土がたたきしめられた状態で検出された．カマドに伴う掘り方と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と断定できるものは検出されていない。規模等からその可能性をもつものとしてはP_3、P_4、P_{15}の３個のピットがある。しかし、埋土の状況、遺物の出土状況からみればその確証に欠ける。

〔出土遺物〕 当住居跡の遺物には、土器・鉄器・土玉・砥石などがある。土器の器種は坏・甕・壺・鉢で構成される。住居のほぼ全域にわたって分布する。

坏形土器（第38図） 坏には、Ａ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢII類（ロクロ成形で還元炎成成）とがある。

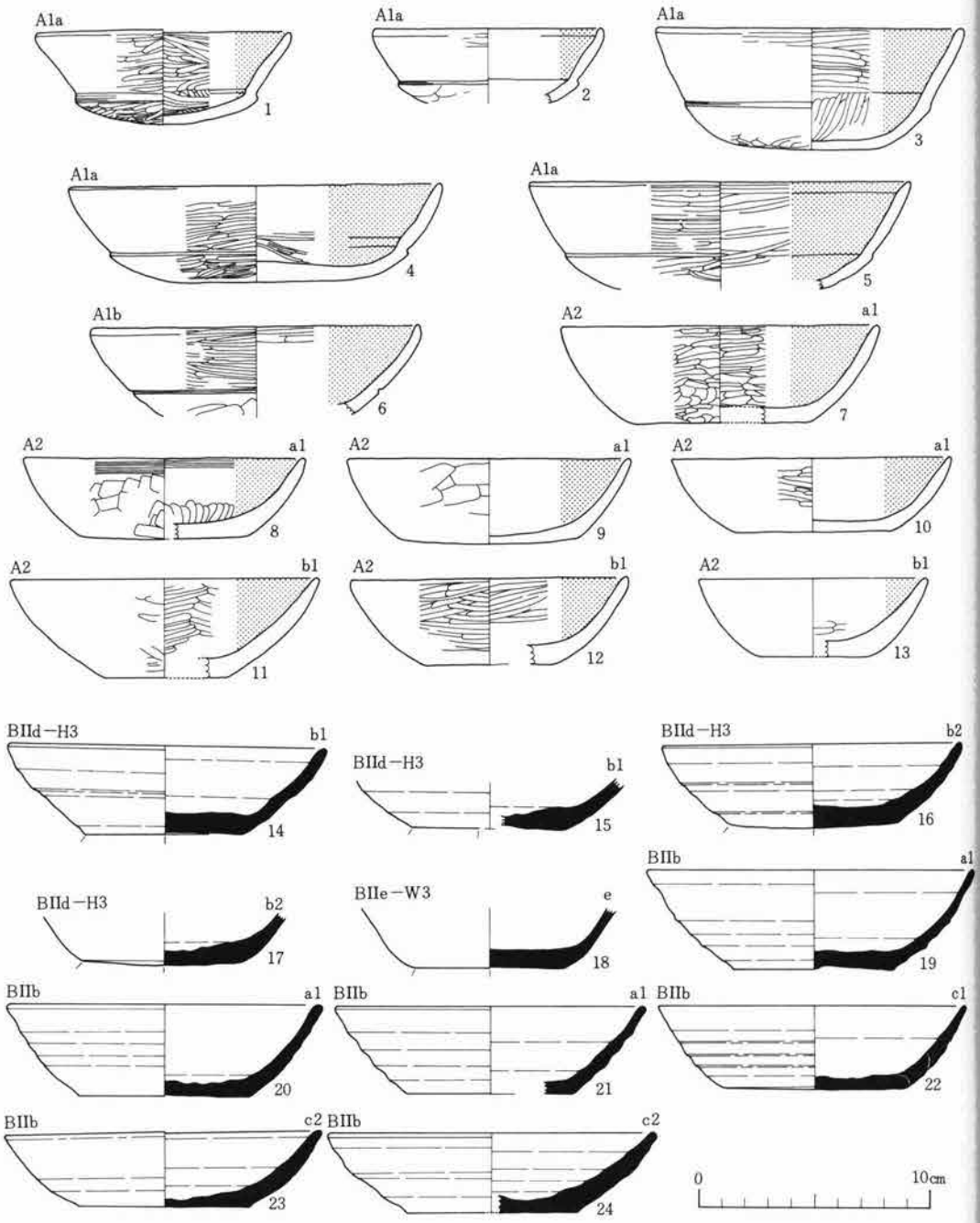
〈坏Ａ類〉 丸底のもの（Ａ１類：１～６）と平底のもの（Ａ２類：７～13）とがあり、前者は体部に段の巡るもの（A1a類：１～５）と沈線の巡るもの（A1ｂ類：６）とに分けられる。

A1a類の坏には、丸味の強い丸底のもの（１・２）、口径に比べて器高が高く、やや平底に近い丸底になるもの（3）、および口径に比べて器高が低く、平底風の丸底になるもの（４・５）とがあり、それぞれ内面には外面の段に対応するくびれをもつ。器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキによっている。

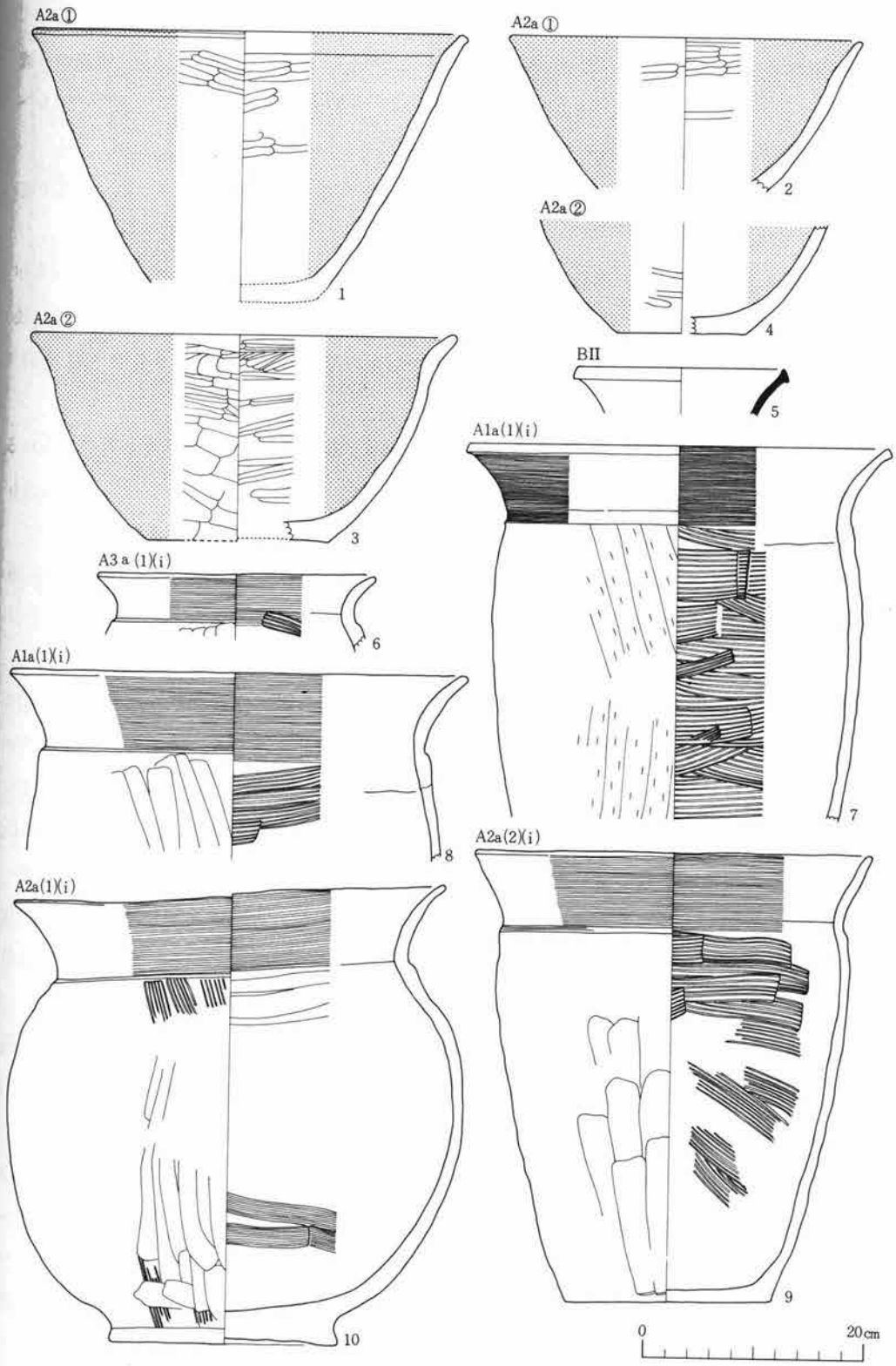
A1b類の坏は１点（６）のみで、体部が細い沈線で区画されている。内面にはくびれがみられない。体部は大きく外傾し、口縁端付近で僅かに内弯する。器面調整は底部外面がヘラケズリによるほかはヘラミガキが施されている。

Ａ２類の坏（７～13）は口径に比べて器高の低いものである。体部から口縁部までは直線的に外傾するもの（７～10）と底径が小さく大きく開いて外傾するもの（11～13）とがある。器面調整は内外面ともヘラミガキによっており、一部のものには前段階の調整であるヘラケズリや横ナデの痕跡を残すものもみられる。

〈坏ＢII類〉 （第38図14～24） 底部を回転ヘラ切りで切り離した後、再調整を施さないもの（ＢIIb類）と再調整を施すもの（ＢIId類）、および再調整のため底部の切り離し技法が不明のもの（ＢIIe類）とに分けられる。再調整の手法には手持ちヘラケズリによるもの（Ｈ手法）と回転ヘラケズリによるもの（Ｗ手法）とがある。



第38図　第11号住居跡　出土遺物（1）



第39図　第11号住居跡　出土遺物（2）

ＢIId類の坏（14～17）には、平底で体部が直線的に外傾するもの（14・15）と丸底風の平底で体部がややふくらみをもって外傾するもの（16・17）とがあり、ともに底部全面に手持ちヘラケズリが施されている（H_3手法）。

ＢIIe類の坏(18)は、底部全面に回転ヘラケズリが施されるもの（W_5手法）で、器高が高くて体部は直線的に立ちあがる。

ＢIIb類の坏（19～24）は、形態上の特徴によって、器高が普通で底径が大きなものと器高が低くて底径の大きなものとに分けられる。前者は体部が直線的に外傾するもの(19～21)で、後者は体部が直線的に外傾するもの(22)と体部がややふくらみをもって外傾するもの（23・24）とに細分される。

甕形土器（第39図）　甕はすべてＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属するものに限られる。

〈甕Ａ類〉（第39図７～９）器形の大小によって２分され、大形のもの（Ａ１類）と中形のもの（Ａ２類）がある。そのいずれも口径より器高が大きく、頸部に段を有するものである。

Ａ１類の甕（７・８）は、頸部に明瞭な段をもつもので、口縁部は単純に長く外反し、体部最大径を中央付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面が刷毛目となっている。

Ａ２類の甕(９)は、頸部の段がやや形式的なものになる。口縁部は直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつものである。器面調整はＡ１類の甕と共通する。底部外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

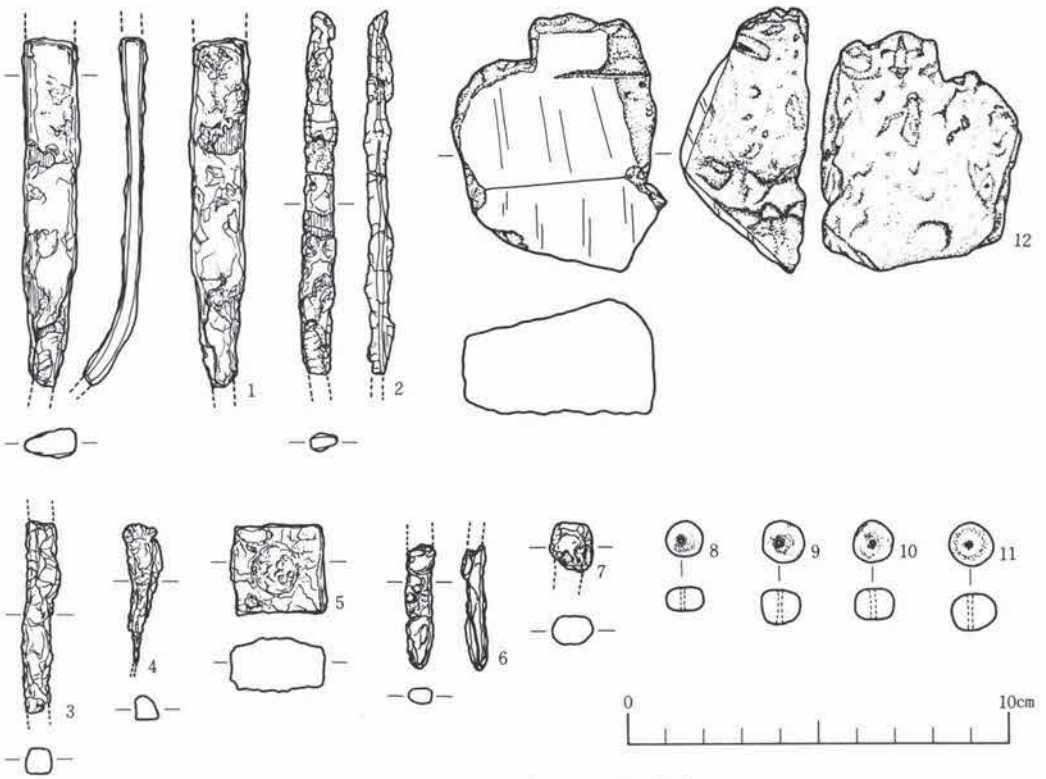
鉢形土器（第39図１～４）鉢はすべてＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものである。体部の形態上の特徴によって２分され、器高が高く、体部が直線的に外傾するもの（１・２）と、体部がややふくらみをもって外傾するもの（３・４）とがある。器面調整はいずれもが共通しており、体部より口縁部まで内外面とも丁寧なヘラミガキで整えている。底部を残すものには外面にヘラケズリの痕跡をとどめている。内外面に黒色処理が加えられている。

壺形土器（第39図）　壺にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢII類（ロクロ成形で還元炎焼成）とがある。

〈壺Ａ類〉（第39図６・10）中形のもの（Ａ２類）と小形のもの（Ａ３類）とがある。

Ａ２類の壺(10)は、頸部に明瞭な段をもつもので、口縁部は単純に長く外反する。体部はほぼ真球を呈し、最大径を中央付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目＋ヘラミガキ、内面が刷毛目＋ナデによっている。底部外面にはヘラケズリが施されている。

Ａ３類の壺(６)は、頸部に明瞭な段をもち、口縁部が長く外反するものである。体部最大径は中央付近にもつものと思われる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面がヘラミガキ、内面が刷毛目によっている。



第40図　第11号住居跡　出土遺物（3）

〈壺BⅡ類〉　（第39図5）　口縁部の細片である。小形のもので、器面にはロクロナデの痕跡のみをとどめている。

鉄製品（第40図1～7）　7点出土している。1は刀子の破片で、刃部端および茎の一部を欠く。茎は変形してかなり弯曲している。長さ9.2cm、身の最大幅1.5cm、背幅0.4cmを計る。2は細身の刀子で、茎と身の一部を欠く。刃部端は背に向かって丸くなっている。現存長は9.6cmで、身幅は中央付近で0.8cmを計る。3・4は細長い棒状のもので、断面形は四角形を呈する。角釘と思われる。3は両端を欠き、4は一方の先端を欠く。それぞれ現存長で5.1cm・3.6cmを計る。5は2.5×2.4cmの方形で、厚さ13cmを計る立方体である。銙帯、馬具等の飾金具と推定される。6・7は細長い棒状のもので、ともに一端を欠く破片である。現存長でそれぞれ3.3cm・1.3cmを計る。性格は不明であるが、6は釘となる可能性が強い。

土玉（等40図8～11）　4点出土している。いずれも上下にやや平坦な面をもつがほぼ球形を呈するものである。8は最大復径1.0cm、厚さ0.6cmで中央部に0.1cmの貫通孔をもつ。以下同様に9は1.1cm、0.9cm、0.1cm、10は1.1cm、0.8cm、0.1cm、11は1.2cm、1.0cm、0.1cmを計る。

砥石（第40図12）　不整形の石で、2面に使用痕が認められる。最大長6.7cm、最大幅5.4cmを計る。石質は淡緑色石質凝灰岩である。

第12号（ＤＪ50）住居跡

〔遺構確認面〕　当住居跡は粗掘の段階でIIa層を若干掘り下げたときには確認されていない。Ｇ区からＥ区にかけて遺構の検出が希薄であったため、再度、重機を使用して遺構の有無を調査しており、当住居はこの段階で確認された。したがって、IIa層はほとんど削平しており、地点によってはIIb層をも露出している。

〔保存状況〕　遺構の検出作業の段階で削平した部分を除いてほぼ原形をとどめている。

〔重複関係〕　当住居との重複遺構はみられない。

〔平面形・長軸方向〕　ほぼ正方形を呈する。長軸方向は東西にとって、Ｎ―87°―Ｗである。

〔規模〕　南北長で5.88ｍ・5.79ｍ、東西長が5.76ｍ・5.71ｍとなり、床面積は約33.06㎡である。

〔堆積土〕　遺構検出の段階で壁はほとんど削平されており、住居内堆積土は単一の層にまとめることができる。住居上部の堆積土の状況は不明である。

第１層：褐色の粘土質シルト層で、床面上の全域を覆う。緻密でかなりしまっている。木炭粒を少量混える。なお、壁沿いには壁の剥落土と思われるにぶい黄褐色土が分布する。

住居内の堆積土は粉状の緻密な堆積状況を示しており、自然的営力による堆積層と思われる。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度はきつい。前記のように壁は遺構検出の段階でかなりの部分が削平されており、構築時の壁高は不明である。現存部分で東壁が６～28㎝、西壁11～25㎝、南壁４～14㎝、北壁12～26㎝となっている。

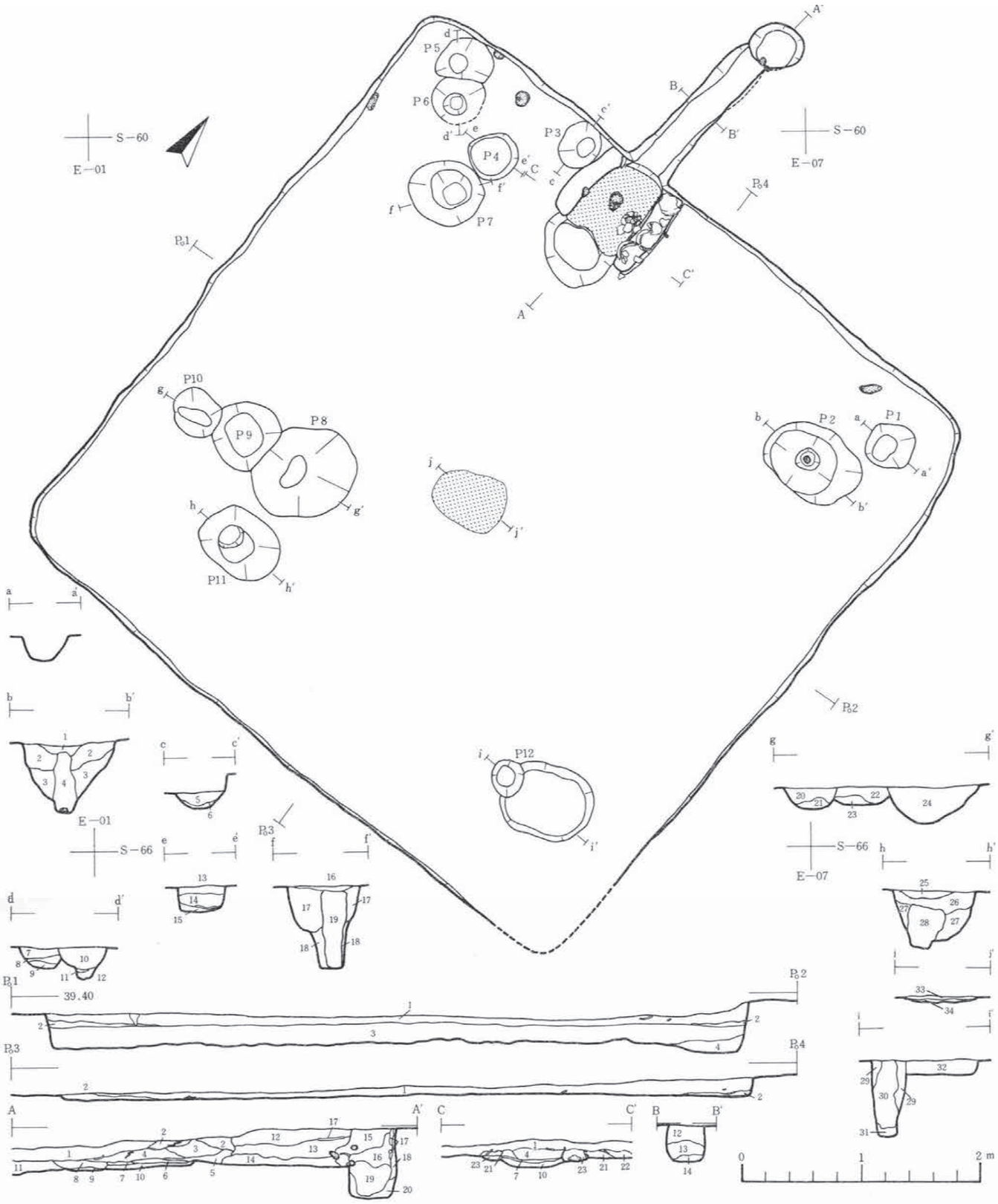
〔床〕　床は全体的に平坦な面をなしており、比較的かたい。床面上には大小13個のピットが掘られているほか、中央部には固い焼土遺構をもち、南西コーナー付近には埋甕がみられる。

なお、床面下を掘り下げたところ、９～19㎝の厚さをもつにぶい黄褐色の砂質シルトが検出された。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕　柱穴にはP_2、P_7、P_{11}、P_{12}の４個のピットがあてられる。P_{12}を除く３つのピットには掘り方を有し、いずれも明確な柱痕が確認されている。これら４個のピットを結ぶ線は南側にやや短い不整正方形(台形)を呈する。

〔カマド〕　北壁のやや西寄りに構築されている。袖の遺存状況は不良であるが、ほかの部位はほぼ原形をとどめている。主軸方向はＮ―7°―Ｅである。

燃焼部は119×56㎝の範囲で床面より６㎝ほど皿状に掘り下げてある。焚口の手前には大きさが65×46ｍで深さが８㎝のピットを持つ。灰等をかき出すためのものであろう。ほぼ中央には支脚として使用したと思われる石があり、その間が良く焼けている。袖部はにぶい黄褐色のシルト質土を素材として構築し、土器と川原石を芯材として併用している。土器(甕)は正位の状態に立てており、右袖内からは３個体分検出されている。左袖は遺存状況が不良で、まとま



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	褐 色(10Y R4/4)	粘土質シルト	少量の木炭粒を含む		6	褐 色(10Y R4/4)	砂質シルト	焼土粒・粘土粒を少量含む
〃	2	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	壁の剥落土	P 5	7	〃 (7.5Y R4/4)	シルト	粒～塊状の焼土を多量に含む
埋り方埋土	3	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	砂質シルト	塊状堆積		8	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	
	4	褐 色(10Y R4/6)	シルト	〃		9	暗 褐 色(10Y R3/4)	砂質シルト	
					P 6	10	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む
カマド	1			住居内堆積土No.1層と同じ		11	〃 (10Y R4/6)	シルト	ややねばりあり
	2	褐 色(7.5Y R4/3)	シルト	焼土粒を少量含む		12			No.9層と同じ
	3	褐 色(7.5Y R4/3)	シルト	粒～塊状の焼土をかなり含む	P 4	13	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒を少量含む
	4	〃 (7.5Y R4/4)	シルト	塊状の焼土を含む		14	〃 (〃)	シルト	緻密、多量の焼土粒を含む
	5	〃 (7.5Y R4/6)	粘土質シルト	焼土粒をかなり含む		15	赤 褐 色(5Y R4/6)	シルト	焼土
	6	明赤褐色(5Y R5/6)	シルト	火床部（やや焼きが弱い）	P 7	16			No.1層と同じ
	7	赤 褐 色(2.5Y R4/6)	シルト	火床部		17			No.2層 〃
	8	暗赤褐色(2.5Y R3/4)	シルト	焼土塊、木炭片・灰の混合土		18			No.3層 〃
	9	極暗赤褐色(2.5Y R2/3)	粘土質シルト	No.8層に比べて灰が多い		19	褐 色(10Y R4/3)	シルト	柱痕、ぼさぼさしている
	10	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	燃焼部掘り方埋土	P 10	20	〃 (10Y R4/4)	シルト	焼土粒を少量含む
	11			住居内堆積土No.3層と同じ		21	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	
	12	褐 色(10Y R4/4)	シルト	焼土粒を少量含む	P 9	22	〃 (〃)	シルト	
	13	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	焼土粒をかなり含む		23	暗 褐 色(10Y R3/4)	砂質シルト	
	14	褐 色(7.5Y R4/4)	粘土質シルト	木炭粒・灰を含む	P 8	24			No.20層と同じ
	15	〃 (10Y R4/4)	シルト	焼土粒をかなり含む	P 11	25			No.1層と同じ
	16	〃 (7.5Y R4/4)	シルト	粒～塊状の焼土をかなり含む		26			No.2層と同じ
	17	暗赤褐色(2.5Y R3/4)	シルト	かたく焼けた焼土		27			No.3層と同じ
	18	にぶい褐色(7.5Y R5/4)	シルト	木炭粒・焼土粒を含む		28			No.4層と同じ
	19	極暗褐色(7.5Y R2/3)	シルト	ぼさぼさしている、焼土塊・灰を含	P 12	29			No.3層と同じ
	20	褐 色(7.5Y R4/4)	砂質シルト	木炭粒・焼土粒を少量含む		30	褐 色(10Y R4/4)	シルト	柱痕、グライ化した粒土塊を含む
	21	褐 色(10Y R4/4)	シルト	袖の崩壊土、焼土粒を含む		31	暗 褐 色(10Y R3/4)	粘土質シルト	
	22			住居内堆積土No.2層と同じ		32	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	塊状に堆積
	23	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	袖部	焼土	33	明赤褐色(2.5Y R5/8)	シルト	
					〃	34	赤 褐 色(5Y R4/6)	シルト	
P 2	1	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	微量の木炭粒を含む					
	2	〃 (10Y R4/3)	シルト	塊状堆積・明褐色粘土を含む					
	3	褐 色(10Y R4/4)	シルト	〃 細砂・粘土を含む					
	4	〃 (〃)	シルト	柱痕、粘土塊を少量含む					
P 3	5	〃 (〃)	シルト	焼土粒・木炭粒を多く含む					

第41図　第12号住居跡

った土器は発見されていない。

煙道部は燃焼部底面と際立った段差をもたずに接続する。煙道部底面はほぼ水平に煙出部へ移行しており、その長さは約130cmである。煙出部には大きさが45×40cm、深さ60cmのピットが掘り込まれており、煙道端との比高は約27cmになる。ピット内には小さな礫が入っている。

最後に、燃焼部底面を掘り下げたところ、厚さ約6cmの褐色土が認められた。これは、床面下の掘り方埋土とは異なっており、カマドを意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴ピット〕 貯蔵穴と推定できるピットは検出されていない。

〔その他の施設〕 中央部床面上に大きさが62×45cm、厚さ6cmの固い焼土面がある。おそらく炉(地床炉)として使われたものであろう。

また、南西コーナー付近には埋甕がある。土器の底部は床面下8cmのところにあるが、埋甕のための掘り方は検出されていない。若干掘り凹めて土器を据えたものと思われる。用途は不明である。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器・鉄製品・砥石がある。土器は坏・高台付坏・甕壺の各器種がある。住居の北壁付近、カマドの周囲より出土したものが多い。

坏形土器（第42図） 坏にはA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成)、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）およびBⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈坏A類〉（第42図7～21） A類の坏はすべて平底（A2類)のものである。底部より口縁部に至る形態上の特徴によりいくつかに細分される。器高が低くて底径の小さなものには、体部がややふくらみをもって外傾するもの(14)、体部がややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがるもの(1)、体部がややふくらみをもって外傾し、口縁端で外反するもの（16～21)、および底部との境にくびれをもち、ややふくらみをもって外傾するもの(10)などがある。器高が低くて底径の大きなものには、体部が直線的に外傾するもの(15)と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(12)とがある。器高が普通で底径が大きなものには、体部が直線的に外傾するもの(8)と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(9)とがある。器高が普通で底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(11)である。また、器高が高くて底径が小さなものには、体部が直線的に立ちあがるもの(13)がある。外面の器面調整は口縁部が横ナデで共通する。体部はヘラケズリによるもの（8～10・12～15・17・19・20）とヘラミガキによるもの(7・11・16・18・21)に分けられ、17には前段階の調整である刷毛目痕が観察される。底部はヘラミガキされるもの(21)もあるが、他はヘラケズリによっている。内面調整は、全面に丁寧なヘラミガキが施される。前段階の調整である横ナデの痕跡をとどめるもの(10)もある。

〈坏BⅠ類〉（第42図3・4） BⅠ類の坏は、底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を

施すもの（ＢＩc類）である。再調整の手法は手持ちヘラケズリによっており、それを体部下端より底部全面に施すもの(３)と底部全面に施すもの(４)とに分けられる。いずれも、器高が低くて底径の大きなもので、体部はややふくらみをもって外傾する。

〈坏ＢII類〉（第42図１・２）　ＢII類の坏は底部を残す破片をも含め糸切り無調整のもの（ＢIIa類）に限られる。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(１)と器高が高くて底径が大きく、体部が直線的に立ちあがるもの(２)とがある。

高台付坏形土器（第42図６）　高台付坏はＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理に属するものである。高台部分は長く外傾し、先端に平坦部分をもたないものである。底部に菊花状のヘラ刻みを施し周縁をロクロ調整している。坏部は、器高が高くて口縁部までやや丸味をもって立ちあがるものである。

なお、第42図５は底部を欠損しているが、高台付坏の破片と思われる。

甕形土器（第43図、第44図）　甕はＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものである。

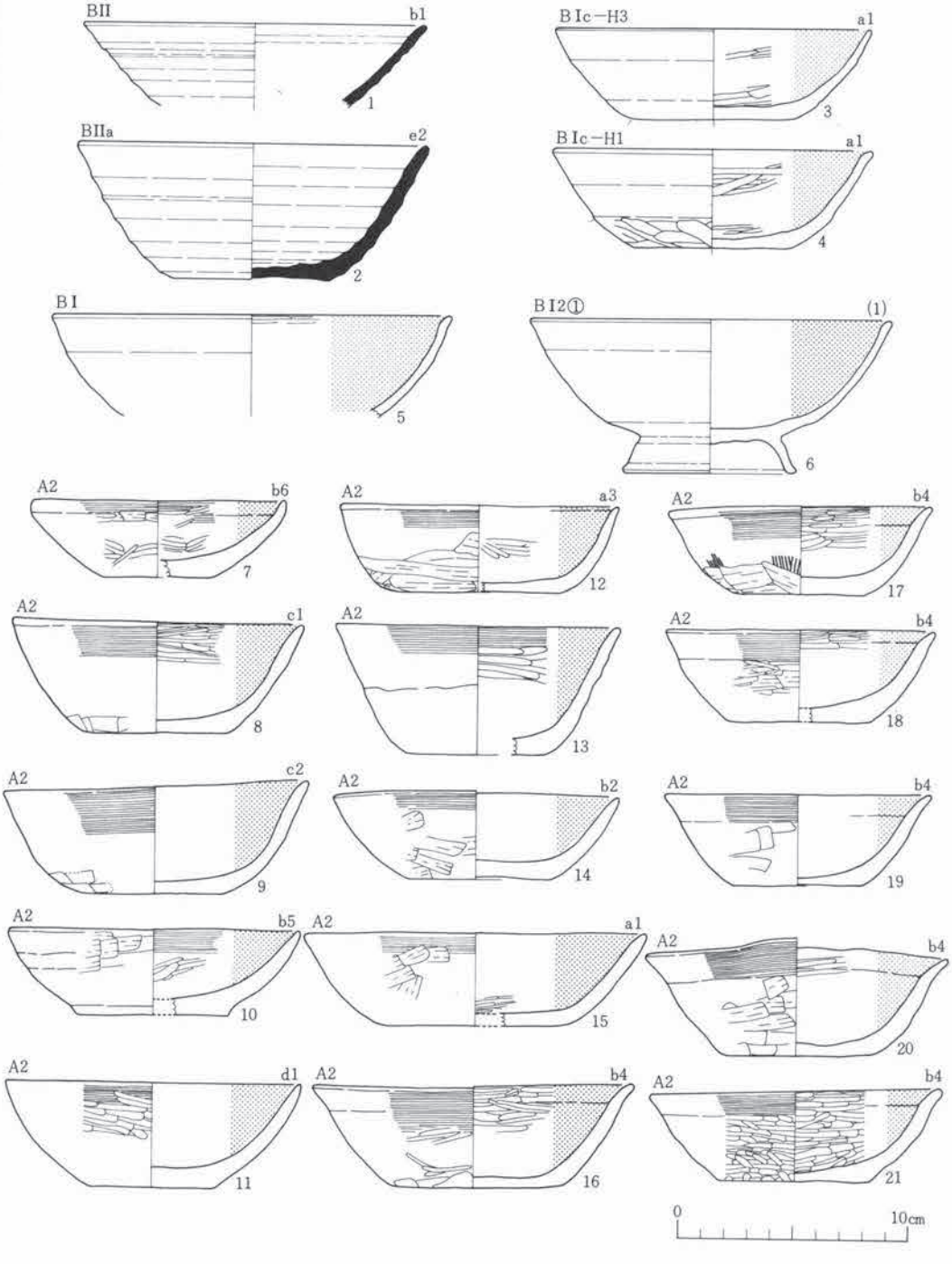
〈甕Ａ類〉　Ａ類の甕は器形の大小により３分（Ａ１類・Ａ２類・Ａ３類）される。

Ａ１類の甕（第43図１～３、第44図１）は、単純に長く外反する口縁部をもつ長胴形のものである。頸部に明瞭な段を有するもの（第43図１、第44図１）と頸部に段をもたないもの（第43図２・３）とに分けられる。体部最大径の位置にも違いがみられ、中央付近にもつもの（第43図１・３）と体部の上端付近にもつもの（第43図２、第44図１）とがある。器面調整は第43図２を除き口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目＋ヘラケズリ、体部内面が刷毛目によっている。底部を残すものには外面にヘラケズリを施している。第43図２は体部外面がヘラミガキに近い軽いヘラケズリ、内面がヘラナデで調整している。

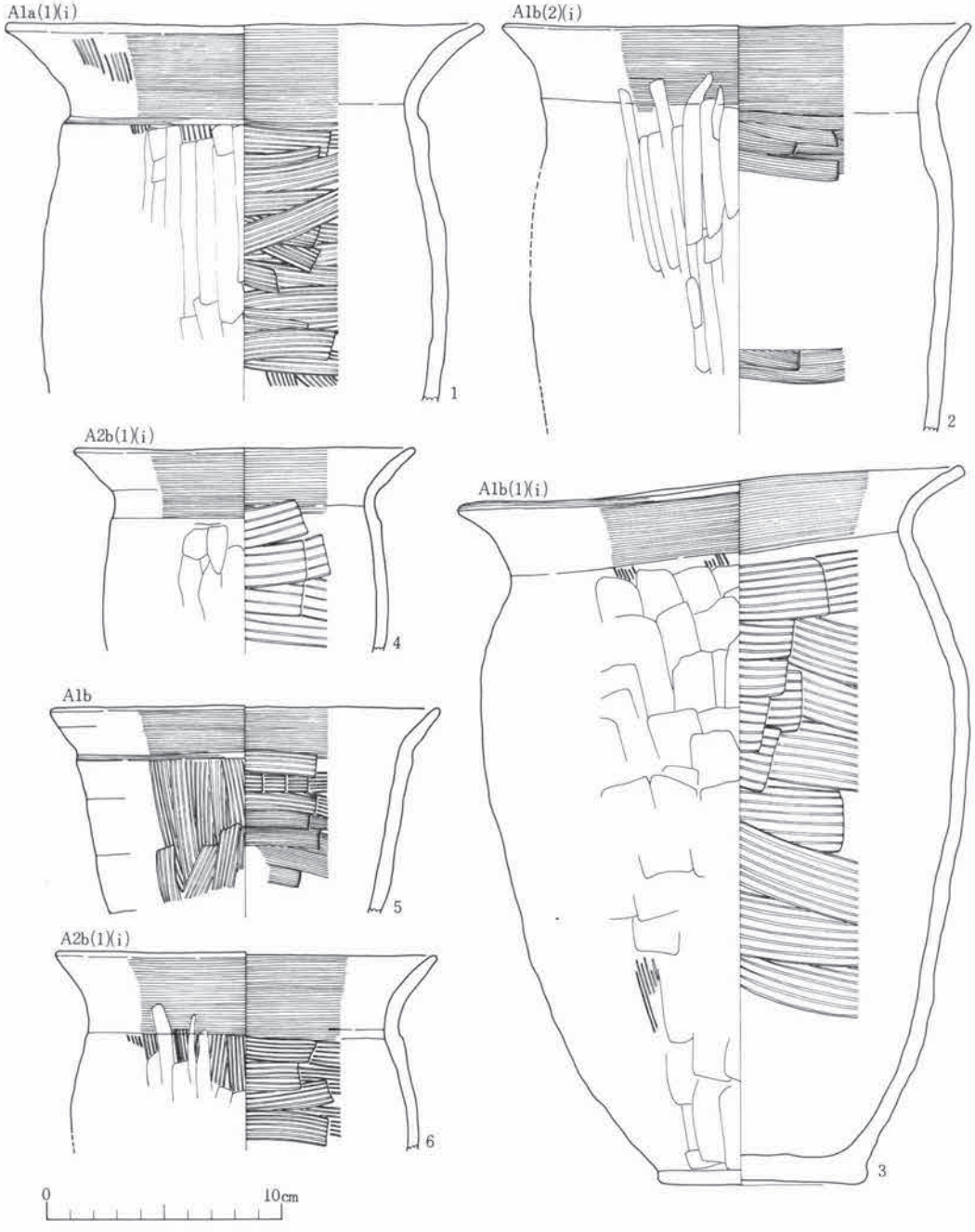
Ａ２類の甕（第43図４・６、第44図３）は口縁部の形態、体部最大径の位置等によって細分され、口縁部が長く外反し、体部最大径を中央付近にもつもの（第43図４・６）と直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつもの（第44図３）とに分けられる。いずれも頸部には段をもたない。器面調整は口縁部は横ナデで共通するが、体部外面はヘラケズリによるもの（第43図４、第44図３）と刷毛目＋ヘラケズリによるもの（第43図６）とに分けられ、体部内面は刷毛目によるもの（第43図４・６）、ヘラナデによるもの（第44図３）とに分けられる。

Ａ３類の甕（第44図６・７）は、口縁部が直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつもの(６)と口縁部が長く外反し体部最大径を中央付近にもつもの(７)とに分けられる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリ(６)、ないしは刷毛目(７)、体部内面がヘラナデによっている。

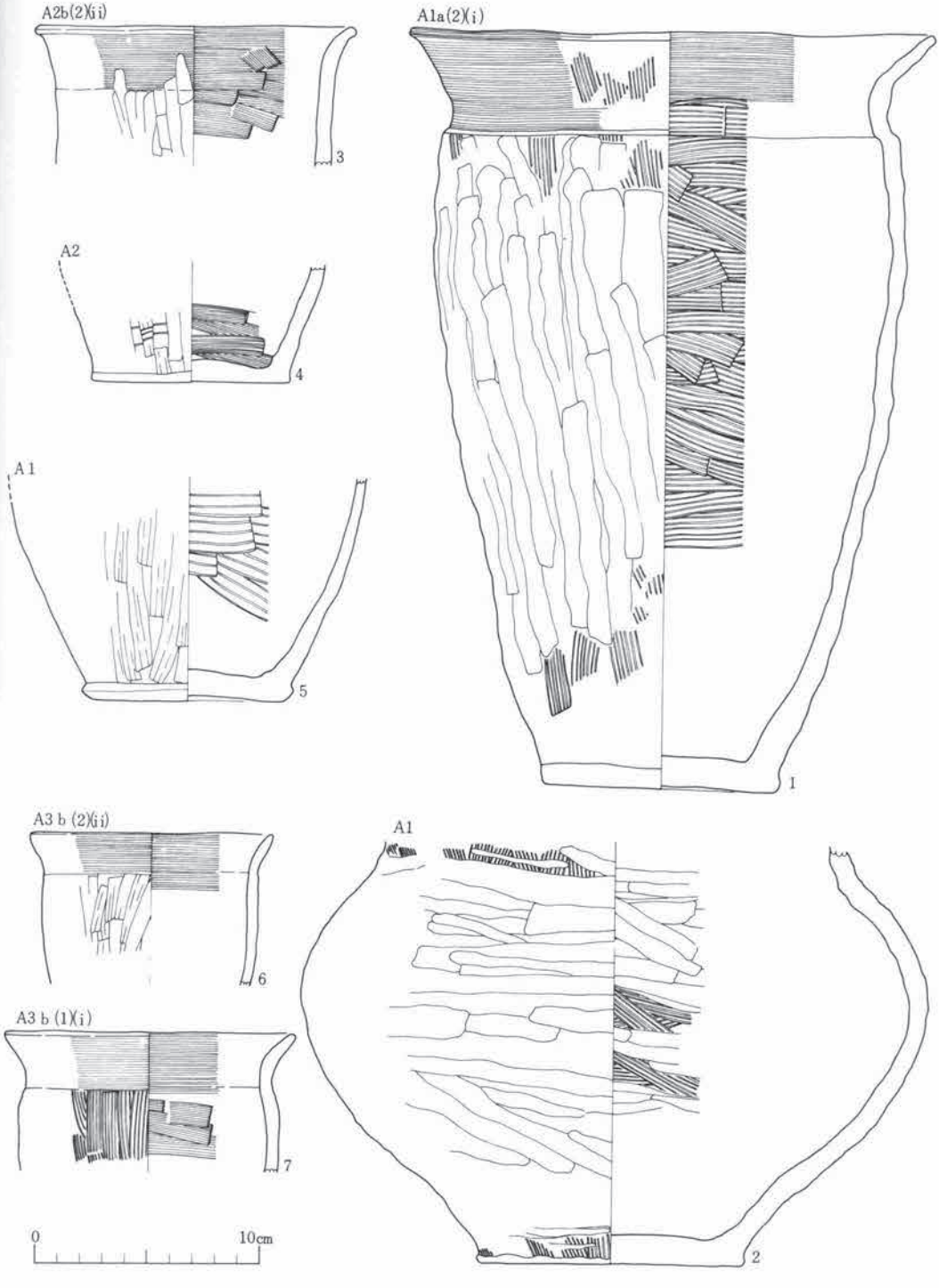
なお、体部下半より底部にかけての破片（第44図４・５）がある。４はＡ２類、５はＡ１類に属するものと思われる。ともに体部最大径を中央付近にもつものである。底部外面は４には



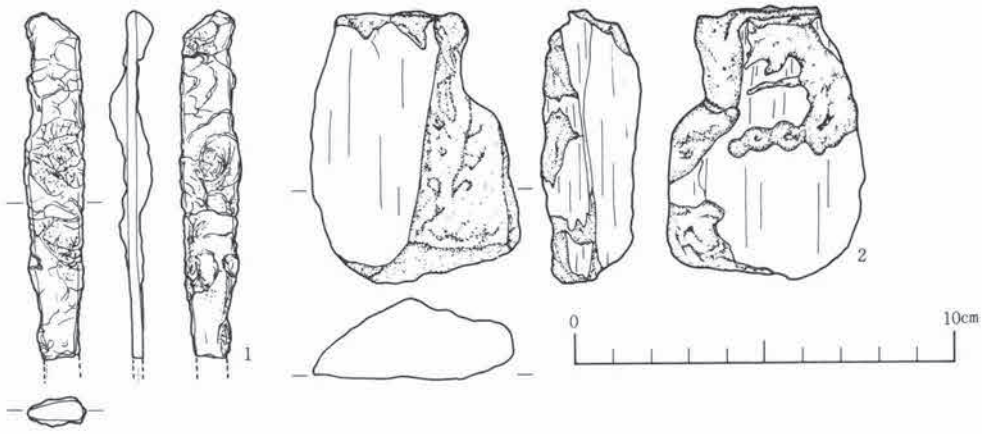
第42図　第12号住居跡　出土遺物（Ⅰ）



第43図　第12号住居跡　出土遺物（2）



第44図　第12号住居跡　出土遺物（3）



第45図　第12号住居跡　出土遺物（４）

ラケズリ、５には木葉痕が観察される。

壺形土器（第44図２）　壺はＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に類別されるものが１点出土している。体部の形状が横長の球形を呈する大形のもので、体部最大径は中央付近にある。器面調整は内外両面とも体部が刷毛目＋粗いヘラミガキによっている。底部外面にはヘラケズリを施している。

鉢形土器（第43図５）　Ａ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属すものが１点出土している。口縁部がゆるく外反し、体部はほとんど脹まずに底部へと移行し、体部最大径を上端付近にもつ。頸部にはやや形式的な段を有する。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目、体部内面がヘラナデ＋刷毛目によっている。

鉄製品（第45図１）　刀子の破片である。茎部および刃一部の部を欠く。現存長で9.2cm、幅1.5cm±、背幅0.6cmを計る。

砥石（第45図２）　不整形の自然石を砥石としている。横断面形は５角形を呈し、２面に砥面がみられる。石質は淡緑色石質凝灰岩である。

第13号（ＥＢ06）住居跡

〔遺構確認面〕　当住居跡も第12号住居跡と同様に、粗掘の段階ではその存在を確認できなかった。重機による再調査の段階でIIa層をかなり掘り下げて遺構を確認している。遺構の掘込面は不明である。

〔保存状況〕　検出作業において上部はかなり削平をうけている。また、住居の西側は水田となっており、床面ぎりぎりまで破壊されている。西壁のほとんどが遺存していない。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は南北に長い長方形を呈する。長軸方向はN－17°30′－Wである。

〔規模〕 長軸(南北)長で6.07m・5.95m、短軸(東西)長が5.25m・5.22mとなり、床面積は31.06㎡である。

〔堆積土〕 遺存する遺構内堆積土は基本的には以下の3層に大別される。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層である。部分的に上部を薄く覆う。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。2層に細分され、住居の全域に広く分布する。木炭粒・焼土粒を多量に含み、遺物をかなり包含する。

第3層：褐色の粘土質シルト層である。床面の上部全域を厚く覆う。粉状の緻密な堆積状況を示す。木炭粒・焼土粒のほか遺物を多量に含む。

以上の3層に大別された堆積土は、すべて自然堆積層として認定される。

〔壁〕 検出作業によりかなり削損をうけている。地山を壁としており、床面より急角度で立ちあがる。

現存する壁高は東壁で4～14cm、西壁0～5cm、南壁10～17cm、北壁8～24cmとなり、場所によってかなりのばらつきがみられる。

〔床〕 床はほぼ平坦な面をなしている。壁沿いが若干低くなるが、周溝等の施設は検出されていない。床面上からは大小15個のピットが発見されている。

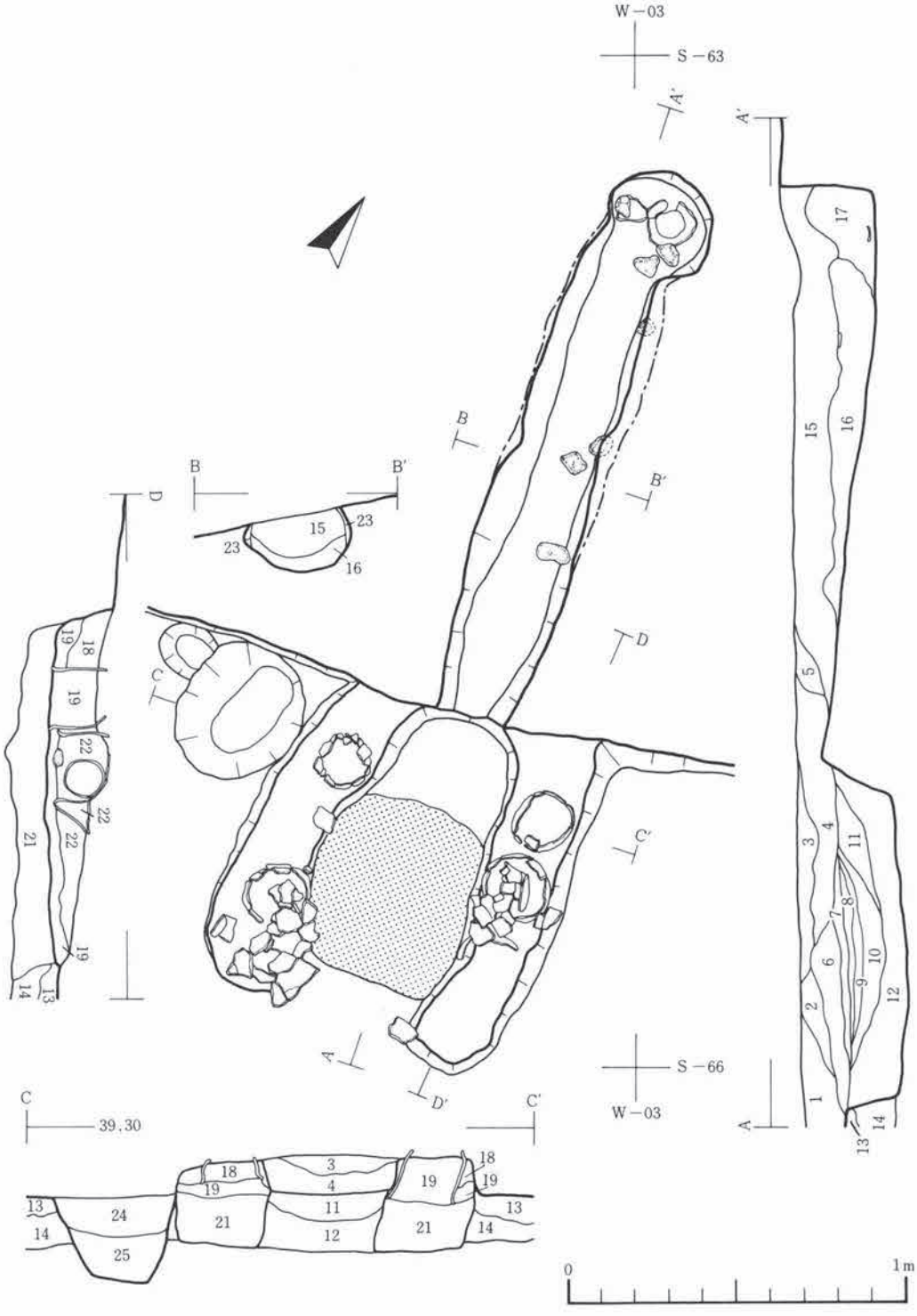
最後に床面を掘り下げたところ、3層に分けられる人為的な堆積層があらわれた。掘り方の埋土と思われる。掘り方は床面下約15cmの深さまで掘られている。破壊されている西側の範囲は掘り方のラインに沿わせて推定した。

〔柱穴〕 柱穴は4個確認されている。P_1、P_9、P_{10}、P_{13}の4個であり、それぞれ規模に斉一性が認められ、それらを結んだ線は1辺約4mの整った正方形を呈する。柱穴の位置は西に偏しており、4本のうち2本は西壁に近接している。

〔カマド〕 北壁のやや西寄りに構築されている。西側の半分が水田耕作により若干削平されているがほぼ原形をとどめている。主軸方向は住居の長軸方向と一致し、N－17°30′－Wである。

燃焼部は床面を若干掘り凹めており、97×48cmの規模をもつ。燃焼部内には54×48cmの範囲で厚さ4～6cmの固い焼土面が認められる。支脚は発見されていない。袖は地山のにぶい黄褐色土を基本とするシルト質土を積みあげて構築しており、土器(甕)が芯材として使用されている。土器は甕を倒位の状態に据えられており、左右の袖とも3個体分づつ検出されている。また、袖の内からは小さな川原石も発見されているが芯材として意識したものであるかは不明である。

煙道部は燃焼部底面より4cmほどの段差をもつ奥壁に作られている。煙道部の長さは約143cm



第46図　第13号住居跡（Ⅰ）

	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む	P 3	8	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒をかなり含む
第2層	2	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む	〃	9	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む
	3	〃 (10YR4/6)	シルト	地山土を塊状に含む	〃	10	〃 (〃)	〃	〃 少量含む
第3層	4	〃 (10YR4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を多量に含む、緻密	P 2	5	褐色(10YR4/4)	シルト	〃 少量含む
埋り方埋土	5	〃 (10YR4/4)	シルト	塊状堆積	〃	6	〃 (〃)	〃	やや砂分が強い
〃	6	暗褐色(10YR4/3)	シルト	〃	P 5	11	〃 (7.5YR4/6)	〃	塊状の焼土・木炭片を含む
〃	7	〃 (〃)	砂質シルト	〃	〃	12	暗褐色(10YR3/4)	〃	
					P 4	13	褐色(10YR4/4)	〃	
カマド(P12)	1			住居内堆積土No.4層	〃	14	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	塊状堆積
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	少量の焼土粒を含む	P 8	15	褐色(10YR4/4)	〃	
	3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	〃	〃	16	極暗赤褐色(5YR2/4)	〃	焼土を塊状に含む
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	塊状の焼土をかなり含む	〃	17	褐色(7.5YR4/4)	〃	焼土粒を少量含む
	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ぼさぼさしている	〃	18	〃 (10YR4/4)	〃	やや砂分が強い
	6	褐色(10YR4/4)	シルト	塊状の焼土が多量に入る	〃	19	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	焼土塊を含み、ぼさぼさしている
	7	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	灰を含む、ねばりがある	〃	20	暗赤褐色(5YR3/4)	〃	焼土
	8	橙色(2.5YR6/6)	シルト	ぼろぼろした塊状の焼土	〃	21	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	
	9	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部	P 9	22			No.1層と同じ
	10	にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	シルト	熱の浸透部	〃	23			No.2 〃
	11	暗褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒・地山土塊を多量に含む	〃	24			No.3 〃
	12	〃 (〃)	砂質シルト	〃 を少量含む	P 10	25			No.1層と同じ
	13			住居内堆積土No.5層と同じ	〃	26			No.2 〃
	14			〃 No.6層と同じ	〃	27			No.3 〃
	15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粒～塊状の焼土をかなり含む	P 11	28	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒をかなり含む
	16	にぶい赤褐色(5YR4/3)	粘土質シルト	多量の焼土塊と灰を含む		29	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	17	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	塊状のかたい焼土を多く含む		30	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	塊状の焼土を含む
	18	褐色(10YR4/4)	シルト	やや砂分が強い	P 12	31	褐色(10YR4/4)	シルト	
	19	〃 (〃)	シルト	非常に緻密	〃	32	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	
	20	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土	P 14	33			No.1層と同じ
	21	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	固化している		34	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	22	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を含み、やわらかい	P 14	35	褐色(10YR4/4)	〃	木炭粒を少量含む
	23	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	焼土	〃	36	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	
P 6	24	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む	〃	37	褐色(10YR4/4)	〃	粒～塊状の焼土を多量に含む
	25	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土・木炭・灰を含む	P 13	38			No.1層と同じ
					〃	39	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	
P 1	1	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒を少量含む	〃	40	褐色(10YR4/6)	シルト	
〃	2	〃 (〃)	〃	ややぼさぼさしている	〃	41	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	緻密でかたい
〃	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	柱痕、ぼさぼさしている	〃	42			No.3層と同じ
P 2	4			No.1層と同じ	P 15	43	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭粒・焼土粒をかなり含む
P 3	7	褐色(10YR4/4)	シルト	緻密で混入物なし	〃	44	褐色(10YR4/4)	〃	

第47図　第13号住居跡（2）

になり、底面は煙出部に向かって下方へ緩く傾斜している。煙出部には大きさが34×29cmで、深さ29cmのピットが掘られており、煙道端とは比高をもたずになめらかに接続する。ピット内からは小さな川原石、土器(甕の底部)が発見されている。

最後に燃焼部を掘り下げたところ、床面下の掘り方埋土とは異なるにぶい黄褐色土が検出された。燃焼部を意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と推定されるようなピットは発見されていない。

〔出土遺跡〕 出土遺物は多種におよび、土器・鉄製品・小形手捏土器・紡錘車・土玉・砥石などがある。土器には坏・甕・壺・鉢・蓋などの器種がある。カマド周辺および北壁際よりまとまって出土している。

坏形土器（第48図） 坏にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものとＢII類（ロクロ成形で還元炎焼成）に属するものとがある。

〈坏Ａ類〉（第48図１～18） Ａ類の坏は底部が平底のもの（Ａ２類）に限られる。底部から口縁部に至る形態上の特徴によりいくつかに細分される。器高が低くて底径の小さなものには、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（３・４）、体部がややふくらみをもって外傾するもの（５～８）、体部がやや丸味をもって外傾するもの（９～11）、ややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがるもの(14)などがある。器高が低くて底径の大きなものには、ややふくらみをもって外傾するもの(12)とややふくらみをもって立ちあがるもの(13)とがある。器高が普通で底径の小さなものには、体部が底部との境にくびれをもち大きく開いて直線的に外傾するもの（１・２）と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの（15～17）とがある。そのほか、器高が普通で底径が大きく、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(18)もある。器面調整は外面は口縁部が横ナデ、体部が刷毛目＋ヘラミガキによるもの（１～４・９）、体部より口縁部までヘラミガキによるもの（７・11・13）、口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキによるもの（５・10・12・14）、口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリによるもの（６）、口縁部が横ナデ、体部が刷毛目＋ヘラケズリによるもの（８）などに分けられる。底部にはヘラケズリが施されている。内面調整は口縁部に横ナデを施し、体部にヘラミガキを加えるもの（１～５・９・10・12・16）と全面にヘラミガキを施すものとに分けられる。

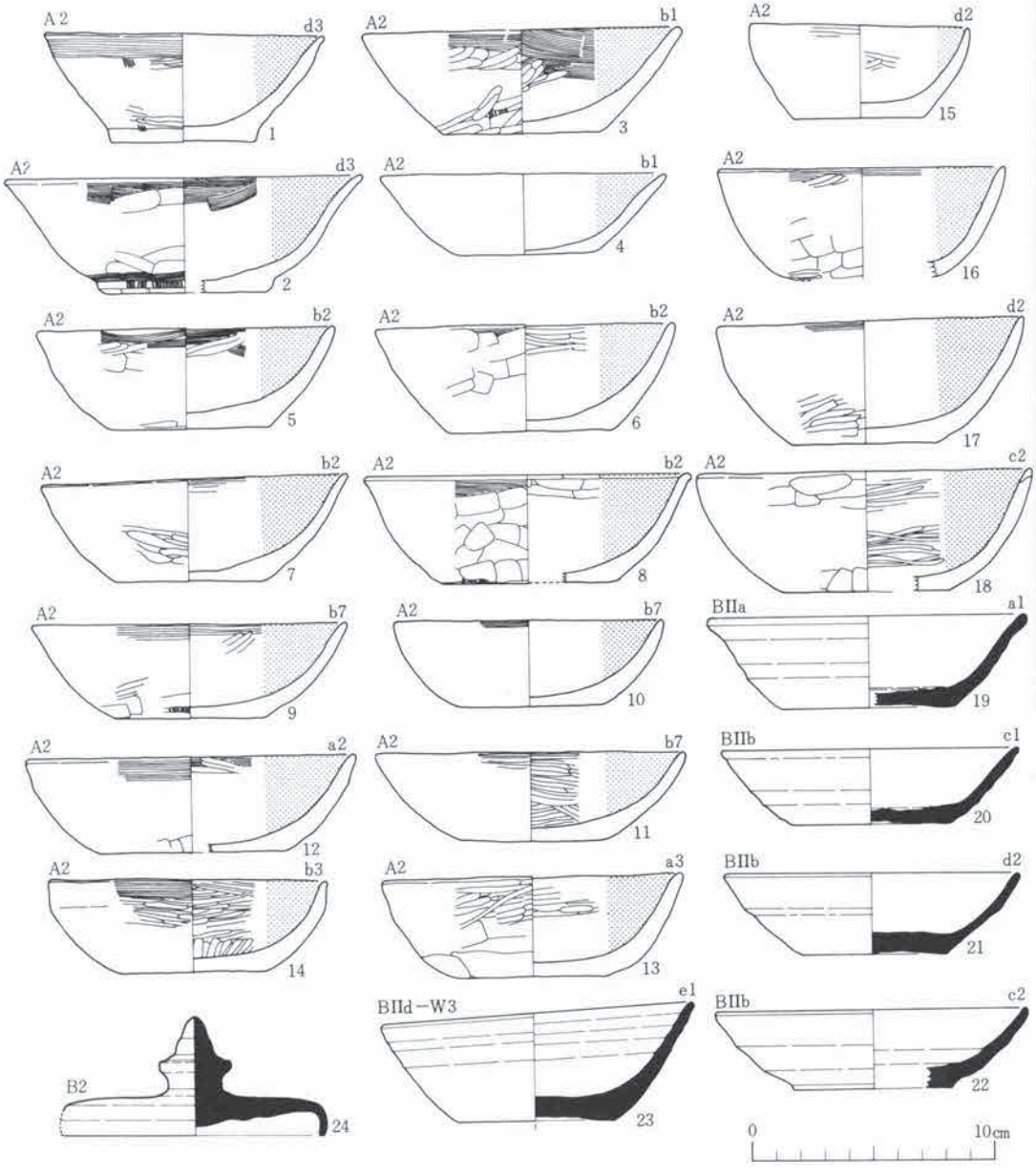
〈坏ＢII類〉（第48図19～23） ＢII類の坏は、底部の切り離し技法、および再調整の有無によって細分され、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施さないもの（ＢIIa類）、底部を回転ヘラ切りで切り離し、再調整を施さないもの（ＢIIb類）、底部を回転ヘラ切りで切り離し、再調整を施すもの（ＢIId類）などがある。

ＢIIa類の坏(14)は、器高、底径とも普通で、体部が直線的に外傾するものである。

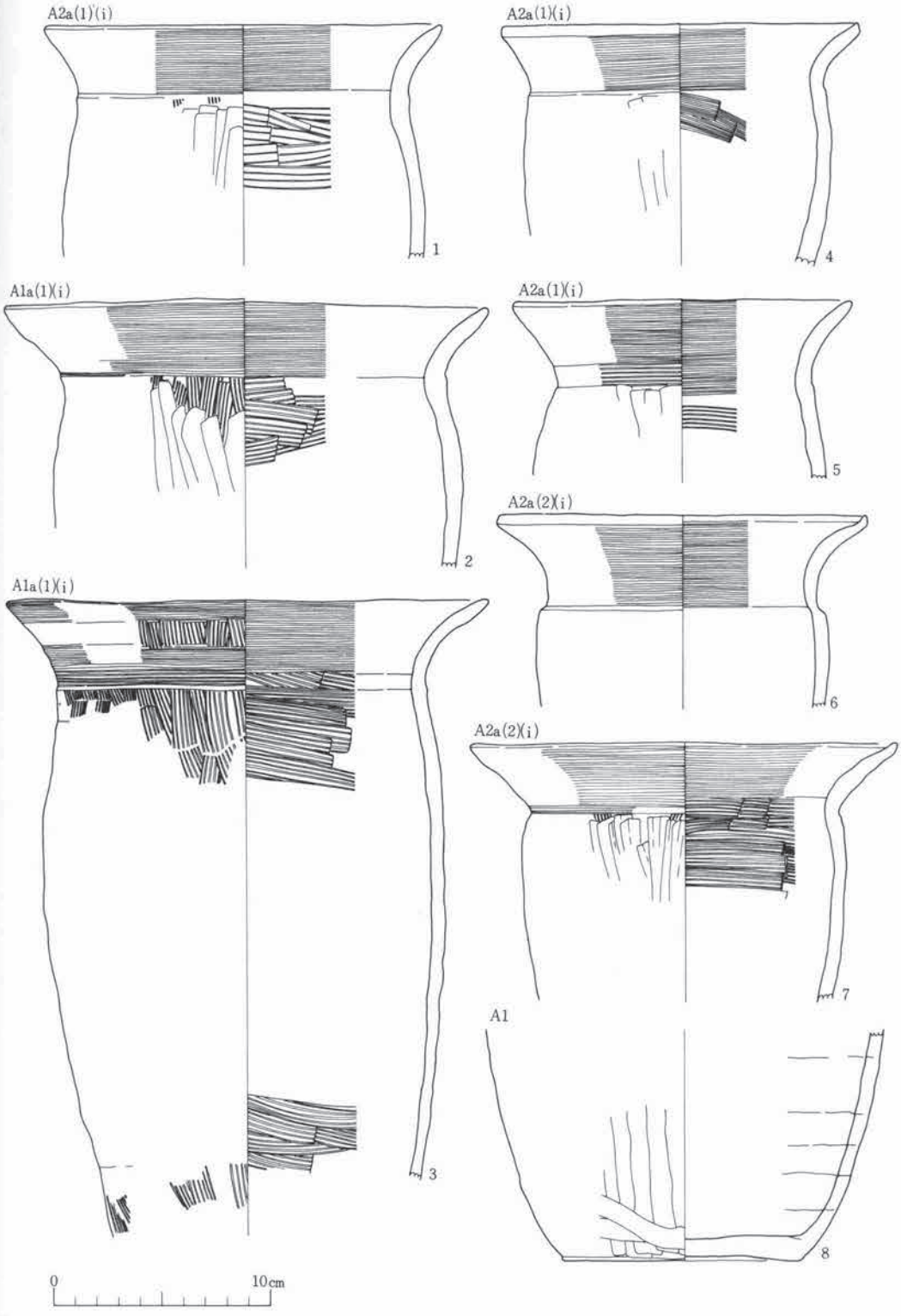
ＢIIb類の坏（20～22）はすべて器高の低いものである。底径が大きく体部が直線的に外傾

するもの(20)と底径が大きく体部がややふくらみをもって外傾するもの(22)、および底径が小さく体部がややふくらみをもって外傾するもの(21)などに分けられる。

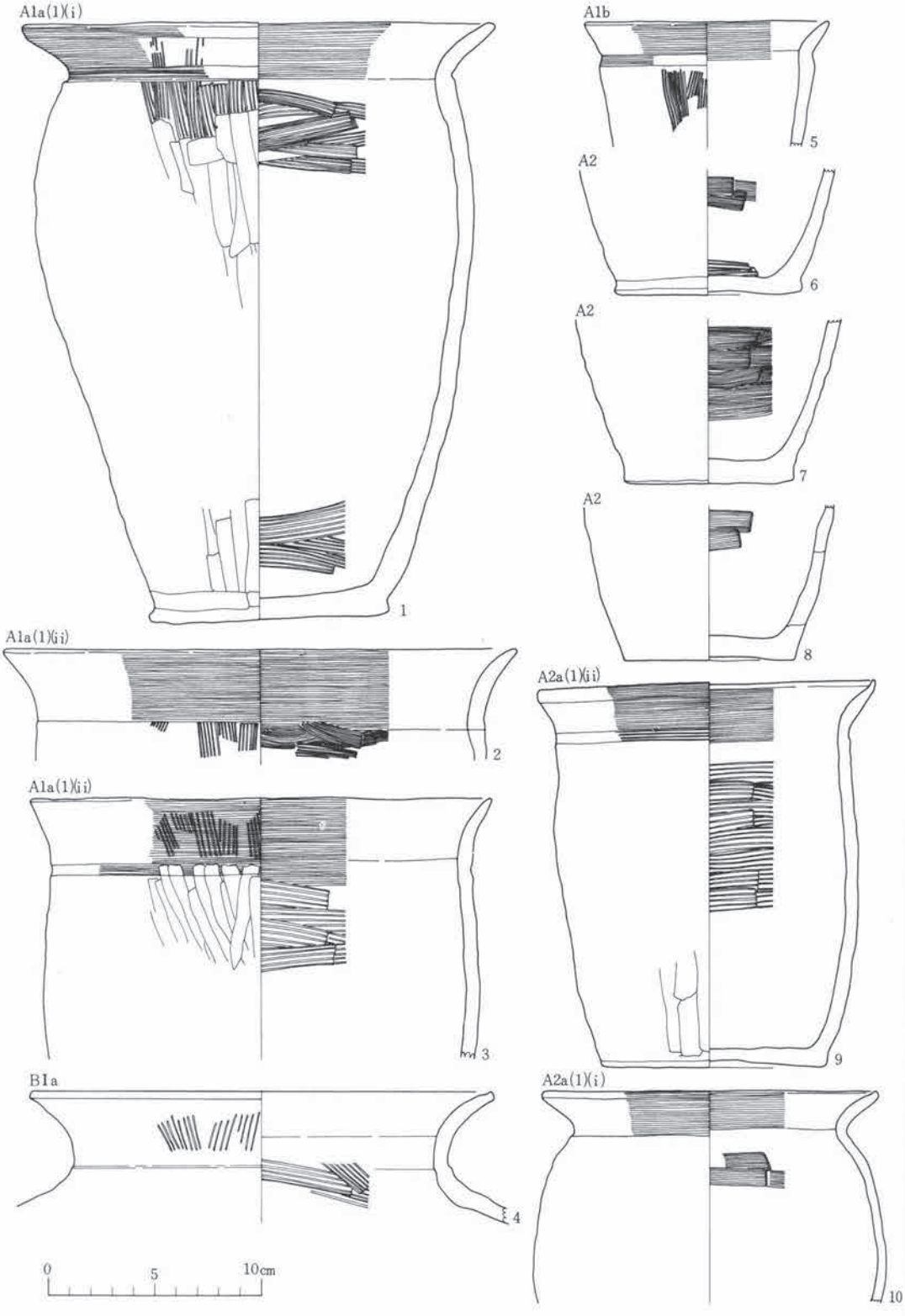
B IId類の坏(23)は、器高が高くて底径の大きなもので、体部は直線的に立ちあがる。底部全面に回転ヘラケズリを施している（B IId類—W_3手法）。



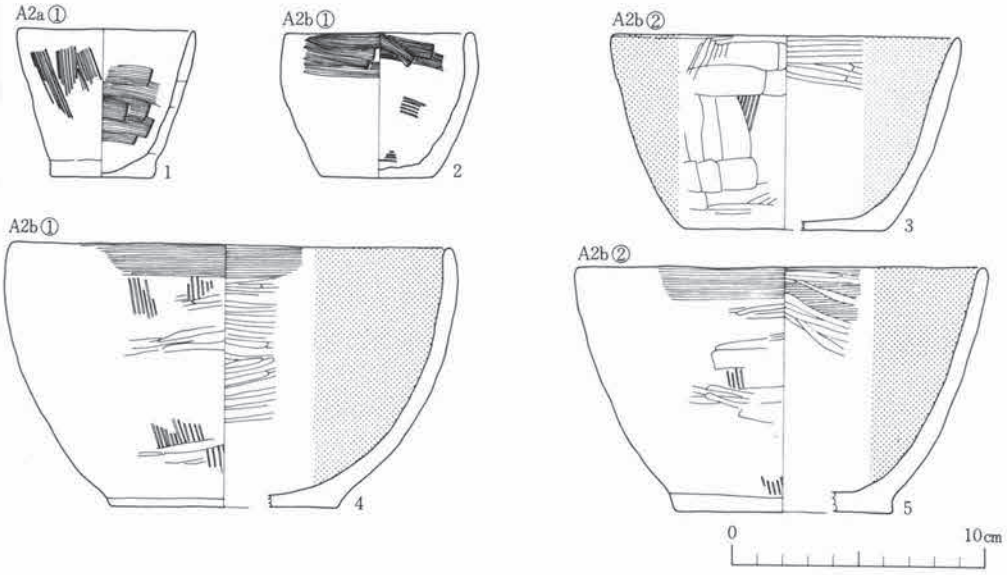
第48図　第13号住居跡　出土遺物（Ⅰ）



第49図　第13号住居跡　出土遺物（２）



第50図　第13号住居跡　出土遺物（3）



第51図　第13号住居跡　出土遺物（4）

甕形土器（第49図、第50図）　甕には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とBII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕A類〉　器形の大小によって3分（A1類・A2類・A3類）され、さらに体部最大径の位置、口縁部の形態等によって細分される。

A1類の甕（第49図2・3、第50図1～3）は、口縁部が長く外反し、体がゆるやかに脹らみ最大径を中央付近にもつもの（第49図2・3、第50図1）と、口縁部が直立ぎみに外反し、体部が直線的で最大径を中央付近にもつもの（第50図2・3）とに分けられる。いずれも頸部にはやや形式化した段を有する。器面調整は共通しており、口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目＋ヘラケズリ、内面が刷毛目によっている。底部を残すものは外面にヘラケズリを施している。口縁部外面には前段階の調整である刷毛目痕が観察される。

A2類の甕（第49図4～7、第50図9）は、口縁部が長く外反し、体部最大径を中央付近にもつもの（第49図1・4・5）、口縁部が極端に長く外反し、体部最大径を上端付近にもつもの（第49図6・7）、口縁部が直立ぎみに外反し、体部が直線的で最大径を中央付近にもつもの（第50図9）とに分けられる。頸部の段には明瞭なもの（第49図6・7）とやや形式的なものとがある。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリになっている。体部内面は刷毛目によるもの（第49図1・6・7、第50図9）とヘラナデによるもの（第49図4）とがある。なお、体部外面には、ヘラケズリの前に刷毛目を施しているもの（第49図1・7）もある。

そのほか、体部下半より底部にかけての破片（第49図８、第50図６～８）がある。すべてＡ類の甕であり、Ａ１類のもの（第49図８）とＡ２類のもの（第50図６～８）とに分かれる。

〈甕ＢⅡ類〉（第52図１～３）　すべて口縁部～体部上端の細片である。大きさはそれぞれ異なるが、口径30cmを越える大甕である。

口縁部はいずれも長く外反するが、口唇部を上下に挽き出すもの(１)と下方へ挽き出すもの(３)とがある。１は口縁外面に櫛描文がみられ、２には体部外面を平行文様工具で叩きしめている。１の内面にはオリーブ褐色の自然釉がかかり、３は内外面に灰色の自然釉がかかる。

壺形土器（第50図）　壺にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈壺Ａ類〉（第50図10）　中形のＡ２類に属するものである。口縁部は長く外反し、体部は真球に近い形を呈し、最大径を中央付近にもつ。頸部の段は形式的なものである。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラミガキ(？)、内面がヘラナデによっている。

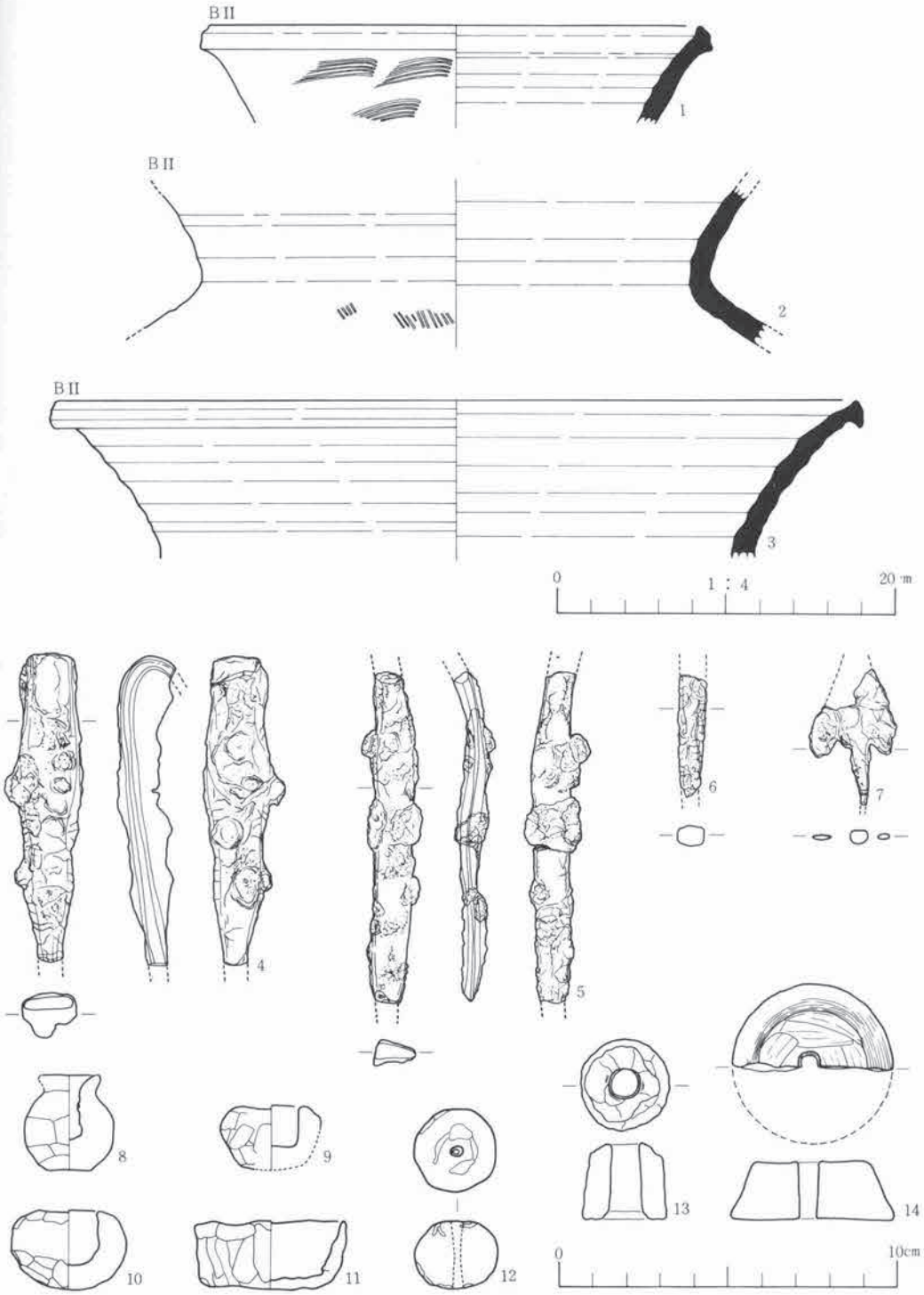
〈壺ＢＩ類〉（第50図４）　大形のものである。口縁部は長く外反し、口唇部は弱く上方へ挽き出している。体部はや肩の張る球形を呈するものと思われる。器面はロクロナデによる調整であるが、口縁部および体部上半の外面に平行文様工具による叩きしめの痕跡が認められる。体部上半内面には刷毛目が施されている。

鉢形土器（第48図、第50図５）すべてＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属すものである。頸部にくびれをもち、体部と口縁部とが区画されているもの（Ａ１類）と体部より口縁部までなめらかに移行するもの（Ａ２類）とがある。

Ａ１類の鉢（第50図５）は、頸部に形式化した段をもち、口縁部は短くゆるく外反するものである。体部はほとんど脹まずそのまま底部へと移行し、体部最大径を上端付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目、内面がヘラナデによっている。

Ａ２類の鉢（第48図１～５）は、相対的に底径が小さく、体部より口縁部まで直線的に外傾するもの（Ａ2a類）と、相対的に底径が大きく、体部より口縁部まで脹みをもって立ちあがり、椀形に近い形を呈するもの（Ａ2b類）とがある。

Ａ2a類の鉢(１)は小形のもので、器面調整は外面が刷毛目、内面がヘラナデによっている。底部外面にはナデが施されている。Ａ2b類の鉢（２～５）は、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（３・５）と、体部がかなり丸味をもって内弯ぎみに立ちあがるもの（２・４）とがあり、後者は器形の大小によって２分される。器面調整は、小形のものを除いて内外面ともヘラミガキを基本としているが、外面には前段階の調整である刷毛目・ヘラケズリが観察され、４・５には口縁部に横ナデが施されている。なお内面は黒色処理されており、３は外面にも黒色処理が施されている。小形のものは内外ともヘラナデで整え、底部外面にはナデが施さ



第52図　第13号住居跡　出土遺物（５）

第53図　第13号住居跡　出土遺物（６）

れている。

蓋形土器（第48図24）　ＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものが１点出土している。宝珠形の極端に高いつまみをもつものである。天井部はほぼ水平になっており、口縁部はするどく屈曲しほぼ直立する。全面ロクロ調整である。

小形手捏土器（第51図）　４点出土している。器形には各種みられ、壺形を呈する平底のもの（８）と埦形を呈する丸底のもの（９・10）、および鉢形を呈する平底のもの(11)とがある。器肉は厚いもの（８～10）と薄いもの(11)とがある。器面はオサエで整えているが、軽いヘラケズリを加えるもの（８～10）もある。法量測定値は８が口径1.8cm、胴径2.7cm、底径1.3cm、器高2.8cmを計る。９は口径約1.9cm、体部径約2.9cm、器高1.9cmとなり、10は口径1.8cm、体部径3.5cm、器高2.3cmとなる。11は口径4.9cm、底径3.2cm、器高2.0cmを計る。

土玉（第52図12）　上下にやや平坦な面をもつがほぼ球形を呈する。最大腹径2.5cm、高さ2.0cmを計り、中央には径約0.3cmの貫通孔がある。器面には軽いミガキの痕跡が観察される。

紡錘車（第52図13・14）　石製のもの(13)と土製のもの(14)とがある。13は輝石安山岩の多

孔質熔岩を加工したもので、上部のやや丸まった截頭円錐形を呈する。上面径2.1cm、底径2.5cm、高さ2.3cmを計る。孔径は上部で0.8cm、下部で1.0cmになる。14は截頭円錐形を呈する土製のもので、約½残存する。大きさは復元推定値で上面径約3.3cm、底径約4.9cmを計り、高さは1.8cmになる。孔径は上部で0.6cm、下部で0.5cmである。

鉄製品（第52図）　4点出土している。4は刀子と推定されるもので、両端を欠いている。錆による変形が著しく、一端は大きく屈曲している。現存長で約9.3cm、幅約1.7cmを計る。5は刀子の破片と思われる。茎・刃部端の両端を欠き、やや弯曲している。現存長で9.9cm、幅1.2cmを計る。6は両端を欠く細長い棒状のものである。角針と思われる。現存長で3.6cmとなる。7は平根有茎腸抉三角形式の鉄族である。峰の先端、両腸抉部の先端、および茎の大半を欠く。峰は推定で長さが約3.2cm、幅2 7cmを計る。箆被は長さ1.6cmで、断面は約0.4cmの方形を呈する。腸抉部・茎部の長さは不明である。

砥石（第53図）　外形が分銅形を呈するものである。周縁には整形痕が認められず、不定形の原材を利用したものと思われる。砥面は長軸に沿って4面認められ、使用部分の横断形は四角形である。石質は輝石安山岩の多孔質溶岩であり、紡錘車(13)と同質である。

第14号（ＥＨ03）住居跡

〔遺構確認面〕　地山のにぶい黄褐色土層(IIa層)を若干掘り下げて遺構の存在を確認した。畦畔断面の観察によれば、遺構はIIa層の上面より掘り込まれている。

〔保存状況〕　ほぼ原形をとどめており、保存状況は良好である。

〔重複関係〕　第16号住居跡と重複関係にある。当住居跡の北東コーナー部、および煙道部が第16号住居跡の西壁を切っている。第16号住居跡より新しい。

〔平面形・長軸方向〕　平面形は南北にやや長い不整の長方形を呈する。長軸方向はN′—17°30′—Eである。

〔規模〕　長軸(南北)長で4.30m・4.17m、短軸(東西)長が4.08m・3.87mとなり、床面積は約16.14m²である。

〔堆積土〕　住居内堆積土は基本的には以下の3層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層である。住居の上部全域に厚く堆積する。やや砂分が強くしまりがない。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。住居の全域に分布する。第1層に比べて緻密でややかたい。焼土粒・木炭片をかなり含む。細砂土が部分的に混入する。

第3層：褐色のシルト層である。床面上の全域に分布する。他の層に比べてやや粘性が強い。やわらかく、ぼさぼさしている。焼土粒・木炭片をかなり含む。

以上の堆積土はすべて自然的営力による堆積であり、人為的な要素は認められない。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は床面より比較的緩く立ちあがる。遺存状態は非常に良好でかなり深くなっている。現存する壁高は東壁で27～29cm、西壁が24～30cm、南壁28～33cm、北壁21～28cmとなる。

〔床〕 床面はたたきしめられた痕跡もなく比較的やわらかい。凸凹はみられず、ほぼ平坦になっている。床面上からは大小14個のピットが検出されている。

最後に床面を掘り下げたところ、8～12cmの厚さをもつ黄褐色のシルト質土が検出された。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 床面上から検出された14個のピットのうち、大きさ、深さからみて柱穴としての可能性をもつものはP_4、P_7、P_{11}、P_{13}の4個のピットに限られる。ただ、これらのピットの配置形態はかなり不整形になっており、やや歪んだ台形状を呈する。また位置も床面上の南東方向に偏している。

〔カマド〕 東壁の北寄りに付設されている。袖部が崩壊していることを除けばほぼ完全な形で遺存している。主軸方向はE－11°30′－－Sである。

燃焼部は床面より若干の段差をもって掘り凹められており、91×35cmの規模をもっている。焚口付近には大きさ59×41cm、厚さ3cmの固い焼土面がある。支脚は検出されていない。袖部は褐色のシルト質土を素材にしてそれを積み上げて構築している。また、間口にあたる部分には川原石が発見されている。芯材として利用していたものであろう。

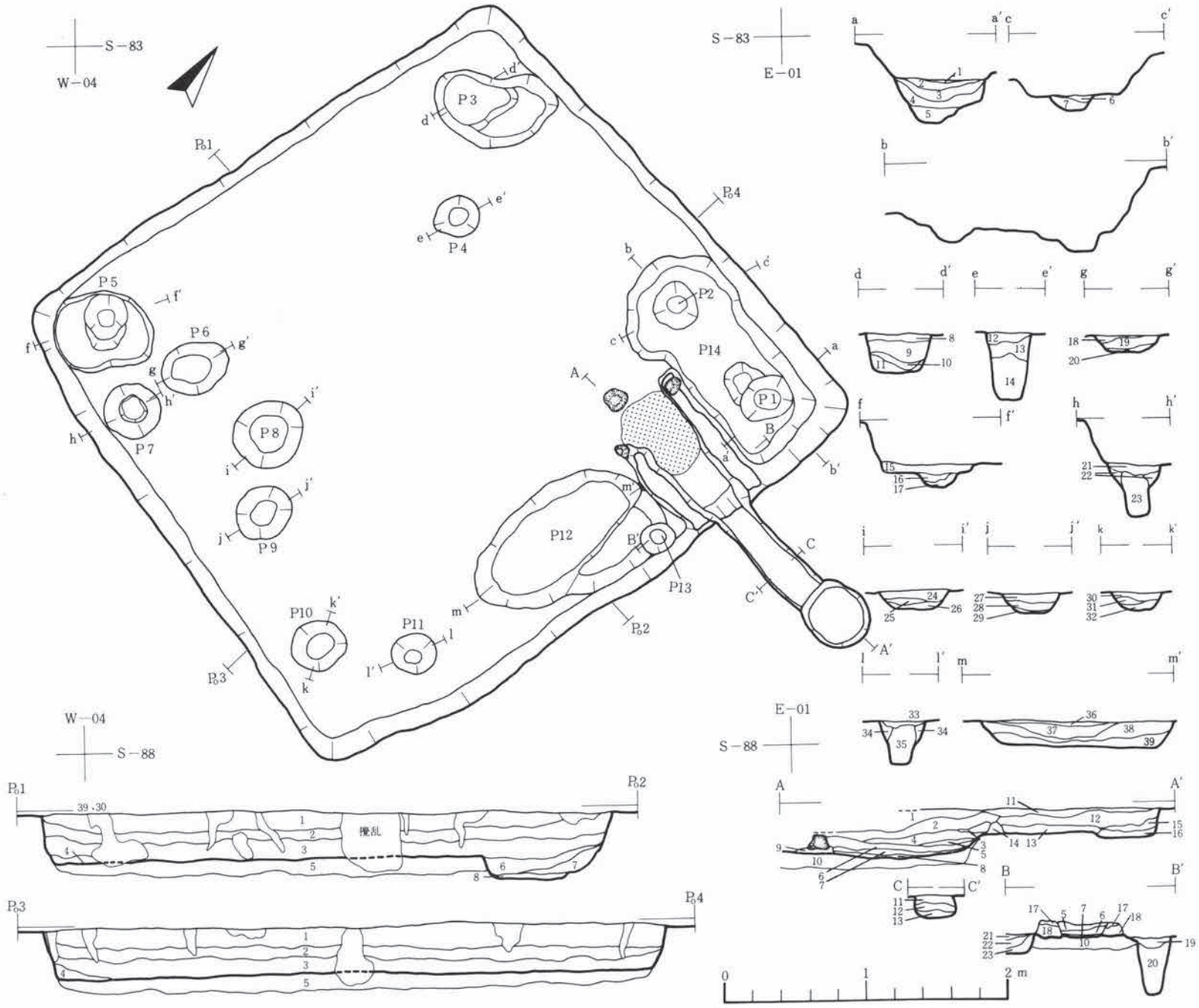
煙道部は燃焼部底面より約12cmの段差をもつ奥壁につくられる。長さは約79cmあり、ほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には大きさが49×43cm、深さ21cmのピットが掘り込まれており、煙道端との比高は約4cmになっている。

なお、燃焼部の下からにぶい黄褐色のシルト質土が認められた。これは床面下の掘り方埋土と同質であり、燃焼部そのものを意識した掘り方は検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と断定できるものではないが、それに類したものとして、P_{12}とP_{14}がある。P_{12}は140×83cmの隋円形を呈し、深さは19cmとなる。カマドの右脇に位置している。P_{14}はカマドの左脇に位置しており、157×67cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cmとなる。P_{12}、P_{14}とも一般的な貯蔵穴とは形態が異なること、深さが浅いことに問題が残り、確証に欠ける。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品があり、土器は坏・甕・壺の3器種に類別される。遺物は、カマドの周囲より集中して出土しているが絶対量は少ない。

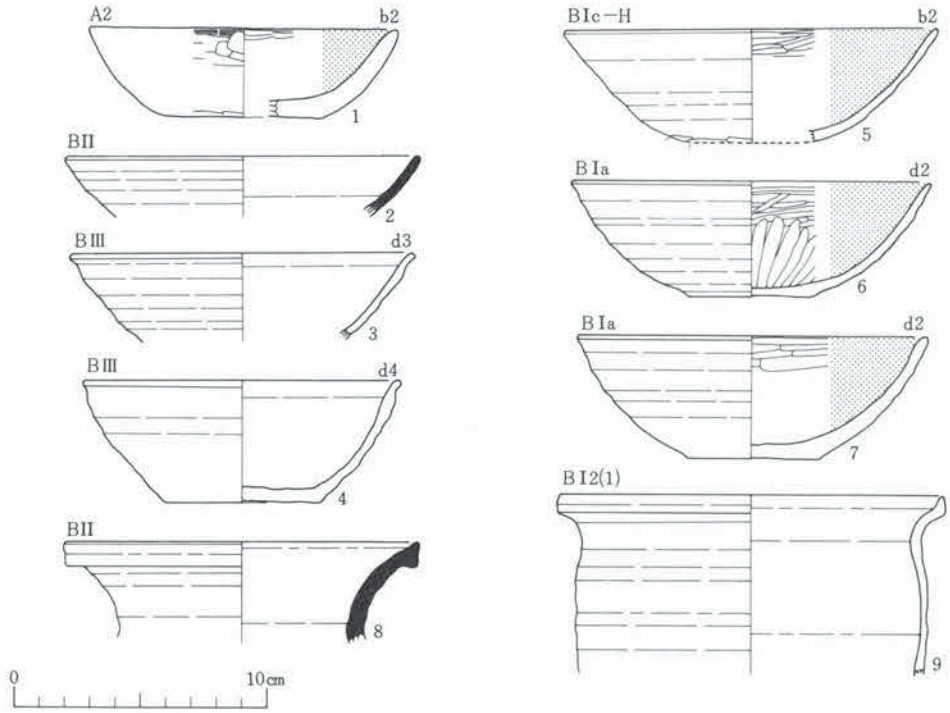
坏形土器（第55図） 坏には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、BⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびBⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

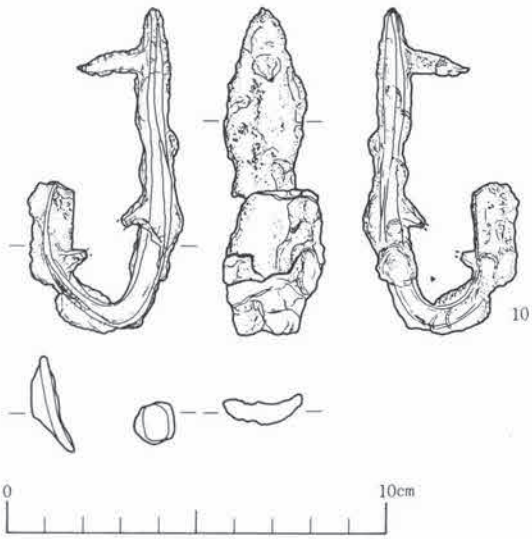


	層No.	土色	土性	その他
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	ややわらかい
第2層	2	〃 (〃)	〃	緻密でかたい
第3層	3	〃 (10YR4/6)	〃	焼土粒・木炭片をかなり含む
〃	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	壁の剝落土
埋り方埋土	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	塊状堆積
P 12	6	褐色(10YR4/4)	〃	
	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	No.4層と類似
	8	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土塊・木炭片を多量に含む
カマド	1			住居内堆積土No.2層と同じ
	2			〃 No.3層と同じ
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	塊状の焼土をかなり含む
	4	〃 (〃)	粘土質シルト	焼土粒・木炭を少量含む
	5	暗褐色(10YR3/4)	〃	〃 をかなり含む
	6	褐色(10YR4/4)	シルト	塊状の焼土を多量に含む
	7	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	焼土塊・木炭粒・灰を多量に含む
	8	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	火床部
	9	褐色(10YR4/4)	〃	細砂を混入する
	10			住居内堆積土No.5層と同じ
	11	褐色(10YR4/6)	シルト	焼土粒を少量含む
	12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	緻密、焼土粒が全面に点在
	13	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土塊・木炭粒をかなり含む
	14	暗褐色(10YR3/4)	シルト	塊状堆積
	15	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土塊を多量に含む
	16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	地山粒を含む、ねばりがある
	17	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒を少量含む
	18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	固化している
	19	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒を少量含む
	20	暗褐色(10YR3/4)	〃	ぼさぼさしている
	21			ピットNo.2層と同じ
	22			〃 No.3 〃
	23			〃 No.4 〃
P 14	1			住居内堆積土No.3層と同じ
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
	3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	〃 を多量に含む

	層No.	土色	土性	その他
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	砂分がやや強い
P 1	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	木炭粒を少量含む
P 2	6			No.4層と同じ
〃	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
P 3	8	褐色(10YR4/4)	シルト	緻密
〃	9	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	10	暗褐色(10YR3/4)	〃	やや砂分が強い
〃	11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	焼土粒を少量含む
P 4	12	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	13	暗褐色(10YR3/4)	〃	
〃	14	褐色(10YR4/4)	〃	粉～粒状堆積
P 5	15	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
〃	16	暗褐色(10YR3/4)	〃	〃 を少量含む
〃	17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	塊状堆積
P 6	18	褐色(10YR4/4)	〃	木炭粒を少量含む
〃	19	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粒～塊状積
P 7	21	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	22	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	
	23	褐色(10YR4/4)	〃	ややぼさぼさしている
	24			No.18層と同じ
	25			No.19層と同じ
	26			No.20層と同じ
	27			No.18層と同じ
	28			No.19層と同じ
	29			No.20層と同じ
	30			No.18層と同じ
	31			No.19層と同じ
	32			No.20層と同じ
	33			No.21層と同じ
	34			No.22層と同じ
	35			No.23層と同じ
	36			住居内堆積土No.4層と同じ
	37			〃 No.6層と同じ
	38			〃 No.7層と同じ
	39			〃 No.8層と同じ

第54図　第14号住居跡





第55図　第14号住居跡　出土遺物

〈坏A類〉　（第55図１）　平底のもの（Ａ２類）が破片でかなり出土している。１は器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するものである。外面の調整は口縁部が横ナデ、体部より庭部がヘラケズリによっており、内面は全面にヘラミガキが施されている。

〈坏ＢＩ類〉　（第55図５～７）　ＢＩ類の坂には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（ＢＩａ類）と再調整を施すもの（ＢＩｃ類）とがある。

ＢＩａ類の坏（６・７）は、器形が共通しており、器高が普通で底径が小さく、体部がやや丸

味をもって外傾するものである。

ＢＩc類の坏(５)には、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。底部を欠くため再調整の部位は不明である。器高が低くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾する。

〈坏ＢⅡ類〉（第55図２）　ＢⅡ類の坏は回転糸切り無調整のものである。すべて細片であり全体の器形を知りえるものは出土していない。

〈坏ＢⅢ類〉（第55図３・４）　回転糸切り無調整のものである。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(３)と体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(４)とに分けられる。

甕形土器（第55図）　甕にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈甕Ａ類〉　すべて図化不能の細片である。大形の甕の体部片がほとんどを占める。

〈甕ＢＩ類〉（第55図９）　ＢＩ類の甕には大形のものと小形のものとがある。いずれも口縁部に最大径をもつものである。９は口縁部に最大径をもつ小形の甕（ＢＩ２(1)類）で、口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。全面ロクロ調整である。

壺形土器（第55図８）　ＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属す口縁部のみの破片である。全体の器形は不明である。

鉄製品（第55図10）　Ｕ字形にまげられたもので、３個所に釘状の突起がついている。中央の一部では棒状を呈し、両端はやや内側に弯曲する坂状のものになっている。性格は不明である。長さは8.6cmを計る。なお、同様の製品が江刺市 鴻之巣館遺跡より出土している。

第15号（ＥＨ09）住居跡

〔遺構確認面〕　Ⅱa層のにぶい黄褐色土層を３～４cm掘り下げて遺構の存在を確認している。なお、遺構の掘込面はⅡa層の上面である。

〔保存状況〕　西側の約半分は路線敷外にわたるため調査していない。調査区に限れば、桑の木による攪乱部分が随所にみられるもののほぼ原形をとどめている。

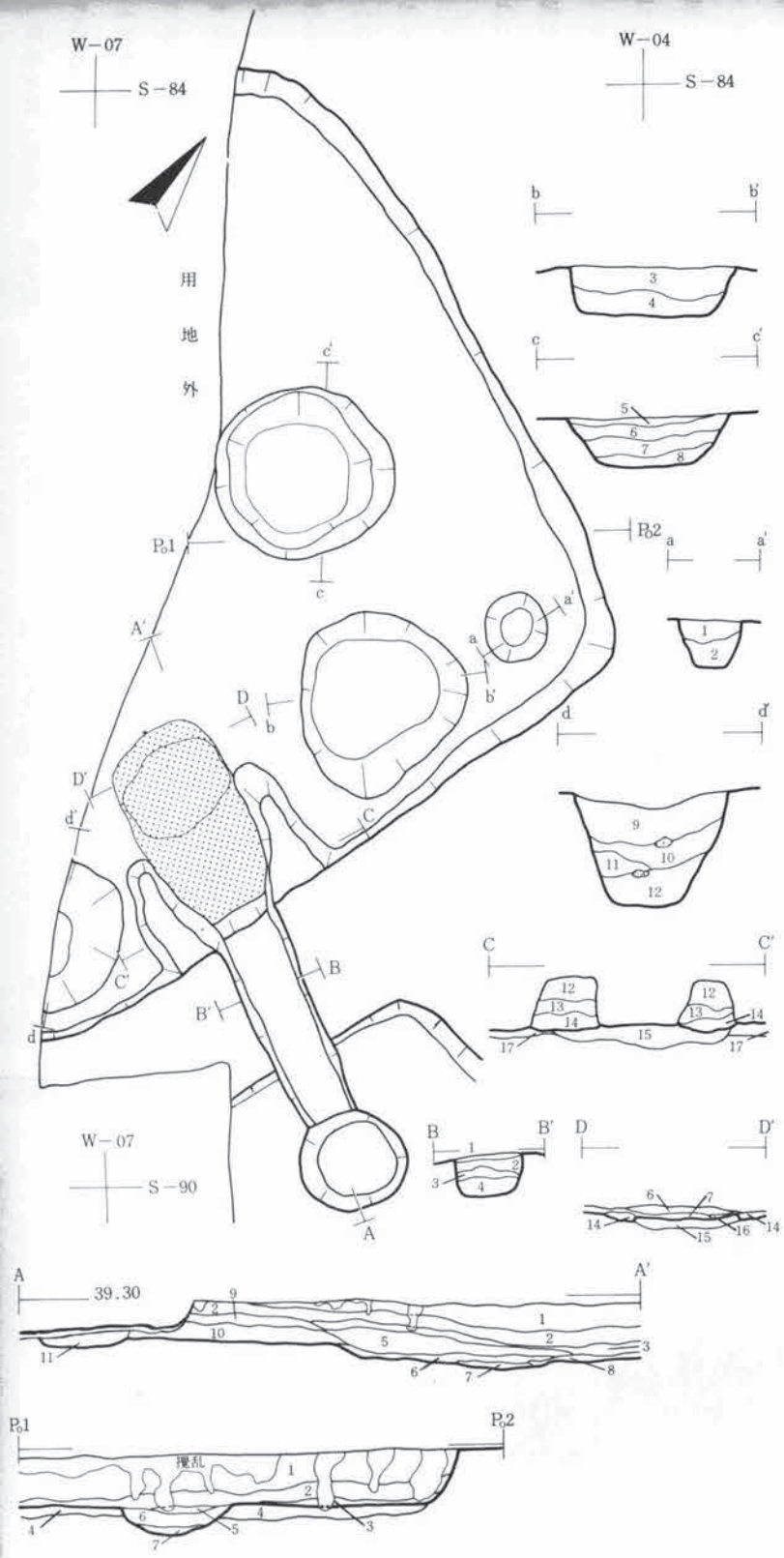
〔重複関係〕　第17号住居跡と重複関係にあり、それよりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕　平面形は部分発掘のため不明である。推定では正方形を呈するものと思われるが確証に欠ける。長軸方向も不明である。

〔規模〕・規模も同様に不明である。北西のコーナーの一部が検出されていることから推定すれば一辺４ｍ前後となる。

〔堆積土〕　遺構内堆積土は以下の２層に大別される。

第１層：褐色のシルト層である。上部は桑木根によりかなり攪乱をうけている。住居の全域



	層No.	土色	土性	その他
第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	3	〃 (〃)	〃	粒～塊状の焼土をかなり含む
掘り方埋土	4	〃 (10YR5/4)	〃	塊状堆積
P 3	5			ピットNo.5層と同じ
〃	6			〃 No.6層 〃
〃	7			〃 No.7層 〃
カマド	1			住居用堆積土No.1層と同じ
	2			〃 No.2層 〃
	3			〃 No.3層 〃
	4	暗赤褐色(2.5YR3/3)	シルト	ぼさぼさした焼土
	5	〃 (5YR3/3)	〃	やや粘性がある
	6	〃 (2.5YR3/4)	〃	ややしまりのある焼土
	7	赤褐色(2.5YR4/6)	〃	火床部
	8	黒褐色(5YR2/2)	粘土質シルト	木炭粒・灰を多量に含む
	9	暗赤褐色(2.5YR3/4)	シルト	ぼさぼさしている
	10	〃 (5YR3/4)	〃	木炭粒・灰を含む
	11	黒褐色(7.5YR2/2)	粘土質シルト	塊状の焼土を含み、ねばりがあ
	12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒を少量含む
	13	褐色(10YR4/4)	〃	ややぼさぼさしている
	14	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	混入物なし
	15	〃 (〃)	〃	細砂土を混入する
	16	暗赤褐色(5YR3/4)	〃	焼土粒・木炭粒を多量に含む
P 1	1	褐色(10YR4/4)	シルト	微量の木炭粒を含む
〃	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	
P 2	3	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	4	〃 (〃)	〃	ぼさぼさしている
P 3	5	暗褐色(10YR3/4)	〃	
〃	6	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒を少量含む
〃	7	〃 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	8	〃 (7.5YR4/3)	〃	ぼさぼさしている
P 4	9	暗赤褐色(5YR3/4)	〃	焼土・木炭・灰を多量に含む
〃	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
〃	11	〃 (7.5YR3/4)	〃	混入物なし
〃	12	灰黄褐色(10YR4/2)	〃	塊状堆積

0 1 2 m

第56図　第15号住居跡

を厚く覆う。混入物はほとんど認められない。

第２層：にぶい黄褐色のシルト層である。床面上の全域に分布する。第１層に比べてやや粘性がある。焼土粒・木炭粒をかなり含んでいる。

第１層、第２層とも住居廃絶後の自然的営力による堆積層と考えられる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。調査区域内での現存する壁高は東壁で17～29cm、北壁が29～39cmとなりかなり深い。

〔床〕 床面は部分的に凸凹がみられるものの、たたきしめられてかなり固い面をなしている。床面上からは大小４個のピットが検出されている。

最後に床面を掘り下げたところ５～10cmの厚さをもつにぶい黄褐色土層があらわれた。住居掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 部分的な調査に限られるため、実体はまったく不明である。床面上に検出された４個のピットのうち、柱穴の可能性をもつものはその規模からP_1に限られ、住居全域での配置形は推定不能である。

〔カマド〕 東壁に付設されている。P_4は南東のコーナー部分に位置するものと予想されることから、東壁での偏位はやや南に寄るものと推定される。一部路線敷外にわたったが、ほぼ完掘しており、全体的に保存状況は良好である。主軸方向はＥ－28°－Ｓである。

燃焼部は107×61cmの範囲で、床面より若干掘り凹めてある。焚口付近には58×45cmの範囲で厚さ２～４cmの固い焼土面をもつ。支脚は発見されていない。袖部は地山のシルト質土を素材にしており、それを水平に積みあげて構築している。

煙道部は燃焼部底面より７cmほどの段差をもつ奥壁に作られている。長さは約113cmあり、底面はほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には59×55cmで深さ約23cmのピットが掘られている。煙道端との比高は４cmと少ない。

なお、燃焼部底面の下から褐色のシルト層が検出されている。これは、床面下の掘り方埋土とは異なっており、燃焼部そのものを意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴にはP_4がある。これはカマド右脇に位置しており、推定で直径約85cmの円形を呈し、深さは63cmである。堆積土は３層に分けられる。上層は暗赤褐色の粘土質シルト層で、粒～塊状の焼土・木炭片・灰を多量に含む。中層は暗褐色のシルト層で、焼土粒・木炭粒を少量含む。下層は灰黄褐色のシルト層で、塊状の堆積状況を示す。P_4のほかにP_2、P_3があり、規模・形状が類しているものの、ともに貯蔵穴としての確証に欠ける。

〔出土遺物〕 当住居の出土遺物には土器と鉄製品がある。土器には、坏・高台付坏・甕・壺の各器種があり、カマドの周囲を中心に出土している。

坏形土器（第57図、第58図） 坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢ

II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢＩ類〉（第57図４～７）　ＢＩ類の坏は回転糸切り無調整のもの（ＢＩａ類）に限られる。形態上の特徴によって、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（４～６）と、器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（７）とに分けられる。

〈坏ＢII類〉　細片で２片出土するのみで図示不能である。

〈坏ＢIII類〉　回転糸切り無調整のものである。ＢＩ類の坏と器形が共通しており、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（４）と器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（５）とに分けられる。

高台付坏形土器（第57図、第58図）　高台付坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈高台付坏ＢＩ類〉（第57図３・８・９）　高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの（ＢＩ２①類）と、高台部が直立ぎみに短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（ＢＩ１③類）とに分かれる。

ＢＩ１③類の高台付坏（８）は、体部より口縁部までやや丸味をもって立ちあがるもので、極端に器高の高い埦形を呈する。器面調整は内外両面にヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。なお、３はＢＩ１③類の高台付坏の坏部片と思われる。

ＢＩ２①類の高台付坏（９）は、坏部を欠き、全体の器形は不明である。

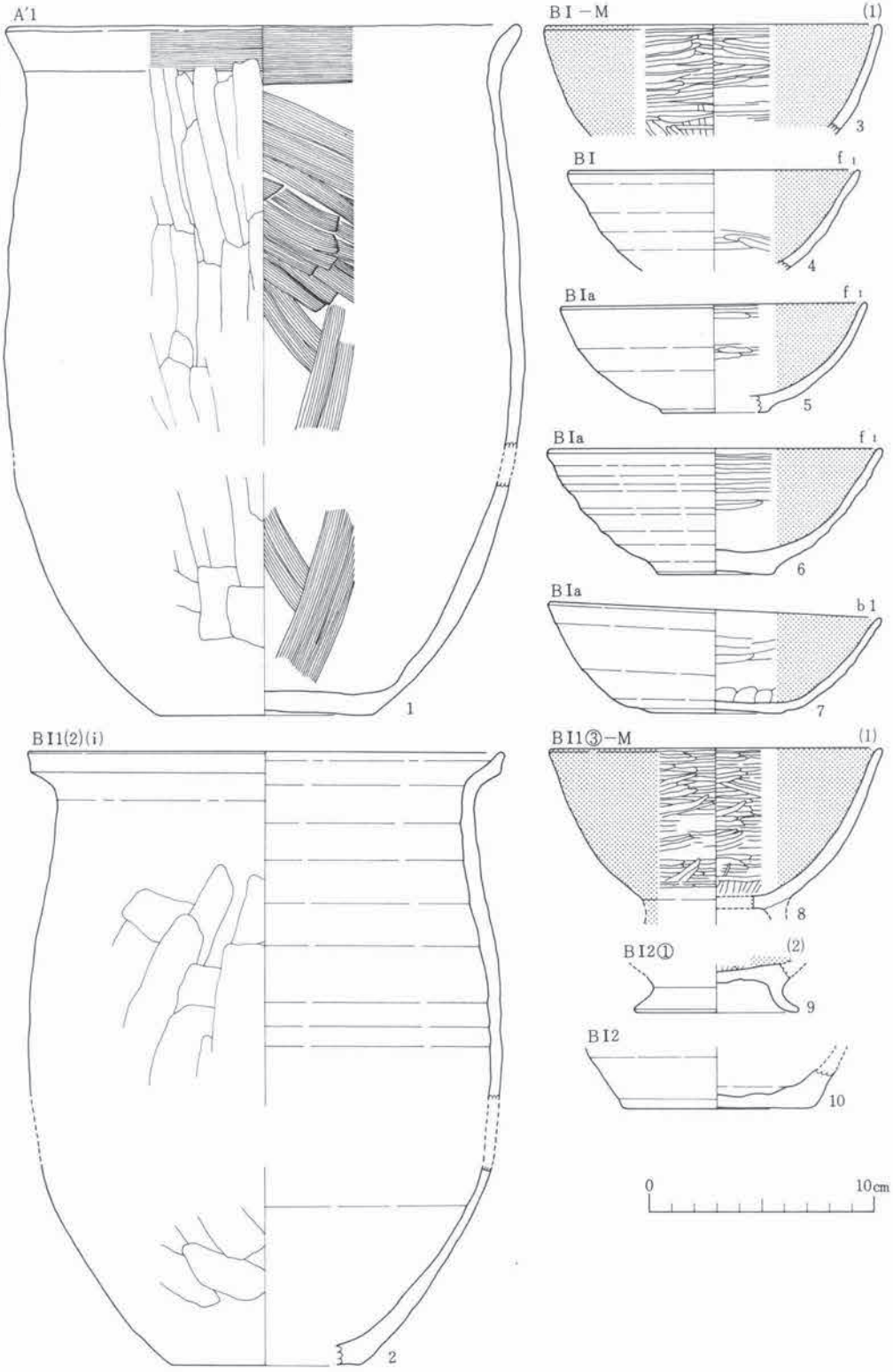
〈高台付坏ＢIII類〉（第58図６・７）　高台部が極端に外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施し、周縁をロクロ調整するもの（ＢIII２①類）と、高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（ＢIII１③類）とがある。

ＢIII２①類の高台付坏（７）は、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾する坏部をもつ。ＢIII１③類の高台付坏（６）は坏部を欠くため全体の器形は不明である。

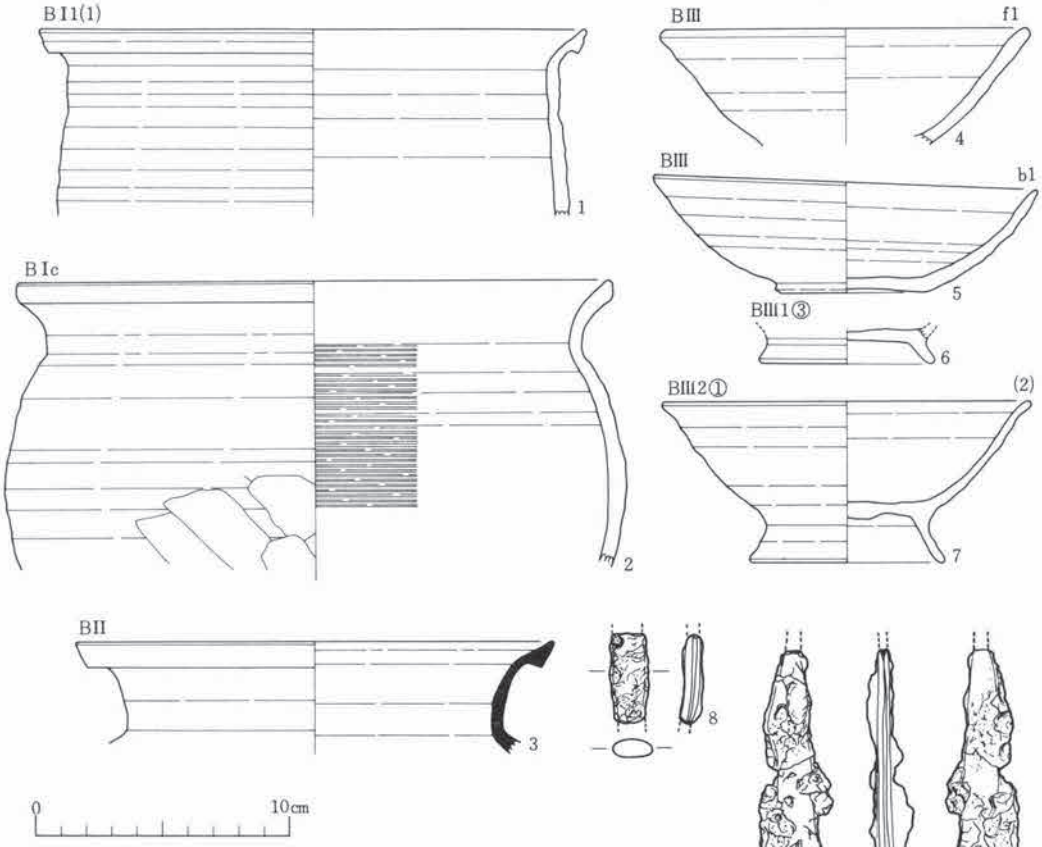
甕形土器（第57図、第58図）　甕には、A′類（ロクロ不使用で酸化炎焼成）、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕A′類〉（第57図１）　A′類の甕は１点のみで、体部に最大径をもつ大形のものである。口縁部は短く直立ぎみに外反し、体部はゆるやかに脹んで底部へと至る。器面調整は口縁部が横ナデ、体部から底部に至るまで外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによっている。調整は粗い。

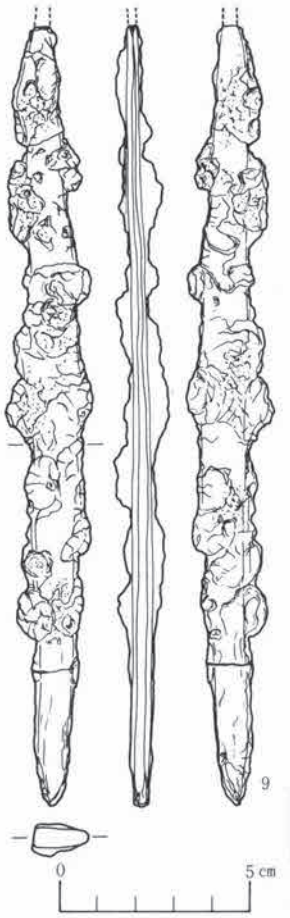
〈甕ＢＩ類〉（第57図２、第58図１）　ＢＩ類の甕は大形のもので、最大径を口縁部にもつもの（ＢＩ１(1)類）と体部にもつもの（ＢＩ１(2)類）とがある。ＢＩ１(2)類の甕（第57図２）は１と器面が近似しており、１のロクロ版である。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。器面調整は体部と底部の外面にヘラケズリが施される。



第57図　第15号住居跡　出土遺物（Ⅰ）



第58図　第15号住居跡　出土遺物（２）



ＢＩ１(1)類の甕（第58図１）は口縁部が短く外反し、口唇部は下方へ挽き出すものである。体部の最大径は中央付近にもつもとの思われる。

なお、第57図10は小形の甕の底部片と思われる。全面ロクロ調整で底部には糸切痕を残す。

〈甕ＢII類〉　体部の細片が少量出土している。図示可能のものはなく、全体の器形は不明。

壺形土器（第58図）　壺にはＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものとＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものとがある。

〈壺ＢＩ類〉（第58図２）　口径より器高が低く、体部に最

大径をもつものである。口縁部は長く外反し、体部は大きく脹み中央付近に最大径をもつ。外面の調整は口縁部から体部上半がロクロナデ、体部下半がヘラケズリによっており、内面は体部上半に刷毛目状ロクロナデが施されるほかはロクロナデで整えている。

〈壺BⅡ類〉（第58図３）　広口壺の口縁部と推定される。肩部で立ち上がり、口縁端で大きく外反する口縁部をもつ。全面ロクロ調整である。

鉄製品（第58図８・９）　９は刀子である。刃部端を欠くが現存長で20.9cmを計る大形のものである。関は背側にのみ段をもつものと思われ、約1.3cmの関幅をもつ。刃部は幅0.6～1.4cmを計り先端に向って細くなっている。茎も同様に先端に向って茎幅が狭くなっている。背幅は約0.4cmの平造りでかなり薄くなっている。８は両端を欠く細長い坂状のものである。刀子の身の一部とも思われるがはっきりしない。現存長で2.4cm、幅1.0cmを計る。

第16号（Ｅ１50）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構の掘込面はⅡa層の上面である。実際にはⅡa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。

〔保存状況〕　当住居は２棟の住居跡によって切られており、かなりの部分が削損をうけている。しかし、後世の攪乱等はみられず、全体のプランはほぼ正確に把握できた。

〔重複関係〕　第14号住居跡および第18号住居跡と重複関係にある。当住居の西壁の一部が第14号住居跡の東壁や煙道・煙出部によって切られており、南東コーナー部が第18号住居跡の北西コーナー部によって切られている。第14号住居跡および18号住居跡より旧い。

〔平面形・長軸方向〕　平面形はほぼ正方形を呈する。長軸方向は南北方向にとって、N－3°－Eとなる。

〔規模〕　南北長で4.38m・4.15m、東西長が4.32m・4.10mとなり、床面積は推定で約17.02m²である。

〔堆積土〕　遺構内堆積土は基本的には次下の２層に分けられる。

第１層：にぶい黄褐色のシルト層である。住居の上部をほぼ水平に覆う。粗い粒塊状の堆積状況を示す。微量の木炭粒・焼土粒を含む。

第２層：にぶい黄褐色のシルト層である。床面上の全域に厚く堆積する。第１層に比べて緻密でかなり固い。焼土粒・木炭粒はかなり含まれる。

なお、上記の第２層は住居廃絶後に自然的な営力で堆積したものと思われる。しかし、第１層は粒～塊状の堆積状況を示しており、人為的な堆積層と推定される。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で24～32cm、西壁が20～23cm、南壁26～30cm、北壁20～28cmとなっている。

〔床〕 全体の⅛強にあたる部分が第18号住居跡によって削損を受けている。残存部分はほぼ平坦になっており、比較的やわらかい。床面上からは大小合わせて９個のピットが検出されている。なお、第18号住居跡の床面上から、当住居にかかわるピットは発見されていない。

最後に床面下を掘り下げたところ６～14cmの厚さをもつにぶい黄褐色土が検出された。掘り方の埋土と思われる。貼り床とすることのできる層は認められない。

〔柱穴〕 ほぼ柱穴とすることのできるものにはP_3とP_5があり、P_1も柱穴の可能性をもつ。これらと対になるピットは、配置の規則性からみれば第18号住居跡の床面上に求められるが検出されていない。第18号住の掘り方によって破壊された可能性が強い。

なお、P_3とP_5の埋土断面の観察によれば、柱を抜きとった痕跡を残している。

〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に構築されている。煙道部・煙出部の部分は検出時の削平および攪乱によって破壊されている。また、燃焼部の右側は第18号住によって切りとられている。遺存状況はきわめて不良である。主軸方向はＥ－12°－Ｓである。

燃焼部は72×(38)cmの規模をもち、床面との段差は認められない。焚口付近には39×(38)cmの範囲で厚さ２～３cmのかたい焼土面を有する。袖は地山のシルト質土を素材にして構築されている。右袖は遺存しない。

煙道部は燃焼部底面と約９cmの段差をもつ奥壁に作られ、煙道部底面は上方へ向かって傾斜している。煙道部、煙出部は検出作業時に削平されており、規模等は不明である。

なお、燃焼部底面の下には床面下の掘り方とは異なる掘り方が検出されている。

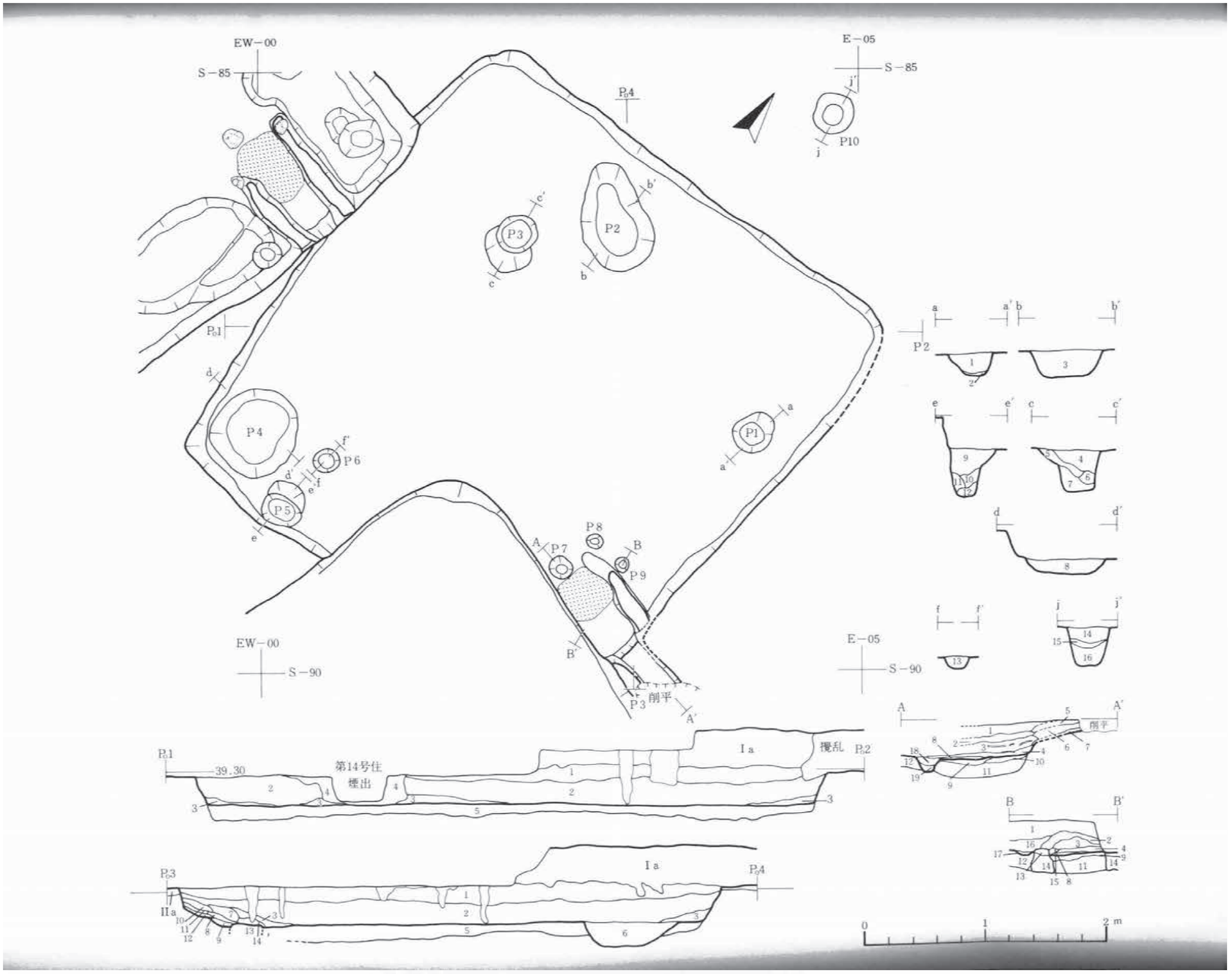
〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴として認定できるピットは検出されていない。P_2とP_4がその可能性をもつが、P_2は住居の廃絶以前に埋め戻されており、P_4は深さが足りない。

〔その他のピット〕 竪穴外の北壁外側にP_6が検出されている。当住居に伴うものであるかは不明である。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器・土錘・石製品がある。土器は坏・甕・壺の３器種に分けられる。カマドの周囲から比較的多く出土している。

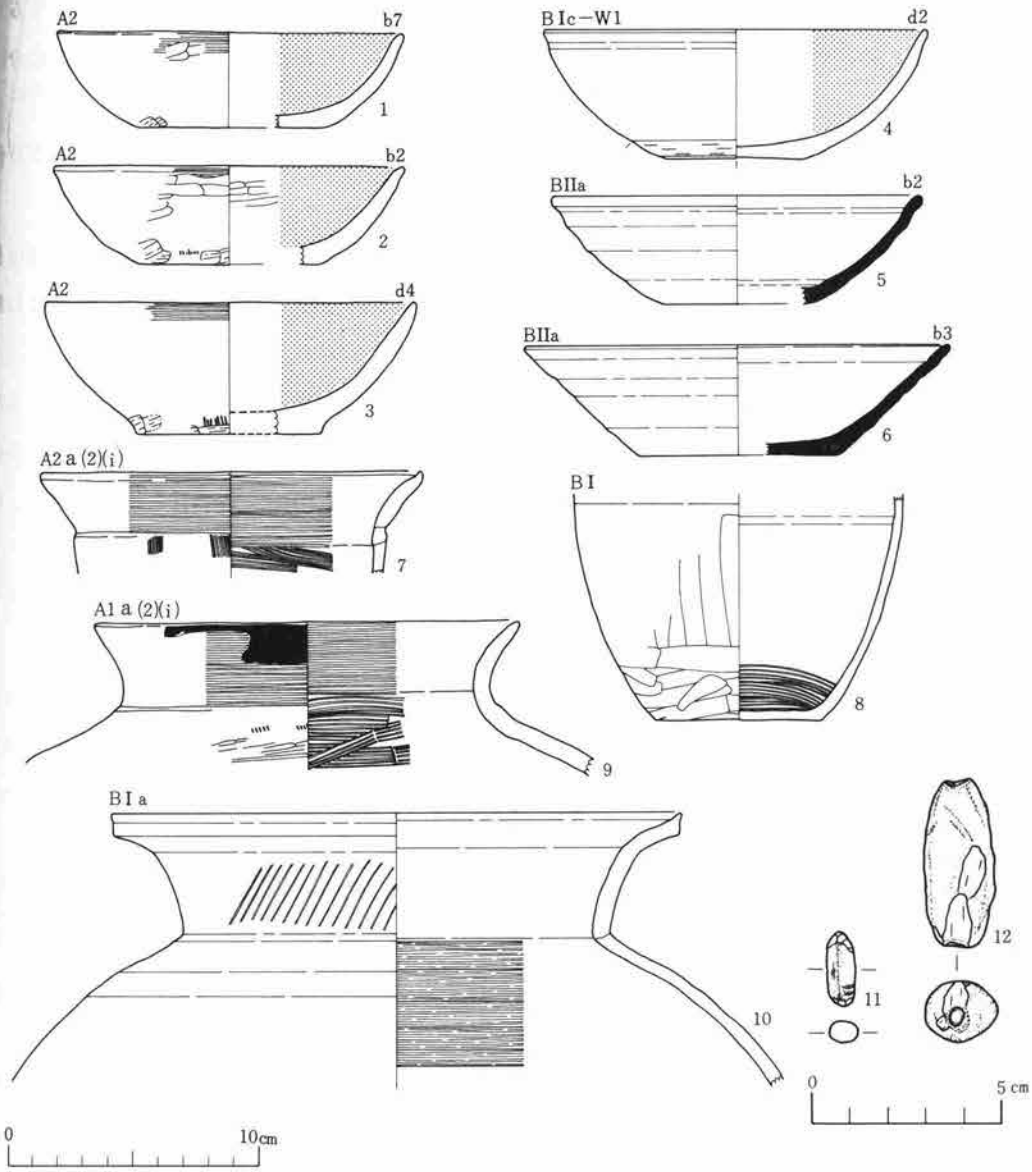
坏形土器（第60図１～６） 坏にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、およびＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈坏Ａ類〉（第60図１～３） Ａ類の坏はすべて平底のもの（Ａ２類）である。体部の形態上の特徴によって、それぞれが類別される。器高が低くて底径の小さなものには、体部がやや丸味をもって外傾するもの(１)と体部がややふくらみをもって外傾するもの(２)とがある。また、器高が普通で底径の小さなものには、底部との境にくびれをもちややふくらみをもって立ちあがるもの(３)がある。外面の調整は、口縁部が横ナデ、体部はヘラミガキによっているが、体部下端より底部にかけてはヘラケズリのままでとどめている。前段階の調整である刷毛目が観



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	粒～塊状堆積		12			住居内堆積土No.5層と同じ
第2層	2	〃 (10YR4/3)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む		13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
〃	3	〃 (10YR5/4)	〃	地山の土とほぼ同質		14	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒を少量含む
補強土	4	褐色(10YR4/4)	〃	第14号住煙出部の補強土		15	〃 (〃)	〃	袖崩壊土、焼土をかなり含む
掘り方埋土	5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	褐色土を粒状混入する		16			住居内堆積土No.3層と同じ
P 2	6	〃 (10YR5/3)	〃	塊状堆積	P 9	17	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
	7			カマドNo.2層と同じ	P 7	18	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土・木炭・灰を混える
	8			〃〃No.3 〃	〃	19	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	9			〃 No.4 〃					
	10			〃 No.5 〃	P 1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	11			〃 No.6 〃	〃	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	細砂土を含む
	12			〃 No.7 〃	P 2	3	〃 (10YR5/3)	〃	褐色土を粒状混入する
	13			〃 No.13 〃	P 3	4	〃 (10YR4/3)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	14			〃 No.15 〃	〃	5	〃 (10YR5/4)	〃	塊状堆積
					〃	6	褐色(10YR4/4)	〃	〃
カマド	1			住居内堆積土No.2層と同じ	〃	7	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	塊状の焼土をかなり含む	P 4	8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	〃
	3	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む	P 5	9			No.4層と同じ
	4	暗赤褐色(10YR3/2)	〃	ぼさぼさした焼土	〃	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	塊状堆積
	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃		〃	11	〃 (10YR5/3)	〃	〃
	6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	塊状の焼土を多量に含む	〃	12			No.7層と同じ
	7	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒をかなり含む	P 6	13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	8	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	火床部	P 10	14	褐色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	9	明赤褐色(2.5YR5/6)	〃	火熱の浸透部	〃	15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	
	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	固化している	〃	16	褐色(10YR4/4)	〃	木炭粒・土器片を多く含む
	11	〃 (10YR5/4)	〃						

第59図　第16号住居跡



第60図　第16号住居跡　出土遺物

察されるもの（２・３）もある。内面は全面ヘラミガキで整えている。

〈坏ＢＩ類〉（第60図４）　底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を施すもの（ＢＩc類）である。再調整は体部下端より底部全面にかけて回転ヘラケズリを施している（W_1手法）。形態上の特徴は、器高が普通で底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するものである。

〈坏ＢII類〉（第60図５・６）　ＢII類の坏は回転糸切り無調整のもの（ＢIIa類）に限られる。

形態上の特徴によって、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(５)と、器高が普通で底径が大きく、体部が大きく開いて直線的に外傾するの(６)とに分けられる。

甕形土器（第60図７・８）　甕にはＡ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈甕Ａ類〉（第60図７）　Ａ類の甕は中形のもの（Ａ２類）が１点出土している。口縁部は長く外反し、頸部にはやや形式的な段を有する。体部最大径を上端付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面がナデ、内面がヘラナデによっている。

〈甕ＢII類〉（第60図８）　ＢII類の甕は小形のもの（ＢII２類）に限られる。口縁部から体部上半を欠くが口縁部に最大径をもつものと思われる。体部の最大径は中央付近にある。器面調整は体部上半がロクロナデ、体部下半が外面にヘラケズリ、内面に刷毛目を施している。底部外面はヘラケズリによっている。

壺形土器（第60図９・10）　壺には、Ａ類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈壺Ａ類〉（第60図９）　Ａ類の壺は大形のもの（Ａ１類）が１点出土している。口縁部は単純に外反し、頸部にはやや形式的な段を有する。体部はやや肩の張る球形を呈するものと思われる。口縁部には丹が塗布された痕跡が認められる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面が刷毛目＋ヘラミガキ、内面が刷毛目によっている。

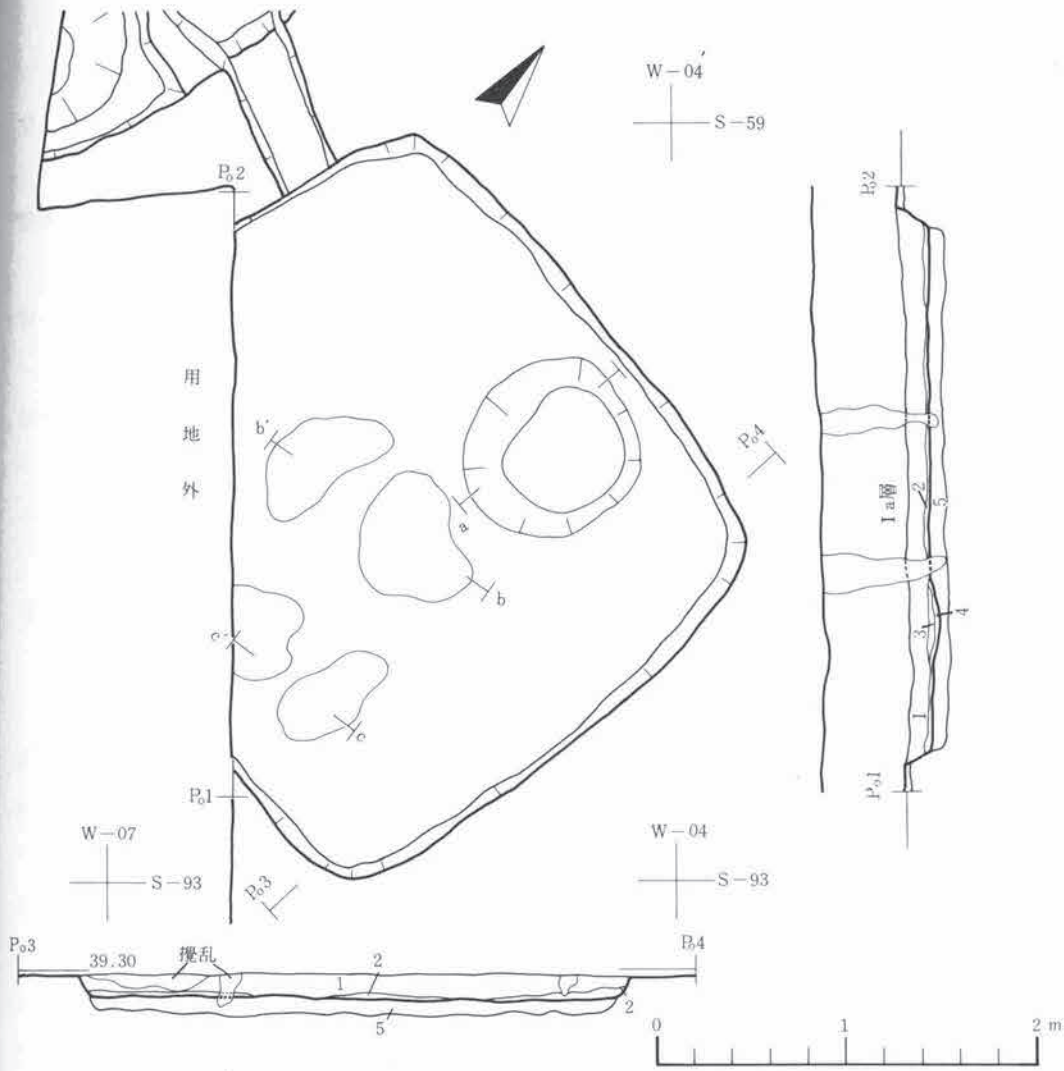
〈壺ＢＩ類〉（第60図10）　口頸部が、肩部より直立ぎみに外傾し口縁端で強く外反する大形のもので、口唇部は上方に挽き出している。体部はほぼ真球を呈し、最大径を中央付近にもつものと思れるれる。外面の調整は、口縁部が平行文様工具による叩きしめ＋ロクロナデ、体部上半がロクロナデ、体部下半がヘラケズリによっている。内面は体部上半に刷毛目状のロクロナデが施されるほかはロクロナデで調整している。

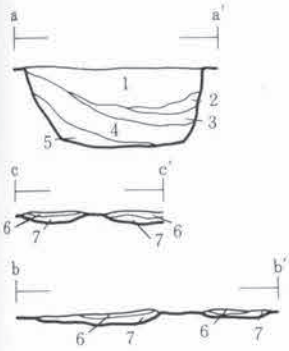
土錘（第60図12）　中央部でやや膨む管状のものである。長さ5.4cm、最大径1.9cmを計り、中央に約0.4cmの貫通孔がある。器面はオサエで整えられているが部分的にヘラミガキが施されている。

石製品（第60図11）　細長い棒状のもので、断面は円形を呈する。石質は長石であり、石や木片に文字を書くことができる。筆記用具として使われた可能性をもつ。長さは2.1cmで、直径は約0.7cmを計る。

第17号（ＥＪ09）住居跡

〔遺構確認面〕　耕作土(Ｉa層)を除去して遺構を確認している。耕作土下にＩb層は検出され





	層No.	土　　色	土　性	そ　の　他
第 1 層	1	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シ　ル　ト	緻密でかなりかたい
第 2 層	2	褐　　色(10Y R4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒をかなり含む
焼　土	3			No 6 層と同じ
〃	4			No 7　〃
掘り方埋土	5	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シ　ル　ト	塊状堆積
P1、第1層	1	褐　　色(10Y R4/4)	シ　ル　ト	緻密でかたい
〃	2	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	ぼさぼさしている
P1、第2層	3	褐　　色(7.5Y R4/4)	〃	
〃	4	〃　(　〃　)	〃	粒～塊状の焼土を多量に含む
P1、第3層	5	〃　(7.5Y R4/6)	粘土質シルト	灰・細砂を含む
焼　土	6	明 赤 褐 色(2.5Y R5/8)	シ　ル　ト	
〃	7	赤　褐　色(2.5Y R4/6)	〃	

第61図　第17号住居跡

ず直接IIa層になっている。遺構はこの層の上面より検出された。

〔保存状況〕 桑の木による攪乱以外には破壊をうけておらず、ほぼ原形をとどめている。なお、北西のコーナー部分は路線敷外にわたるため、調査していない。

〔重複関係〕 第15号住居跡と重複関係にある。第15号住居跡の煙道・煙出部が当住居の西壁および床面の一部に切られている。第15号住居跡よりも新しい。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は正方形を呈する。長軸方向は東西方向にとってN－76°30′－Wとなる。

〔規模〕 東西長で3.24m・3.13m、南北長が3.01m・2.89mとなり、床面積は約9.05m²である。

〔堆積土〕 遺構内堆積土は2層に分けられる。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層である。住居の全域に厚く堆積し、非常に緻密でかたくしまっている。焼土粒・木炭粒を少量含むほか、細砂土を混入する。

第2層：褐色の粘土質シルト層である。床面上の一定部分に薄く堆積する。ぼさぼさしており粘性がある。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第1層、第2層とも自然的な営力によって堆積した層と思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。壁の高さは低く、他の遺構と明確に区別される。現存する壁高は東壁で11～17cm、西壁が12～14cm、南壁8～11cm、北壁17～20cmとなっている。

〔床〕 床面は部分的な凸凹はみられるが全体的にはほぼ平坦である。とくにたたきしめられた痕跡もなく比較的やわらかい。床面上からは大形のピットが1個のみ検出されている。ほかに、かたい焼土面が4ヶ所ほどみられる。

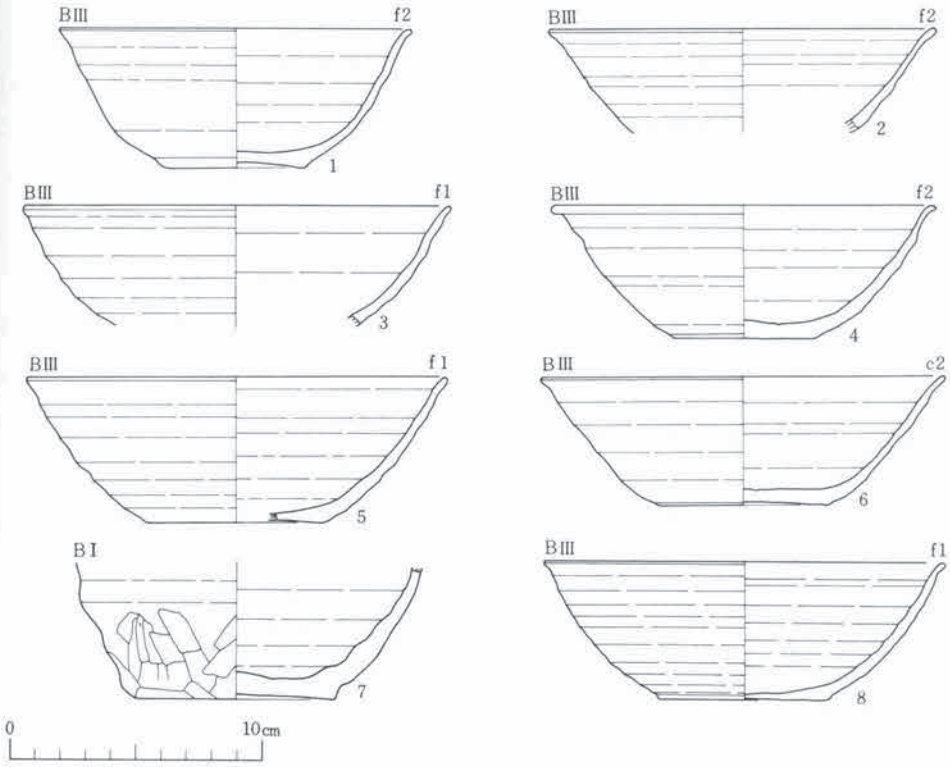
なお、床面の下から6～10cmの厚さをもつにぶい黄褐色シルト層が検出されている。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 柱穴とすることのできるピットはまったく発見されていない。

〔カマド〕 カマドは検出されなかった。これは、そもそも付設されていないものなのか、それとも用地外に構築されているものなのかは不明である。用地外に認められるとすれば南壁が有力である。

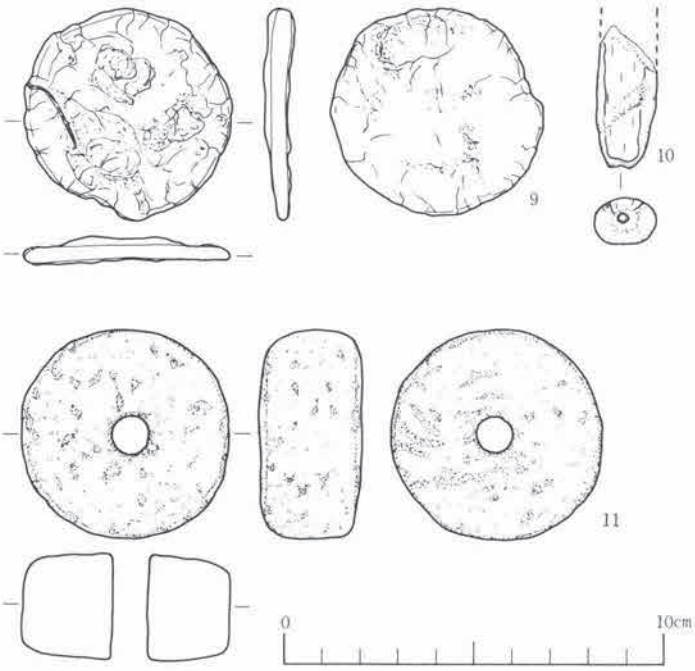
〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴として断定はできないが、その可能性をもつものとしてP_1がある。埋土は3層に分けられる。上層は褐色のシルト層で焼土粒・木炭粒を少量含む。粉状の緻密な堆積状況を示す。中層は褐色のシルト層で、多量の焼土塊・木炭片を多量に含む。下層は褐色の粘土質シルト層で、灰・細砂を混入する。

〔その他の施設〕 床面上に焼土遺構が4個所検出されている。F_1は66×65cmの範囲で厚さ6cm、F_2が35×76cmの範囲で厚さ4cm、F_3が32×64cmの範囲で厚さ6cm、F_4が45(＋2)×47cmの



範囲で厚さ4cmとなっている。ともに平面的には不整形を呈している。地床炉とも想定される。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器・鉄製品・石製紡錘車・土錘などがある。土器は坏と甕に限られる。遺物の絶対量は極端に少ない。



第62図　第17号住居跡　出土遺物

坏形土器（第62図）　坏にはＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢⅠ類〉　図示不能の細片で少量出土している。すべて回転糸切り無調整のものである。

〈坏ＢⅢ類〉（第62図１～６、８）　回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって３分される。器高が高くて底径の小さなものには、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの（１・２・４）と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（３・５・８）とがあり、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（６）もある。

甕形土器（第62図７）　甕は、ＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものに限られる。大形のものと小形のものがある。ほとんどが体部片のため作図不能である。７は小形の甕の底部片である。底部外面には糸切り痕を残し、体部下半外面には、ナデに近い軽いヘラケズリが施されている。口縁部に最大径をもつものと思われる。

鉄製品（第62図９）　中央にあると思われる芯棒の痕跡を確認できないが、紡錘車の円盤部分と思われる。径約5.6cmの円形を呈し、厚さ0.4cmを計る。

土錘（第62図10）　中央でやや脹む管状のもので、一方の先端を欠く。現存長で3.8cm、最大腹径1.6cmを計り、中央に径約0.3cmの貫通孔が入る。

石製紡錘車（第62図11）　低い円柱形を呈するもので、上径と底径がほぼ共通する。径11cm、厚さ5.5cmを計る。複輝質安山岩の多孔質溶岩塊を加工したものである。

第18号（ＥＪ50）住居跡

〔遺構確認面〕　耕作土（Ⅰa層）下のにぶい黄褐色土（Ⅱa層）を若干掘り下げて遺構を確認している。なお、Ⅰb層は検出されず、Ⅱa層の上面まで耕作土になっている。

〔保存状況〕　東壁付近が庭木の抜根のためかなりの攪乱をうけており、煙道部・煙出部が欠損している。ほかに攪乱はみられず、遺存状態は比較的良好である。

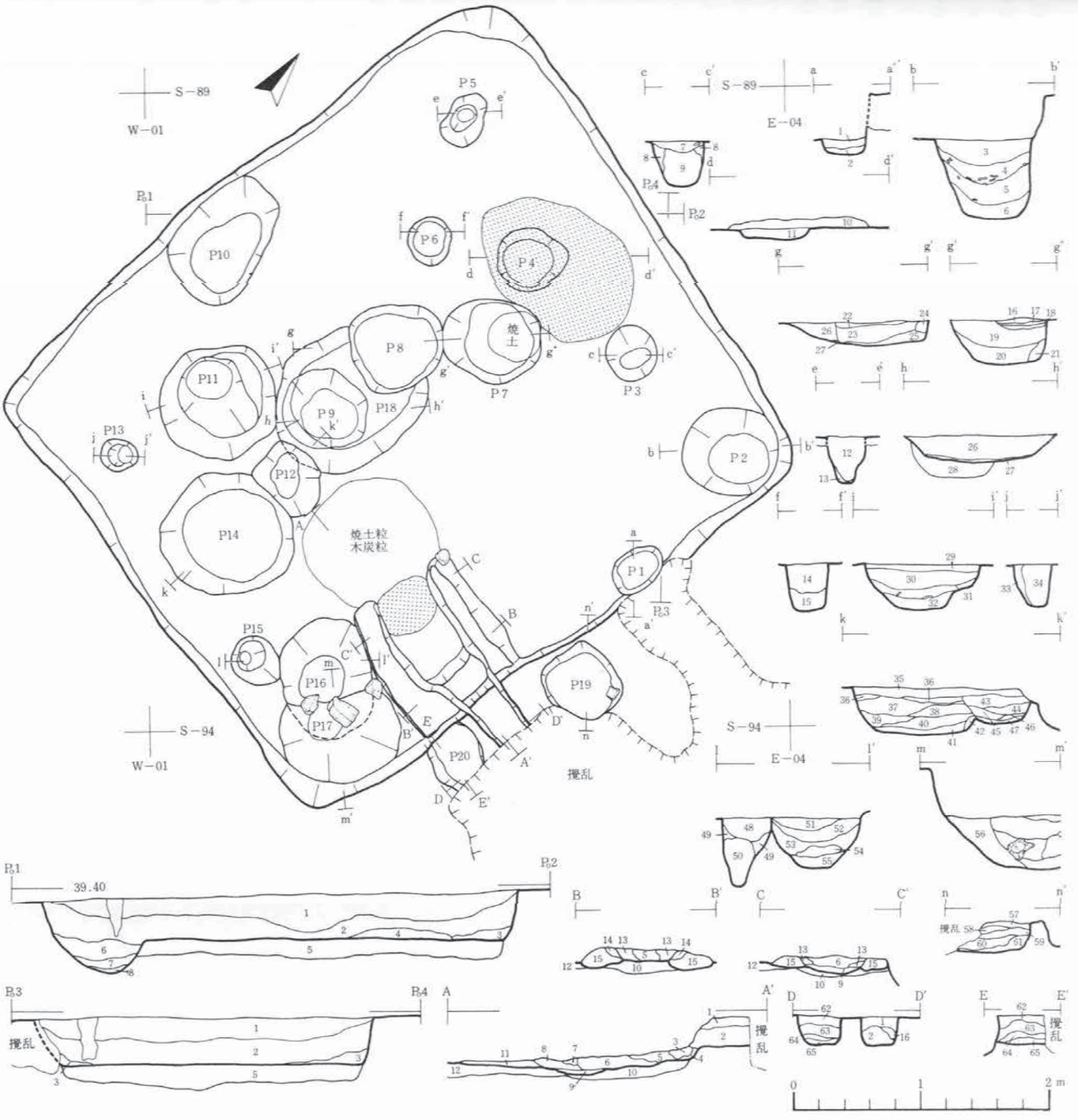
〔重複関係〕　第16号住居跡と重複関係にある。当住居の北西コーナーの部分が第16号住居跡の南東部を切っている。第16号住居跡より新しい。

また、東壁沿いに位置するP_{20}の一部を切っている。しかしP_{20}は当住居に伴うものである可能性も残されており、遺構相互の重複関係を示すものであるかは不明である。

〔平面形・長軸方向〕　平面形は南北に若干長い長方形を呈する。正方形に近い。長軸方向はＮ－16°50′－Ｅである。

〔規模〕　長軸（南北）長で4.92ｍ・4.80ｍ、短軸（東西）長が4.53ｍ・4.42ｍとなり、床面積は約22.12㎡である。

〔堆積土〕　住居内の堆積土は基本的には以下の２層に分けられる。



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第1層	1	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	緻密でかたい	P 7	21	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	
第2層	2	褐色(10Y R4/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む	P 8	22	褐色(10Y R4/4)	〃	
〃	3	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	壁の剥落土	〃	23	暗褐色(10Y R3/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	4	褐色(10Y R4/4)	〃	焼土塊・木炭片を多量に含む	〃	24	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	
埋り方埋土	5	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	〃	塊状堆積	〃	25	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
P 10	6	褐色(10Y R4/4)	〃	地山土を塊状に含む	P 18	26	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	固化している
	7	〃 (〃)	〃	焼土粒をかなり含む	〃	27	黒褐色(5Y R2/1)	粘土質シルト	木炭の層
	8	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	細砂を混入する	P 9	28	褐色(10Y R4/4)	シルト	粒〜塊状の焼土を多量に含む
					P 11	29	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	固化している。
カマド	1	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト		〃	30	暗褐色(10Y R3/4)	〃	地山粒、焼土・木炭を多く含む
	2	暗褐色(10Y R3/4)	〃	粒〜塊状の焼土をかなり含む	〃	31	〃 (〃)	〃	緻密、焼土粒・土器片を含む
	3	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	焼土粒を少量含む	〃	32	〃 (〃)	砂質シルト	焼土粒を少量含む
	4	暗褐色(10Y R3/4)	〃	混入物なし	P 13	33	褐色(10Y R4/4)	シルト	柱痕、やややわらかい
	5	〃 (10Y R3/3)	〃	焼土粒を少量含む	〃	34	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	
	6	褐色(10Y R4/4)	〃	粒〜塊状の焼土を多量に含む	P 14	35	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	固化している
	7	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む	〃	36	褐色(10Y R4/4)	〃	混入物なし
	8	〃 (〃)	〃	焼土粒を少量含む	〃	37	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	9	赤褐色(2.5Y R4/8)	〃	火床部	〃	38	〃 (〃)	〃	緻密で焼土塊を多量に含む
	10	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	〃	塊状堆積	〃	39	灰黄褐色(10Y R4/2)	砂質シルト	木炭粒を少量含む
	11	黒褐色(7.5Y R3/2)	粘土質シルト	灰・木炭粒を多量に含む	〃	40	褐色(10Y R4/4)	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
	12			住居内堆積土No.5層と同じ	〃	41	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	
	13	褐色(10Y R4/4)	シルト	塊状の焼土がかなり含まれる	〃	42	暗褐色(10Y R3/4)	砂	
	14	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	〃	P 12	43	褐色(10Y R4/4)	シルト	あらくてかなりの焼土粒を含む
	15	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	袖部	〃	44	〃 (〃)		緻密で多量の焼土粒を含む
					〃	45	〃 (〃)	砂質シルト	
P 1	1	暗赤褐色(2.5Y R3/3)	シルト	塊状の明赤褐色焼土を含む	〃	46	灰白色(10Y 7/1)	粘土	
〃	2	褐色(7.5Y R4/4)	〃	微量の焼土粒を含む	〃	47			No.42層と同じ
P 2	3	〃 (10Y R4/4)	〃	緻密でかたい	P 15	48	褐色(10Y R4/4)	シルト	微量の焼土粒を含む
〃	4	〃 (〃)	〃	土器片を多く含む	〃	49	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	塊状堆積
〃	5	〃 (7.5Y R4/4)	粘土質シルト	焼土・灰・土器片を多量に含む	〃	50	褐色(10Y R4/4)	〃	やわらかい
〃	6	〃 (〃)	〃	焼土・灰・木炭をかなり含む	P 16	51	暗褐色(10Y R3/4)	〃	緻密でかたい
P 3	7	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	焼土粒を少量含む	〃	52	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
〃	8	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	塊状堆積	〃	53	褐色(10Y R4/4)	粘土質シルト	焼土・木炭・土器を多量に含む
〃	9	褐色(10Y R4/4)	〃	ぼさぼさしている、柱痕	〃	54	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	
	10			住居内堆積土No.4層と同じ	〃	55	灰黄褐色(10Y R4/2)	粘土質シルト	灰・細砂土を含む
P 4	11	暗褐色(10Y R3/4)	シルト		P 17	56	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	塊状堆積、固化している
P 5	12	褐色(10Y R4/4)	〃	やわらかい	P 19	57	〃 (10Y R5/4)	〃	ぼさぼさしている
〃	13	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	細砂を含む	〃	58	〃 (〃)	〃	塊状の堆積
P 6	14	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	固化している	〃	59	〃 (〃)	〃	焼土粒を全面に含む
〃	15	褐色(10Y R4/4)	〃	少量の焼土粒・木炭粒を含む	〃	60	暗赤褐色(5Y R3/2)	〃	焼土
焼土遺構	16	赤褐色(2.5Y R4/6)	〃		〃	61	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	〃	混入物なし
〃	17	暗赤褐色(5.Y R3/2)	〃		P 20	62	暗褐色(10Y R3/4)	〃	暗赤褐色の焼土粒を多く含む
〃	18	褐色(10Y R4/4)	砂		〃	63	〃 (〃)	〃	明赤褐色の 〃
P 7	19	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む	〃	64	褐色(10Y R4/4)	〃	焼土塊を多量に含む
〃	20	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	〃 かなり含む	〃	65	〃 (〃)		焼土粒・地山塊をかなり含む

第63図　第18号住居跡

第1層：暗褐色のシルト層である。住居の上部ほぼ全域に分布する。緻密でかなりかたく、少量の木炭粒を含む。

第2層：褐色のシルト層である。床面上に厚く堆積する。粉状の緻密な堆積状況を示し、焼土粒・木炭粒をかなり含む。部分的に焼土・木炭の集中する個所がみられる。

なお、第1層、第2層とも住居廃絶後に自然堆積したものと思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面より急角度で立ちあがる。壁はかなり深く、現存する壁高は東壁で34～42cm、西壁が36～40cm、南壁30～35cm、北壁27～40cmとなる。

〔床〕 北西部の一部分は精査の段階で4～6cmほど掘り過ぎている。基本的にはほぼ平坦になっており、とくにたたきしめられた痕跡もなく、比較的やわらかい。床面上からは大小18個のピットが検出されているが、同時に使用されたものではなく、相互にかなりの重複関係がみられる。

最後に、床面を掘り下げてにぶい黄褐色のシルト質土を検出した。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 明確な柱痕をもつ柱穴が4個検出されている。P_3、P_5、P_{13}、P_{15}の4個は配例にも規則性がみられ、平面的には長方形を呈する。住居のプランからはやや西側にずらして配置されている。

〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に付設されている。煙道部の一部、煙出部は庭木の抜痕によって破壊されている。主軸方向はE－16°50′－Sである。

燃焼部は床面より若干掘り下げており、103×45cmの縦にかなり長い規模をもつ。焚口付近には39×44cmで厚さ5cmの固い焼土面があり、中央やや煙道寄りの部分は4cmほどの低い段差になっている。支脚は発見されていない。袖は地山のシルト質土を素材にして構築している。最大高で11cmしかなくほとんど崩壊しているが、長さは110cmもありかなり長い。

煙道部は燃焼部底面端より10cm高い奥壁につくられており、現存する範囲では底面は水平になっている。煙出部は破壊されている。

なお、燃焼部底面の下にはにぶい黄褐色土が充填する掘り方を有する。これは床面下の掘り方の埋土と識別できることから燃焼部そのものを意識した掘り方と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴にはP_2、P_{16}、P_{17}がある。P_2は北東隅に位置しており、大きさは76×74cmで深さは60cmある。埋土は4層に分けられる。No.1層は褐色のシルト層で粉状の緻密な堆積を示している。No.2層は褐色のシルト層で、多量の土器片を含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で、灰・焼土粒・木炭片・土器片を多量に含む。No.4層は褐色のシルト質粘土層で、灰・焼土塊・木炭片を混入する。P_{16}とP_{17}は南東隅に位置し、P_{16}がP_{17}を切っている。P_{17}は塊状の堆積状況を示し、埋め戻されたものである可能性が強い。P_{16}はP_{17}より新しく、埋土は4層に分けられる。No.1層は暗褐色のシルト層で、緻密でかなりかたい。少量の焼土粒木炭片を含む。

No.2層は暗褐色のシルト層で焼土粒・木炭粒をかなり含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で多量の焼土塊・木炭片・土器片を含む。No.4層は灰黄色色のシルト質粘土層で、かなりのねばりがある。灰・細砂土を混入する。

〔その他のピット〕 貯蔵穴と思われるピットと柱穴を除き、床面上に合計11個のピットが残る。これらのピットを重複関係、埋土状況などから整理すると以下のようになる。

①P_4－上部は焼土・木炭の混合土に覆われるが、ピットの埋土にこれらの土は含まれない。

②P_6－床面直上より掘り込まれており、埋土上層は人為的に埋め戻した堆積層と思われる。

③P_7－埋土最上部の床面とほぼ水平になる面に焼土遺構が認められる。

④P_8－P_{18}と重複関係にあり、P_{18}を切っている。埋土は自然的営力による堆積状況を示している。

⑤P_9－P_{18}と重複関係にあり、P_{18}に上部を切られている。

⑥P_{10}－西壁際にあり、埋土に壁の剝落土を混入する。

⑦P_{11}－埋土最上層は人為的堆積層と認定され、埋め戻した痕跡をとどめている。

⑧P_{12}－P_{14}およびP_{18}と重複関係にある。P_{14}の一部を切っているが、P_{18}には壁の一部を切られている。最上層は埋め戻されている。

⑨P_{14}－P_{12}に切られており、P_{12}と同様に最上層は人為的な堆積層である。

⑩P_1－北壁の一部を削っている。掘り方によって破壊されていないことから、当住居に伴うものである可能性が強い。

⑪P_{18}－P_8、P_9、P_{12}と重複関係にあり、P_9、P_{12}より新しく、P_8よりは旧い。堆土は自然的営力による堆積状況を示す。

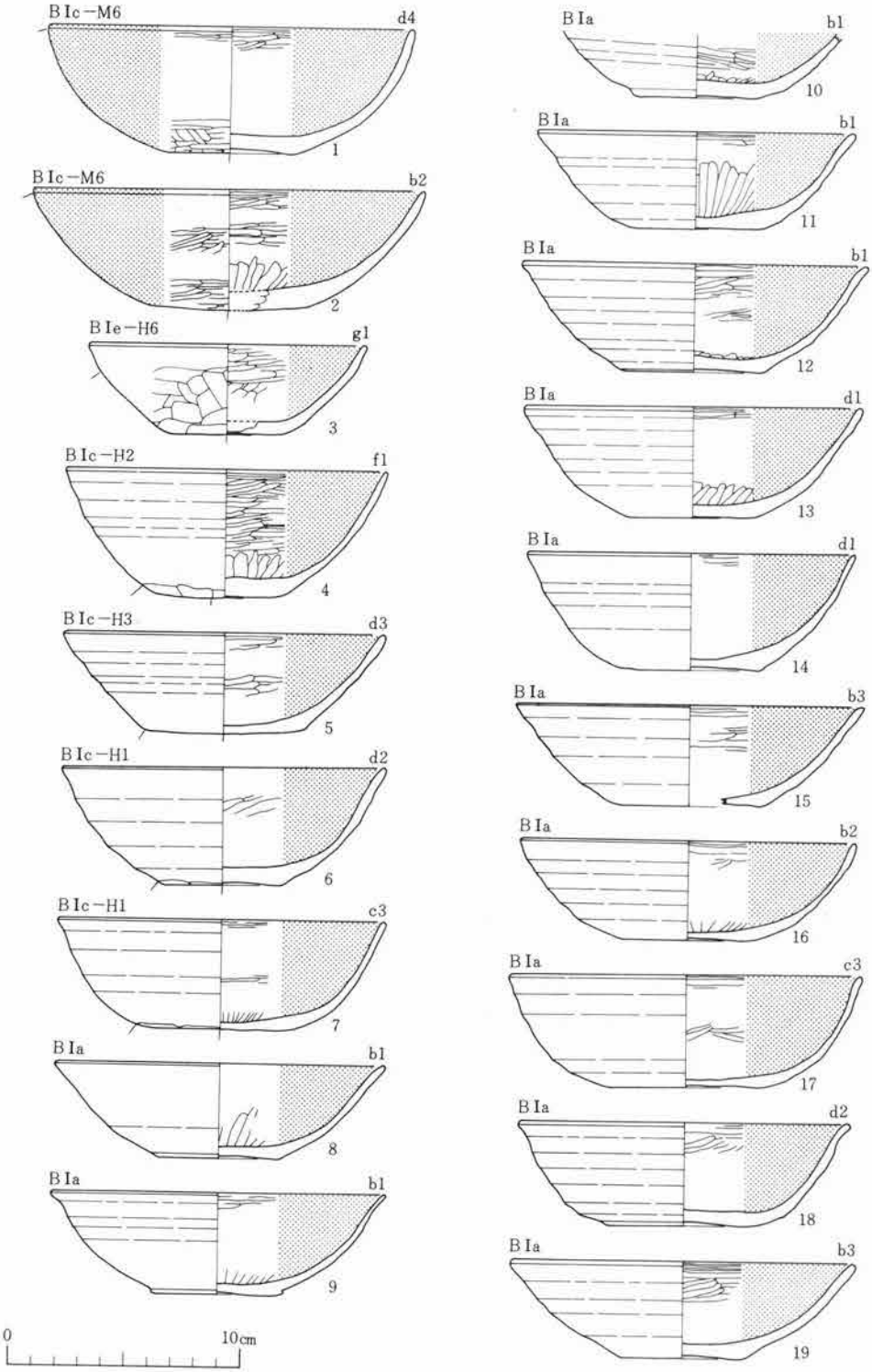
以上の事実から、当住居が廃絶される直前の段階で使用されていたものと予想されるピットにはP_8、P_{10}の2個のピットがあげられる。

なお、住居北西部からは第16号住居跡に伴うピットが検出される可能性をもっていたが、明確にそれと認めることのできるピットは発見されていない。

竪穴外からP_{19}、P_{20}の2個のピットが検出されている。これらは当住居に伴う可能性も残されているが、庭木の抜根によって攪乱をうけた部分に何らかの遺構が存在したことも考えられる。P_{20}としたものは当住居の旧煙道部となることも予想されたため、それを意識した精査を行なっている。

〔出土遺物〕 当住居跡の遺物には、土器・鉄製品・金銅製品・切子玉などがある。土器は、坏・高台付坏・甕・鉢の器種に分けられる。遺物の出土量は非常に多く、住居のほぼ全域より出土している。

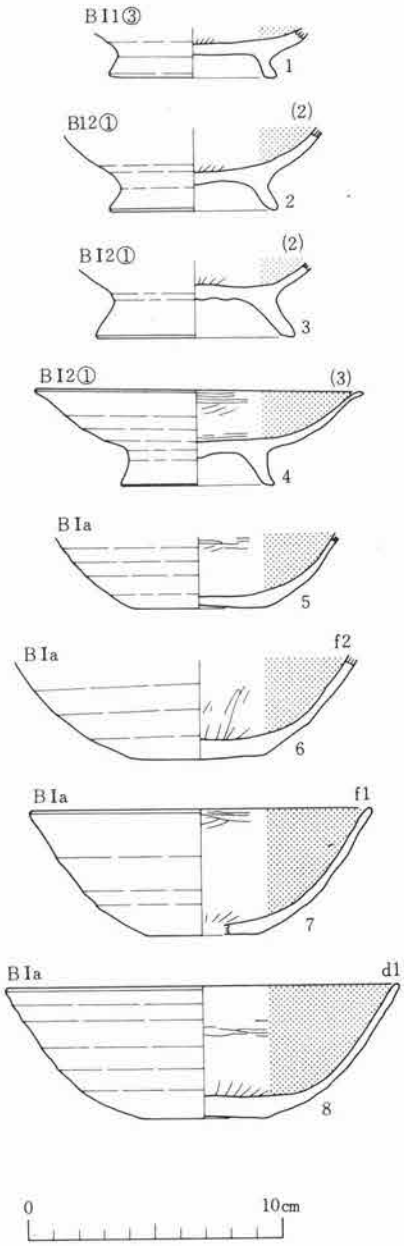
坏形土器（第64図～第66図） 坏には、BⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、BⅡ



第64図　第18号住居跡　出土遺物（1）

類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢⅠ類〉（第64図１～19、第65図５～８）　ＢⅠ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（ＢⅠａ類）、再調整を施すもの（ＢⅠｃ類）および再調整のため底部の切り離し技法が不明のもの（ＢⅠｅ類）とがある。

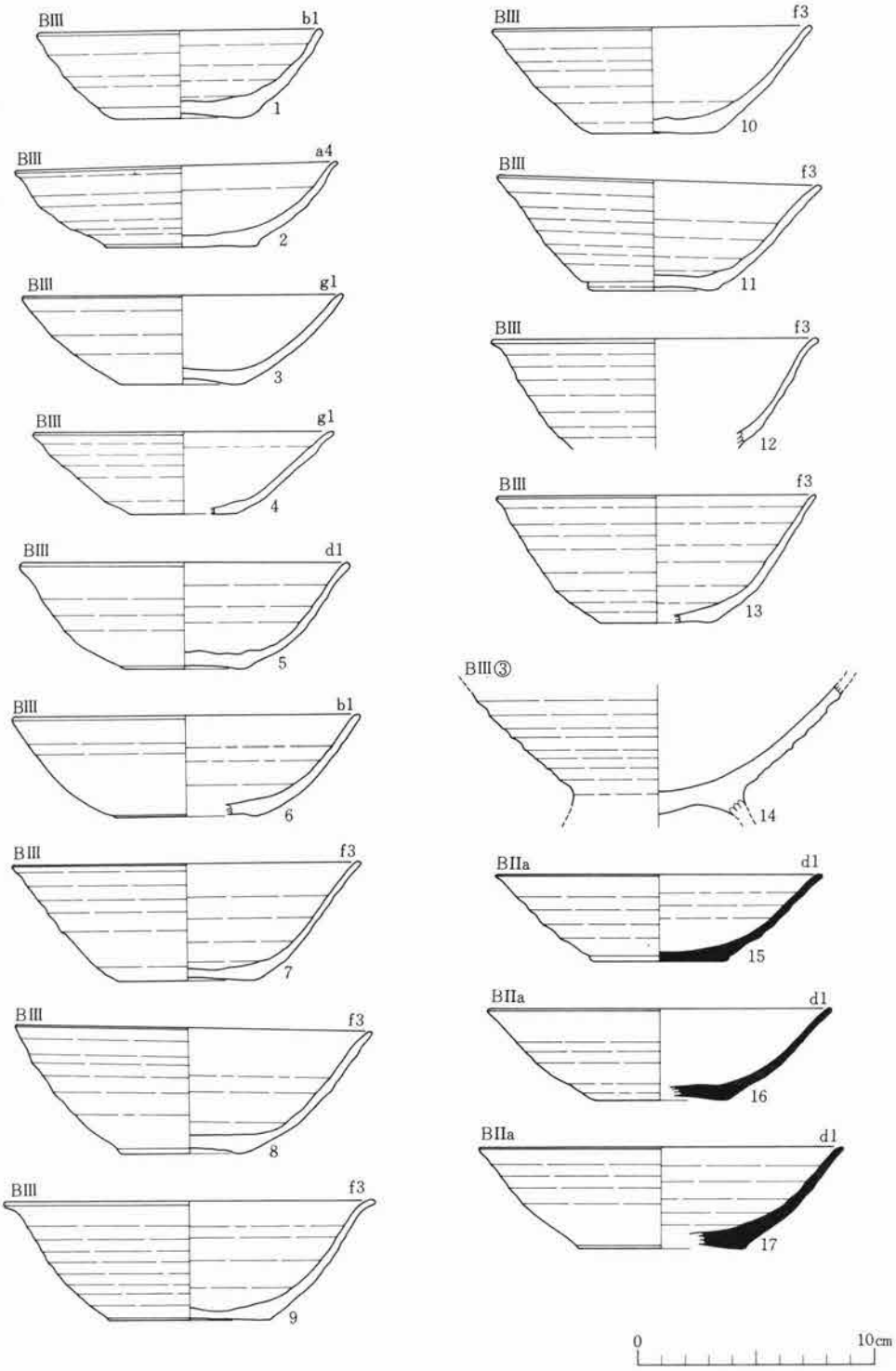


第65図　第18号住居跡　出土遺物（２）

ＢⅠｅ類の坏(３)は１点のみで、体部より底部にかけて全面に手持ちヘラケズリを施している（H_6手法）。器高が低くて底径が極端に小さく、体部は大きく開いて直線的に外傾する。

ＢⅠｃ類の坏（１・２、４～７）は、再調整の手法の違いによっていくつかに細分される。外面全体に丁寧なヘラミガキを施すもの（M_6手法）（１・２）、体部下端より底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの（H_2手法）(４)、底部全面に手持ヘラケズリを施すもの(５)、および体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの（６・７）などがある。器形はそれぞれ異なり、器高が普通で底径の小さなものには、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(1)と体部がやや丸味をもって外傾するもの(６)とがある。器高が低くて底径の小さなものには、体部がやや丸味をもって外傾するもの(２)と体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(５)とがある。器高が普通で底径の大きなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがる(７)。また、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(４)もある。

ＢⅠａ類の杯(第64図８～19、第65図５～８）は、形態上の特徴によっていくつかに分けられる。器高が低くて底径の大きなも



第66図　第18号住居跡　出土遺物（3）

のは、体部がやや丸味をもって外傾するもの(18)で、器高が低くて底径の小さなものには、体部がややふくらみをもって外傾するもの(８～12)、体部がやや丸味をもって外傾するもの(16)、および体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（15・19）とがある。器高が普通で底径の大きなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(17)で、器高が普通で底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって外傾するもの（13・14、第65図８）となる。また、器高が大きくて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(第65図６・７)もある。

〈坏BⅡ類〉（第66図15～17）　回転糸切り無調整のもの(ＢⅡa類)に限られる。すべて器高が低くて底径が小さく、体部は直線的に外傾するものである。

〈坏BⅢ類〉（第66図１～13）　回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(１・６)、器高が低くて底径が大きく、体部がやや丸味をもって外傾するもの(２)、器高が低くて底径が極端に小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（３・４）、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(５）などがある。また、器高が高くて底径が小さく体部が直線的に外傾するもの（８～13）がかなり出土している。

高台付坏形土器（第65図、第66図）　高台付坏には、ＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈高台付坏BⅠ類〉（第65図１～４）　高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの(BⅠ１③類)と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの（ＢⅠ２①類）とに分けられる。

ＢⅠ１③類の高台付坏(１)は、坏部が欠損しており全体の器形は不明であるが、器高の高い埦形((1)類)を呈するものと思われる。ＢⅠ２①類の高台付坏（２～４）も、４を除き坏部を欠いている。２・３は坏形の坏部((2)類)と思われる。４は体部が大きく開くもので器高が極端に低い皿形の坏部((3)類)をもつ。

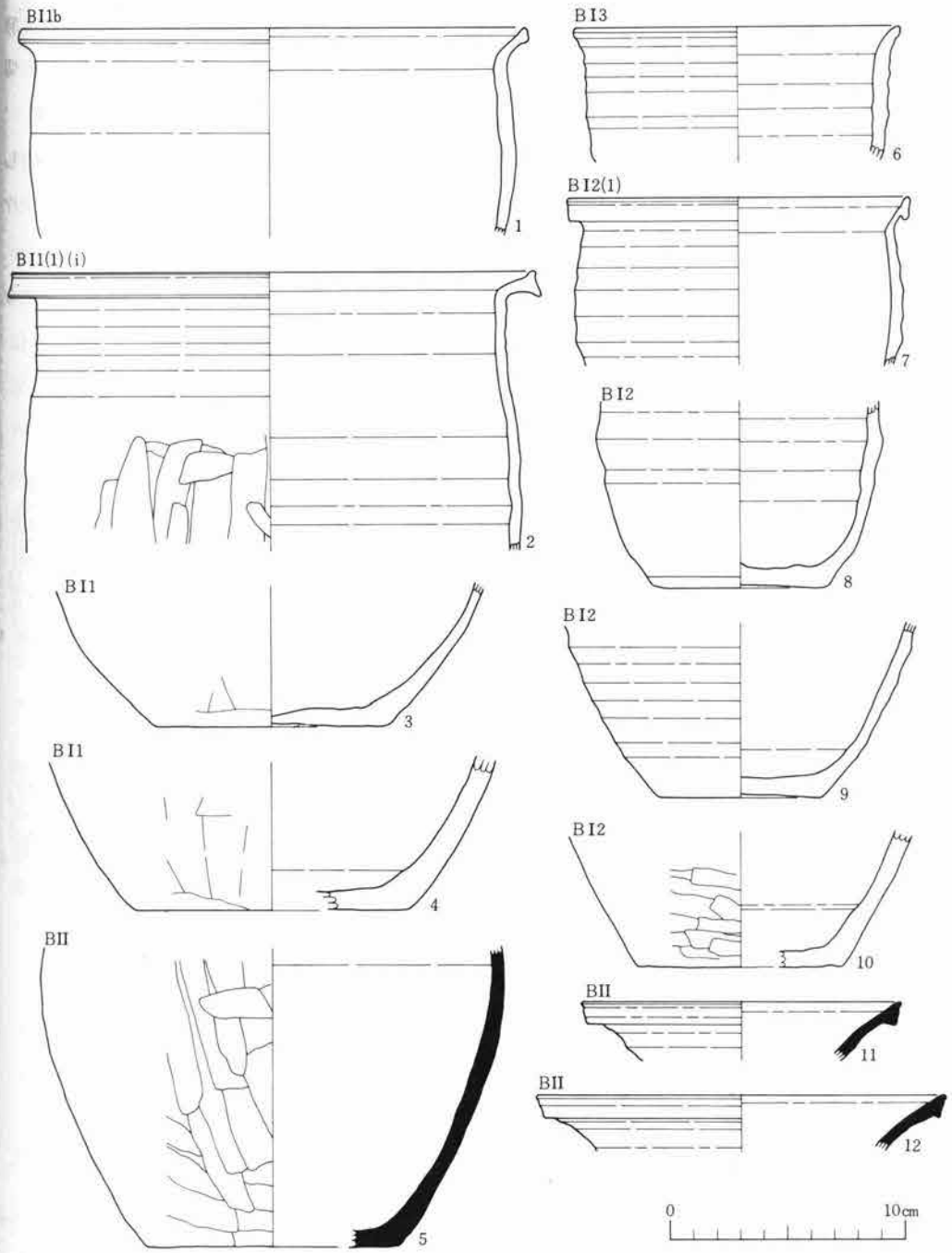
〈高台付坏BⅢ類〉（第66図14）　かなり大形のもので、高台付盤に近い形を呈する。底部は菊花状のヘラ刻みを施し周縁をロクロ調整している。高台部・坏部の形状は不明である。

甕形土器（第67図）　甕には、ＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕BⅠ類〉（第67図２～４、７～10）　ＢⅠ類の甕は器形の大小によって２分される（ＢⅠ１・ＢⅠ２類）が、すべて最大径の位置は口縁部にもつもの（(1)類）である。

ＢⅠ１(1)類の甕(２)は、口縁部が短く強く外反するもので口唇部は上下に挽き出している。体部はゆるやかに脹み、中央付近に体部最大径をもつ。体部下半外面にヘラケズリが施される。

ＢⅠ２(1)類の甕(７)は、口縁部が短く外反し、口唇部を下方へ強く挽き出すものである。体



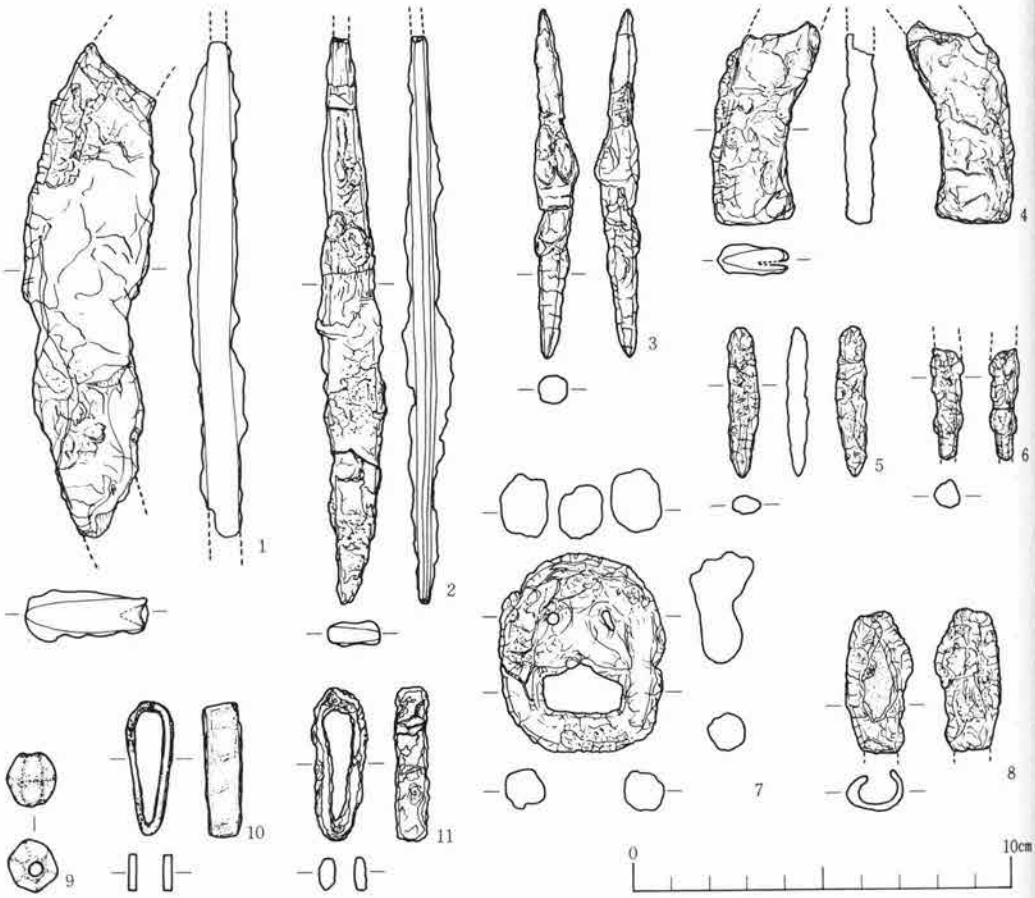
第67図　第18号住居跡　出土遺物（4）

部は比較的円やかに張らみ、中央付近に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整である。

なお、体部下半より底部にかけての破片（３・４、８～10）が出土している。３・４は大形のもの（ＢＩ１類）で、８～10は小形のもの（ＢＩ２類）と思われる。８・９の底部には糸切痕をそのまま残すが、ほかはヘラケズリが施されている。

〈甕ＢII類〉（第67図５、11・12）　すべて細片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない。11・12は体部が大きく張む甕の口縁部片で、５は体部下半より底部にかけての少片である。

鉢形土器（第67図１・６）　鉢はいずれもＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別される。



第68図　第18号住居跡　出土遺物（５）

1は口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ弱く挽き出すもので、体部は上半付近でゆるく張り出している。6は口縁部が極端に短く直立ぎみに外反し、体部はほとんど脹まずそのまま底部へと移行する。いずれも全面ロクロ調整である。

鉄製品（第68図1～8、11）　1と4は鋤の刃先の一部である。平面形がU字形をなし、内縁に沿って溝をつくり、木身をはめるようにしたものである。1は大形のもので現存長で約13.1cm、最大幅3.1cmを計る。4は比較的小形のもので、基部の一部のみを残す。現存長で約5.4cm、最大幅1.9cmとなる。2は刀子で、刃部端の一部を欠く。15.0cmの大形のもので、刃部長約10cm、刃部の最大幅2.9cmを計る。関は背側にのみ段を有し、幅2.2cmとなる。茎は先端に向って細くなり、1.0～2.2cmの幅をもつ。3は両端がとがった角棒である。銛と思われる。上部端はするどくとがらせており身の先端と思われるが逆刺はつかない。茎は身と同様に細くなっており、柄に挿入するようにつくられている。現存長で9.2cmを計る。5は先端をするどくとがらせた細い棒状のものである。錐と推定される。現存長で4.0cm、最大幅1.5cmとなる。6は細長い角棒であり、釘と思われる。両端を欠き、現存長で3.9cmを測る。7は絞具（かこ）である。刺鉄（さすが）の部分は付着したまま錆化している。大きさは長さ5.3cm、幅4.3cmを計る。8は上半部に木身を挿入するための袋部をもつ円棒である。性格は不明であるが、のみの一部とも推定される。現存長で3.7cm、幅1.6cmを計る。11は刀子の刃部の元にはめこむはばき金具と思われる。長さが3.9cm、厚さ0.4cmのものである。

金銅製品（第68図10）　11と同じであり、はばき金具と思われる。鉄地金銅ばりで、鉄製品に鍍金の青銅をはったものである。長さ3.6cm、厚さ0.2cmを計る。

切子玉（第68図9）　上下で12面をもつ算盤玉状を呈する。水晶製品である。長さが1.4cmで最大幅は1.3cmになる。

第19号（FB50）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構はIIa層を4～5cm掘り下げた段階で確認されている。当地区ではIb層は検出されず、遺構確認面の上部は耕作土（Ia層）になっている。

〔保存状況〕　住居の北西部は庭木の抜根によって破壊されている。また、木根による攪乱が随所に認められ、保存状況はあまり良くない。

〔重複関係〕　当住居と重複する遺構は発見されていない。

〔平面形・長軸方向〕　東辺長が他より若干短いため台形に近い形状になるが、ほぼ正方形を呈する。長軸方向はN—78°30′—Wである。

〔規模〕　東西長で2.82m・2.77m、南北長が2.73m・2.58mとなり、底面積は約7.12m²である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は２層に分けられる。

第１層：にぶい黄褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。上部の全面を覆っている。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第２層：褐色のシルト層である。第１層に比べてやや砂分が強くて密度があらくなる。床面上の全域に厚く堆積する。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第１層、第２層とも自然的な営力による堆積層と思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は床面より比較的急角度で立ちあがる。大小の攪乱をうけており、遺存状況は良くない。現存する壁高は東壁で16～22cm、西壁が20～38cm、南壁18～23cm、北壁13～20cmとなっている。

〔床〕 壁際が若干低くなっているがほぼ平坦な面をなしている。とくにたたきしめてはおらず、比較的やわらかい。床面上からは３個のやや大形のピットが検出されている。

なお、床面の下からは８～９cmの厚さをもつにぶい黄褐色土層が検出されている。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 柱穴はまったく検出されていない。

〔カマド〕 東壁のほぼ中央に付設されている。とくに破壊はうけておらず、遺存状況はかなり良好である。カマドの構築法は他の住居とは異なっており、やや特異な構造をもっている。主軸方向はＥ－16°－Ｓである。

燃焼部・袖部は床面上から６～８cmの段差をもつ〝壇〟の上に構築されている。この壇は燃焼部と袖部の規模に合わせて作られているが、燃焼部は火床面にあたる部分に限定されている。したがって平面的には東壁際に出口をもつ〝Ｕ〟字形になっている。

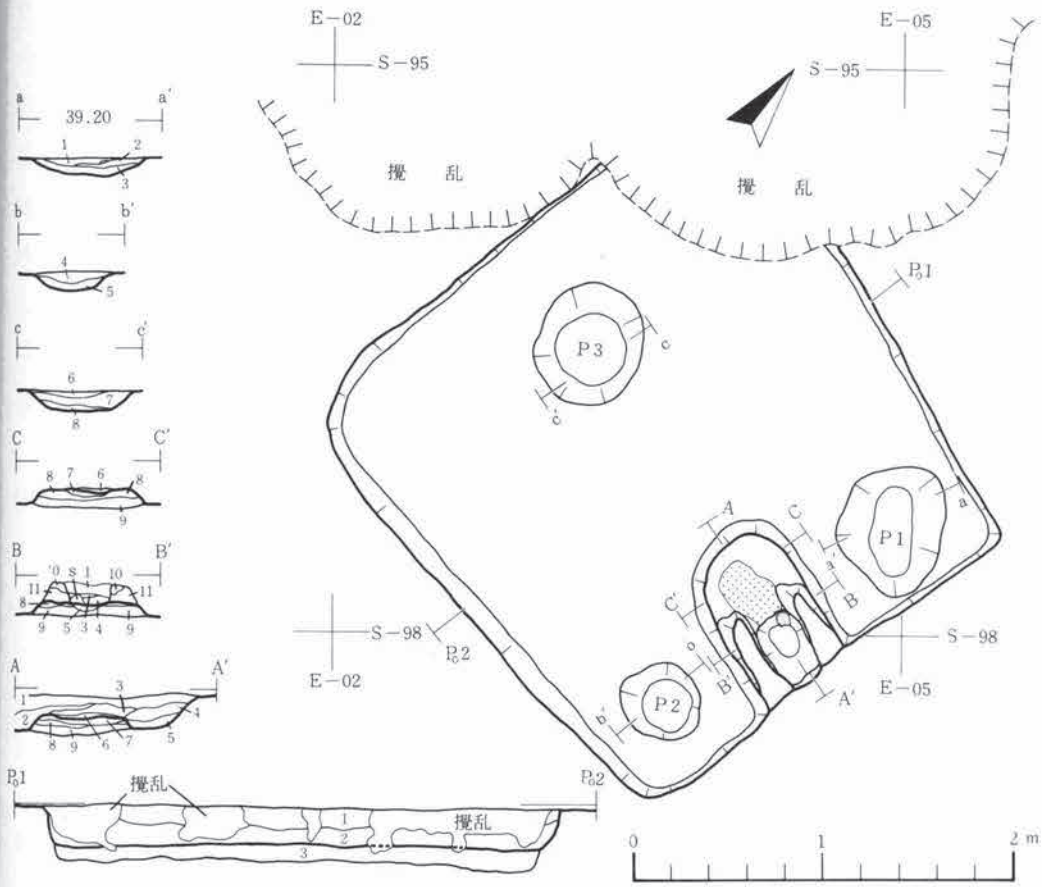
燃焼部は焚口付近に36×24cmの範囲で厚さ２～３cmのかたい焼土面をもっている。火床部の奥は一段低くなり、両袖にはさまれてピット状になっている。これは前記の壇を作るに際して土を重ねなかった部分にあたり、床面とほぼ同一レベルにある。支脚とは断定できないが熱をうけた石が燃焼部内に１個発見されている。袖は壇の上に地山のシルト質土をさらに積みあげて構築されており、袖幅は壇による規制をうけたものと思われ、最大幅で16cmと狭い。

煙道部・煙出部は竪穴外の地山上からは検出されていない。おそらく、竪穴の外に出て上方へ立ちあがるものであろう。

〔貯蔵穴状ピット〕 床面上から発見された３個のピットはいずれも貯蔵穴とするには確証に欠ける。平面的には比較的大形であるがどれもが深さは10cm±となっており、かなり浅い。

〔出土遺物〕 当住居の出土遺物は土器に限られ、土器には、坏・甕・鉢・壺の器種がある。カマドの周囲に集中して出土するが、その量は少い。

坏形土器（第70図） 坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）、ＢII類（ロク



	層No.	土　色	土　性	その他		層No.	土　色	土　性	その他
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	緻密でかたい		9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	固化している、塊状堆積
第2層	2	褐　色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む		10	〃　(10YR5/3)	〃	焼土粒を少量含み、やわらかい
埋り方埋土	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	塊状堆積		11	〃　(10YR5/4)	〃	
カマド	1			第1表No.1層と同じ	P 1	1	褐　色(10YR4/4)	シルト	焼土塊・木炭片を多く含む
	2			〃 No.2層と同じ		2	褐　色(10YR4/4)	〃	ややねばりがある
	3	褐　色(7.5YR4/3)	シルト	塊状の焼土を多量に含む		3	暗褐　色(10YR3/4)	〃	あらくてやわらかい
	4	〃　(　〃　)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む	P 2	4	褐　色(10YR4/4)	〃	焼土塊を多量に含む
	5	〃　(10YR4/4)	〃	やわらかく、木炭粒を少量含む		5	暗褐　色(10YR3/4)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	6	明赤褐　色(2.5YR5/8)	〃	火床部	P 3	6	褐　色(10YR4/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む
	7	赤褐　色(5YR4/8)	〃	熱の浸透部		7	暗褐　色(10YR3/4)	〃	〃　少量含む
	8	褐　色(10YR4/4)	〃	固化している、塊状堆積		8	〃　(　〃　)	粘土質シルト	ねばりがある

第69図　第19号住居跡

ロ使用で還元炎焼成)、およびＢⅢ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏ＢⅠ類〉（第70図１～４）　ＢⅠ類の坏には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（ＢⅠa類）と再調整を施すもの（ＢⅠc類）とがある。

ＢⅠc類の坏（１～３）は、すべて手持ちヘラケズリによる再調整で、体部下端に施すもの（H_5手法）（１）と底部全面に施すもの（H_3手法）（２～３）とがある。いずれも、器高の低いもので、底径が小さく体部がやや丸味をもって外傾するもの（１・３）と、底径が大きく体部がやや丸味をもって外傾するもの（２）とに分けられる。

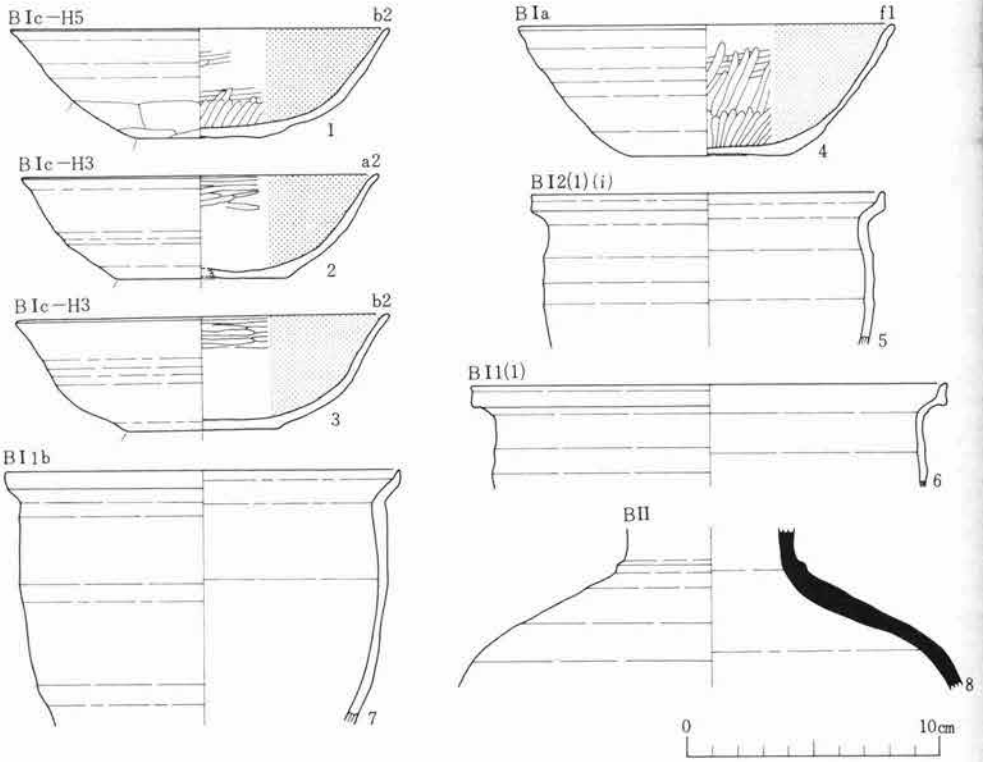
ＢⅠa類の坏（４）は、器高が高くて底径が大きく、体部はややふくらみをもって立ちあがる。

〈坏ＢⅡ類〉〈坏ＢⅢ類〉　回転糸切り無調整のものが、細片で少量出土している。

甕形土器（第70図）　甕は、ＢⅠ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とＢⅡ類（ロクロ使用で還元炎焼成）とに類別される。

〈甕ＢⅠ類〉（第70図５・６）　ＢⅠ類の甕は、口縁部に最大径をもつ大形のもの（ＢⅠ1(1)類）と口縁部に最大径をもつ小形のもの（ＢⅠ2(1)類）とがある。

ＢⅠ1(1)類の甕（６）は、口縁部が短く強く外反し、口唇部は上方へ強く挽き出すものである。



第70図　第19号住居跡　出土遺物

体部はゆるく脹み、中央付近に体部最大径をもつものと思われる。

ＢＩ２(1)類の甕(５)は、口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。

〈甕ＢII類〉　破片のため図示不能である。大形のもので、長い口縁部をもち、体部は肩部より大きく張り出す器形を呈するものと思われる。

鉢形土器（第70図７）　ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものである。口縁部は短くゆるく外反し、口唇部は弱く上方へ挽き出している。体部はあまり脹まず、上端付近に体部最大径をもつ。全面ロクロナデで整えている。

壺形土器（第70図８）　ＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものである。口縁部、体部下半を欠き、全体の器形は明らかでないが長頸壺として分類した。

第20号（ＦＤ09）住居跡

〔遺構確認面〕　遺構確認面はIIa層のほぼ上面である。断面観察によれば遺構はIIa層の直上より掘り込まれている。なお、当地区にはＩb層は存在しない。

〔保存状況〕　当住居の北西隅から南東隅にかけての左半分が路線敷外に入るため調査していない。調査範囲内に限定すればほぼ原形をとどめており保存状況はかなり良好である。

〔重複関係〕　第５号溝と重複関係にある。当住居の北壁の一部が第５号溝によって切られており、第５号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕　北辺長より東辺の現存長が長く、南北に長い長方形を呈するものと思われる。長軸方向は推定でＮ―7°30′―Ｅである。

〔規模〕　未調査部分を含むため規模は不明である。ただ、北西コーナーと北東コーナーは検出されており、東西長は推定で3.65ｍ強、南北長は40.5ｍ＋α となる。

〔堆積土〕　住居内堆積土は基本的には以下の２層に大別される。

第１層：褐色シルト層である。上部全面に厚く堆積する。緻密でかたくしまっている。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第２層：暗褐色のシルト層である。第１層に比べてややねばりがある。床面上の全域に分布し、焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第１層、第２層とも住居の廃絶後自然的営力によって堆積した層と思われる。

〔壁〕　地山を壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で10～17cm、北壁が23～32cmとなっている。

〔床〕　床面上はほぼ平坦になっている。かたくたたきしめられており、埋土とは肌分れ現象がみられる。床面上からは大小５個のピットが発見されている。

最後に床面を掘り下げたところ、床面全域に15～25cmの深さをもつ掘り方が検出されている。

埋土は２層に分けられ、いずれもが埋め戻した人為的な堆積層である。

〔柱穴〕 床面上より発見された５個のピットのうち、平面的な大きさから柱穴と考えられるものにはP_2とP_4がある。このうちP_4は深さが約51cmもありかなり深くなるが、P_2は24cmと浅い。いずれのピットも対となるのが検出されておらず確証に欠ける。

〔カマド〕 東壁の南寄りに付設されている。煙道部・煙出部が検出時に若干削平されているほかは良好なかたちで遺存している。主軸方向はＥ―2°30′―Ｓである。

燃焼部の大きさは92×24cmとなり、長さに比べて幅がとくに狭くなっている。燃焼部底面は火床部分が床面よりやや凹んでいるものの奥に向かって緩く立ち上がっている。支脚は発見されていない。煙道部は、火床部とは16cmの比高をもつが、緩く傾斜して立ちあがる燃焼部底面とは際立った段差をもたずに接続する。袖部は地山のシルト質土を素材とし、それを積み上げて構築している。煙道部底面は入口付近でやや高くなるもののほぼ水平に煙出部へと移行する。煙出部には直径約41cmのピットが掘り込まれており、煙道端との比高は４cmと少ない。

なお、燃焼部を掘り下げて検出されたにぶい黄褐色土は床面下の掘り方埋土とは異なっており、カマドの付設場所に限定された掘り方と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴には南東隅に発見されたP_5がある。約半分が路線敷外に入る。直径約103cmの不整円形を呈するものと思われ、深さは約26cmになる。埋土は３層に分けられる。上層は暗褐色のシルト層で、緻密な堆積状況を示し、混入物はほとんどみられない。中層は灰黄褐色の粘土質シルト層で、木炭粒を少量混入する。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、粒～塊状のあらい堆積状況を示し、少量の焼土粒を含む。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器と鉄製品があり、土器は坏・高台付坏・甕・壺・鉢の器種に分類される。カマドおよび焼土面の周囲より集中して出土する。

坏形土器（第72図） 坏には、ＢＩ類（ロクロ使用で酸化炎焼成＋黒色処理）とＢII類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびＢIII類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

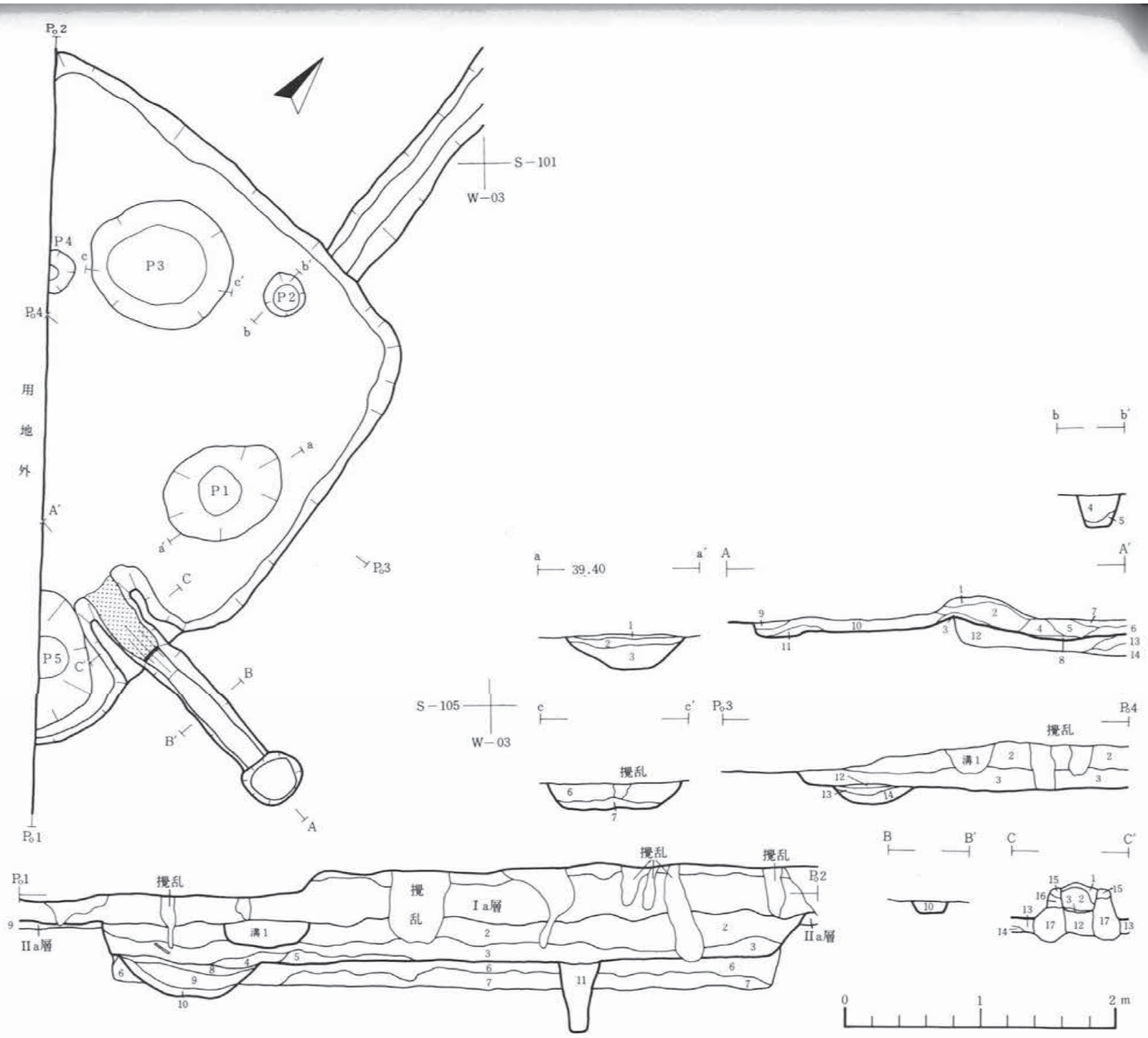
〈坏ＢＩ類〉（第72図１、６～９） ＢＩ類の坏は、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（ＢＩa類）と再調整を施すもの（ＢＩc類）とがある。

ＢＩc類の坏(１)は、器高が高くて底径の小さなもので、体部はかなり丸味をもって立ちあがる。底部を欠損するが、体部下端に手持ちヘラケズリを施している。

ＢＩa類の坏（６～９）は、形態上の特徴によって３分され、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（６・７）、底径が大きく体部が直線的に外傾するもの(８)および底径が大きく体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(９)などに細分される。

〈坏ＢII類〉 図示不能の細片が４片出土している。

〈坏ＢIII類〉（第72図11～14） 回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さく



	層No.	土色	土性	その他		層No.	土色	土性	その他
第5号溝	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	木炭粒をかなり含む		6			住居内堆積土No.5層と同じ
第1層	2	褐色(10YR4/4)	〃	緻密でかなりかたい		7			〃 No.3層 〃
第2層	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土粒・木炭粒をかなり含む		8	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	火床部
〃	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	粘土塊を含む		9	暗褐色(10YR3/3)	〃	ススを含み黒ずんでいる
〃	5	極暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	焼土塊・木炭片を多量に含む		10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	焼土塊・木炭粒をかなり含む
埋り方埋土	6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	地山土の塊状堆積		11	褐色(10YR4/4)	〃	ぼさぼさしている
〃	7	〃 (10YR4/3)	〃	褐色土を粒～塊状混入する		12	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃	固化している
P 5	8	暗褐色(10YR3/4)	〃			13			住居内堆積土No.6層と同じ
〃	9	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	木炭粒を少量含む		14			〃 No.7層 〃
〃	10	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土粒を少量含む		15	褐色(10YR4/4)	シルト	微量の焼土粒を含む
P 4	11	褐色(10YR4/4)	シルト	やわらかい		16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	〃
P 1	12			ピットNo.1層と同じ		17	〃 (10YR5/4)	〃	
〃	13			〃 No.2 〃					
〃	14			〃 No.3 〃	P 1	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
					〃	2	暗褐色(10YR3/4)	〃	緻密でかたい
カマド	1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	粒状の焼土をかなり含む	〃	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土粒・木炭粒・地山粒を含む
	2	暗赤褐色(2.5YR3/4)	〃	多量の焼土塊を混入する	P 2	4	褐色(10YR4/4)	〃	
	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土粒を少量含む	〃	5	暗褐色(10YR3/4)	〃	細砂を含む
	4	暗赤褐色(10YR3/3)	〃	焼土塊・木炭粒を多量に含む	P 3	6	〃 (〃)	〃	焼土粒・木炭粒を少量含む
	5	〃 (〃)	〃	ぼさぼさしている	〃	7	〃 (〃)		細砂を含みやわらかい

第71図　第20号住居跡